



松東遺跡3次

2014年2月

浜松市教育委員会

松東遺跡 3 次

2014 年 2 月

浜松市教育委員会



1工区 全景（東から）



1 SK06 銅鐸出土状況（南東から）



2 SK06 銅鐸出土状況（北東から）



3 弥生時代 主要出土遺物



SK06 出土銅鐸



1 奈良・平安時代 主要遺構



2 SD109 出土銅印



3 奈良・平安時代 主要出土遺物

例 言

- 1 本書は静岡県浜松市東区天龍川町 519 番ほかにおける松東遺跡（3 次調査）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、天竜川駅周辺整備事業における道路建設工事に先立ち実施した。現地発掘調査及び整理作業・報告書刊行作業は、浜松市（土木部東・浜北土木整備事務所）の依頼を受けて、浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が行い、浜松市教育委員会の監理のもと、浜松市から委託を受けた株式会社フジヤマが実務を実施した。調査にかかわる費用は、全額浜松市が負担した。
- 3 発掘調査にかかわる面積と期間は、以下の通りである。

調査面積 2,102 m²
調査期間（現地調査）平成 24 年（2012 年）6 月 1 日～平成 25 年（2013 年）3 月 22 日
（整理作業）平成 25 年（2013 年）6 月 3 日～平成 26 年（2014 年）2 月 21 日
- 4 発掘調査は、鈴木一有・鈴木京太郎（浜松市市民部文化財課）が監理業務を担当し、現地調査は中川潤次（株式会社フジヤマ）が実務を担当した。また、整理作業は坂下俊介（株式会社フジヤマ）が実務を担当し、原田和子（株式会社フジヤマ）が補佐した。
- 5 本書の執筆は、第 1 章 1・2、第 3 章 5、第 4 章 2・3 を鈴木京太郎が、第 1 章 4 を坂田昌代（株式会社フジヤマ）が、第 3 章 1 を川本耕三（公益財団法人元興寺文化財研究所）、西田京平・平尾良光（別府大学文化財研究所）が、第 3 章 2・3 を西尾太加二（静岡文化財研究所）が、第 3 章 4 を鈴木一有が行い、その他を坂下が行った。現地における写真撮影は主に中川が行い、一部を鈴木一有が行った。遺物写真撮影は主に坂下と村松幸壽（株式会社フジヤマ）が行い、一部を鈴木一有が行った。編集は坂下が行い、柴田稔・鈴木加奈子（株式会社フジヤマ）が補佐した。
- 6 調査にかかわる諸記録及び出土遺物は、浜松市市民部文化財課が保管している。
- 7 現地調査、整理作業および本書の編集にあたり、以下の方々や機関からご協力やご指導を賜った。記して深謝したい（敬称略、順不同）。

渥美賢吾、岩原剛、川江秀孝、佐伯郁乃、佐藤祐樹、篠原和大、柴垣勇夫、高田健一、高田康成、竹内裕貴、寺沢薫、東野治之、中勇樹、中井正幸、難波洋三、賛元洋、林至美、福永伸哉、藤村翔、藤原治、松井一明、渡辺晃宏

伊勢市教育委員会、大垣市教育委員会、四国中央市教育委員会、東京大学総合研究博物館、豊橋市教育委員会、東観音寺

凡 例

- 1 本書で用いる座標値は世界測地系に基づく。方位（北）は座標北、標高は海拔高である。

- 2 遺跡の略記号は以下の通りである。

SK：土坑 SX：大型土坑、不明遺構 SH：掘立柱建物
SD：溝 SP：小穴 SE：井戸 SR：自然流路

- 3 遺物番号は種別にかかわらず、時代ごとに連番を付した。

- 4 遺構中のアミは、焼土の広がりを示す。

- 5 本書で報告する土器の断面と種別の関係は以下の通りとする。

	弥生土器・土師器
	須恵器
	灰釉陶器・山茶碗
	陶磁器

ただし、須恵器と灰釉陶器の判断がつかない個体については、断面を黒塗りとした。

- 6 本文中の引用文献等の表記については、以下のよう略す。

浜松市博物館→浜市博

（財）浜松市文化協会→浜文協

（財）浜松市文化振興財団→浜文振

（財）静岡県埋蔵文化財研究所→静文研

教育委員会→教委

- 7 本文中に使用した土器の型式名や用語および編年観は、以下の文献に基づいて記載した。

弥生土器：鈴木一有 2009 「鳥居松遺跡出土遺物にみる弥生時代後期の土器編年」

『鳥居松遺跡 5 次 弥生時代編』（財）浜松市文化振興財団

古式土師器：鈴木一有 2002 「古墳時代前期にかんする諸問題」

『恒武西宮遺跡』（財）浜松市文化協会

須恵器・土師器：鈴木敏則 2005 「出土須恵器について」

『東若林遺跡』（財）浜松市文化振興財団

陶器・灰釉陶器・山茶碗：

遠江地方 松井一明 1988 「宮口古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器・陶器生産についての一考察」

『静岡県窯業遺跡 本文編』静岡県教育委員会

尾張地方 檜崎彰一他 1983 『愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅲ）（尾張・三河地区）

付 猿投窯の編年について』愛知県教育委員会

松東遺跡 3 次

目 次

巻頭図版

例言・凡例

第 1 章 序 論	1
-----------	---

1 調査にいたる経緯	1
2 予備調査	2
3 調査の方法と経過	3
4 遺跡をめぐる環境	6

第 2 章 調査成果	11
------------	----

1 基本層位と遺構検出面	11
2 弥生時代	13
3 奈良・平安時代	62
4 鎌倉時代以降	87

第 3 章 後 論	93
-----------	----

1 銅鐸・銅印の自然科学分析	93
2 銅鐸・銅印の保存処理	101
3 井戸材・漆器の樹種同定	103
4 松東遺跡における銅鐸破片出土の意義	105
5 松東遺跡と長上郡家	119

第 4 章 総 括	129
-----------	-----

1 発掘調査の成果	129
2 特筆すべきことがら	130
3 今後の展望	130

出土遺物観察表	131
---------	-----

付 図	141
-----	-----

図 版

図 版 目 次

巻頭図版

- 1 1 工区 全景（東から）
- 2 1 SK06 銅鐸出土状況（南東から）
2 SK06 銅鐸出土状況（北東から）
3 弥生時代 主要出土遺物
- 3 SK06 出土銅鐸
- 4 1 奈良・平安時代 主要遺構
2 SD109 出土銅印
3 奈良・平安時代 主要出土遺物

図 版

- 1 1 工区 全景（北から）
- 2 1 2 工区 全景（北東から）
2 2 工区 全景（東から）
- 3 3 工区 全景（南西から）
- 4 弥生時代 土坑 遺物出土状況（SK361 南西から）
- 5 1 SX01 遺物出土状況（西から）
2 SX01 土層断面（西から）
- 6 1 SX01 焼土内遺物出土状況（北東から）
2 SX01 焼土断面（北西から）
- 7 SK06 銅鐸出土状況（南東から）
- 8 1 SK06 銅鐸出土状況（北東から）
2 SK06 土層断面（南東から）
- 9 1 SK07 遺物出土状況（北から）
2 SK84 遺物出土状況（南から）
- 10 1 SK231 遺物出土状況（北東から）
2 SK231 土層断面（南西から）
- 11 1 SK339 遺物出土状況（北西から）
2 SK346 遺物出土状況（南東から）
- 12 1 SK352 遺物出土状況（東から）
2 SK361 遺物出土状況（南西から）
- 13 1 SK03 遺物出土状況（東から）
2 SK03 土層断面（南西から）

- 3 SK03 遺物出土状況（北西から）
- 14 1 SK208・SK215 遺物出土状況（南東から）
 - 2 SK209 遺物出土状況（北東から）
 - 3 SD03 遺物出土状況（南東から）
 - 4 SD51 完掘状況（北から）
- 15 弥生時代 遺物出土状況
 - 1. SK337（東から） 2. SK350（南東から） 3. SP24（東から）
 - 4. SP131（北東から） 5. SP713（北東から） 6. SD51（西から）
- 16 奈良・平安時代 遺構集中部（3 工区 東から）
- 17 1 奈良・平安時代 遺構集中部（1 工区 北から）
 - 2 SH02（西から）
 - 3 SH03（南から）
 - 4 SH05（南から）
 - 5 SH07（西から）
- 18 1 SD107 完掘状況（東から）
 - 2 SD107 完掘状況（南西から）
- 19 1 SD107 遺物出土状況（南東から）
 - 2 SD107 遺物出土状況（北西から）
 - 3 SD107 遺物出土状況（南西から）
 - 4 SD118 遺物出土状況（南から）
- 20 1 SD109 銅印出土状況（北西から）
 - 2 SD109 銅印出土状況（北西から）
 - 3 SD109 銅印出土状況（南東から）
- 21 1 SE02 井戸棒 検出状況（南東から）
 - 2 SK301・SK302 遺物出土状況（南西から）
- 22 鎌倉時代以降 大型溝（SD01・SD02 北から）
- 23 1 SD01・SD02 完掘状況（南から）
 - 2 SD01 完掘状況（北から）
 - 3 SD02 完掘状況（南から）
- 24 1 SE01 完掘状況（南から）
 - 2 SE03 遺物出土状況（南から）
 - 3 SE04 遺物出土状況（西から）
- 25 弥生時代 主要出土遺物
- 26 弥生時代 大型土器集積土坑（SX01）出土遺物（1）
- 27 弥生時代 大型土器集積土坑（SX01）出土遺物（2）
- 28 弥生時代 銅鐸出土土坑（SK06）出土遺物（1） 銅鐸（76） 1. A 面 2. B 面

- 29 1 弥生時代 銅鐸出土土坑 (SK06) 出土遺物 (2) 銅鐸 (76) 詳細
1. A面 右側面 2. A面 下側面 3. A面 菱環周辺
4. B面 菱環周辺 5. B面 戴書文 6. B面 重弧文
2 弥生時代 銅鐸出土土坑 (SK06) 出土遺物 (3) 銅鐸 (76) 相伴土器
- 30 弥生時代 土器集積土坑 出土遺物 (1)
- 31 弥生時代 土器集積土坑 出土遺物 (2)
- 32 弥生時代 土器集積土坑 出土遺物 (3)
- 33 弥生時代 土器集積土坑 出土遺物 (4)
- 34 弥生時代 土器集積土坑 出土遺物 (5)
- 35 弥生時代 土器集積土坑 出土遺物 (6)
- 36 弥生時代 土坑 出土遺物 (1)
- 37 1 弥生時代 土坑 出土遺物 (2)
2 弥生時代 溝・小穴 出土遺物
- 38 奈良・平安時代 主要出土遺物 (SD107 出土遺物)
- 39 1 奈良・平安時代 土坑 出土遺物
2 奈良・平安時代 溝 出土遺物 (1)
- 40 奈良・平安時代 溝 出土遺物 (2)
- 41 奈良・平安時代 溝 出土遺物 (3)
- 42 1 奈良・平安時代 溝 出土遺物 (4) SD109 出土銅印
2 奈良・平安時代 井戸 (SE02) 出土遺物
- 43 奈良・平安時代 包含層 出土遺物 (1)
- 44 奈良・平安時代 包含層 出土遺物 (2)
- 45 1 奈良・平安時代 包含層等 出土遺物 1. 緑釉陶器 2. 輪羽口 3. 鉄滓
2 鎌倉時代以降 出土遺物
- 46 1 銅鐸 X線画像
2 銅印 X線画像

挿 図 目 次

Fig. 1	松東遺跡の位置	1	Fig. 34	SK231 実測図	27
Fig. 2	試掘坑配置図	2	Fig. 35	SK339 実測図	28
Fig. 3	試掘坑土層柱状図	2	Fig. 36	SK346・SK347 実測図	28
Fig. 4	グリッド配置図	3	Fig. 37	SK351・SK352 実測図	29
Fig. 5	調査風景	4	Fig. 38	SK361 実測図	29
Fig. 6	銅鐸検出状況	4	Fig. 39	SK361 における遺物の対応関係	30
Fig. 7	現地説明会風景	5	Fig. 40	SK07 出土遺物	31
Fig. 8	整理作業風景	5	Fig. 41	SK56 出土遺物	32
Fig. 9	木船銅鐸 1号・2号	6	Fig. 42	SK84 出土遺物	33
Fig. 10	森西遺跡 銅鐸形土製品	6	Fig. 43	SK231 出土遺物	34
Fig. 11	松東遺跡周辺の遺跡分布	7	Fig. 44	SK339 出土遺物	35
Fig. 12	大蒲村東1遺跡 木簡	8	Fig. 45	SK346・SK347 出土遺物	36
Fig. 13	木船座寺跡 軒丸瓦・軒平瓦	8	Fig. 46	SK351 出土遺物	37
Fig. 14	宮竹野郡遺跡6次 官衙関連遺物	8	Fig. 47	SK352 出土遺物	38
Fig. 15	松東遺跡2次 銅鐸飾耳片	9	Fig. 48	SK361 出土遺物(1)	39
Fig. 16	松東遺跡周辺の調査状況	10	Fig. 49	SK361 出土遺物(2)	40
Fig. 17	土層観察位置図	11	Fig. 50	SK02 実測図	41
Fig. 18	調査区土層柱状図	12	Fig. 51	SK03 実測図	41
Fig. 19	弥生時代 遺構分布図	13	Fig. 52	SK50 実測図	42
Fig. 20	SX01 実測図	14	Fig. 53	SK79・SK208 実測図	42
Fig. 21	SX01 出土遺物(1)	15	Fig. 54	SK209・SK212・SK215 実測図	43
Fig. 22	SX01 出土遺物(2)	16	Fig. 55	SK315・SK320 実測図	44
Fig. 23	SX01 出土遺物(3)	17	Fig. 56	SK337 実測図	44
Fig. 24	SX01 出土遺物(4)	18	Fig. 57	弥生時代 土坑 出土遺物(1)	45
Fig. 25	SX01 出土遺物(5)	19	Fig. 58	弥生時代 土坑 出土遺物(2)	46
Fig. 26	SK06 実測図	20	Fig. 59	弥生時代 土坑 出土遺物(3)	47
Fig. 27	SK06 出土銅鐸三次元陰影図	22	Fig. 60	SD03 実測図(1)	48
Fig. 28	SK06 出土銅鐸実測図	23	Fig. 61	SD03 実測図(2)	49
Fig. 29	SK06 出土銅鐸復元図	24	Fig. 62	SD13 実測図	49
Fig. 30	SK06 出土遺物	25	Fig. 63	SD17・SD51・SD58・SD60 実測図	50
Fig. 31	SK07 実測図	26	Fig. 64	弥生時代 溝 出土遺物(1)	51
Fig. 32	SK56 実測図	26	Fig. 65	弥生時代 溝 出土遺物(2)	52
Fig. 33	SK84 実測図	27	Fig. 66	SD102 出土遺物	52

Fig. 67	SP24・SP131・SP713 実測図	53	Fig. 103	松東遺跡周辺の地籍図と 奈良・平安時代の遺構	86
Fig. 68	弥生時代 小穴 出土遺物	53	Fig. 104	鎌倉時代以降 遺構分布図	87
Fig. 69	SR01 実測図	54	Fig. 105	SD01 実測図	88
Fig. 70	弥生時代 包含層等 出土遺物 (1)	55	Fig. 106	SE01・SE03・SE04 実測図	88
Fig. 71	弥生時代 包含層等 出土遺物 (2)	56	Fig. 107	鎌倉時代以降 出土遺物	89
Fig. 72	弥生時代 包含層等 出土遺物 (3)	56	Fig. 108	松東遺跡周辺の地籍図	90
Fig. 73	松東遺跡周辺と弥生時代の遺構	60	Fig. 109	松東遺跡周辺の地籍図詳細と 松東遺跡の中世遺構全体図	91
Fig. 74	西遠江口における主要弥生時代遺跡分布図	61	Fig. 110	銅鐸鈕 (左)、銅印 (中・右) と その分析箇所	93
Fig. 75	奈良・平安時代 遺構分布図	62	Fig. 111	銅鐸鈕分析箇所 (Fig. 110 左) の XRF スペクトル	94
Fig. 76	SH01 実測図	63	Fig. 112	銅印分析箇所 (Fig. 110 中 a) の XRF スペクトル	94
Fig. 77	SH02・SH05・SH08 実測図	64	Fig. 113	銅印分析箇所 (Fig. 110 中 b) の XRF スペクトル	94
Fig. 78	SH09 実測図	65	Fig. 114	銅印分析箇所 (Fig. 110 中 c) の XRF スペクトル	94
Fig. 79	SH03 実測図	65	Fig. 115	ICP 発光分析用使用採取部分	95
Fig. 80	SH04 実測図	66	Fig. 116	銅鐸鈕と銅印の鉛同位体比 測定用試料採取部分	96
Fig. 81	SH06・SH07 実測図	66	Fig. 117	松東遺跡出土資料の鉛同位体比分布 (A式図)	98
Fig. 82	SK301・SK302・SK317・SK332 実測図	67	Fig. 118	松東遺跡出土資料の鉛同位体比分布 (B式図)	98
Fig. 83	SK322・SK325・SK333 実測図	68	Fig. 119	松東遺跡出土銅鐸と突線鈕式銅鐸の 鉛同位体比分布 (A式図)	99
Fig. 84	奈良・平安時代 土坑 出土遺物	69	Fig. 120	松東遺跡出土銅鐸と突線鈕式銅鐸の 鉛同位体比分布 (B式図)	99
Fig. 85	SD107 実測図 (1)	71	Fig. 121	Fig. 119 の突線鈕式銅鐸の 鉛同位体比分布の拡大図 (A式図)	99
Fig. 86	SD107 実測図 (2)	72	Fig. 122	Fig. 120 の突線鈕式銅鐸の 鉛同位体比分布の拡大図 (B式図)	99
Fig. 87	SD109 実測図	73	Fig. 123	皇朝十二銭と奈良・平安時代資料の 鉛同位体比分布 (A式図)	99
Fig. 88	SD110 実測図	73			
Fig. 89	SD107 出土遺物 (1)	74			
Fig. 90	SD107 出土遺物 (2)	75			
Fig. 91	SD107 出土遺物 (3)	76			
Fig. 92	SD109 出土銅印 実測図・三次元陰影図	77			
Fig. 93	SD109 出土遺物	78			
Fig. 94	奈良・平安時代 溝 出土遺物	78			
Fig. 95	奈良・平安時代 小穴 出土遺物	79			
Fig. 96	SE02 井戸枠検出状況 (東から)	80			
Fig. 97	SE02 実測図	80			
Fig. 98	SE02 出土遺物	81			
Fig. 99	奈良・平安時代 包含層等 出土遺物 (1)	82			
Fig. 100	奈良・平安時代 包含層等 出土遺物 (2)	83			
Fig. 101	奈良・平安時代 包含層等 出土遺物 (3)	84			
Fig. 102	奈良・平安時代 包含層等 出土遺物 (4)	84			

Fig. 124	皇朝十二銭と奈良・平安時代資料の 鉛同位体比分布 (B式図) ……………	99	Fig. 138	山の神遺跡 墨書山茶碗……………	121
Fig. 125	奈良・平安時代の鉛同位体比分布 (A式図) ……………	100	Fig. 139	宮竹野際遺跡「北家」墨書 ………	121
Fig. 126	奈良・平安時代の鉛同位体比分布 (B式図) ……………	100	Fig. 140	出土銅印 ……………	122
Fig. 127	銅鐸のクリーニング処理前後写真 1. A面 処理前 2. A面 処理後 3. B面 処理前 4. B面 処理後 ………	101	Fig. 141	東海地方における古代銅印分布図 (発掘調査出土品) ……………	123
Fig. 128	銅鐸・銅印の修復状況写真 ………	102	Fig. 142	静岡県関係古代銅印 ……………	124
Fig. 129	木材顕微鏡写真 ……………	104	Fig. 143	出土墨書 ……………	125
Fig. 130	松東遺跡とその周辺における 銅鐸関連遺物分布状況 ……………	105	Fig. 144	古代の主な遺構と特殊遺物の出土状況	125
Fig. 131	松東遺跡出土銅鐸想定復元図 ………	106	Fig. 145	宮井戸川及び支流の推定流路と 各遺跡の様相 ……………	127
Fig. 132	東海地方における銅鐸破片 ………	107		付図	
Fig. 133	突線鈕式銅鐸と銅鐸破片の分布 ……	109	Fig. 146	松東遺跡 検出遺構全体図……………	142
Fig. 134	遠江における銅鐸の変遷 ……………	113	Fig. 147	弥生時代 検出遺構……………	143
Fig. 135	突線鈕式銅鐸のライフサイクル ……	114	Fig. 148	奈良・平安時代 検出遺構……………	144
Fig. 136	遠江における銅鐸の分布と地域圏 …	115	Fig. 149	鎌倉時代以降 検出遺構……………	145
Fig. 137	西遠江における郡と郡家の推定地 …	119	Fig. 150	松東遺跡 検出遺構図①……………	146
			Fig. 151	松東遺跡 検出遺構図②……………	147
			Fig. 152	松東遺跡 検出遺構図③……………	148

表 目 次

Tab. 1	発掘調査工程表 ……………	4	Tab. 10	松東遺跡で発掘された銅鐸と銅印の 鉛同位体比……………	98
Tab. 2	出土資料器種比率 ……………	57	Tab. 11	樹種同定結果一覧……………	104
Tab. 3	松東遺跡3次調査の 一括資料における属性分析 ………	58	Tab. 12	突線鈕式銅鐸の破片資料……………	108
Tab. 4	一括資料における属性の変遷 ………	59	Tab. 13	銅鐸型式別出土数……………	110
Tab. 5	小穴出土遺物一覧 ……………	79	Tab. 14	静岡県出土銅鐸一覧……………	112
Tab. 6	松東遺跡出土遺物の分析項目 ………	93	Tab. 15	永田遺跡群における特殊遺物の出土状況	120
Tab. 7	酸可溶分 (sol 液) の定量分析結果 ……	95	Tab. 16	東海地方の銅印一覧……………	123
Tab. 8	酸不溶分 (insol 液) の定量分析結果 …	95			
Tab. 9	松東遺跡で発掘された銅鐸と銅印の 化学組成 ……………	97			



浜松市域から出土した突縁鈕式銅鐸群

第1章 序 論

1 調査にいたる経緯

松東遺跡は、静岡県浜松市東区天竜川町に所在する弥生時代～中世の遺跡である。1989年に企業の社屋建設に伴って発見され、これまでに2度の発掘調査が実施されている。過去の調査では弥生時代の環濠とみられる溝が確認され、銅鐸飾耳の破片が出土するなどの成果が得られている（浜文協1990 a・b）。また、松東遺跡の周辺には弥生時代後期及び古代の遺跡が点在し、永田遺跡群と総称されているが、官衙の存在をうかがわせる遺構・遺物が確認されていることから、長田（長上）郡家の所在地に想定されている。

松東遺跡の南側には、JR東海道線の天竜川駅が存在する。天竜川駅は通勤・通学時の利用が多く乗降客数が増加傾向にあり、周辺には住宅街が形成されて交通量も多いことから、都市計画上の地域生活拠点に位置づけられている。しかしながら、駅の改札口は北側にしかなく、駅周辺の施設も小規模であることから、交通の結節点機能を果たしていく上で利便性や安全性に課題を抱えている。

こうした課題を改善するため、天竜川駅及び周辺の整備事業が計画された。整備区域のうち、駅北側の駅前広場計画地が松東遺跡の範囲に含まれる可能性があることから、その車道部分の取り扱いについて、浜松市（土木部東・浜北土木整備事務所）と浜松市教育委員会（市民部文化財課が補助執行）が事前協議を行い、2011年3月23日に遺跡の範囲を把握するための予備調査を実施した。予備調査の結果、車道の整備計画地全域に遺跡が広がっていることが明らかとなったため、本発掘調査を実施することとなった。

調査は、浜松市教育委員会（市民部文化財課が補助執行）が行い、実務は、浜松市から業務を受託した株式会社フジヤマが実施した。現地調査は2012年6月1日から2013年3月22日にかけての約9ヶ月間で実施した。調査面積は2,102 m²である。

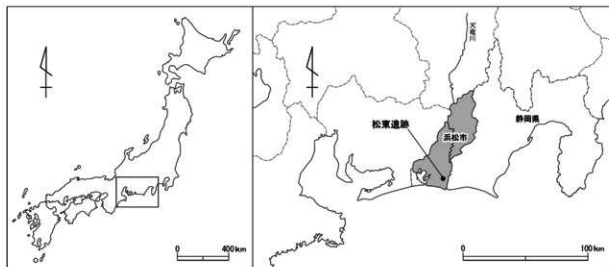


Fig.1 松東遺跡の位置

2 予備調査

従来、今回の調査対象地は松東遺跡の隣接地という扱いであったが、これまでに調査履歴はなく、遺跡が及んでいる可能性があったため、2011年3月23日に浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が予備調査を実施した。

この予備調査では、5箇所の試掘坑（3m×4mを1箇所、3m×3mを2箇所、2m×4mを2箇所）を設定した。いずれもバックホーにて層位的に掘削し、遺構・遺物の有無を確認したのち、人力で試掘坑の壁面を精査して土層の堆積状況を記録した。土層の詳細については、次章1「基本層位と遺構検出面」を参照していただきたい。

調査の結果、いずれの試掘坑でも弥生時代後期の山中～欠山式期の土器、奈良時代の須恵器・土師器、山茶碗などの遺物が認められた。基盤層は地表より2m以上低い標高約4.4～4.8mで確認され、試掘坑2・3・4・5では、基盤層を掘り込んだ遺構が検出された。

試掘坑1・2・3・5では、標高4.8～5.1m付近で弥生時代と古代の遺物包含層（Ⅳ層）が確認された。また、各試掘坑のⅢ層から山茶碗が出土したことから、鎌倉時代の遺構が残されている可能性も推測された。

このように、いずれの試掘坑からも遺跡の存在を示す結果が得られ、従来よりも大きく東へと遺跡の範囲が広がることが判明したため、埋蔵文化財包蔵地の範囲変更を行った上で、本発掘調査を実施することとなった。

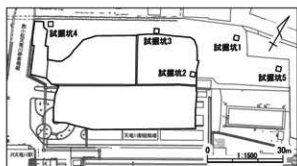


Fig.2 試掘坑配置図

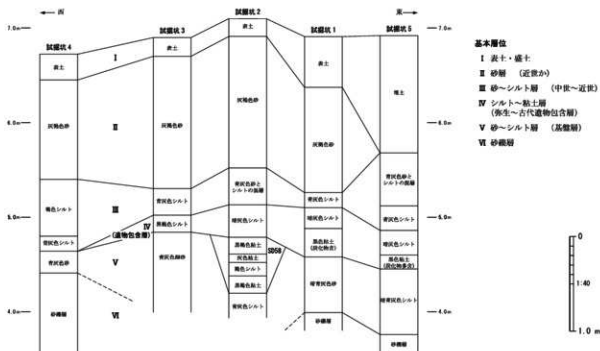


Fig.3 試掘坑土層柱状図

3 調査の方法と経過

(1) 調査方法

調査区・グリッドの設定 発掘調査対象地に国家座標軸（世界測地系）に合わせた10 m間隔のグリッドを設定した。調査地区の北西隅（ $X = -141990$ 、 $Y = -66030$ ）を原点とし、東西方向にアルファベット、南北方向に数字をそれぞれ組み合わせた。各グリッド名は北西の基準点を名称とした。発掘調査区は整備事業の工程との兼ね合いにより、調査対象地を1～4工区に4分割して調査を行った。

表土掘削 調査対象地の遺物包含層上面までは重機（バックホー）を用いて除去した。表土および盛土は1.2～2.0 mの厚さがあり、中間層は0.3～0.6 mの厚さで堆積していた。標高4.8～5.3 m付近まで掘削した。

包含層掘削・遺構精査 重機で表土などを除去した後、鍬、スコップ、鋤簾等を使用し、人力による包含層掘削と遺構精査を行った。

遺構掘削 遺構検出後、移植ゴテや竹ベラ等を使用し、遺構埋土を掘削した。遺構の埋没状況を把握するため、適宜セクションベルトを設定し、土層断面図を作成した。また、土器集積土坑など土器が多量に出土した遺構や特徴的な遺構は、出土状況図を作成した。出土状況図で図示できなかったものや、特徴的な遺物については取り上げの際に出土位置を測量した。

図面作成 遺構の測量は基準点やグリッド杭をもとに、トータルステーションを用いて行った。遺構の土層断面図の測量も同様の方法で行い、ともに縮尺20分の1で作成した。また、遺物出土状況図は一部写真測量を使用し、縮尺10分の1で作図を行った。

写真撮影 写真撮影は主に銀塩フィルムを用いた。フィルムはモノクロフィルムとカラーリバーサルフィルムを使用し、6×7判を主体とした。全景写真や重要遺構については4×5判を使用し、35mm判とデジタルカメラを補助的に使用した。なお、全景写真の撮影にはローリングタワーを使用した。

整理作業 洗浄・注記等の基礎整理作業は、現地調査と並行して現場事務所にて実施した。本格的な整理作業は、現地調査翌年度の2013年6月から2014年2月まで浜松市東区天龍川町の株式会社フジヤマ事業本部において実施した。

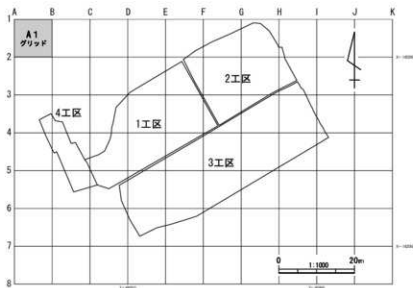


Fig.4 グリッド配置図

2 工区は、1 工区と比較してやや遺構密度は薄く、特に中央部から北部にかけては遺構はほとんど検出されなかった。遺構としては、土器が多く出土した弥生時代の大型土器集積土坑（SX01）や溝（SD51 ほか）などが検出された。

3 工区の調査 1 月 15 日～25 日に表土掘削を実施した。21 日から作業員を導入し、包含層掘削・遺構精査の作業を並行して行った。29 日の遺構精査中に、SD109 上層から銅印が出土し、周辺からは墨書土器や灰釉陶器なども出土した。2 月 7 日～3 月 9 日に遺構掘削を行った。3 月 14 日に全景写真を撮影し、22 日に調査を完了した。なお、現地調査と並行して行っていた基礎整理作業も、3 月 22 日までに完了した。

3 工区は今回の調査区の中で一番広い面積であり、遺構・遺物ともに密度が濃かった。土器集積土坑（SK352・SK361 ほか）や溝などの弥生時代の遺構も 1・2 工区と同様に検出されたが、特筆すべきは 1・2 工区に比べ古代の遺構が数多く検出されたことである。掘立柱建物（SH03～09）や井戸（SE02）、溝（SD107・SD109 ほか）などが検出され、特に SD107 からは須恵器や灰釉陶器、土師器等の遺物が多く出土した。

成果の公開 発掘調査期間中は、調査成果を市民へ伝えるため、随時「発掘調査通信」を発行し、現地の道路沿いに掲示するとともに、設置したポストに入れて配布した。また、銅鐸鈕出土に伴い 2012 年 9 月 15 日に現地説明会を実施した。地域の方の関心は高く、遠方からの方も含め 550 人の見学者が来訪した。その後、浜松市博物館において、出土した銅鐸鈕の速報展示を 9 月 17 日～10 月 8 日に、銅印の速報展示を 2013 年 3 月 6 日～4 月 7 日に実施した。

整理作業 現地調査翌年度の 2013 年 6 月～2014 年 2 月に、浜松市東区天龍川町の株式会社フジヤマ事業本部において整理作業を実施した。遺物の接合・復元、遺物実測・トレース、遺物写真撮影などを実施し、報告書の編集・執筆を行った。

調査参加者

現地調査 池田典子、伊藤均、植田嘉明、内山孝彦、大石稔、影山文子、木下益男、金原知一、倉田秀彦、

佐々木真佐エ門、鈴木勝太郎、鈴木由美子、永井攻、野沢豊秀、野本徹、橋爪博幸

整理作業 奥野加織、田口久子、豊田七重、野沢豊秀、前島里美、水野知恵子



Fig.7 現地説明会風景



Fig.8 整理作業風景

4 遺跡をめぐる環境

(1) 立地環境

松東遺跡は、天竜川の下流域の沖積平野に位置する。遺跡の東方約1kmに安間川、西方約2kmに芳川、両河川のほぼ中央を宮井戸川が流れ、芳川に合流している。遺跡周辺部は平坦な市街地となっており、南接してJR東海道線天竜川駅が立地する。

堤防が整備される以前の天竜川は、流路変更を繰り返し、大小の支流が平野全体を網の目のように流下していた。河道や湿地の間に形成された微高地は、古くから居住適地となっており、松東遺跡もそのような微高地上に位置している。

(2) 歴史的環境

弥生時代 天竜川の沖積平野の開発は縄文時代晩期にさかのぼることが明らかになっている。これまでの調査から、天王中野遺跡、宮竹野際遺跡、山の神遺跡、松東遺跡、森西遺跡から、わずかに縄文土器が出土している。宮竹野際遺跡では、弥生時代前期の可能性がある水田跡が発見されているが（浜文協 1994）、本格的な開発は弥生時代中期以降に始まったと考えられる。

弥生時代中期から後期にかけて、多くの集落や水田の痕跡が確認されている。大蒲町村東1遺跡、森西遺跡、越前遺跡、寺西遺跡などがあげられ、松東遺跡、山の神遺跡、将監名遺跡では環濠集落が確認されている。

浜松市では、これまで20個以上の銅鐸が確認されている。中でも、天竜川下流の平野部は有力な銅鐸出土地の一つであり、松東遺跡からは近畿式銅鐸の飾耳片が（浜文協 1990b）、約0.5km西方の木船遺跡ではほぼ完全な三遠式銅鐸2口が、約3km南西の芳川町のツツミドリ銅鐸出土地においては銅鐸2口（1口は三遠式、もう1口は所在不明）が出土した。また、森西遺跡からは、銅鐸形土製品の鈕部分が発見された（浜文振 2005）。これらのことから、弥生時代後期のこの地域に一定の勢力を持った拠点集落群が形成されていたと考えられる。

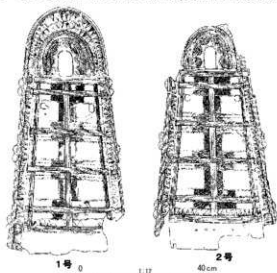


Fig.9 木船銅鐸 1号・2号

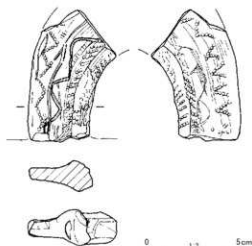


Fig.10 森西遺跡 銅鐸形土製品



Fig.11 松東遺跡周辺の遺跡分布



Fig.12 大蒲町東Ⅰ遺跡 木簡

古墳時代 古墳時代の神積平野上では集落が減少し、代わって天竜川兩岸の磐田原台地と三方原台地の縁辺部に古墳が数多く確認されるようになる。

神積平野にある古墳時代の遺跡として、天王中野遺跡、宮竹野際遺跡、山の神遺跡、越前遺跡、木船廃寺跡、大蒲町村東Ⅰ遺跡、海東遺跡があり、古式土師器が出土している。また、大蒲町村東Ⅱ遺跡では堅穴住居跡も確認されている（浜文協 2004）。しかしいずれも断片的な資料にすぎないため、集落の全体像をつかむには至っていない。

奈良時代 奈良時代に律令制の影響が及ぶと、天竜川下流域の神積平野に国郡甲（郷）制による長田郡が設置された。長田郡は、和銅2年（709）に南北に分割され、以後、北側を長上郡、南側を長下郡と呼ぶ。松東遺跡は長上郡に属すると考えられている。

長田郡及び分割後の長上郡の郡家は、木船廃寺跡に近い大蒲町村東Ⅰ遺跡近辺に中枢部が存在した可能性が大きい。近隣の木船廃寺跡、大蒲町村東Ⅰ遺跡、森西遺跡、越前遺跡、山の神遺跡、宮竹野際遺跡などを包括する地域は水田遺跡群と総称され、郡家の存在をうかがわせる木簡、墨書土器、円面硯、布目瓦や、規則性のある掘立柱建物跡が発見されている。

木船廃寺は、長田郡家の成立とほぼ同時期に創建された、浜松市内最古の寺院である。2010年度の調査で、境内地周辺から古代瓦が大量に出土したことから、位置がほぼ特定された（浜文振 2011）。その性格は、後の長上郡の郡司屋を担う勢力が造営した私寺で、郡家隣接寺院であると考えられる。木船廃寺は、補修を行いながら平安時代前半まで存続していたことが確認されている。

また、大蒲町村東Ⅰ遺跡では、宮井戸川の近くに、弥生時代中期以前に形成された埋没河川が確認されている（浜文協 2004）。前出のとおり郡家関連遺跡の分布を見ると、古代の宮井戸川と想定される埋没河川の流域に集中している。大蒲町村東Ⅰ遺跡近辺に郡家中枢があり、後に出先機能を宮竹野際遺跡付近に追加したと考えることもできる。

上組遺跡、大蒲町村東Ⅱ遺跡、天王町村東遺跡、箕輪遺跡においても、奈良時代の集落の痕跡が発見されており、郡家周辺に一定の人口を抱えていた事がわかる。これらの遺跡は芳川と安間川の間の一定範囲に分布し、松東遺跡はそのほぼ東端に相当する。



Fig.13 木船廃寺跡 軒丸瓦・軒平瓦

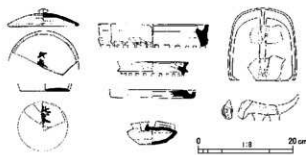


Fig.14 宮竹野際遺跡6次 官衙関連遺物

平安時代 平安時代に律令制が崩れると、長上郡内には市野莊、池田莊、蒲御厨などの莊園が成立した。松東遺跡は蒲二十四郷のひとつ橋羽郷に含まれていた。蒲御厨は、蒲氏が開発し伊勢内宮に寄進した土地のことで、これにより蒲氏は蒲神明宮の神官として莊園経営を行った。山の神遺跡からは、一町四方の大溝で区画された12世紀代の屋敷地が確認されており（浜文協1989）、有力階層の居住地と考えられる。源義朝の異母兄弟である源範頼は、蒲御厨で生まれ、蒲氏の娘を娶ったとの伝承が残る。

後の東大寺文書によると、蒲御厨の範囲は西は名塚町から丸塚町、北は原島町、東は安間町から大塚町、南は飯田町まで及び、木船庵寺跡を中心に約4km四方に至る。

鎌倉時代以降 鎌倉時代には、山の神遺跡、山寺野遺跡、寺西遺跡、宮竹野際遺跡で掘建柱建物や井戸、水田遺構が確認されている。大蒲町村東Ⅱ遺跡付近には、蒲屋敷という字名と屋敷堀跡の地割が確認できる。

蒲御厨は戦国時代には今川氏の領地となった。山の神遺跡、宮竹野際遺跡からは、14世紀に湿地を掘り下げ水田と畑を造成した島畑の痕跡が確認されている。古代の集落地の上に農地が拓かれ、松東遺跡周辺は農村景観が広がっていたと考えられる。

松東遺跡の東には応長元年（1311）に開かれた日蓮宗妙恩寺がある。松東遺跡西側の静岡県指定天然記念物「法橋の松」は、妙恩寺の建立者である金原法橋の屋敷内にあったとされ、かつての広大な寺域がうかがわれる。後の元龜三年（1572）、武田方に追われた徳川家康が妙恩寺に逃げ込み、かくまわれたと伝わる。

（3）松東遺跡をめぐる調査履歴

発見の経緯 当初は埋蔵文化財包蔵地として認識されていなかったが、隣接して越前遺跡、木船庵寺跡などの遺跡が存在することなどから、1989年11月に企業社屋建設の際に工事立会を行い、遺構・遺物が発見されたため、周辺の小字名より松東遺跡と名付けられた。

1次調査 工事立会で遺跡の存在が確認された企業社屋建設地にて、1989年12月に（財）浜松市文化協会が調査を行った（浜文協1990a）。弥生土器などの遺物出土量は少量であったが、弥生時代後期の環濠を検出した。環濠は、南北方向に延びる幅約3.0m、深さ約1.0mで、断面形は底が平らな逆台形を呈する。

2次調査 1次調査区の南側隣接地でマンション建設に伴い、1990年1月から3月にかけて（財）浜松市文化協会が調査を行った（浜文協1990b）。1次調査で確認された弥生時代後期の環濠が検出され、東へ延びることが確認された。そのほかに掘立柱建物や中世以降の井戸が検出された。遺物は突線鈕3式の近畿式銅鐸の飾耳片が出土した。

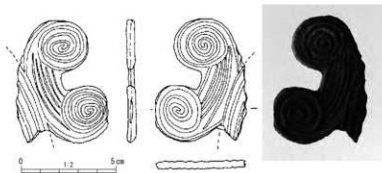


Fig.15 松東遺跡2次 銅鐸飾耳片

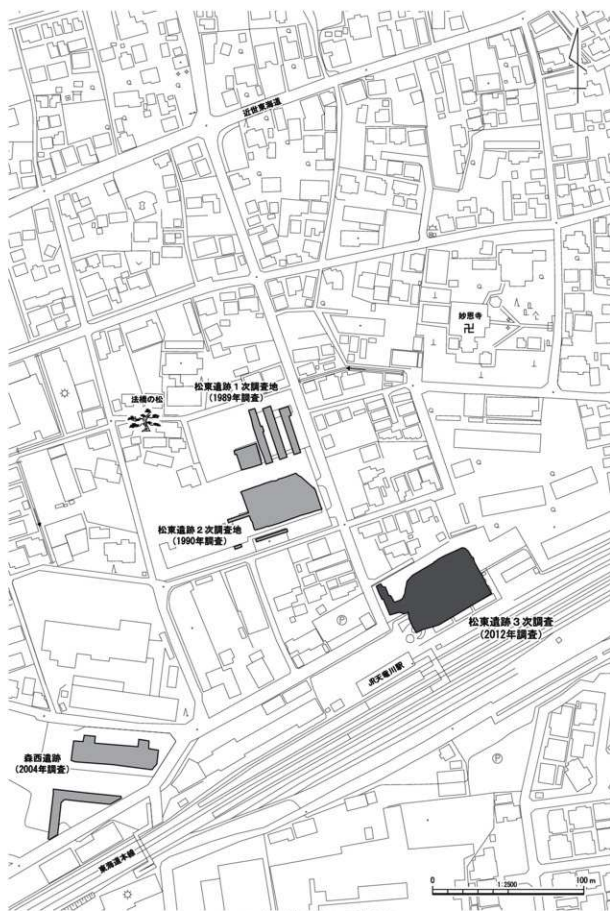


Fig.16 松東遺跡周辺の調査状況

第2章 調査成果

1 基本層位と遺構検出面

松東遺跡3次調査の基本層位は予備調査の結果を踏まえ、本調査で土層柱状図を作成し土層堆積状況を確認した (Fig. 18)。土層は大きくⅠ～Ⅵ層に分けられる。以下、各層を概観する。

- Ⅰ層** 表土および現代の盛土層である。0.15～0.7 mの堆積がみられる。
- Ⅱ層** 灰褐色および褐色を呈する砂層である。厚い箇所では約1.4 mの堆積がみられる。河川の氾濫等により一気に堆積した層と考えられる。遺物はほとんど含まれないが、近世頃の堆積層とみられる。
- Ⅲ層** 青灰色、褐色、暗灰色等を呈するシルトまたは砂の層である。ややしまりが弱く、0.3～1.0 mの堆積がみられる。さらに数層に分層することができ、調査区の東側に向かって若干砂質が強まる傾向がある。中世～近世にかけての堆積層とみられ、遺物出土量は少ないものの、下層からは山茶碗が出土している。
- Ⅳ層** 黒色、黒褐色等を呈するシルトまたは粘土の層で、弥生時代および古代の遺物包含層である。0.3～0.5 m程度堆積しており、箇所によっては数層に分層することができる。本来ならば古代の遺構面がこのⅣ層中に存在するとみられるが、明確に層位を把握することが困難であるため、Ⅴ層上面において遺構確認面としている。
- Ⅴ層** この層の上面を遺構検出面としている。2工区の中央部から北部にかけては青灰色の細砂層となっており、遺構・遺物の密度は薄い。それ以外の箇所については褐色のシルト層で、グライ化によって青灰色を呈する箇所がみられる。調査区西側ではこの層が確認できない箇所もある一方で、厚い箇所では1 m以上の堆積がみられ、下層であるⅥ層を確認できなかった箇所もある。調査区の地形は、中央部から東部にかけて高く、南西に向けて低く傾斜している。
- Ⅵ層** 直径3 cm前後の円礫からなる砂礫層である。Ⅴ層がみられない調査区西側の一部の箇所では、この層の上面で遺構を検出している。

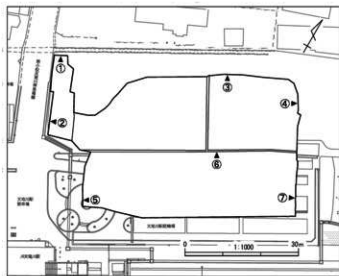


Fig.17 土層観察位置図

1 基本層位と遺構検出図

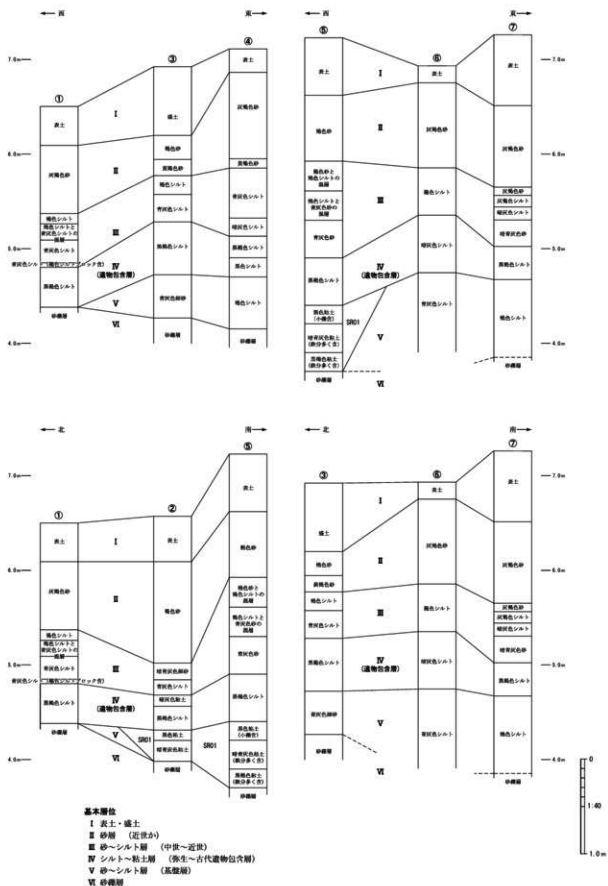


Fig.18 調査区土層柱状図

2 弥生時代

(1) 検出遺構の概観

1～3工区のほぼ全域にわたって弥生時代後期から終末期にかけての遺構を検出した (Fig. 19)。なお、元屋敷Ⅰ式期を古墳時代初頭に含める考え方もあるが、本書では弥生時代終末期とする。

検出された弥生時代の遺構は、土坑・溝・小穴である。土坑は、SX01をはじめとして土器が集中して出土するものが多く確認された。これらの分布にまともりは認められず、調査区全域に分散している。また、SK06からは銅鐸の鈕の破片が出土している。溝は、SD60・SD103は低位面へと延びていることから排水溝として、SD03・SD51は直線的に延びていることから区画溝としての性格がそれぞれ考えられる。多数検出された小穴は、その用途を確定できるものはみられないが、一部は柱穴とみられることから、掘立柱建物が存在した可能性は考えられる。調査区西側には自然流路 (SR01) が検出され、遺跡西側一帯に湿地帯が広がっていたことが想定される。調査区北側も徐々に低位面へ移行しており、遺構は希薄である。

(2) 大型土器集積土坑 (SX01)

SX01 (Fig. 20) 2工区F1・F2グリッドで検出した不定形の大型土坑で、長軸5.6m、短軸2.4m、深さ0.3mを測る。2工区北側の遺構が希薄になる付近に位置している。土坑の東側一部をSD51に切られているが、ほぼ単独で存在しているといえる。土坑内の北側では焼土が検出された。被熱を受けた土器があることから土坑内で焼かれたと考えられたが、焼土の堆積状況が帯状ではなくブロック状になっていることから、土坑内で焼かれたものではなく他の場所で焼かれたものが集

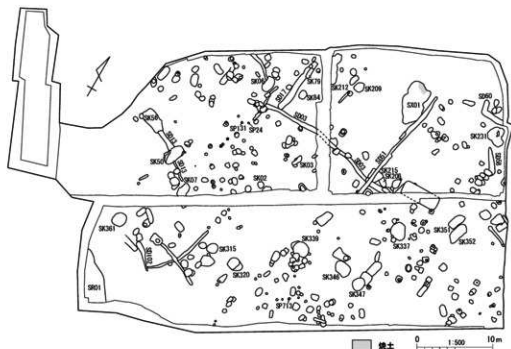


Fig.19 弥生時代 遺構分布図

められて SX01 に廃棄されたと考えられる。遺物はある程度のまとまりで捉えられる箇所もあるが、基本的に土坑全体からまんべんなく出土している。出土遺物は豊富だが破片が多く、図示した遺物 75 点の中で全体を復元できた個体はほとんどない。また、詳しくは後述するが、山中式期から欠山式期の終わりごろまでの土器が出土しており、長期にわたって SX01 が機能していたと思われる。集落のはずれに位置する立地や遺物の出土状況から、SX01 は廃棄土坑として使用されていたと思われる。

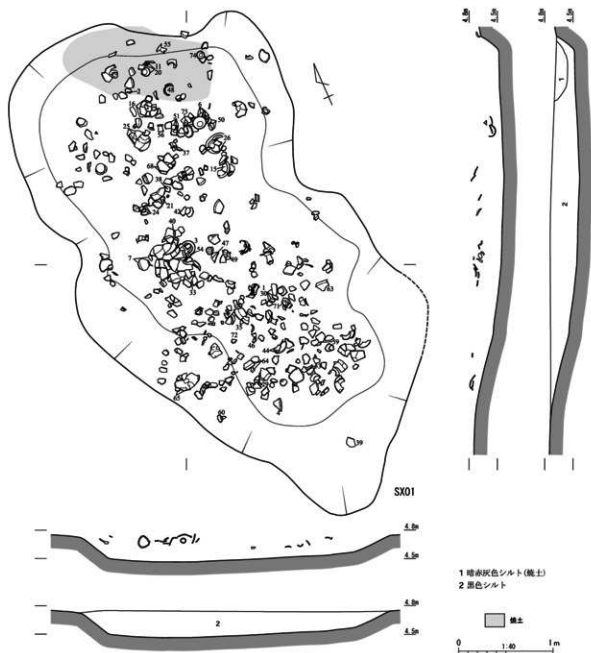


Fig.20 SX01 実測図

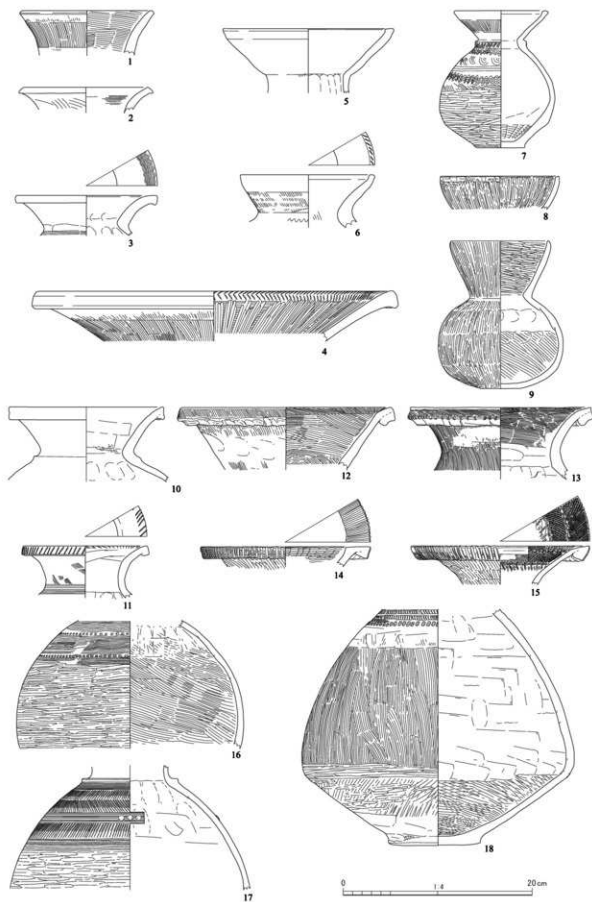


Fig.21 SX01 出土遺物 (1)

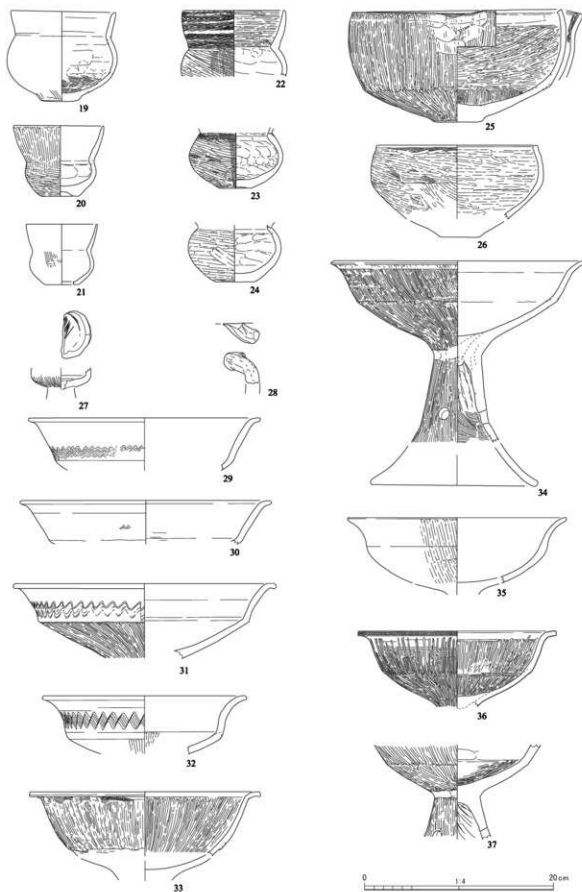


Fig.22 SX01 出土遺物 (2)

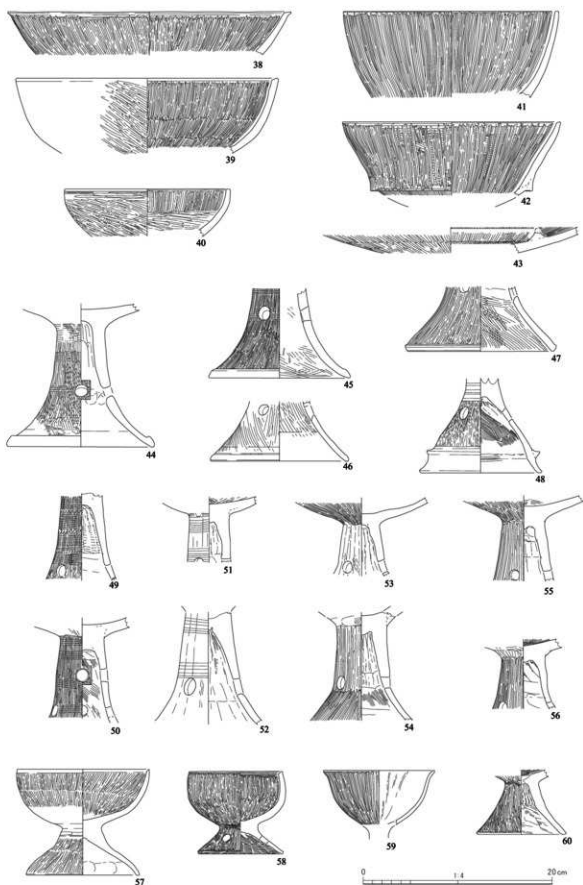


Fig.23 SX01 出土遺物 (3)

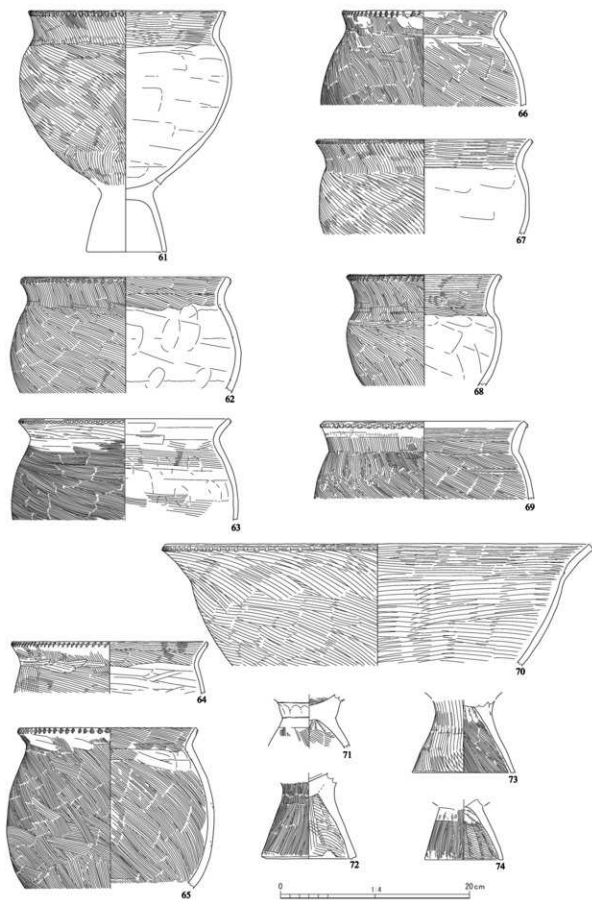


Fig.24 SX01 出土遺物 (4)

SX01 出土遺物(Fig. 21～25) 1～75はSX01から出土した遺物である。1～18は壺である。口縁形態は、広口(1)、外反口縁(2)、拡張口縁(3・4)、内彎口縁(5～8)、直口(9)、折返口縁(10～15)の各種が確認できる。4は口縁内面に羽状の刺突文が施され、胎土は緻密である。7は一部口縁が欠けているが、ほぼ完形の小型壺である。側肩部には波状文、横線文、扇形文、刺突文が施されている。14は口縁部外面に縦の押圧文、内面は平行に並ぶハケ状の調整と簾状文に近い波状文が施され、丁寧なつくりをしている。12・13・15は菊川式の搬入品であろう。15は口縁内面に結節縄文を施している。16・17の側肩部は横線文と刺突の組み合わせが施され、18は側肩部に櫛により横方向に刺突された文様が入る。また、1個体の中で破片ごとに被熱しているものとしていないものがあり、破断面にもススが附着していることから、割れた後に被熱を受けたことがわかる。



Fig.25 SX01 出土遺物(5)

19～27は鉢である。小型直口鉢(19～21)、裝飾小型直口鉢(22)、片口鉢(25)、小型脚付鉢(27)と多種類の鉢が確認できる。22は羽状文の刺突の単位が長い特徴をもつ。25は内外面とも丁寧なミガキが施されている。28は把手である。

29～60は高坏である。山中式系統(29～32)と欠山式系統(41・42)が混在する。坏部の形態は、外反坏部(29～32)、く字碗形坏部(33～36)、碗形坏部(39・40)、有稜(41・42)の各種が確認できる。34は坏部と脚部との接合の様子が観察できた。36には、簾状文のような細かい刺突が口縁に施され、ミガキは粗く下のハケが残る。43は返付高坏で、坏部内面の特に返りの内側にススが附着しており、逆位にして蓋の用途として使用された可能性がある。他地域からの搬入品と思われる。脚部は、全体の形状がわかるものの中では外反しながら開くもの(44～47)が多数を占める。48は裝飾高坏である。50は、脚部に上段1方向、下段3方向の2段の透孔をもつ。57～60は小型高坏である。57は碗形坏部で、口唇部は内傾している。脚部は低く、内彎している。58は胎土が緻密で、内外面とも丁寧なミガキが施されている。口唇部は内傾している。脚部の扁平化が顕著で、欠山Ⅲ式期の中でも新しい様相をみせている。59はく字碗形坏部で、器壁は非常に薄くつくられている。

61～74は甕である。図示できた個体はすべて口縁端部に刺突をもっている。図示できなかった個体を含めても、確認できたもののなかで刺突をもたないものは1点のみである。71～74は台付甕の脚台部で、脚部は直線的に開いている。71にのみ接合部に粘土帯を廻らせている。

75は石製の紡錘車である。泥岩製で、幅5.2cm、厚さ0.9cmの円形である。土坑内北側から土器と重なるようにして出土した。

小 結 遺物の出土量は大量にあったが、全体を復元できる個体は少なかった。そのなかでも時期の判断材料となりうる遺物をみていくと、山中式系統の高坏から欠山Ⅲ式期の中でも低脚化した小型高坏(58)など新しい様相を示すものまである。このことから、SX01は掘削から廃棄・埋没まで一定期間機能していたと思われる。その中でも主体となる時期は欠山Ⅱ～Ⅲ式期といえるだろう。

(3) 銅鐸出土土坑 (SK06)

概要 1 工区北側に位置する SK06 より銅鐸が出土した。近畿式銅鐸の鈕の破片で、鈕の頂部が大きく曲がり、飾耳は一部を残して欠損している。土坑南端の上層から、傾いた状態で出土した。共伴遺物は弥生土器があるが、いずれも小片である。

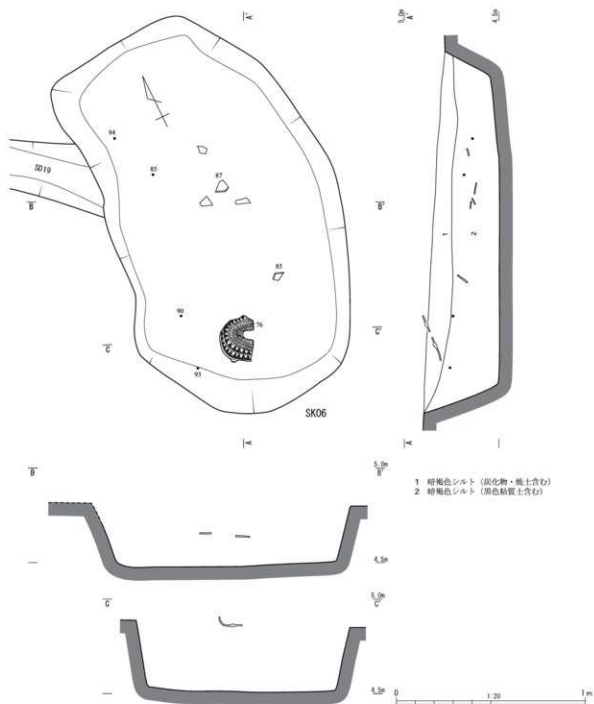


Fig.26 SK06 実測図

SK06 (Fig. 26) D2 グリッドと E2 グリッドとにまたがって検出された。平面形は、長径約 2.1 m、短径約 1.2 m の不整楕円形である。深さは約 0.4 m である。埋土は暗褐色シルトであるが、1 層は、炭化物とバミス状の焼土を少量含んでいる。2 層には焼土は見られず、炭化物の量も少ない。

1 層からは、銅鐸の破片が出土した。鈕の破片で、第 2 文様帯付近から上は大きく曲がっていた。また、縦断方向では壁際の方が低い状態で、約 23 度傾斜していた。遺構検出作業の結果、遺構の検出面は銅鐸検出面より低くなったが、銅鐸が擾乱層に突出していたわけではない。銅鐸出土状況から見れば、土坑が概ね埋積した後の窪地内に置かれていたと解釈できる。しかし、下層の埋土である 2 層は他の土坑と比較すると遺物の出土量が少なく、有機物の混じりも少ない。また、中央に向って傾斜する堆積を確認することもできなかった。これらを考慮に入れると、2 層は人為的に埋めた部分もあるように思える。銅鐸の出土状況をみると、鈕の傾斜方向が一般的な自然堆積の土層で得られる角度とは逆になっており、何らかの目的を持って置いた可能性も考えられる。

銅鐸以外の出土遺物は、弥生土器の小片であり、他の類似した土坑に比較すると、土器の出土量が少ない。

SK06 出土銅鐸 (Fig. 27 ~ 29) 銅鐸の鈕は、残存高 17.8cm (歪んだ状態)、残存幅 25.2cm、重さ 1,178g を測る。便宜的に出土した際の表面を A 面とし、裏を B 面とする。鈕は大きく歪んでいるため、現況での実測図 (Fig. 28) とともに、歪みを補正した復元図 (Fig. 29) も作図した。

鈕の頂部は、第 2 文様帯付近から A 面側に大きく歪んでいる。A 面側でいえば右側の第 2 文様帯の半分以上が欠損し、舞に近い部分では菱環の外界線も欠落している。これに対して左側は外周突線まで残存し、飾耳も一部残存している。鈕頂部の飾耳は完全に欠落しているが、その痕跡は明確ではない。欠損した部分は、錆化が進行しており、相当以前に欠損していたと観察できる。

A 面右側の菱環の外界線と、第 1 文様帯の鋸歯文の 2 箇所にも傷が認められる。前者は出土時の傷と思われるが、後者は傷の風化がみられ、いつ受けた傷かは不明である。また、両面とも鈕孔上縁を中心に錆瘤による黒褐色の変色が認められる。鏤は両面に認められるが、B 面の方が A 面よりやや目立っている。

鈕は、2 条の外周突線で縁どられている。第 1 文様帯と第 2 文様帯は、2 条の突線で界されている。いずれも内向きの鋸歯文が施されている。鋸歯文内の斜線方向は左上から右下方向である (R 鋸歯文)。菱環と外縁との界線は 3 条、内縁との界線は 2 条である。菱環には、綾杉文が施されているが、両面ともに中央部に 3 条の突線が施され、綾杉文はこれを界として左右対称になる。内縁には内向きの重弧文が施されている。重弧文は、中央に 1 単位左右に各 2 単位の合計 5 単位が連続している。A 面中央や B 面右側の重弧文には、線が 2 つに枝分かれするものがあり、描きなおしが認められる。鈕孔は縦長で、基部に 1 条の突線を施している。この突線は、舞に接続する部分で左右ともに欠落しており、鈕脚壁が剥落しているのではないかと思われる。突線の剥落している部分から、鈕脚壁の高さは 1 cm 内外と推定できる。外周突線は、鈕の全周の約半分が残存しているが、その外側 1 箇所に双頭渦文の飾耳痕跡がある。

第 1 文様帯、2 文様帯の鋸歯文は、区画線、斜線ともに界線側にはみ出した部分が認められる。第 1 文様帯頂部付近には、外向きの弧線が見られるが、範傷であろう。



Fig.27 SK06 出土銅鐸三次元陰影図

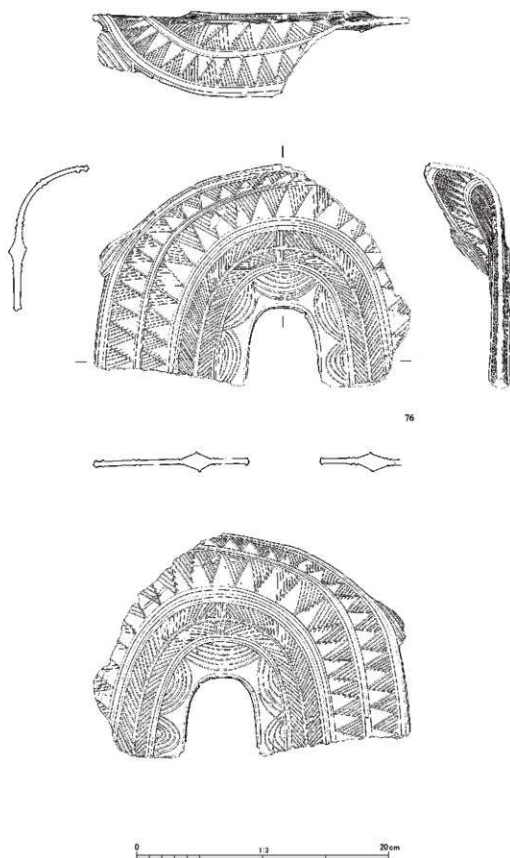


Fig.28 SK06 出土銅鐸実測図

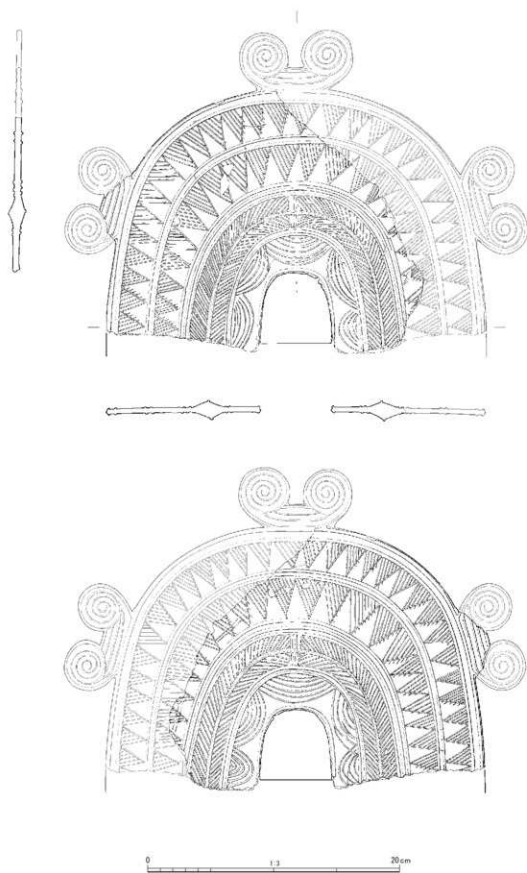


Fig.29 SK06 出土銅鐸復元図

鈕は、A面左側の舞に近いところで約12.1cm、同様に鈕孔が約3.0cmであるので、鈕幅は約30.0cmである。鈕孔の高さは、約5.6cm、幅は約5.8cmである。鈕高は、外縁を旧状に復元した状況の頂部で約20.6cmである。鈕の厚さは、第1・2文様帯で約0.45cm、内縁で約0.45cmである。菱環は、幅は約2.6cm、厚さ約1.5cmで、幅は均一である。内縁の幅は鈕の中心線付近で菱環内縁境界線も含めて約3.3cm、舞付近で約2.6cmである。外縁の幅は、中心線方向で菱環外縁境界線も含めて約8.3cmである。第1文様帯、第2文様帯の鋸歯文が施されている部分の幅は、中心線付近でそれぞれ約2.5cmと約3.0cmであり、舞付近ではそれぞれ約2.1cm、約1.9cmである。

以上の観察結果から、銅鐸全体の高さは、80～90cm程度と復元できる。

SK06 出土土器 (Fig. 30) 土器の出土量は少なく、全て破片である。これらの中で、図化可能なものは77～94に示した。77～84は、1層から出土した。77は折返口縁壺である。81は外反部高坏で、波状文が施されている。82は小型高坏である。84の土師器の甕は混入品である。85～94は銅鐸より下層の2層から出土した。85は壺の側肩部で、横線文と波状文が施されている。92は甕で、口縁端部に刺突をもつ。93・94は台付甕の脚台接合部で、94には粘土帯が廻っている。

ほとんどが小片のため詳細な時期比定は困難を極めるが、1層の出土遺物は、甕(79・80)の口縁の刺突が省略されていることなどから、山中Ⅲ～欠山Ⅰ式期が想定される。

小 結 鈕の観察結果を見ると、近畿式銅鐸と考えることができる。外周突縁が2条である点や、鈕全体に占める内縁の幅が、鈕の文様帯全体に占める割合の約25%となり、突縁鈕2式と考えられている滝峯才四郎谷銅鐸(難波2007)よりもさらに狭い点などから、突縁鈕2式(難波1986)

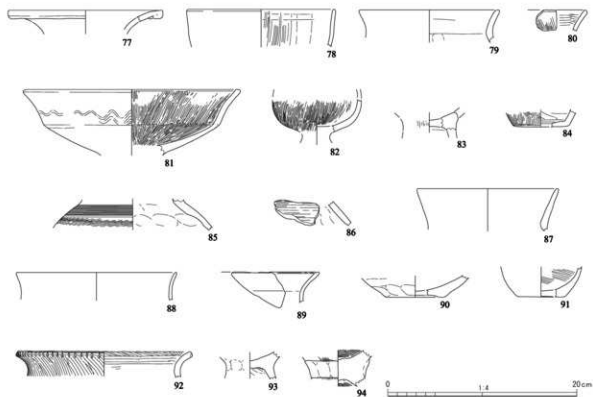


Fig.30 SK06 出土遺物

と考えるべきであろう。しかし、菱環の外縁線が3条である点や、推定復元された鐔全体の高さが突線鈕2式に例を見ないほど大きい点や、内縁が狭いながらも完成した状況にある点などから、突線鈕3式の要素もあるといえる。

(4) 土器集積土坑

概要 検出した土坑の内、他の土坑に比べて遺物が集中して出土した土坑を土器集積土坑として抽出した。土器集積土坑としたものは、SK07・SK56・SK84・SK231・SK339・SK346・SK347・SK351・SK352・SK361の10基である。以下に各遺構の詳細を紹介する。

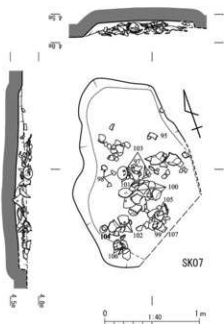


Fig.31 SK07 実測図

SK07 (Fig. 31) 1工区D4グリッドで検出した不定形の土坑で、長軸1.8m、短軸1.2m、深さ0.2mを測る。埋土には炭化物が含まれている。中世の溝であるSD02に切られているため上層は大きく削られているが、遺物は豊富に出土した。高坏や穿孔がある小型壺などが出土しており、高坏の割合も多いことから祭祀に伴う土坑とも考えられる。出土した遺物は、95～107がある。出土遺物から、欠山Ⅱ式期の遺構と捉えられる。

SK56 (Fig. 32) 1工区C4グリッドで検出した隅丸長方形の土坑で、長軸3.2m、短軸1.7m、深さ0.3mを測る。埋土中には炭化物が含まれる。3m程東にSK50があり、同じくSD13と切り合っていて土坑の形状も似ている。出土した遺物は、108～134がある。出土遺物から、欠山

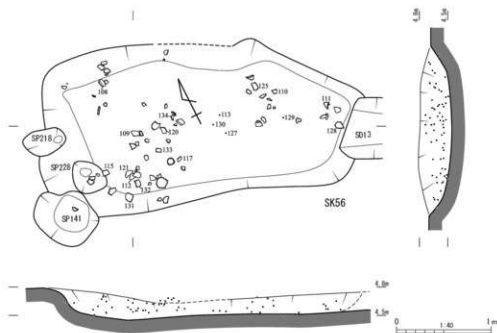


Fig.32 SK56 実測図

Ⅱ式期の遺構と捉えられる。

SK84 (Fig. 33) 1工区E2グリッドで検出した楕円形の土坑で、長軸1.1m、短軸0.9m、深さ0.4mを測る。土坑としては小規模ながら、比較的多くの遺物が出土した。出土した器種は、甕が目立つ。甕に囲まれるように完形の片口瓢壺が出土している。出土遺物は135～139である。出土遺物から、欠山Ⅱ～Ⅲ式期の遺構と捉えられる。

SK231 (Fig. 34) 2工区G1グリッドで検出した不定形の土坑で、長軸2.5m、短軸2.4m、深さ0.4mを測る。検出当初はひとつの土坑と考えていたが、土坑が切り合うような遺構となり、不定形土坑として扱う。出土遺物は140～162で、量、器種ともに比較的豊富である。出土遺物から、欠山Ⅰ～Ⅱ式期の遺構と捉えられる。

SK339 (Fig. 35) 3工区F4グリッドで検出した円形の土坑で、径2.0m、深さ0.2mを測る。埋土中に一部炭化物が含まれる。4基の遺構が切り合っている。出土遺物は163～169があり、装飾く字鉢や大型の高坏があげられる。大型の高坏は坏部と脚部が近くから出土していることから、土坑内で割れたと思われる。大型の壺の体部片も出

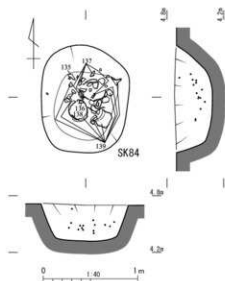


Fig.33 SK84 実測図

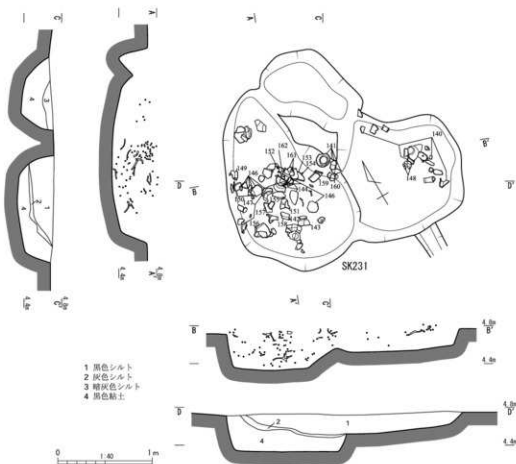


Fig.34 SK231 実測図

土している。出土遺物から、山中Ⅲ式期の遺構と捉えられる。

SK346 (Fig. 36) 3工区G4グリッドで検出した楕円形の土坑で、長軸2.2 m、短軸1.5 m、深さ0.3 mを測る。出土した遺物は170～181がある。比較的良好な状態で出土した遺物が多い。出土遺物から、元屋敷Ⅰ～Ⅰ式期の遺構と捉えられる。

SK347 (Fig. 36) 3工区G4グリッドで検出した楕円形の土坑で、長軸1.8 m、短軸1.5 m、深さ0.3 mを測る。遺物はおもに破片で出土した。このことから廃棄土坑としての用途が考えられる。出土遺物は182～187がある。出土遺物から、欠山式期の遺構と捉えられる。

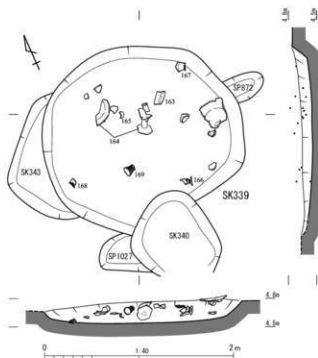


Fig.35 SK339 実測図

SK351 (Fig. 37) 3工区H3グリッドで検出した不定形の土坑で、長軸2.2 m、短軸1.1 m、深さ0.5 mを測る。埋土は1層で、短期間に埋まったと思われる。SK352に隣接する土坑で、形状が似ている。関連する遺構であろうか。土器片が重なるように出土しているため、廃棄土坑としての用途をもつと思われる。出土遺物は188～196がある。出土遺物から、欠山Ⅱ～Ⅲ式期の遺構と捉えられる。

SK352 (Fig. 37) 3工区H3グリッドで検出した不定形の土坑で、長軸3.0 m、短軸1.3 m、深さ0.6 mを測る。隣接するSK351より一回り大きい。出土遺物は197～220で、量、器種ともに豊富である。

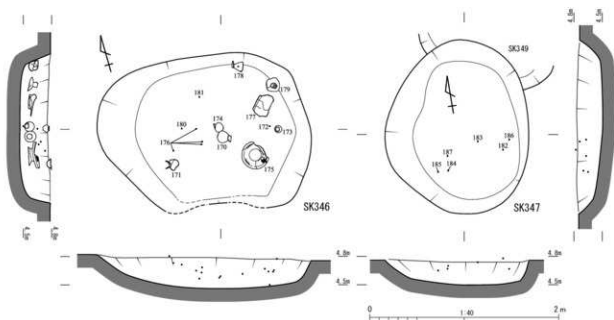


Fig.36 SK346・SK347 実測図

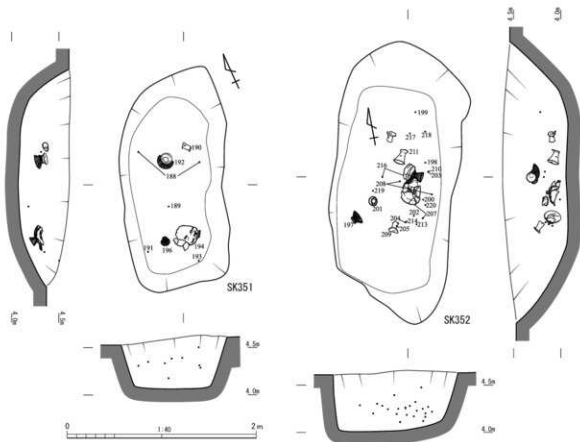
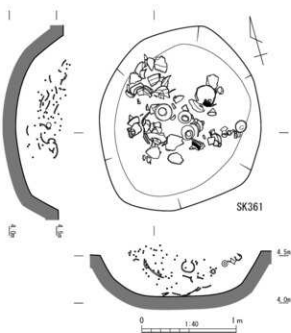


Fig.37 SK351・SK352 実測図

出土遺物から、山中Ⅲ式期の遺構と捉えられる。

SK361 (Fig. 38・39) 3工区D5グリッドで検出した円形の土坑で、径1.6m、深さ0.5mを測る。調査区西端にあるSR01の約5m北東に位置する。V層が存在しない箇所、VI層を検出面としている。出土した遺物は221～257があり、検出上面から床面まで隙間なく土器が堆積した状況で出土した。出土状況から廃棄土坑と考えられる。出土遺物から、欠山Ⅱ式期の遺構と捉えられる。

SK07 出土遺物 (Fig. 40) 95～107はSK07から出土した遺物である。95～98は壺である。96は側肩部に羽状文を施す。菊川式の搬入品と思われる。98は小型の壺で、口縁部に2箇所穿孔を有する。95・99は鉢、100～103は高坏である。100は碗形坏部高坏で、口縁端部は



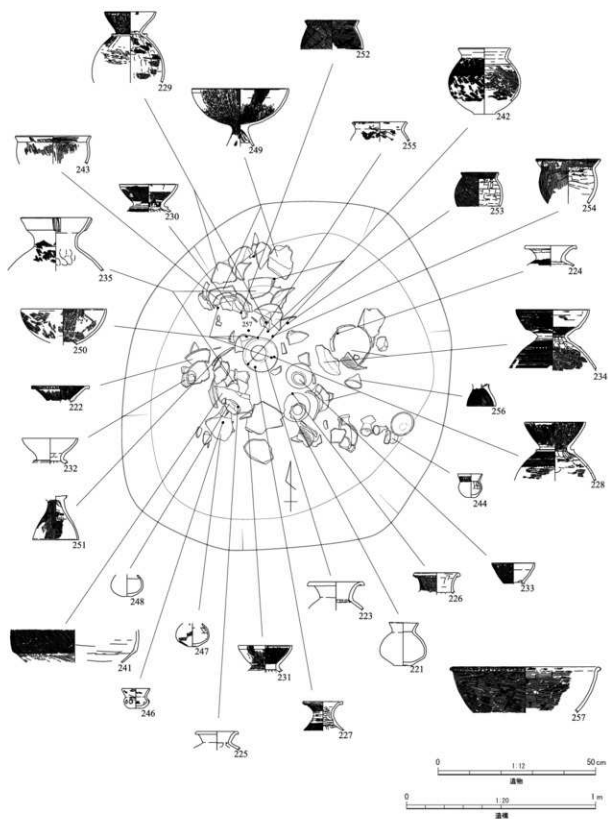


Fig.39 SK361 における遺物の対応関係

内傾している。器壁は薄く、丁寧なつくりをしている。101・102にはそれぞれ脚部に横線文や山形刺突文の装飾が施されている。4個体とも脚部裾は外反して広がる。104～107は甕である。口縁刺突のく字甕(104)やく字大型甕(105)、脚台接合部に粘土帯が廻る個体(106)などがある。106・107は脚台部の高さから、欠山Ⅱ式期にあたると考えられる。

出土物の特徴からSK07の帰属時期は、欠山Ⅱ式期と考えられる。

SK56 出土遺物 (Fig. 41) 108～134はSK56から出土した遺物である。108～124は壺である。口縁形態は、外反口縁(108～111)、折返口縁(114)がある。113の頸部には刺突による横線文が施されている。122～124は側肩部に刺突文を用いている。菊川式の影響を受けたものと考えられる。125・126は装飾直口鉢である。127は有台小型壺である。手捏ねで、胎土は灰白色である。128～131は高坏である。坏部の形態は外反(128～130)と碗形(131)がある。山中系統が主体だが、131は内湾し深い坏部であるため、欠山式の典型であるといえる。132～134は甕である。

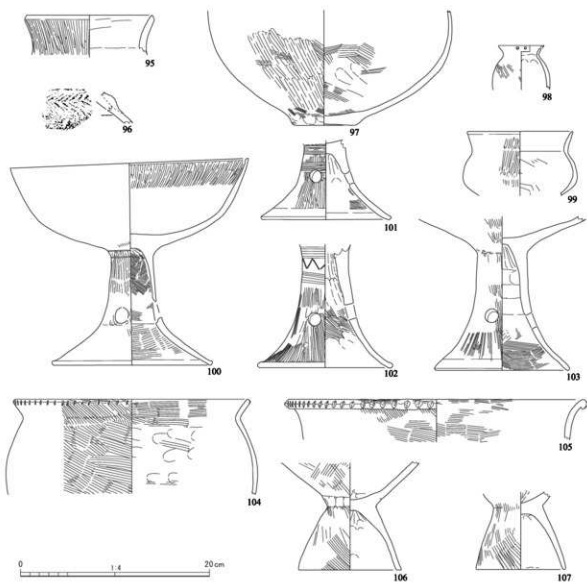


Fig.40 SK07 出土遺物

132・133 の口縁端部には刺突をもつ。

高坏などの特徴から、SK56 は欠山Ⅱ式期に帰属すると考えられる。

SK84 出土遺物 (Fig. 42) 135～139 はSK84 から出土した遺物である。135・136 は壺である。135 は折返口縁壺で、口縁には縦の押圧文を施している。136 は片口瓢壺で、口縁の一部を意図的に打ち欠いている。137～139 は甕で、137・138 は口縁端部に刺突を施し、139 は無刺突で口縁にヨコナデが入る。

出土遺物からSK84の帰属時期は、欠山Ⅱ～Ⅲ式期に位置づけられる。

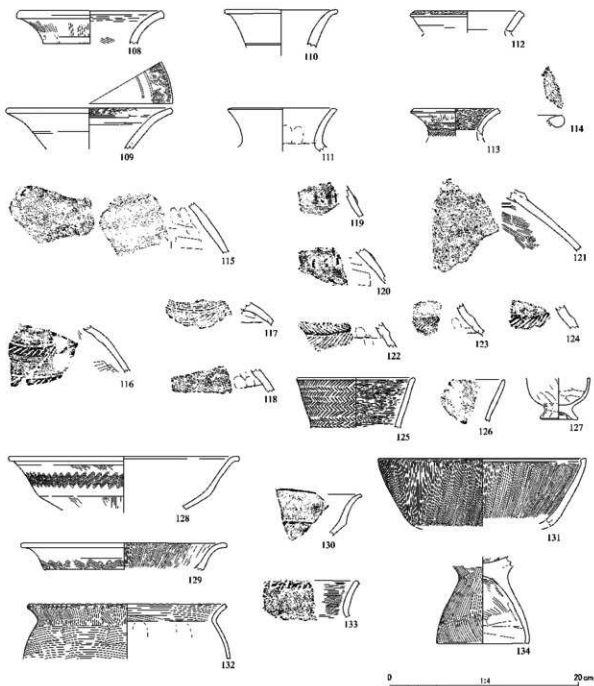


Fig.41 SK56 出土遺物

SK231 出土遺物 (Fig. 43) 140～162はSK231から出土した遺物である。140～148は壺である。口縁形態は外反口縁(140・141)、直立口縁(142・143)、折返口縁(144)、複合口縁(145)の4種類がある。側肩部の文様帯には、横線文に波状文を組み合わせた文様が多い。148は菊川式の搬入品である。149は鉢である。150～154は高坏である。150・151は外反坏部をもつ山中式系統の高坏であるが、151は山中式期の坏部より深くなっており、欠山式期に残存した変容形態と考えられる。152は口縁が内側に内彎している。154は器壁が薄く脚が低脚化し、直線的で新しい要素をもつ。155～162は甕である。口縁端部に刺突をもつもの(155～157)と、刺突をもたないもの(158・159)がある。160は脚台接合部に粘土帯が廻らされている。

154は新しい要素をもっているが、出土遺物全体をみるとSK231の帰属時期は欠山Ⅰ～Ⅱ式期と考えられる。

SK339 出土遺物 (Fig. 44) 163～169はSK339から出土した遺物である。163は装飾直口鉢である。摩滅して確認しにくい、口縁に3列の羽状文が施されている。164～166は高坏である。164はく字碗形坏部高坏で、坏部の口径が30cmを超える大型品である。長脚で裾は外反して開き、端部を折り返す山中式の特徴をもっている。165・166は脚部に文様を施しており、3条の横線文の間にそれぞれ刺突文と交差文が施されている。いずれも山中式期の特徴を有する。167～169は甕である。167・168は口縁端部に刺突をもつ。167は、口縁部に横方向のハケが丁寧に施されている。169は脚台接合部に粘土帯が廻らされている。

出土遺物は山中式期の特徴をもち欠山式期に降る遺物も見受けられないことから、SK339の帰属時期は山中Ⅲ式期と考えられる。

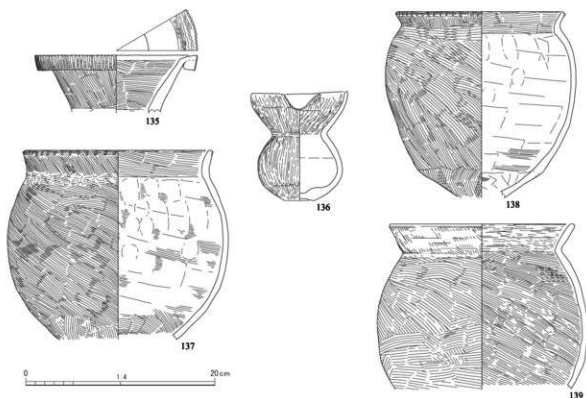


Fig.42 SK84 出土遺物

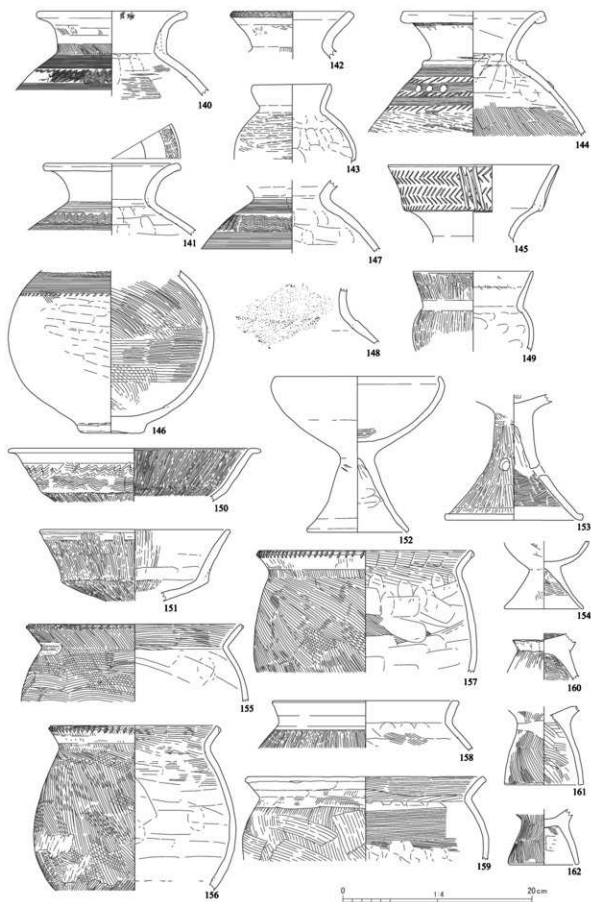


Fig.43 SK231 出土遺物

SK346 出土遺物 (Fig. 45) 170～181はSK346から出土した遺物である。170～176は壺である。口縁形態は直立口縁(170・171)、内罅口縁(172)、折返口縁(175)がある。175は口縁内面に縄文を施しており、176とともに菊川式の搬入品である。177はく字鉢である。178・179は高坏である。180・181は甕である。

直線的に開く高坏の脚(178)や低い甕の脚台部(180・181)の特徴から、SK346の帰属時期は元屋敷Ⅰ-Ⅰ式期と考えられる。

SK347 出土遺物 (Fig. 45) 182～187はSK347から出土した遺物である。182・183は壺である。182の側肩部は、横線文と刺突文の組み合わせが3列施されている。183は菊川式の搬入品である。184はく字鉢である。185・186は高坏である。187は甕である。口縁端部に刺突をもっている。

出土遺物からSK347の帰属時期は、欠山Ⅱ式期を中心としてその前後の時期幅の中で捉えたい。

SK351 出土遺物 (Fig. 46) 188～196はSK351から出土した遺物である。188～190は鉢である。191～193は高坏である。191は外反坏部高坏で波状文が施されている。194～196は甕である。194・195は口縁端部に刺突をもち、口縁部にヨコナデが入っている。196の脚台部は直線的に開いている。

特徴として壺より鉢の出土比率が大きいがいえる。甕の口縁部には刺突とヨコナデが入っている。SK351の帰属時期は、欠山Ⅱ～Ⅲ式期に相当すると考えられる。

SK352 出土遺物 (Fig. 47) 197～220はSK352から出土した遺物である。197～201は壺である。口縁形態は、内罅口縁(197・198)、拡張口縁(199～201)の2種類がある。202はく字鉢である。199・200は口縁内面に波状文が施され、199の口縁に羽状の刺突文と円形浮文がある。203～215

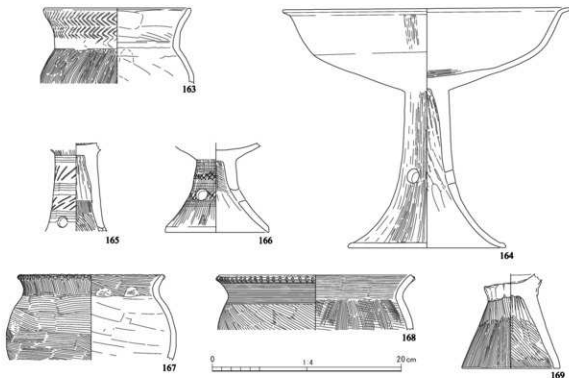


Fig.44 SK339 出土遺物

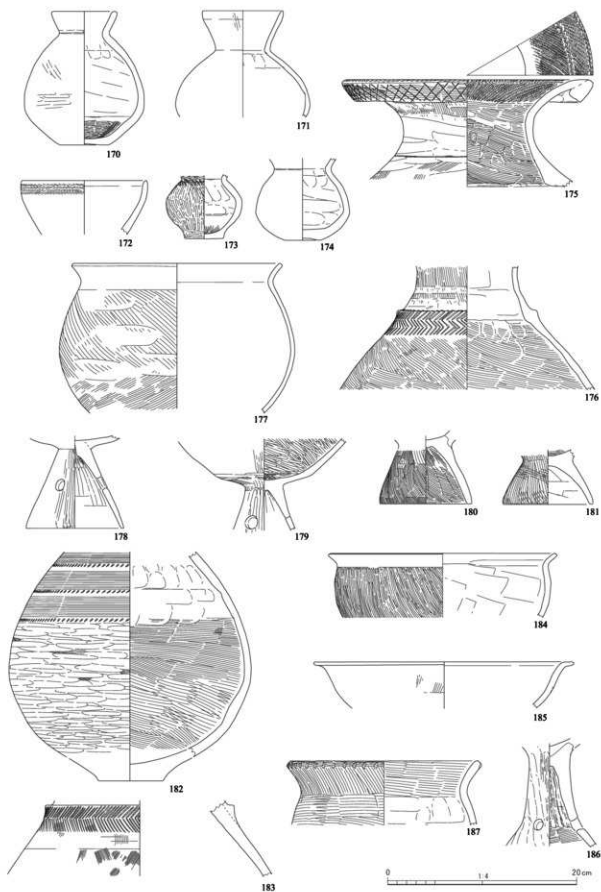


Fig.45 SK346・SK347 出土遺物
170～181：SK346 182～187：SK347

は高坏である。外反坏部（203～208）で、山中式系統の高坏が主体を占めている。203～206は坏部に波状文が施されている。207・208は形や大きさがほぼ同一である。脚部は真ん中付近で明瞭に折れ、若干内彎しながら裾が広がっている。215は脚接合部から直線的に広がっている。216～220は甕である。216・217は口縁端部に刺突をもつ。脚台部は内彎するもの（216・218）と直線的に開くもの（219・220）があり、218・219は脚台接合部に粘土帯を廻らしている。

215の高坏脚部は欠山Ⅲ式期～元屋敷Ⅰ式期頃の新しい特徴をもっているが、出土遺物全体をみると山中式期の遺物として捉えられるため、215は混入品としてよいだろう。山中式系統の高坏や台付甕の脚部が高いことなどから、SK352の帰属時期としては山中Ⅲ式期を想定したい。

SK361 出土遺物 (Fig. 48・49) 221～257はSK361から出土した遺物である。221～241・245・247・248は壺である。口縁形態は直立口縁（221）、拡張口縁（222）、折返口縁（223～227）、内彎口縁（228～233）、複合口縁（234・235）があり、多種にわたっている。222の口縁には竹管文、234は羽状の刺突文が丁寧に施されている。側肩部に突帯をもつもの（228～232・234）が目立つ。236は受口状口縁の壺である。器壁は薄く、側肩部に横線文と羽状の刺突文が施されている。横線文と刺突文の組み合わせ（228・234・238）が多く、扇形文（237）も見受けられる。搬入品も多く確認でき、226・227・240・241は菊川から搬入されたものであろう。235も他地域からの搬入品と思われる。242～244・246は鉢である。246は扁平な小型直口鉢で、胴部に円形浮文2個1対が貼り付けられている。249～251は高坏である。249・250は碗形坏部をもち、口径は30cm近くある大型品である。251は脚が内彎しながら広がっており、249・250とあわせて典型的な欠山式の特徴をもつといえる。252～257は甕である。口縁端部に刺突をもつもの（252～254、257）と無刺突

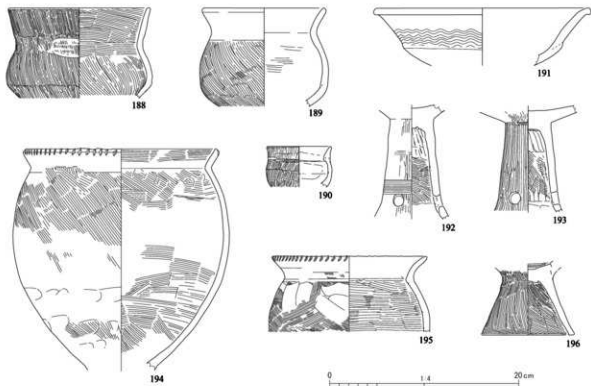


Fig.46 SK351 出土遺物

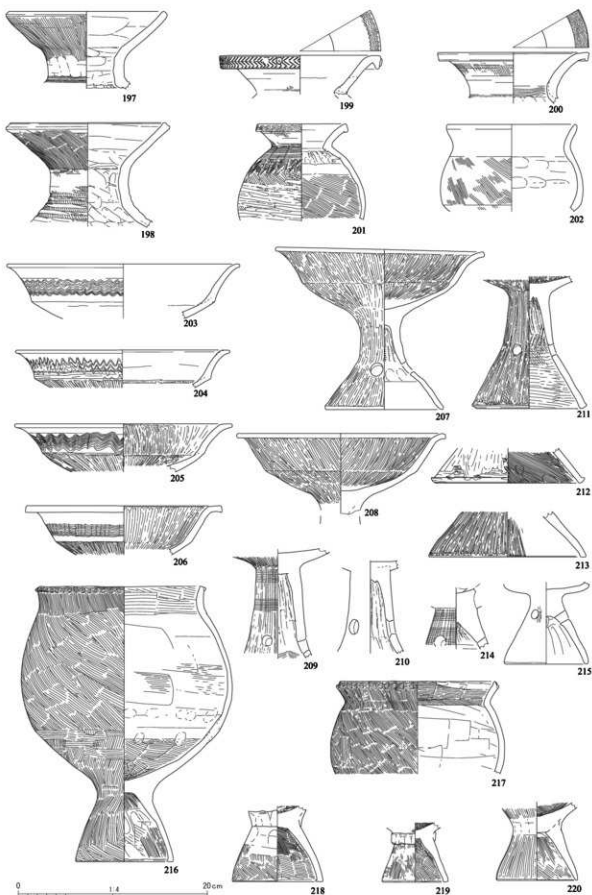


Fig.47 SK352 出土遺物

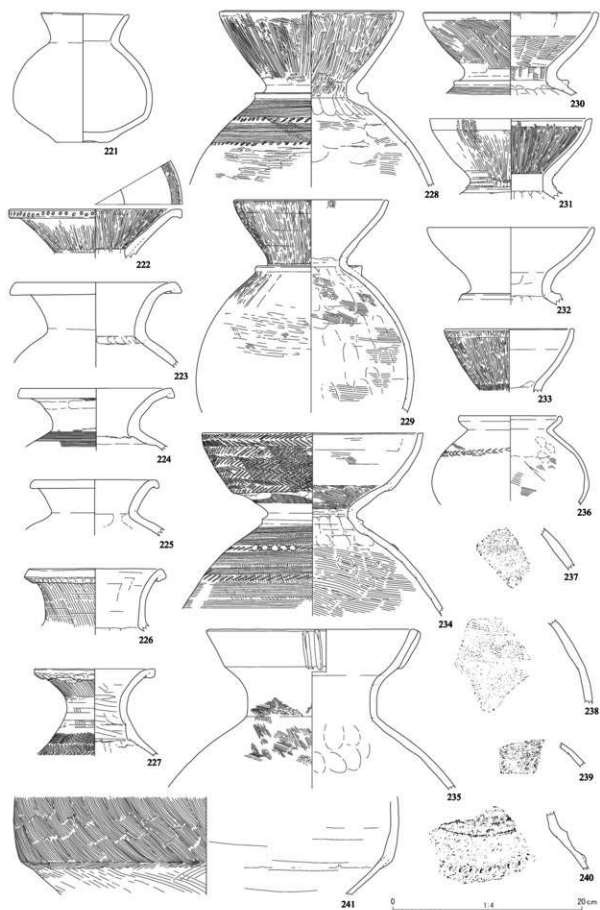


Fig.48 SK361 出土遺物 (1)

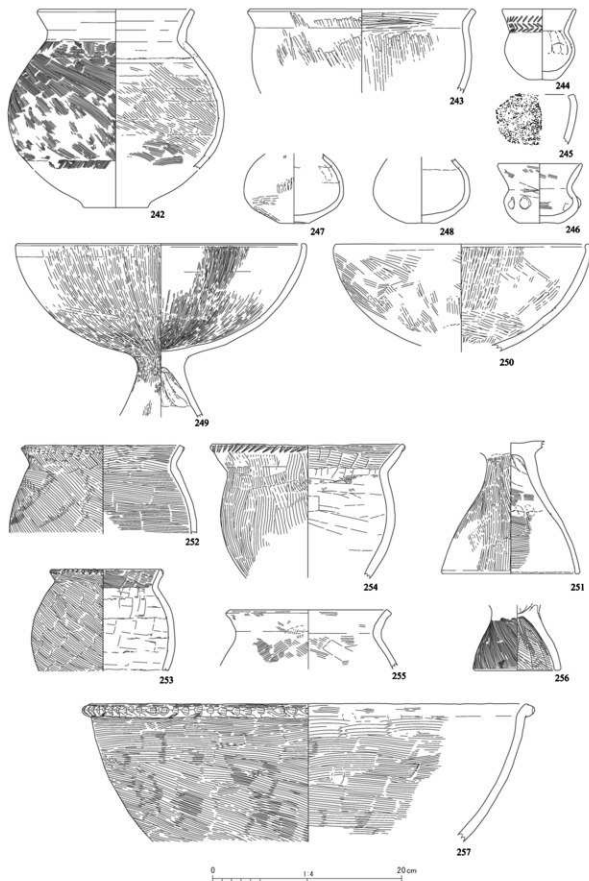


Fig.49 SK361 出土遺物 (2)

のもの(255)がある。254・255には口縁部にヨコナデが入る。

SK361の出土遺物は量、器種ともに豊富である。拡張口縁壺の存在や高坏の形態が典型的な欠山式の特徴を示すことから、SK361の帰属時期は欠山Ⅱ式期と考えられる。

小 結 土器集積土坑は、遺物の出土量は多いが、全体的に破片での出土がほとんどである。今回、図化できなかった小片については、遺構図への表示(ドット)を省いたが、それぞれの遺構からは多量の土器片が出土している。1個体に復元できる土器も少数であることから、多くは廃棄土坑としての用途が想定される。出土遺物には、縄文や羽状刺突文など菊川式の影響を受けたと思われる土器が一定量見受けられる。遺構の時期としては、出土遺物から山中Ⅲ式期から元屋敷Ⅰ-Ⅰ式期に帰属する遺構が確認された。その中でも欠山式期の遺構が多く、土器集積土坑の形成時期は欠山式期に中心があったと考えられる。

(5) 土坑

概 要 前述した土器集積土坑以外のものを土坑として扱う。土坑は調査区全域において検出でき、規模・形状は様々なものがある。SK02・SK03など完形に近い土器が出土する土坑もあるが、破片で出土する土坑が多い。以下では、検出した土坑の内、遺物が出土したものを中心に11基の土坑の詳細をみていく。

SK02 (Fig. 50) 1工区E4グリッドで検出した円形の土坑で、径0.8m、深さ0.2mを測る。埋土は2層に分かれる。出土遺物は259がある。

SK03 (Fig. 51) 1工区E3グリッドで検出した楕円形の土坑で、長軸1.6m、短軸0.6m、深さ0.3mを測る。土坑北寄りから口縁を欠いた状態の壺が出土した。当初土器棺の可能性も考えたが、壺の開口が北側小口方向に位置している事、北側に壺が単体で位置していることからその可能性は低いと判断した。出土した遺物は260～262がある。

SK50 (Fig. 52) 1工区D4グリッドで検出した楕円形の土坑で、長軸2.9m、短軸1.5m、深さ0.3mを測る。3m程西に同じような形状の土坑SK56があり、同じくSD13と切り合っている。出土した遺物は269

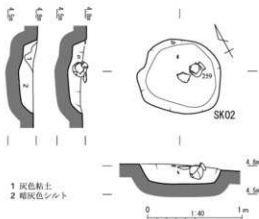


Fig.50 SK02 実測図

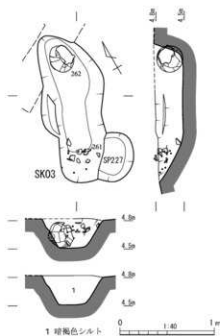


Fig.51 SK03 実測図

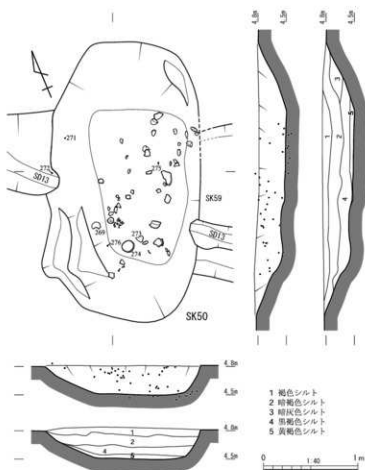


Fig.52 SK50 実測図

～276がある。出土遺物はいずれも小片のため、遺構の時期は不明である。

SK79 (Fig. 53) 1工区E2グリッドで検出した縦に細長い楕円形の土坑で、長軸1.5 m、短軸0.5 m、深さ0.25 mを測る。SD17・SP170と切り合っている。出土した遺物は280～282がある。出土遺物の特徴から、欠山式期の遺構と捉えられる。

SK208 (Fig. 53) 2工区F3グリッドで検出した楕円形の土坑で、長軸1.2 m、短軸0.8 m、深さ0.5 mを測る。北西部はSK215に切られ上端が削られているが、土坑の立ち上がりが見出されたため長軸は1.5 mほどと想定される。埋土は2層からなる。出土遺物は283・284があり、床面直上から正位の状態で見出

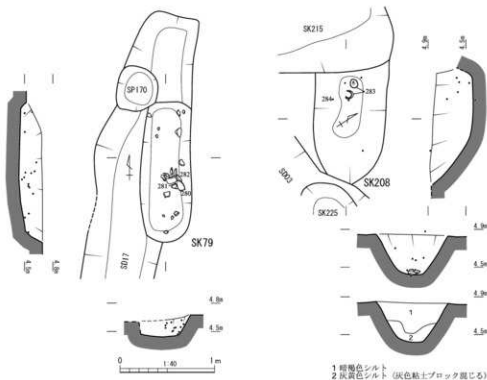


Fig.53 SK79・SK208 実測図

した。土坑の形状、遺物出土状況から土坑墓の可能性が考えられる。

SK209(Fig. 54) 2工区F2グリッドで検出した楕円形の土坑で、長軸1.4m、短軸1.1m、深さ0.1mを測る。土坑内東寄りの50×30cmほどの範囲に焼土が検出された。出土した遺物は285～288がある。出土遺物から、山中式期の遺構と捉えられる。

SK212(Fig. 54) 2工区E2グリッドで検出した不定形の土坑で、長軸4.0m、短軸0.8m、深さ0.1mを測る。1工区寄りの調査区境に位置し、上層での遺構検出作業時から遺物が散見された。遺構北西側の湧水が多く、また地山が砂質であった。そのため平面プランははっきりせず土坑としたが、浅い窪地が土器溜まりとなっている可能性も想定される。出土遺物は289～295で、高坪の出土比率が高くなっている。出土遺物から、山中式期の遺構と捉えられる。

SK215(Fig. 54) 2工区F3グリッドで検出した不定形の土坑で、長軸1.7m、短軸1.4m、深さ0.3mを測る。中央部をSD51、南側をSD03とSP348にそれぞれ切られている。出土遺物は296・297があり、北東に偏って出土している。

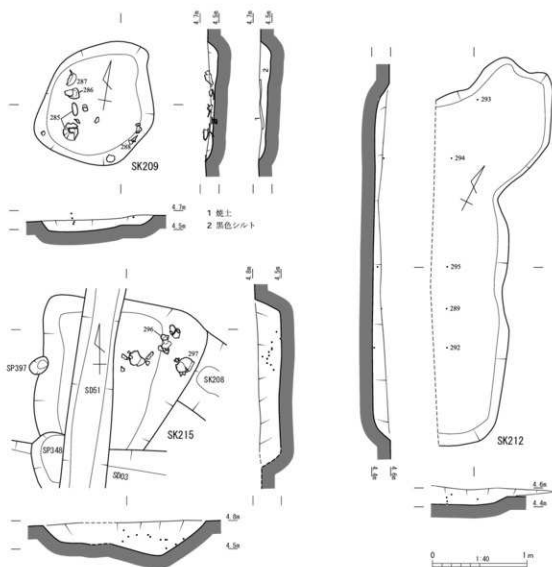


Fig.54 SK209・SK212・SK215 実測図

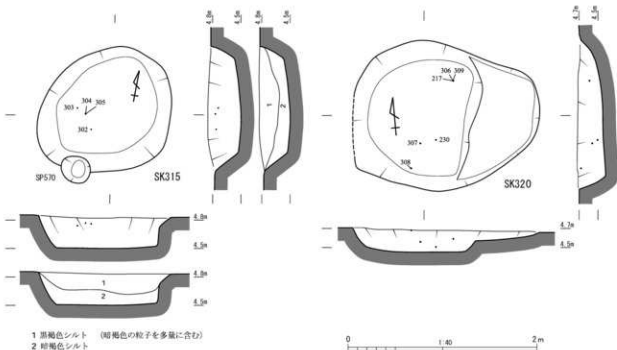


Fig.55 SK315・SK320 実測図

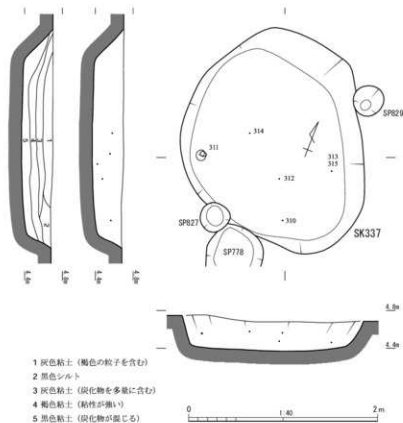


Fig.56 SK337 実測図

SK315 (Fig. 55) 3 工区 E5 グリッドで検出した楕円形の土坑で、長軸 1.5 m、短軸 1.3 m、深さ 0.3 m を測る。南側に SP570 が切り合っており、埋土は 2 層に分かれる。出土遺物は 302～305 である。出土遺物から、山中式期の遺構と捉えられる。

SK320 (Fig. 55) 3 工区 E5 グリッドで検出した楕円形の土坑で、長軸 2.0 m、短軸 1.6 m、深さ 0.3 m を測る。東側に中段があり、西側が一段深くなっている。西側は SP583 に切られている。遺物は 306～309 が出土した。出土遺物はいずれも小片のため、遺構の時期は不明である。

SK337 (Fig. 56) 3 工区 G3 グリッドで検出した楕円形の土坑で、長軸 2.4 m、短軸 2.0 m、深さ 0.3 m を測る。埋土は 5 層に分かれており、中間の層で炭化物を多量に含む層がみられる。出土遺物は

羽状の刺突文と山形文が施されている。後者は、口縁内面に横方向のミガキが短い単位で施されている。273 は高坏の脚部で、2 段にミガキが施されている。出土遺物から、SK50 の帰属時期は欠山Ⅱ～Ⅲ式期に相当すると考えられる。277 はSK57 から出土した装飾高坏である。焼成が良好のため器面は硬質で、丁寧なつくりをしている。278 はSK59、279 はSK69、280～282 はSK79 から出土した。280 は山中式系統の外反坏部高坏であるが、坏部が深く、欠山式期に残存した変容形態と考えられる。283・284 はSK208 から出土した。283 はく字鉢、284 は外反坏部高坏である。285～288 はSK209 から出土した。285・286 は壺、287・288 は鉢である。285 と287 は体部中央が張り、扁平な形をしている。289～295 はSK212 から出土した。外反坏部高坏（290）や横線文が施された高坏の脚（291～294）から、SK212 は山中式期に帰属すると思われる。296・297 はSK215 から出土した。297 は甕で、口縁端部に刺突をもつ。298 はSK233 から出土した。台付甕で、口縁端部にヨコナデと刺突が入る。脚台部は低く、若干内彎している。299～301 はSK304、302～305 はSK315 から出土した。300 は高坏の脚部で、接合部に刺突文が施されている。301 とともに低脚

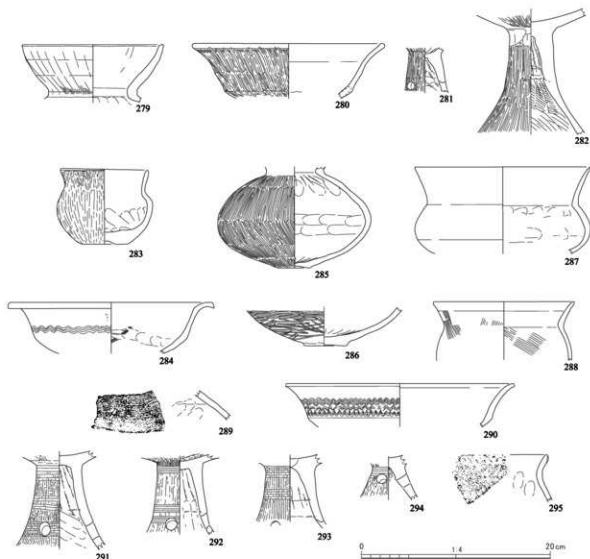


Fig.58 弥生時代 土坑 出土遺物(2)

279:SK69 280～282:SK79 283・284:SK208 285～288:SK209 289～295:SK212

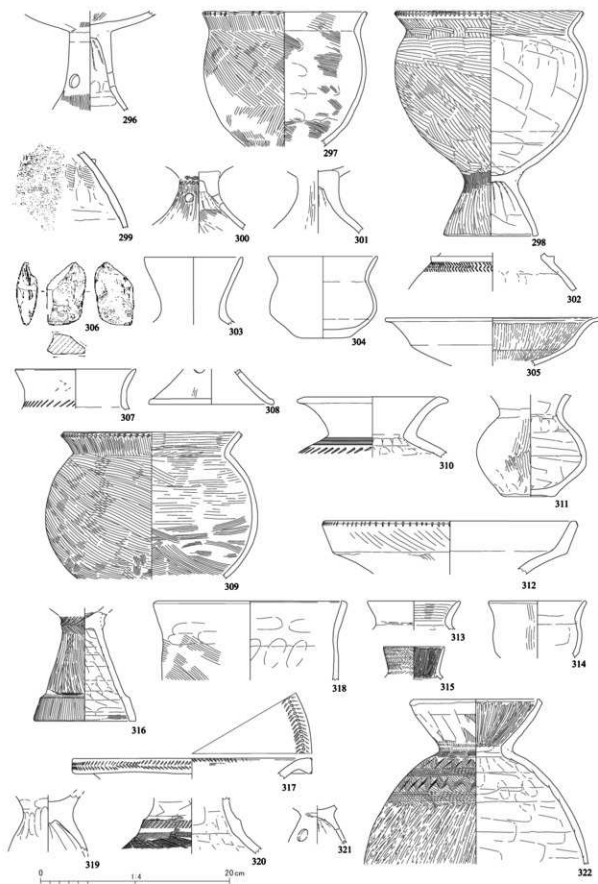


Fig.59 弥生時代 土坑 出土遺物 (3)

296・297:SK215 298:SK233 299～301:SK304 302～305:SK315 306～309:SK320
 310～315:SK337 316:SK350 317～319:SK354 320・321:SK355 322:SK356

で、裾は開いている。302は壺で、側肩部に突帯文と羽状の刺突文が施されている。306～309はSK320から出土した。306は流紋岩製の砥石である。309は甕で、口縁端部に刺突をもつ。310～315はSK337から出土した。310～312は壺である。312は複合口縁で、口縁端部に刺突をもつ。313～315は鉢である。315は装飾く字鉢である。先端が細い工具によって、口縁部に羽状の刺突文を施している。316はSK350から出土した。高坏の脚で、脚接合部に羽状の刺突文を施し、裾には段を有している。菊川式の高坏で、搬入品である。317～319はSK354から出土した。317は壺である。拡張口縁で、口縁に羽状の刺突文、口縁内面に羽状の刺突文と竹管文を組み合わせた文様が施されている。320・321はSK355から出土した。320は壺で、側肩部に突帯文と廉状文風の刺突文が3列施されている。322はSK356から出土した。内彎口縁壺で、側肩部に横線文と波状文が施されている。

(4) 溝

概要 弥生時代の溝は、1・2工区を中心に検出された。ほとんどが南北方向か、その直交方向へ延びる溝である。全体的に溝の方向が統一されている印象があり、ある程度の規則性があるのかもしれない。SD51のような細長く直線的な溝から、SD58のような太く短い溝、SD60のようなL字状の溝などの溝が確認できる。遺跡の縁辺に位置する溝が多く、SD60・SD103などは調査区西側や北側の低地へ向って延びており、排水溝としての用途が想定される。出土遺物は多くない。

SD03 (Fig. 60・61) 1・2工区E3・F3グリッドで、工区をまたいで検出した。東西に延び、西端で南へ折れるL字状の溝である。溝の延長は東西約20m、南北約3mである。幅0.4～0.7m、深さは0.1～0.2mを測る。1工区では直線的に延び、2工区に入ると多少のうねりをもって延びている。L字状に折れた南端は、徐々に浅くなっていく。東側ではSD51と直交するように切り合っている。出土した遺物は、323・324がある。

SD13 (Fig. 62) 1工区D4グリッドで検出した。東西に延びる溝で、東西約7.2m、幅0.3～0.6m、深さは0.1～0.3mを測る。SK41・SK50・SK56・SK59と切り合っておりSK50で分断されているが、両者は一連の遺構と考えた。出土した遺物は、325～328がある。

SD17 (Fig. 63) 1工区E2グリッドで検出した。南北に延びる溝で、南北約7.8m、幅0.8m、深さは0.2mを測る。

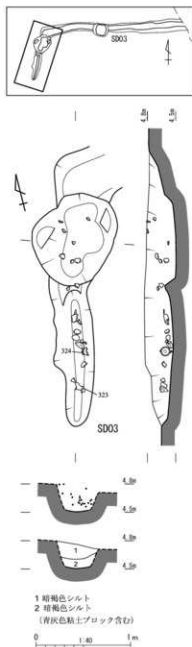


Fig.60 SD03 実測図 (1)

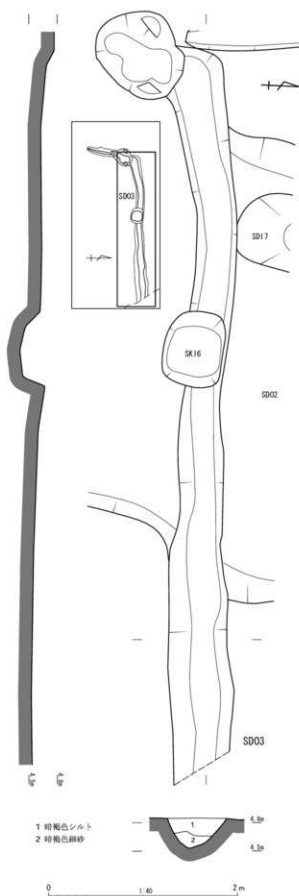


Fig.61 SD03 実測図 (2)

SP170・SK79・SD03と切り合っており、SD03から直角に北へ直線的に延びている。他の溝と比較すると、溝の幅が広がっている。低地への排水を意識した溝であろうか。出土した遺物は、329がある。

SD51 (Fig. 63) 2工区F2・F3グリッドで検出した。南北に延びる溝で、南北約16.6m、幅0.6m、深さは0.15～0.25mを測る。主にSD03・SX01・SK215と切り合っており、SD03と直交している。南の調査区境から北へ延び、SX01の東側で徐々に浅くなりなくなる。低地への排水を意識した溝であろうか。出土した遺物は、330・331がある。出土遺物から、山中式期の遺構と想定される。

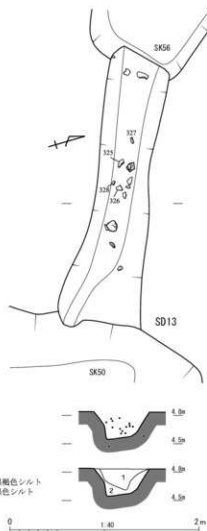


Fig.62 SD13 実測図

SD58 (Fig. 63) 2工区H2グリッドで検出した。北西に延びる溝で、延長約3.7m、幅0.5～0.8m、深さは0.15～0.4mを測る。南東側は幅広く深いのが北西に延びるにつれ徐々に浅くなっている。SK230と切り合っている。出土した遺物は、332～341がある。出土遺物から、欠山Ⅲ式期の遺構と捉えられる。

SD60 (Fig. 63) 2工区G1グリッドで検出した。東西に延び、西端で北へ折れるL字状の溝であ

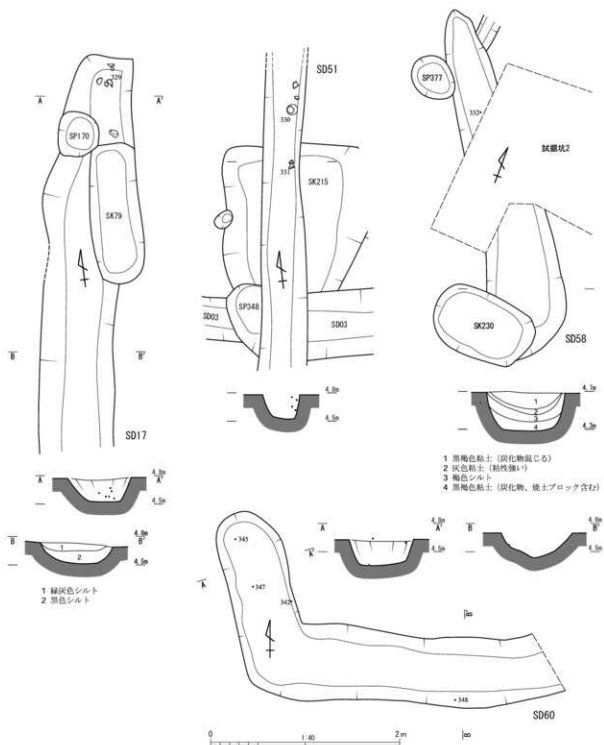


Fig.63 SD17・SD51・SD58・SD60 実測図

る。溝の延長は東西約3m、南北約1.5mである。幅0.7m、深さは0.2～0.35mを測る。出土した遺物は、342～348がある。出土遺物から、山中式期の遺構と想定される。

SD03 出土遺物 (Fig. 64) 323・324はSD03から出土した遺物である。323は高坏の脚部である。324は台付甕の脚部である。いずれも破片であり遺構の帰属時期は不明であるが、弥生時代後期であろう。

SD13 出土遺物 (Fig. 64) 325～328はSD13から出土した遺物である。325・326は壺である。325は折返口縁で、口縁内面に扇形文が施されている。326は複合口縁で、口縁下部に刺突をもつ。327は鉢で、口縁が直線的に立ち上がっている。328は甕で、口縁端部に刺突をもつ。いずれも破片であり遺構の帰属時期を明確にすることは難しいが、欠山式期であろうか。

SD17 出土遺物 (Fig. 64) 329はSD17から出土した遺物である。甕で、口縁端部に刺突をもつ。

SD51 出土遺物 (Fig. 64) 330・331はSD51から出土した遺物である。330は壺である。小型壺で、底部の厚さが極端に薄くなっている。331は高坏で、脚部に刺突文と横線文を施している。

遺構の帰属時期は、山中式期に想定したい。

SD58 出土遺物 (Fig. 65) 332～341はSD58から出土した遺物である。332・333は壺である。332は折返口縁壺で、口縁内外面に刺突文が施されている。333は内彎口縁細頸壺で、口縁に羽状の刺突文を6列施している。334～337は高坏である。坏部の形態は外反坏部(334)、碗形坏部(335)、有稜(336)の各種が確認できる。336は欠山式期の高坏の典型で、内彎傾向が強く深い坏部をもつ。欠山Ⅱ式期のものと思われる。338～341は甕である。口縁端部に刺突をもつもの(338・339)とまたないもの(340)があり、338は口縁にはヨコナデが入る。341は台付甕の脚台部で、器壁は薄く直線的に開いている。

出土遺物からSD58の帰属時期は、欠山Ⅱ～Ⅲ式期に相当すると考えられる。

SD60 出土遺物 (Fig. 65) 342～348はSD60から出土した遺物である。342～345は壺である。

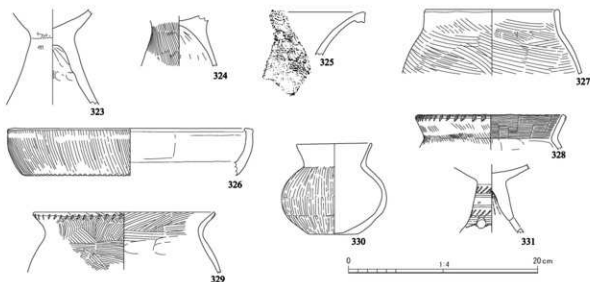


Fig.64 弥生時代 溝 出土遺物(1)

323・324:SD03 325～328:SD13 329:SD17 330・331:SD51

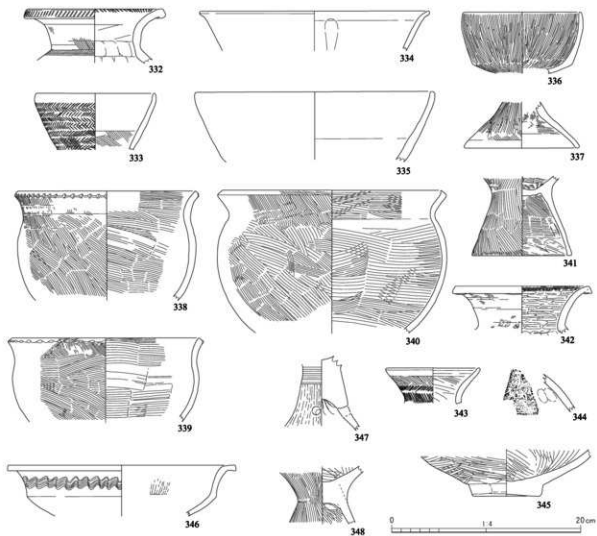


Fig.65 弥生時代 溝 出土遺物 (2)

332 ~ 341:SD68 342 ~ 348:SD60

342は折返口縁壺である。口縁内面に波状文と横方向のミガキが施されている。343は外反口縁壺で、頸部に羽状の刺突文が施されている。346・347は高坏である。346は外反坏部高坏で、坏部に波状文を施している。348は台付甕の脚台接合部である。

出土遺物からSD60の帰属時期は、山中式期に相当すると考えられる。

SD102 出土遺物 (Fig. 66) 349はSD102から出土した扁平片刃石斧である。緑色片岩製で、基部は欠損している。長さ6.7cm、幅5.4cm、厚さ1.4cmを測る。刃部にのみ研磨が施されている。時期は明確にはできないが、他の出土遺物から弥生時代後期のものと考えられる。

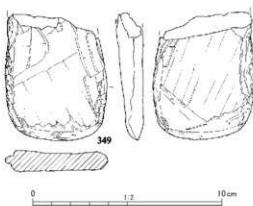


Fig.66 SD102 出土遺物

(5) 小穴

概要 小穴は調査区全域で多数検出されたが、特に3工区南西部に集中している傾向がみとれる。出土遺物も小片が多く、ほとんどの小穴の時期や性格は不明である。今回は弥生時代の掘立柱建物等の建物跡は検出できなかったが、小穴に中段があるものは柱穴の可能性があり、建物

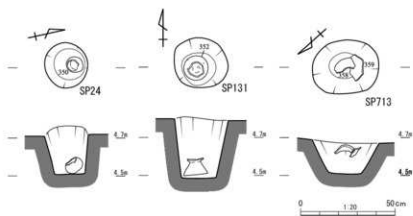


Fig.67 SP24・SP131・SP713 実測図

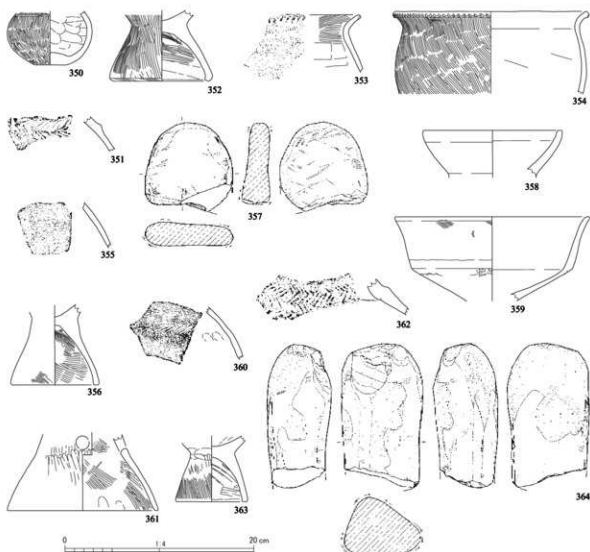


Fig.68 弥生時代 小穴 出土遺物

350:SP24 351:SP73 352:SP131 353:SP170 354:SP172 355:SP351 356:SP575
357:SP597 358・359:SP713 360・361:SP786 362:SP813 363:SP874 364:SP1009

の存在を示唆している。また、SP24のように土器が埋納されたような状態で検出された小穴も存在する。

SP24 (Fig. 67) 1工区E3グリッドで検出した円形の穴で、長軸0.24 m、短軸0.21 m、深さ0.25 mを測る。床面直上より口縁が欠損した小型壺が若干斜め上を向いたほぼ正位の状態出土した。意図的に埋納したものであろうか。出土遺物は350がある。

SP131 (Fig. 67) 1工区D3グリッドで検出した円形の穴で、長軸0.28 m、短軸0.25 m、深さ0.3 mを測る。床面付近より台付甕の脚台部が正位の状態出土した。出土遺物は352がある。

SP713 (Fig. 67) 3工区F5グリッドで検出した楕円形の穴で、長軸0.35 m、短軸0.28 m、深さ0.16 mを測る。小穴内から壺口縁部と高坏坏部が重なるように出土した。出土遺物は358・359がある。

小穴出土遺物 (Fig. 68) 小穴から出土した遺物は破片が多く、量も少ないため、正確な時期は不明である。

350はSP24から出土した壺である。口縁が欠損しているが、胴部のミガキが丁寧に施されている。351・362はそれぞれSP73とSP813から出土した壺の側肩部である。突帯羽状文で、菊川式の壺であろう。352・356・363はそれぞれSP131・SP575・SP874から出土した台付甕の脚台部である。脚台部しか出土しておらず、他の用途に転用された可能性がある。358・359はSP713から出土した。358は内彎口縁部の口縁部、359は外反坏部高坏の坏部である。357・364はそれぞれSP597・SP1009から出土した流紋岩製の砥石である。

(6) 自然流路 (SR01)

SR01は3工区南西隅で検出された自然流路である (Fig. 69)。調査区境で検出されたため詳細な規模は不明である。3工区西端は徐々に低地に移行し、その先にSR01が流れている。SR01の南側は1段下がっており、時期によって流路を変更しながら流れていた可能性がある。深さは0.4 mで、南側の1段下がった箇所は0.7 mを測る。SR01はⅢ層 (基本層位Ⅵ層) の砂礫層を削って流れている。SR01上層のⅠ・Ⅱ層 (基本層位Ⅳ層) は遺物包含層で、灰釉陶器など古代の遺物を中心に出土した。SR01埋土の1層からは、弥生時代の遺物を中心に出土したが、その下層の3層以降からは遺物はほとんど出土していない。これらのことから、SR01は弥生時代かそれ以前の自然流路であり、弥生時代以降に埋没したと考えられる。

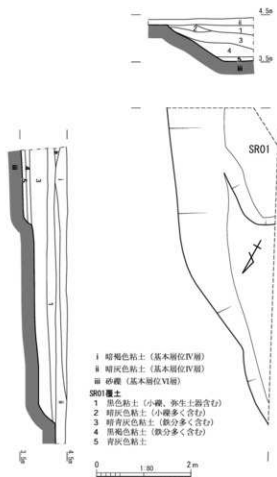


Fig.69 SR01 実測図

ただし、松東遺跡2次調査でも南西側は湿地帯が広がっていたとされており、SR01が埋没したあとも調査区西側一帯は、ある程度の期間湿地帯が広がっていたと思われる。

(7) 包含層等出土遺物

包含層からは比較的多くの遺物が出土した (Fig. 70 ~ 72)。その内、実測可能なものの中から抽出して図示した。

365は二重口縁壺で、口縁に羽状の刺突文が施されており、柳ヶ坪型壺と思われる。367・368は複合口縁壺である。ともに口縁に棒状浮文が貼り付けられ、367は棒状浮文の下に交差文が施されている。382～384は高坏の脚部で、383は横線文と山形文を施している。どれも裾は外反しながら広がっている。385は装飾高坏である。389はS字甕の口縁である。ハケメ調整は内面を省略し、



Fig.70 弥生時代 包含層等 出土遺物 (1)

屈曲部内面にのみ行っている。これらの特徴からS字甕B類に相当する(赤塚1990)。392は砂岩製の叩石である。393はSK60から出土した磨製石斧である。SK60は古代の遺構で、393は混入品であるため、ここで扱う。泥岩製の扁平片刃石斧で、長さ5.2cm、幅3.3cm、厚さ1.2cmを測る。完形品で丁寧に研磨されている。胴部に比べて刃部の幅がややひろがる形状をとる。時期は明確にはできないが、弥生時代中～後期のものと考えられる。394～399は軽石である。砥石として使用されている。

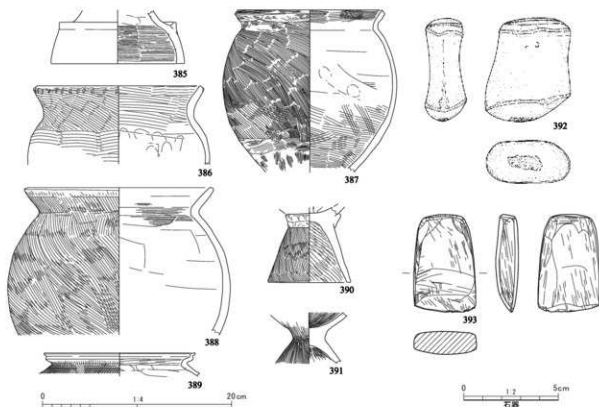


Fig.71 弥生時代 包含層等 出土遺物 (2)

385～392: 包含層 393:SK60

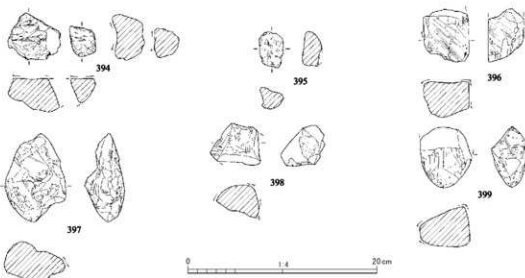


Fig.72 弥生時代 包含層等 出土遺物 (3)

(8) 弥生時代検出遺構・遺物の特徴

松東遺跡における弥生時代の遺構は、弥生時代後期の遺構を中心に、一部終末期に含まれるであろう遺構も検出できた。堅穴住居や掘立柱建物等は検出されず居住域は確認できなかったが、土坑を中心として遺物が豊富に出土した。以下、一括資料を示したうえで各遺構の時期的な位置付けを行い、松東遺跡における弥生時代の景観を復元してみたい。

器種比率と属性分析 松東遺跡3次調査において出土した土器様相の変化を、遺構ごとに属性分析を行うことにより編年の位置を読み取る。分析方法、器種の識別基準等は、鈴木2009aに基づく。

器種比率 定量的な分析に耐えられる遺構として、土器集積土坑を中心にSX01・SK231・SK346・SK352・SK361を抽出し、遺構別に器種ごとの個体数をまとめた(Tab. 2)。遺構の時期順に並べると、時期を追うごとに壺の割合が多くなり、逆に高坏が減少している。壺は元屋敷期に入ると半数を超える。甕に関してはあまり変化がみられず、時期を問わずに一定量出土している。鉢に関しては、底部から口縁部まで全体が復元できるもののみカウントしているため、若干の誤差があると思われる。鳥居松遺跡5次調査の同時期の遺構を比較すると、若干の違いはあるものの、欠山Ⅲ式期を中心に概ね一致している。両遺跡の位置する箇所が天竜川平野南部と浜松南部であるため(Fig. 74)、一概には比較できないが、同時期遺構の器種比率の傾向は近似することが示された。

属性分析 次に、同一器種や器形における属性分析をTab. 3にまとめた。ここでは壺肩部の模様と台付壺の口縁部刺突の有無、脚台接合部における粘土帯の有無を数値化し、浜松南部の遺跡の分析結果(Tab. 4)と比較しながら検討してみた。

壺肩部の模様では、今回縦方向の直線文は確認されなかった。

扇形文は山中Ⅲ式期に多用される模様だが、山中Ⅲ式期のSK352では確認されなかった。SX01ではある程度確認できたが、時期幅があるため比較は難しい。SK361では少量確認され、浜松南部の傾向からSK361は欠山Ⅱ式期でも古相に帰属するものかもしれない。

波状文は、山中Ⅲ式期を最大に時期が降るごとに減少している。逆に列点文は、欠山Ⅲ式期まで確認数は増加している。浜松南部では山中Ⅲ式期で主体的だった波状文は、山中Ⅲ-2～欠山Ⅰ式期あたりで同程度になり、欠山Ⅱ式期以降は列点文が主体となるが(鈴木2009a)、天竜川平野南部

Tab.2 出土資料器種比率

遺構	段階	壺		鉢		高坏		甕		計
		数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	
松東遺跡3次	SK352 山中Ⅲ	11	35%	1	3%	13	42%	6	20%	31
	SK231 欠山Ⅰ～Ⅱ	11	40%	0	0%	9	34%	7	26%	27
	SK361 欠山Ⅱ	19	44%	3	7%	10	23%	11	26%	43
	SX01 山中Ⅲ～欠山Ⅲ	39	46%	5	5%	23	28%	18	21%	85
	SK346 元屋敷Ⅰ-1	16	55%	0	0%	8	28%	5	17%	29
鳥居松遺跡5次	SD108 山中Ⅲ-2	29	40%	3	4%	24	33%	16	22%	72
	SX204 欠山Ⅰ	26	44%	2	3%	21	35%	10	16%	59
	SD104 欠山Ⅱ(古相)	13	35%	3	8%	12	32%	9	24%	37
	SD201下 欠山Ⅱ(古相)	81	32%	22	9%	65	26%	79	31%	247
	SX103中 欠山Ⅱ(新相)	14	41%	2	6%	12	35%	6	17%	34
	SX101 欠山Ⅲ	16	37%	2	5%	15	34%	10	23%	43
	SD201上 欠山Ⅲ	90	41%	6	3%	50	22%	73	33%	219

鈴木2009a Tab.6を一部改変

Tab.3 松東遺跡3次調査の一括資料における属性分析

遺構名	時期	模様							口縁刺突・ヨコナデ					粘土帯	
		縦	扇	波	刺				有・有	有・無	無・有	無・無	不明	有	無
					点	羽	山	交							
SK352	山中Ⅲ			6	3	4			4	7				2	4
SK231	欠山Ⅰ～Ⅱ			4	8				4	8	2	1		3	4
SK361	欠山Ⅱ		2	3	10	5			12		3				
SX01	山中Ⅲ～欠山Ⅲ		5	16	18	3			9	9	1	1		5	2
SK346	元屋敷Ⅰ-1				1	1			18		2				
									9	14		1	1	1	3
									23		1				15
										2	1	2		5	
									2		3				5

凡例

縦：縦方向直線文（T・J字文） 扇：扇形文 波：波状文

刺：刺突文 点：列点文 羽：羽状文 山：山形文 交：交差文

アミ：濃いアミは主体の模様であること、薄いアミは新旧の模様が拮抗することを示す。
 個体数：個体数のカウントは、非抽出遺物を含む全体を対象とした。また、口縁の摩滅が
 著しく観察が困難なものについては不明とした。

でも同じ傾向が示された。元屋敷Ⅰ-1式期のSK346でも列点文と波状文が確認され、元屋敷Ⅰ式期に入っても少量残る傾向が天竜川平野南部でも示された。

羽状文・山形文・交差文は欠山Ⅱ～Ⅲ式期に好んで採用されている模様である。菊川式土器に好んで採用される羽状文が、山中Ⅲ～欠山Ⅲ式期まで一定量認められる。また、他の遺構からも縄文を施したもののや、胎土などから菊川式の影響を受けたと思われる土器が見受けられる。一方、交差文や尾張地方のパレススタイル土器に好まれる山形文が確認されなかった。今回の調査で検出された他の遺構から出土した土器をみても、高坏の脚部に少量認められる程度である。浜松南部の欠山Ⅱ～Ⅲ式期の遺構からは一定量出土しており、この差は地域性をあらわすものであろうか。

台付甕は口縁端部の刺突の有無と、西遠江にみられる脚台接合部の補強としての粘土帯の有無の2点について属性分析を行った。口縁端部の刺突は、山中式期は有刺突の個体のみで、欠山式期になると無刺突の個体が見受けられるようになる。また、口縁端部における刺突の有無が同数になるのは、元屋敷Ⅰ-1式期であると想定されており（鈴木2009a）、天竜川平野南部でも同じ傾向が示された。脚台接合部の粘土帯の有無は山中式期ではほぼ同数だったものが、時代を降るごとに粘土帯をもたない個体が増加し、元屋敷式期に入ると粘土帯をもつものがなくなる。これも浜松南部と同じ傾向である。

以上、浜松南部の一括資料と比較しながら天竜川平野南部をみてきた。今回の分析結果を浜松南部の遺跡の属性分析表に当てはめてみた（Tab.4）。結果として若干の違いはあるものの、概ね浜松南部の属性分析の傾向は、天竜川平野南部にもあてはめることができるといえる。ただ、壺肩部の山形文や交差文が確認されなかったことは地域性をあらわしているのかもしれない。今回は尾張地方のパレススタイル土器に多用される山形文が確認されず、菊川式土器の影響が考えられる羽状文が多くみられた。このことは、尾張地方に近い浜松南部より東側で、菊川様式圏と接する境界に松東遺跡が位置するという地理的要因が考えられるのではないだろうか。しかし、同じ天竜川平野南部に位置する遺跡の中でも、寺西遺跡のように菊川様式の強い影響がみられる遺跡もあれば、山の神遺跡のように伊勢湾沿岸地域との交易が活発であったと考えられる遺跡もある。このことは、集

Tab.4 一括資料における属性の変遷

資料名	時 期	模 様								口縁突起		粘土帯	
		縦	肩	波	刺				交	有	無	有	無
					点	羽	山	交					
梶子 10 次 SD08	山中Ⅱ-2	2	5	33						10		13	7
梶子 10 次 SD10	山中Ⅱ-2		7	28	1					7		12	10
梶子 8 次 SX01	山中Ⅲ-1	3	8	26	2					12		10	4
鳥居松 3 次 SD04	山中Ⅲ-1	1	1	1	1					5		3	4
梶子 8 次 SD01A・B	山中Ⅲ-2		2	14	6	1	1			8		8	6
梶子 8 次 SK06・07	山中Ⅲ-2	1	4	10	4					10		10	10
鳥居松 5 次 SD108	山中Ⅲ-2	2	2	12	13					18	1	13	3
松東 3 次 SK352	山中Ⅲ			6	3	4				11		2	4
鳥居松 5 次 SX204	矢山Ⅰ		1	7	7					16	1	5	5
松東 3 次 SK231	矢山Ⅰ～Ⅱ			4	8					12	3	3	4
鳥居松 5 次 SD104	矢山Ⅱ (古相)		4	14	24					8	1	9	1
鳥居松 5 次 SD201 下	矢山Ⅱ (古相)	1	4	37	4		5			96	3	34	39
鳥居松 5 次 SX103 中	矢山Ⅱ (新相)			2	3					3	1	3	3
椿野 1982 溝	矢山Ⅱ (新相)			8	13	5				21	5	2	4
松東 3 次 SK361	矢山Ⅱ		2	3	10	5				18	2	2	9
鳥居松 5 次 SX101	矢山Ⅲ			2	8		2			11	6	1	9
松東 3 次 SX01	山中Ⅲ～矢山Ⅲ		5	16	18	3				23	1	3	15
鳥居松 5 次 SD201 上	矢山Ⅲ		3	19	100	3	7	6		111	23	16	27
鳥居松 1 次 SX03・06	矢山Ⅲ			7	21	4	11	1		32	9	5	26
坊ヶ跡 1 次 SB25	元屋敷Ⅰ-Ⅰ			1	1					5	3	2	8
松東 3 次 SK346	元屋敷Ⅰ-Ⅰ				1	1				2	3		5
坊ヶ跡 1 次 SB49	元屋敷Ⅰ-Ⅰ		2	2	3					3	5	1	3
坊ヶ跡 1 次 SK33	元屋敷Ⅰ-Ⅰ				2					4	5	1	8
坊ヶ跡全体	元屋敷Ⅰ-Ⅰ・Ⅱ		3	5	23	3				19	61	6	59
北神宮寺全体	元屋敷Ⅰ・Ⅱ			21	25		4			95	228	2	78

凡例：Tab.3 参照

鈴木 2009a Tab.7 を一部改変

落のあり方が拠点集落か分岐集落かにより、出土する土器組成の違いに表れてくることが指摘されている（鈴木 2000）。これらのことから、松東遺跡は分岐集落と考えることができ、山の神遺跡を拠点集落とした集団関係が成立していた可能性がある（向坂 1989）。

弥生時代後期の集落 松東遺跡では、過去 2 回の調査において環濠を伴う集落の存在が明らかになっている。また、突線鈕 3 式（近畿Ⅱ式）と考えられる銅鐸節耳の破片が出土し（2 次調査）、今回出土した銅鐸鈕の破片も含めて集落の様相を知る上で貴重な発見である。

松東遺跡は、過去に天竜川が激しく流路変更して形成された微高地上に位置し、その周辺には低位面が広がっていた。周辺には同じく微高地上に集落が形成された遺跡が点在し、銅鐸型土製品が出土した森西遺跡や環濠を伴う山の神遺跡などがある。今回の調査区から西へ約 600 m のところからは、木船銅鐸 2 口（Fig. 9）も出土しており、集落が密に集まるこの地域は、銅鐸という共通祭祀具を用いた集落間の深い関係が想定されている（浜文協 2000）。特に山の神遺跡は、松東遺跡と同様に環濠を伴う集落が検出されており、規模は松東遺跡の環濠よりはるかに大きいと想定される。山の神遺跡が規模、出土遺物の内容などから、天竜川平野南部地域において拠点集落であると評価でき、その分岐集落として松東遺跡が存在していたと考えられる（鈴木 2000）。

今回の調査区は、過去の調査で検出された環濠より南東へ約 100 m のところに位置する。環濠は南北約 80 m、東西約 55 m と想定されており、今回の調査区は環濠の外側にあたる。土坑と溝が検出され、建物跡が 1 軒も検出されなかった。しかし、小穴が多数検出されていることから、建物跡

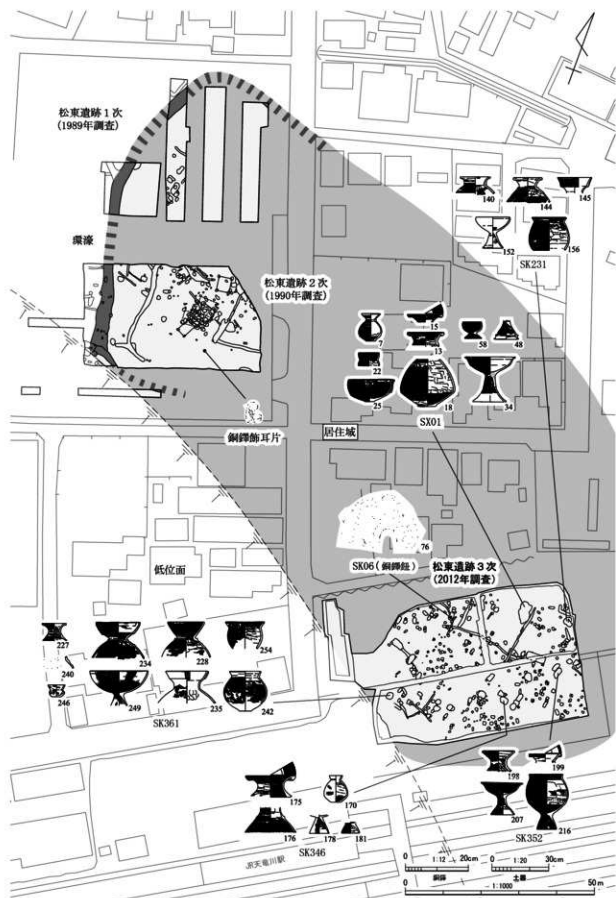


Fig.73 松東遺跡周辺と弥生時代の遺構

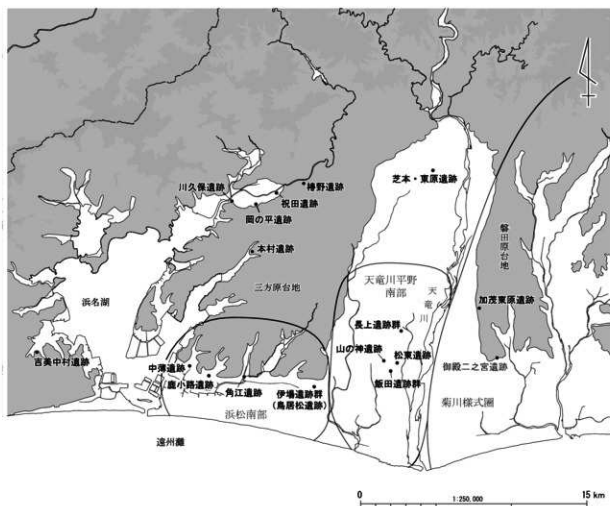


Fig.74 西遠江における主要弥生時代遺跡分布図

が存在していた可能性はある。また、環濠の内側で検出された溝と今回検出された溝の方向が一致しているものがある。環濠内の小区画溝とされており、同じ性格の遺構であると考えれば、区画溝に囲まれた小区画単位の集落が存在していた可能性はある。検出された遺構の時期は山中Ⅲ式期から元屋敷Ⅰ－Ⅰ式期まで存在する。環濠は欠山式期には廃絶しており、今回検出された遺構は、環濠が機能しなくなった欠山Ⅱ式期を中心に構成されている。山の神遺跡の環濠も同様の時期に廃絶し、欠山式期に遺跡の範囲が最大規模になっていることから、今回検出した遺構も、遺跡の範囲が最大規模に広がった時期のものと考えられる。また、過去の調査により低位面が西側に広がっていることが想定されていたが、今回も遺跡西側に低位面が広がることが確認された。天竜川平野南部の他の遺跡と同様に水田が営まれていたと思われ、弥生時代後期の集落として一般的な集落景観が復元できる。

元屋敷式期の土坑は1基確認されたが、その後は遺物も乏しく、元屋敷式期に入って集落は急速に衰退していったと考えられる。同様の傾向は浜松南部の鳥居松遺跡でもみられ、居住地の中心が三方原台地上に移り、低地に展開していた弥生時代的な集落景観は次第に姿を消していったと思われる（鈴木 2009b）。

3 奈良・平安時代

(1) 検出遺構の概観

奈良・平安時代の遺構は、調査区の全域から検出された (Fig. 75)。ここで、奈良・平安時代の遺構と認定したものは、①小片であっても当該時期の遺物を含んでいるもの、②遺構の重複関係からこの時期と認定できるもの、③遺構を構成する要素からこの時期と認定できるものである。この方法だと、弥生土器の小片しか出土していないが、掘立柱建物の柱穴のように、②、③の条件から奈良・平安時代の遺構に認定されるものもある。逆に、遺物を伴出していないために時期不明とした小穴や、弥生時代と認定した小穴などの中にも奈良・平安時代に属するものが若干含まれると考えられる。

以上の方法で認定した遺構の分布を見ると、相対的には調査区の北隅方向では、遺構密度が薄くなる。また、調査区南西端側は低地に移行する部分となり、遺構が検出されない。

奈良・平安時代の遺構としては、高床構造と考えられるものも含めた掘立柱建物9棟、土坑多数、溝状遺構多数、小穴多数、井戸1基が検出された。

土坑、小穴については、その区別が厳密ではない。溝状遺構は、区画溝的性格を持つ例の他に、不明確なものが多くある。

SD107・SD110からは、遺物が豊富に出土している。また、SK301・SK302からは鉄滓が主に出土した。

(2) 掘立柱建物

概要 東西に長く延びる SD107 の北側 (以後 SD107 区画溝外側と呼ぶ) に所在するものと、南

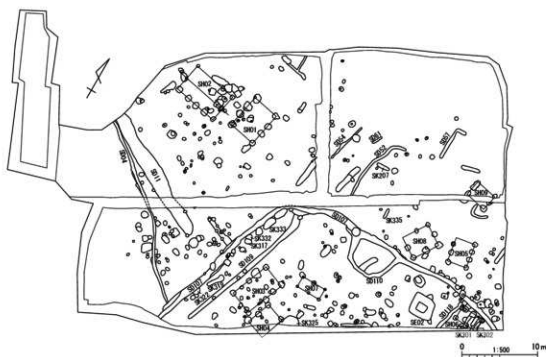


Fig.75 奈良・平安時代 遺構分布図

側（以後SD107区画溝内側と呼ぶ）に所在するものがある。前者に属するものとして、SH01・SH02・SH05・SH08・SH09がある。また後者に属するものは、SH03・SH04・SH06・SH07がある。

SD107区画溝外側の5棟の内、SH01とSH02は、隣接しているのと同時に建物方位も近似しており、関連性がうかがえる。同様に、SD107区画溝内側の、SH03とSH04も関連性がうかがえる。

柱穴内からは土器・須恵器・陶器などの細片が少量出土した程度で、いずれの建物も厳密な年代を決定することはできなかった。

また、掘立柱建物には復元できないが、形状から柱穴と考えられる小穴もいくつかみられる。

① SD107区画溝外側の建物跡

SH01 (Fig. 76) 1工区D3からE3グリッドにまたがって検出された。SH02と建物方位が近似している。桁行3間、梁行1間で、高床構造の可能性が高い。桁行4.7m、梁行3.8mである。柱穴は、直径0.8～1.2mと大型で、不整隅丸方形である。深さは、0.2～0.4mで、埋土は、若干有機質を含んでいる。SP214～SP216、SP209は、建物東側桁行に属する柱穴であるが、これらは、中世以降に属するSD02の底面に検出面があり、低地化のために埋土はグライ化している。西側の列に属する、SP132・SP138・SP51・SP140の埋土は、有機質を含む黄褐色粘質土である。柱痕は、SP132以外では検出できなかった。

遺構を構成する柱穴からは、律令期の遺物は検出できず、弥生土器の小片が検出されただけであるが、SH02との関連性を根拠として、律令期の遺構と考えた。

SH02 (Fig. 77) 1工区D3グリッドから検出された。SH01とは隣接し、建物方位も近似している。桁行4間、梁行2間であるが、梁行側の棟持柱に該当するSP203とSP194に隣接した外側に、SP200とSP118がある。この柱穴は、建物を構成している他の柱穴より浅い点などの疑問点はあるが、独立棟持柱の可能性が考えられる。桁行6.25m、梁行3.95mである。柱穴は、直径0.5～1.0mで、SP105・SP195のように隅丸方形の平面形を呈する例がある。深さは、0.5m前後のものもある。埋土は有機質の混じった黄褐色粘質土である。柱痕は、SP135以外では検出できなかった。遺構を構成する柱穴中にSK47のように土坑と認識したものもあるが、柱穴である。

SK47・SP89・SP135・SP196・SP200・

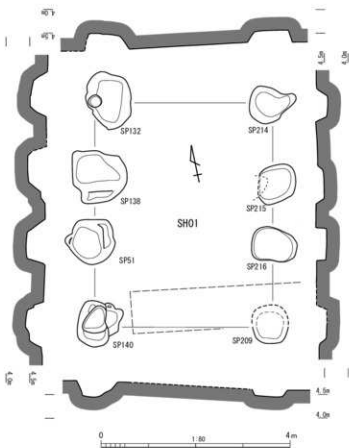


Fig.76 SH01 実測図

SP203 からは、律令期の土器小片が出土した。

SH05 (Fig. 77) 3 工区 H3 グリッドから検出された。桁行 3 間、梁行 1 間で、高床建物の可能性が高い。桁行 3.25 m、梁行 2.65 m である。柱穴は、直径 0.5 ~ 0.6 m で、不整隅丸方形である。

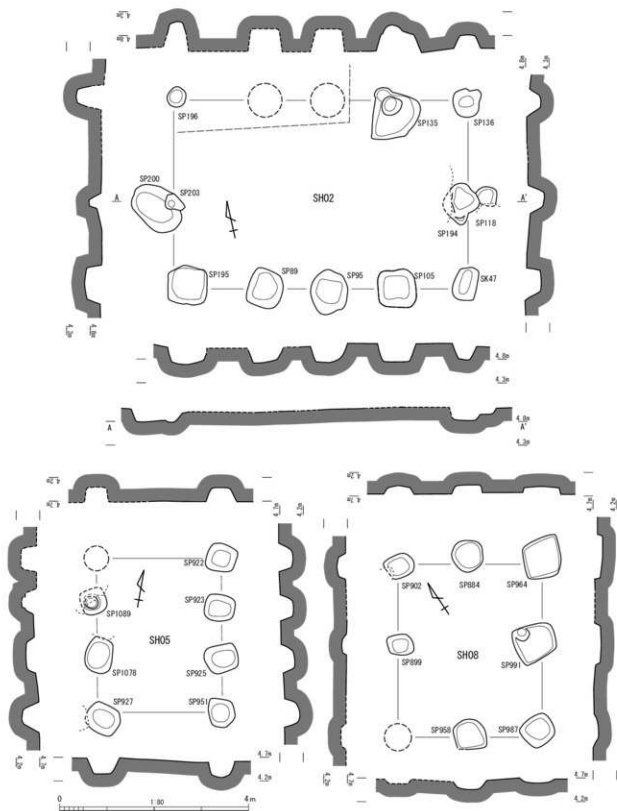


Fig. 77 SH02・SH05・SH08 実測図

深さは、0.3 m程度である。埋土は有機質の混じった黄褐色粘質土である。北東隅の柱穴は、弥生時代に属するSK352と重複していたと考えられるが、検出することはできなかった。柱痕はいずれの柱穴からも検出できなかった。

SP923・SP925・SP1078からは、律令期の土器小片が出土した。

SH08 (Fig. 77) 3工区G3グリッドから検出された。SH05に近接しているが、建物方位が大きく異なっている。桁行2間、梁行2間である。桁行3.65 m、梁行3.0 mである。柱穴の直径は0.5～1.0 mで概して西側が小さい。深さは、0.1～0.2 mと浅い。埋土は

有機質の混じった黄褐色粘質土である。南西隅の柱穴は、SK337と重複しており、検出できなかった。

SP902・SP987・SP991からは律令期の土器小片が出土した。

SH09 (Fig. 78) 2工区・3工区H2グリッドから検出された。発掘調査は1～3工区に分けておこなったが、当遺構は2工区と3工区にまたがって検出された。建物方位はSH01、SH02に近似している。桁行2間、梁行1間である。桁行2.15 m、梁行2.95 mである。桁行の方が短い高床建物であろう。柱穴は、直径0.5～0.9 mで、深さは、0.2～0.5 mである。埋土は有機質の混じった黄褐色粘質土である。柱痕は、SP1072以外からは検出できなかった。

SP325・SP1072から律令期の土器小片が出土した。

② SD107 区画溝内の建物跡

SH03 (Fig. 79) 3工区F5グリッドから検出された。SH04と建物方位が近似している。桁行4間、梁行2間である。桁行5.55 m、梁行3.25 mである。桁行の東側通りでは、西側通りのSP1017に対応する柱穴が検出されてない。柱穴の直径は、0.6～0.8 mで不整隅丸方形である。深さは、0.2

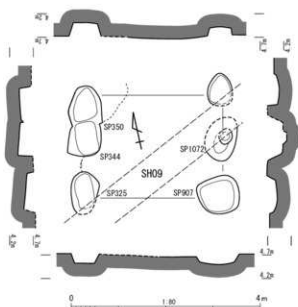


Fig.78 SH09 実測図

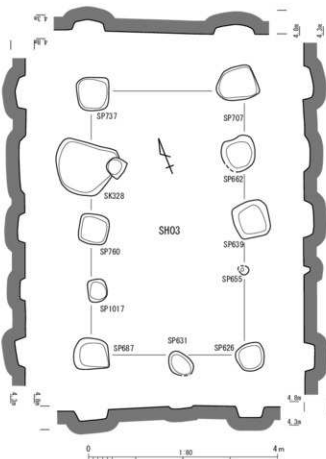


Fig.79 SH03 実測図

m前後と浅い。埋土は有機質の混じった黄褐色粘質土である。柱痕は検出できなかった。

SP626・SP639・SP687・SP707・SP737・SP760 から律令期の土器小片が出土した。

SH04 (Fig. 80) 3工区F5グリッドから検出された。南東側が調査区外となるために詳細は不明であるが、桁行2間、梁行1間の建物と考えられる。SH03と方位が近似し、至近の位置にある。桁行3.45m、梁行2.75mである。柱穴は、直径0.7～0.8mである。深さは0.2～0.3mである。柱痕は、SP792から検出された。

SP642・SP710から律令期の土器小片が出土した。

SH06 (Fig. 81) 3工区H4グリッドから検出された。鉄滓の出土量が多いSK301は、この建物の中の取り込まれるような位置にある。桁行2間、梁行1間で、桁行3.2m、梁行1.8mである。南西隅は調査区外となる。柱穴は、直径0.5～0.8mでSP931やSP879のように隅丸方形に近いものもある。深さは、0.3～0.4mとやや深い。柱痕は、SP879・SP931・SP944から検出された。

SP877・SP879・SP932・SP942から律令期の土器小片が出土した。

SH07 (Fig. 81) 3工区F4グリッドから検出された。桁行2間、梁行1間である。桁行3.35m、梁行1.5mである。小形であるが、掘立柱建物であろう。柱穴は、北側のSP324・SP818が直径0.6～0.8mで、他は0.3～0.4mである。深さは、0.2～0.3mであるが、SP818は約0.35mで、径に比較して深い。柱痕は、北側の列では検出できたが、南側の列では検出できない。

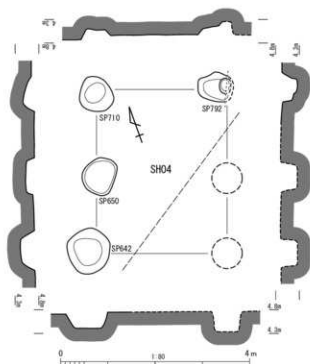


Fig.80 SH04 実測図

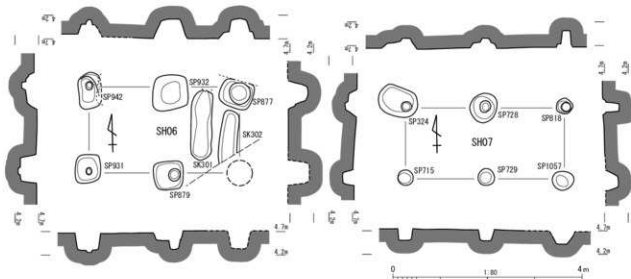


Fig.81 SH06・SH07 実測図

埋土は有機質の混じった黄褐色粘質土である。

SP728 から律令期の土器小片が出土した。

小 結 SH03 と SH04 は隣接し、ともに区画溝に沿って建てられており関連性が認められる。また、区画溝内の SH06 は、鉄滓と轆轤口が出土した SK301・SK302 を取り囲むように建っている。周辺の遺構からも鉄滓が出土しており、SH06 は鍛冶関連の工房の可能性はある。

掘立柱建物を構成している小穴、および一部の土坑から出土した遺物はきわめて少ない。出土したのは、土師器・須恵器・灰釉陶器の小片であり、実測図として掲載できるものはなかった。

(3) 土坑

概 要 SD107 区画溝の内外から多数検出された。多くの場合、土師器・須恵器・灰釉陶器の細片が出土しているが、その用途を限定するのは困難である。SD107 の南北に延びる部分の内側に接して検出した土坑からは比較的多くの遺物が出土した。また、SK301・SK302 のように、鉄滓を多く出土する土坑もある。

調査の段階で土坑と認識したものは多数あるが、後述する小穴との区別は厳密ではない。

SK301 (Fig. 82) 3 工区 H4 グリッドから検出した。SK302 と隣接している。SH06 の内側に存在する。長さ 1.6 m、幅 0.4 m、深さ 0.1 m の浅い溝状である。埋土は、有機質を含む黄褐色粘質土である。

出土した遺物は 245 ～ 248 で、少量の土師器小片と轆轤口 1 点 (245)、鉄滓 13 点 (246 ～ 248) が出土した。

SK302 (Fig. 82) 3 工区 H4 グリッドから検出した。SK301 と隣接しているが、北端が 0.4 m 南側になっている。南端は調査区外となるため長さは不明であるが、現況で 1.15 m を測る。幅は、0.4 m、深さは 0.1 m である。埋土は、有機質を含む黄褐色粘質土である。

埋土から鉄滓が 4 点出土している。また、SK301・SK302 周辺の包含層からも鉄滓は多数出土している。

SK317 (Fig. 82) 3 工区 E4 グリッドから検出された。平面形は、長径 0.95 m、短径 0.65 m の

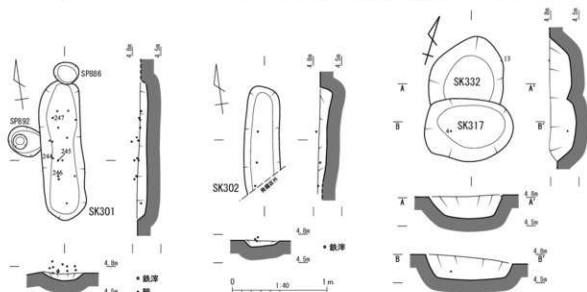


Fig.82 SK301・SK302・SK317・SK332 実測図

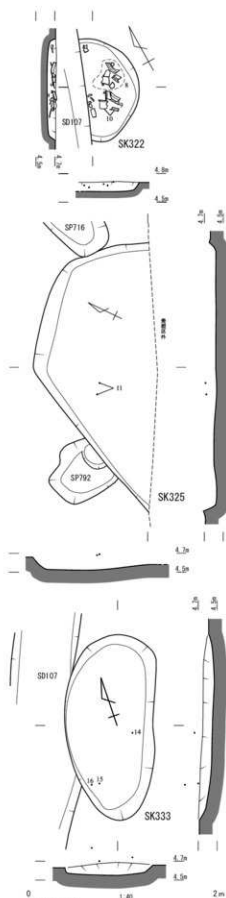


Fig.83 SK322・SK325・SK333 実測図

不整楕円形である。深さは、0.25 mを測る。SK332 と切り合い関係にあり、SK332 の方が古いという観察結果を得ているが、出土遺物は同時期のものである。埋土は、有機質を含む黄褐色粘質土である。

出土した遺物は2～7で、土師器甕の他に灰釉陶器瓶、土師器坏が出土した。

SK322 (Fig. 83) 3工区E5グリッドから検出された。西側がSD107に切られているので、規模は不明であるが、平面形は径1.25 mの不整円形であろう。深さは、0.1 mである。埋土は、有機質を含む黄褐色粘質土である。

出土した遺物は8～10で、土師器甕片がまとまって出土した。

SK325 (Fig. 83) 3工区F5グリッドから検出した。調査区端から検出したもので規模は不明である。現状で、調査区壁面に沿って2.85 m、壁面に直行する方向で1.3 mが確認できる。深さは、調査区壁際の深い所で0.15 mであるが、浅い部分は0.1 m以下になる。埋土は、有機質を含む黄褐色粘質土である。

出土した遺物は11で、その他に図示できないが数点の土師器小片が出土した。

SK332 (Fig. 82) 3工区E4グリッドから検出された。SK317と切り合い関係にある。平面形は、不整楕円形であろうが、長径側はSK317に切られている。現況で長径0.65 m、短径0.8 mである。埋土は、有機質を含む黄褐色粘質土である。

出土した遺物は12・13で、その他に土師器甕、鉢の小片が出土した。

SK333 (Fig. 83) 3工区E4グリッドから検出した。SD107と重複している。遺構の観察ではSD107に切られているように見えたが、明確ではない。平面形は、長径1.95 m、短径0.95 mで、深さは0.5 mと浅い土坑であるが、遺物の出土状況を見ると、遺構面はもう少し上にあったようである。埋土は、有機質を含む黄褐色粘質土である。

出土した遺物は14～16で、その他に数点の土師器と灰釉陶器片が出土した。

その他の土坑 3工区F3グリッドで検出したSK207は

長径 1.8 m、短径 0.5 m、深さ 0.2 m の溝状を呈する。形態は SK301 や SK302 に類似している。3 工区 E5 グリッド検出の SK319、3 工区 G3 グリッド検出の SK335、2 工区 F2 グリッド検出の SD61 などは類似した平面形であり、共通した用途の可能性がある。

不整形円で径が 1 m 前後の土坑や不整形の土坑は調査区全域から検出されているが、出土遺物は少ない。

土坑出土遺物 (Fig. 84) 土坑内出土の遺物は必ずしも多くはない。土師器・須恵器・灰釉陶器は、かなりの小片も復元実測したが、土師器 10 点、灰釉陶器 7 点が図示できたに過ぎない。これら以外には、SK301 から轆轤口 1 点と鉄滓 16 点が出土した。鉄滓は、16 点中 3 点を図示した (246 ~ 248)。

土師器の中で、1 は、F3 グリッドから検出した SK207 の埋土から出土した。内外面に共に丹塗りの摘蓋である。VI 期に属し、時期的には 8 世紀後半であろう。3 は、SK317 出土の坏である。4 ~ 9・11 は、SK317・SK322・SK325・SK333 出土の長胴壺、10 は鉢である。口縁部が上方方に内彎気味に伸びる特徴や、8 で見られるように頸部帯が見られるなどの特徴は、VI ~ VII 期に属するものであ

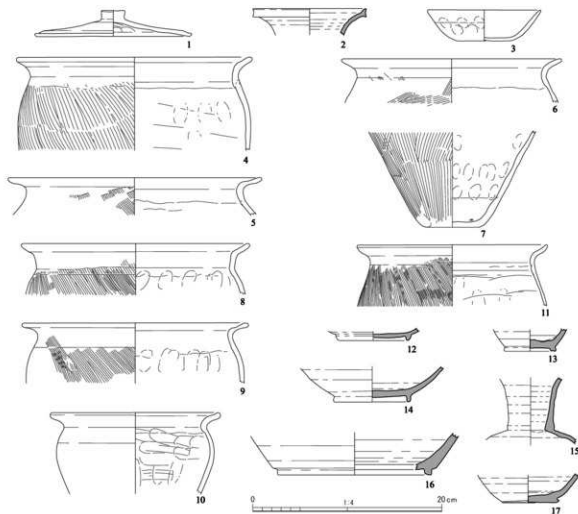


Fig.84 奈良・平安時代 土坑 出土遺物

1:SK207 2~7:SK317 8~10:SK322 11:SK325 12・13:SK332 14~16:SK333 17:SK334

う。

2、12～17は、灰釉陶器である。いずれも小片からの復元であるが、13・15は胎土・色調などから、猿投山古窯跡群の製品である可能性が高い。おそらく、黒笹90号窯式に属するものであろう。12・14は、宮口古窯跡群の製品と考えられる。12は、Ⅱ-2段階、14はⅢ-1段階に属するものであろう。他の灰釉陶器も猿投編年でいえば、黒笹90～折戸53号窯式に並行するものであろう。

轆轤口・鉄滓は、SK301、SK302以外の遺構では、SD118、SP982から鉄滓が1点ずつ出土している(249・250)以外は、包含層出土である。

小 結 ほとんどの土坑は遺物の出土が少量のため、遺構の性格は不明である。その中で、SK301とSK302からは鉄滓と轆轤口が出土している。ほとんど轆轤口と鉄滓のみの出土であり、鍛冶関連の遺構と想定される。さらに、土坑の西側に位置するSD118やSP982からも鉄滓が出土しており、SH06を含めた区画溝内のこの一帯で、鍛冶に関連した作業が行われていたと考えられる。

(4) 溝

概 要 調査区全体から、合計24条の溝状遺構が検出された。SD11を除くと幅1m以下のものが目立つ。これらの中で、SD04、SD107、SD109、SD110は、細く長く延び、何かを区画しているように見える。また、SD118も調査区外に延びているので全容は分からないが、区画溝の可能性もある。幅広の溝は、SD11だけであるが、この溝を境にしてその西側では遺構密度が急速に低くなるので、区画溝と考えてよいであろう。

SD107、SD110からは多量の遺物が出土しているが、包含層中から確認された律令期の遺物の多くが、SD107に区画された内側からのものである。一方でSD107に区画された外側の包含層には、弥生土器が多く、律令期の遺物は少ない傾向がみられる。

以下、主要な溝の概要を記す。

SD04 C4グリッドからE6グリッドにかけて、1工区と3工区の調査区を横断するように緩やかに湾曲しながら続いている。この溝を境にして西側は低地になって行くので、その境界付近に掘られた溝であろう。長さ約25mに渡って検出された。幅は0.4～0.5m、深さは0.2m前後である。埋土は、有機質を含む暗褐色粘質土である。

埋土からは、土師器・須恵器、弥生土器小片が出土している。

SD11 1工区と3工区のD4からE4グリッドにかけて検出された。幅2.0m前後と他の溝に比べると幅広で、深さは0.2～0.3mである。溝の西側は調査区外になるので全長は不明であるが、現況で長さ約18mである。SD04よりは少し高い位置にあるが、基本的には低地との境に掘削されたと考えることができる。埋土は有機質を含む暗褐色粘質土である。床面は砂礫層に達している。

埋土からは、弥生土器片も多く出土したが、古代の土師器片も出土しているため、古代の遺構と考えられる。

SD107 (Fig. 85・86) 3工区I4グリッドからF3グリッドにかけてほぼ東西に延び、F3グリッドで約105度の角度で緩やかに屈曲し、E6グリッド方向に延びている。調査区内ではL字状に検出されただけであるが、東方向・南方向ともに調査区外まで続いており、全貌は不明である。なお、

調査区内での総延長は約 55 m である。溝の幅は狭い所では 0.5 m、広い所では 1 m を測り、深さは 0.2 ~ 0.3 m である。遺物の出土状況を見ると、遺構面はもう少し上位にあると考えられる。埋土は、暗褐色粘質土が主体である。土地を方形に区画する、いわゆる区画溝と考えられる。

SD04、SD108、SD109、SD110 は、SD107 に接した状況になるが、交差することはない。また、それぞれとの新旧関係は不明確である。いくつかの土坑も SD107 と重複して検出されたが、律令期と認定できた土坑との新旧関係を明確にすることはできなかった。

出土した遺物は 18 ~ 112 である。

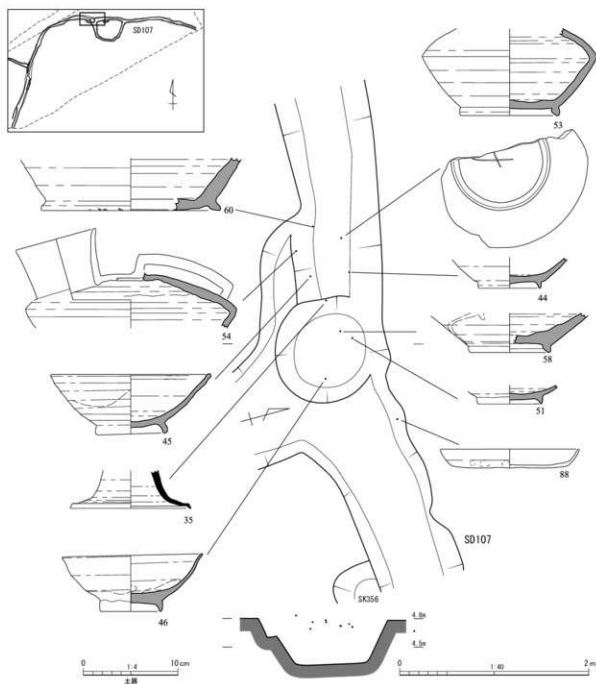


Fig.85 SD107 実測図 (1)

SD109 (Fig. 87) 3工区F4グリッドからE5グリッドにかけて検出された。長さ19 m、幅0.6 mで深さは0.1 mにも満たない。本来の遺構面はもう少し上位にあると考えられる。SD107と接する部分にSK341があり、SD107と直接的な関連性は確認できない。ただし、SD107南北方向の溝約2 m東の位置に並行して延びており、SD107との関連性がうかがえる。

埋土は暗褐色シルト又は粘質土である。

出土遺物は少なく磨耗した小片が目立つが、溝の最も北寄りでSK341に接した場所から、銅印(113)と墨書のある土師器(114)が出土した。銅印、土師器は、ほぼ遺構検出面と同じレベルから出土している。

SD110 (Fig. 88) 3工区G4グリッドから検出された。SD107の東西方向の溝に接し、内側に向けて半円形に展開している。SD107とは同時期のものと思われる。溝の幅は、0.4～1.0 mであるが、全体としては幅0.5 m前後である。深さは、約0.2 mである。SD107とSD110に囲まれた範囲は、東西約5.0 m、南北約4.5 mである。

出土した遺物は121～124がある。

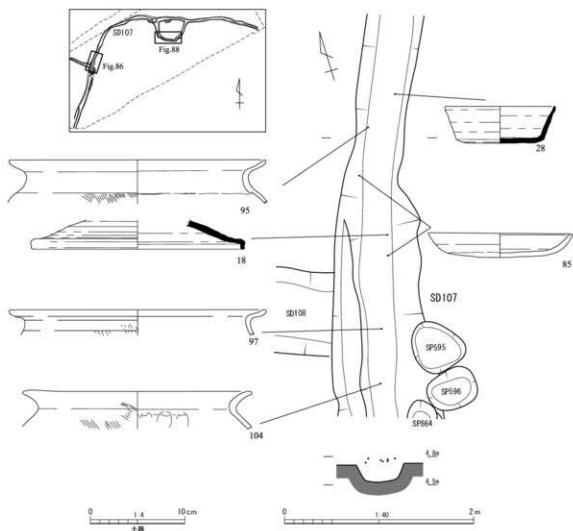


Fig.86 SD107 実測図(2)

その他の溝状遺構 2工区F2・F3グリッド検出のSD52やSD54、2工区G2グリッド検出のSD57は、何らかの区画溝とも考えられる。3工区H4グリッド検出のSD118からは、鉄滓（249）が出土しており、SK301、SK302との関連性が注目される。

SD107 出土遺物 (Fig. 89 ~ 91)

18 ~ 112 は、SD107 から出土したもので図示できたものである。18 ~ 38 は須恵器、39 ~ 60 は灰釉陶器、61 ~ 112 は土師器である。

須恵器は、古墳時代に属する例はない。18・19・21 ~ 23 は、Ⅵ期に属する蓋坏である。26 ~ 32 はⅦ期に属する箱坏であろう。33・34 は、Ⅶ期に属する皿であろう。35 は高坏脚部、36 は鉄鉢形須恵器、37・38 は甕であるが、これらはⅥ期に属すると考えられる。32 は底部外面に墨書がみられる。この墨書は、SD109 出土土師器（114）の坏底部外面に施されたものと類似している。

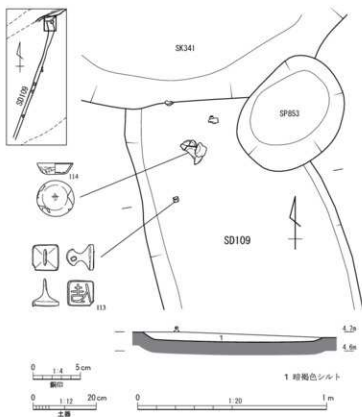


Fig.87 SD109 実測図

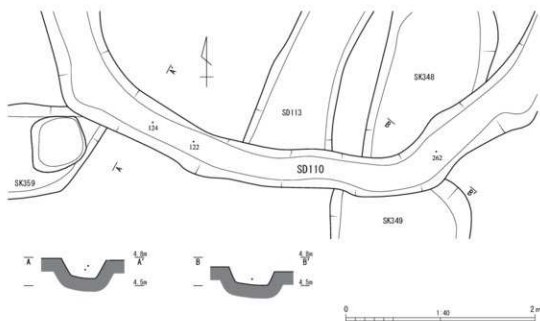


Fig.88 SD110 実測図

灰軸陶器は、猿投編年の黒笹 14 号窯式、黒笹 90 号窯式、折戸 53 号窯式に並行するものが出土している。黒笹 14・90 号窯式の時期に属する灰軸陶器は全て尾張産と考えられ、折戸 53 号窯式に並行するものは、宮口窯産及び清ヶ谷窯産と考えられる。39～43 は黒笹 14 号式に属する皿、44 は黒笹 90 号窯式に属する碗である。45～51 は折戸 53 号窯式に並行する遠江産の灰軸陶器である。これらの中で、45 は清ヶ谷窯産、他は宮口窯産であろう。52～60 は、全て尾張産と思われる。

土師器は、61～64 が有台坏、65～84 が坏、85～91 が皿、92 は鉢、93 は盤、94 は横断面が八角形になる高盤脚部である。95～112 はいわゆる長胴甕である。

有台坏の 62 はⅥ期、61 はⅦ期に属するものであろう。坏、皿等は、個別に時期を限定するのは困難である。66、83、84 は内轆坏の要素を留めている点や、口径と底径の差が少ない点などから、Ⅵ期に属すると考えることもできるが、多くはⅦ期に属すると見てよいであろう。長胴甕も多くはⅦ期に属すると考えられる。土師器では、多量の破片の中に甕が認められない。

以上から、SD107 出土遺物は、8 世紀代の遺物を少量含むが、多くは黒笹 14 号窯式から折戸 53

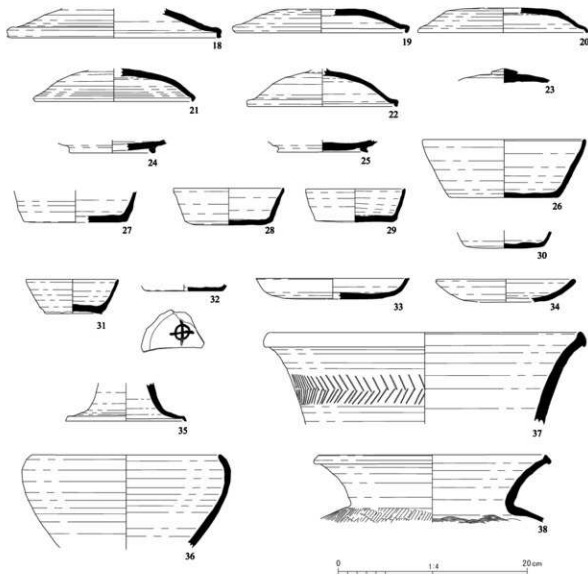


Fig.89 SD107 出土遺物 (2)

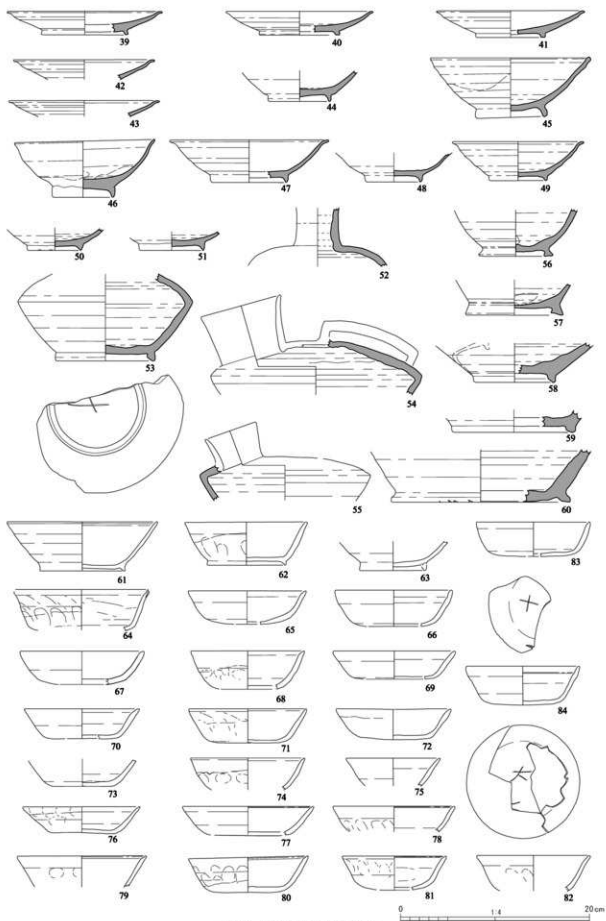


Fig.90 SD107 出土遺物（2）

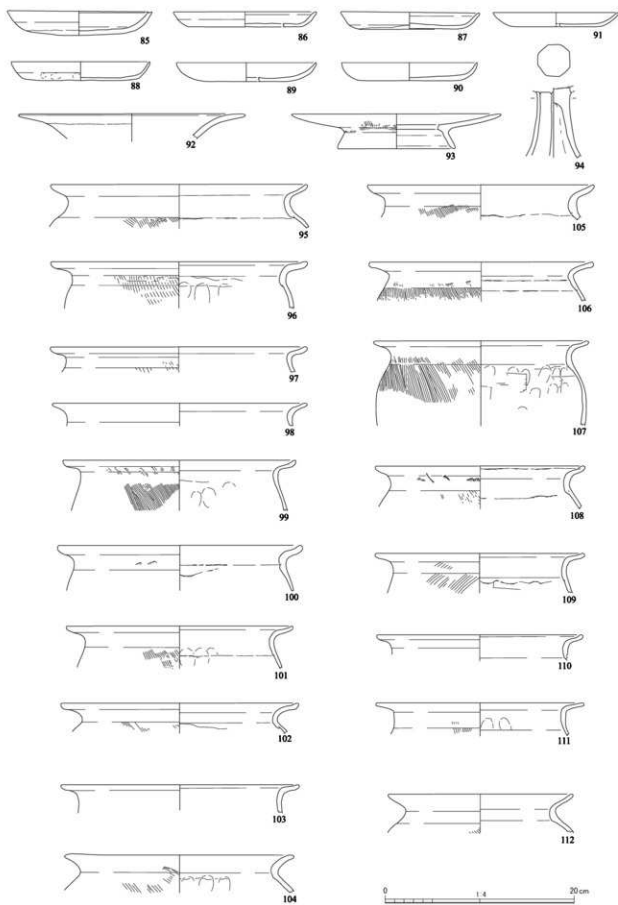


Fig.91 SD107 出土遺物 (3)

号窯式の時期と見て良いであろう。すなわち、8世紀後半に使用を開始し9世紀から10世紀前半を中心に機能していた遺構といえよう。

SD109 出土遺物 (Fig. 92・93) SD109の埋土から出土した土器類は、磨耗が目立つものが多かったが、北端付近から銅印(113)と底部外面に墨書のある土師器坏(114)が出土した。114の墨書は、SD107から出土したものと類似している。この土師器は、Ⅶ期に属するものであろう。

土師器と近接して銅印が出土した。隅の一箇所を欠損しているが、保存状況は良好である。鈕は、鋳造後ほとんど整形されていない。鈕には特に文様を施すことはなく、きわめてシンプルな形状である。材質は、銅の含有量が多く、ほぼ純銅製と判断した方が良いかもしれないとする分析結果が出ている(第3章1参照)。

印面は縦横2.7cmとほぼ方形で、隅が丸い。高さは、2.9cmである。鈕は、弧鈕有孔の形式に属し、側面は分銅形である。鈕孔は、縦0.5cm、横0.35cmの楕円形であるが、印綬等で擦れた痕跡は観察できない。印面輪郭は有郭で、郭の幅は約0.1cmである。重さは約30gである。印面は、「估」の一字とも「吉人」の二字とも読める。

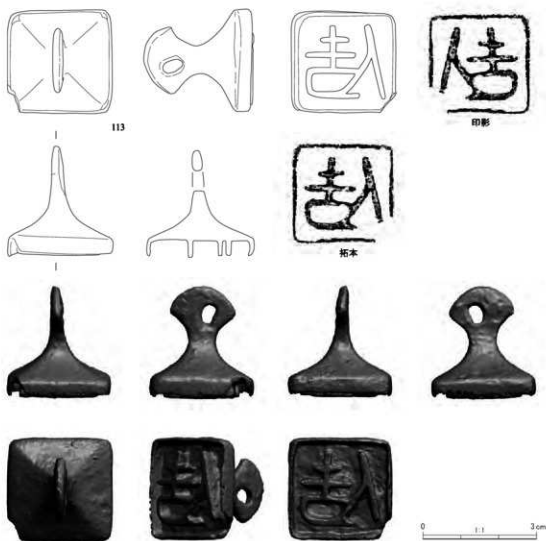


Fig.92 SD109 出土銅印 実測図・三次元陰影図

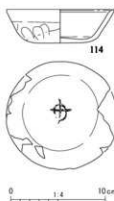


Fig.93 SD109 出土遺物

『類聚三代格』にしたがえば、印鑑の大きさは一寸五分以下なので、私印ということになる。

共伴遺物など周辺の状況や鈕の形状を考慮に入ると、この銅印は9世紀代のものであろう。

SD110 出土遺物 (Fig. 94) 121・123・124 は須恵器、122 は灰釉陶器である。121・123 は、VI期に属するであろう。124 は、黒笹 14 号窯式に並行する時期であろう。122 は、黒笹 90 号窯式である。

その他溝出土遺物 (Fig. 94) 115 は SD05、117 は SD57 出土の須恵器である。時期はVI期に属すると思われる。116 は SD08 出土の内面に暗文のある土師器で、VI期に属するであろう。118・119 は SD101 出土で、118 は黒笹 14 号窯式の灰釉陶器、119 は流紋岩製の砥石である。120 は

SD108、125 は SD112 出土の須恵器である。いずれもⅦ期に属するであろう。126 は、SD113 出土で、黒笹 14 号窯式の灰釉陶器である。SD118 から鉄滓 (249) が出土している。溝状遺構は 24 箇所で見出されているが、ここに示した遺構以外からの出土遺物はいずれも小片であり、図示することができない。

小 結 SD107 をはじめ、多くは区画溝として機能していたと思われる。特に SD107 は総延長約 55 m あり、広大な面積を囲う区画溝と考えられる。黒笹 14・90 号窯式の時期に属する尾張産の灰釉陶器も出土しており、出土遺物から主に 9 世紀～10 世紀前半に機能していたと思われる。その区画溝の内側からは、銅印や墨書土器 (SD109)、陶馬、製塩土器 (SE02) など特殊遺物が多く出土していることから、鍛冶関連遺構も含め区画溝で囲まれた区画は、特別な区域であったと想定できる。

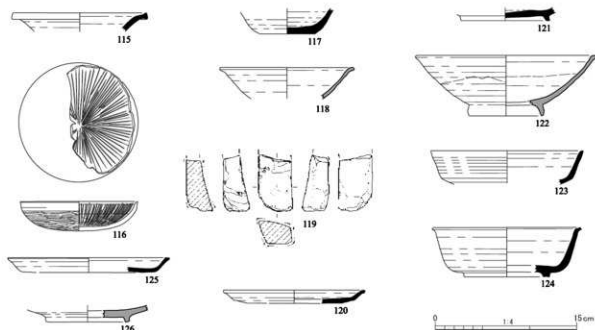


Fig.94 奈良・平安時代 溝 出土遺物

115:SD05 116:SD08 117:SD57 118・119:SD101 120:SD108 121～124:SD110 125:SD112 126:SD113

(4) 小穴

概要 小穴は、全時期を通すと1000を超える数が検出されているが、時期を認定できるものは少ない。1工区D3グリッドや3工区H3・H4グリッド付近では、柱痕と思われる穴を伴う例も少なくないが、掘立柱建物を復元するに至らなかった。

小穴出土遺物 (Fig. 95) 出土した遺物は、127～144がある。出土した遺物の詳細は表に示した (Tab. 5)。

(5) 井戸

概要 井戸は4基検出されたが、の中で、SE02が平安時代に属するものである。

SE02 (Fig. 96・97) 多量の湧水で井戸枠周辺が崩落したために、井戸の掘り方は十分に確認できなかった。井戸枠は、周辺に矢板が打ち込まれ、その内部に板材を井桁に組んでいる。井桁内法は、東西約0.85m、南北は西側で約0.75m、東側で約0.8mと、平面形はほぼ正方形である。深さは約1.1mで、底面の標高は約3.55mである。井桁は、いわゆる三枚組接ぎである。井戸枠は組接

Tab.5 小穴出土遺物一覧

番号	種類	器種	形式	遺物名
127	土師器	坏	VI	SP18
128	須恵器	碗	Ⅷ	SP39
129	土師器	皿	Ⅷ	SP39
130	土師器	甕	VI	SP39
131	土師器	甕	Ⅷ	SP47
132	須恵器	有台坏	VI	SP100
133	土師器	坏	Ⅷ	SP155
134	灰釉陶器	碗	Ⅲ	SP533
135	灰釉陶器	碗	Ⅲ	SP539
136	灰釉陶器	碗	Ⅲ?	SP585
137	須恵器	罐蓋	VI	SP593
138	土師器	甕	Ⅷ	SP620
139	灰釉陶器	碗	Ⅲ?	SP620
140	灰釉陶器	平瓶	黒管 14?	SP699
141	須恵器	皿	Ⅷ	SP785
142	須恵器	甕	VI	SP785
143	土師器	甕	Ⅷ	SP868
144	灰釉陶器	甕	黒管 14?	SP939

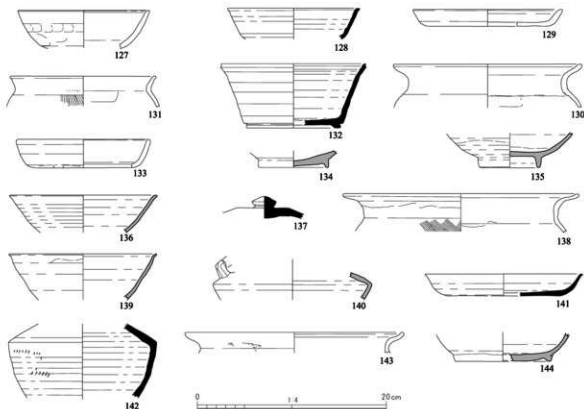


Fig.95 奈良・平安時代 小穴 出土遺物

127:SP18 128～130:SP39 131:SP47 132:SP100 133:SP155 134:SP533 135:SP539
136:SP585 137:SP593 138～139:SP620 140:SP699 141～142:SP785 143:SP868 144:SP939



Fig.96 SE02 井戸枠検出状況（東から）

ぎ分を除くと 0.89 m (170) と 0.84 m (171) である。井戸底と思われる位置から 2 枚の板材が検出された (172・173)。173 は長さ 0.78 m, 174 は長さ 0.82 m である。井戸枠等の材質は全てヒノキである。

出土した遺物は 145 ～ 173 がある。

SE02 出土遺物 (Fig. 98) 145 ～ 150 は須恵器、151 ～ 158 は灰釉陶器、159 ～ 167 は土師器、168 は陶馬、169 は製塩土器の脚部である。

須恵器の中で、145・146、148 ～ 150 は VI 期、147 は、

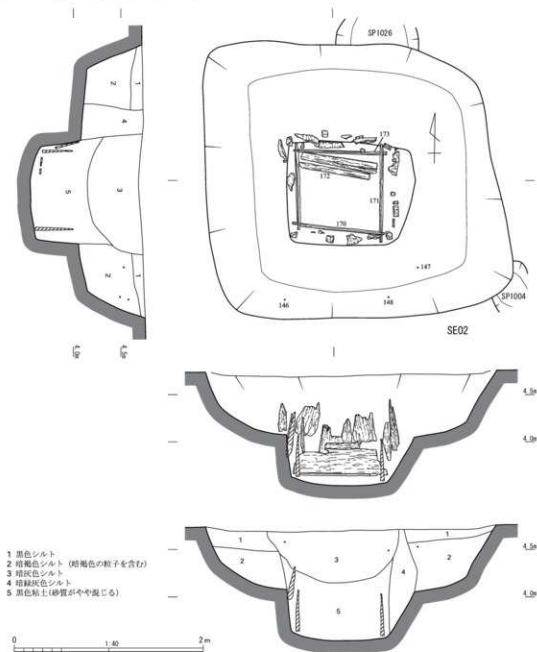


Fig.97 SE02 実測図

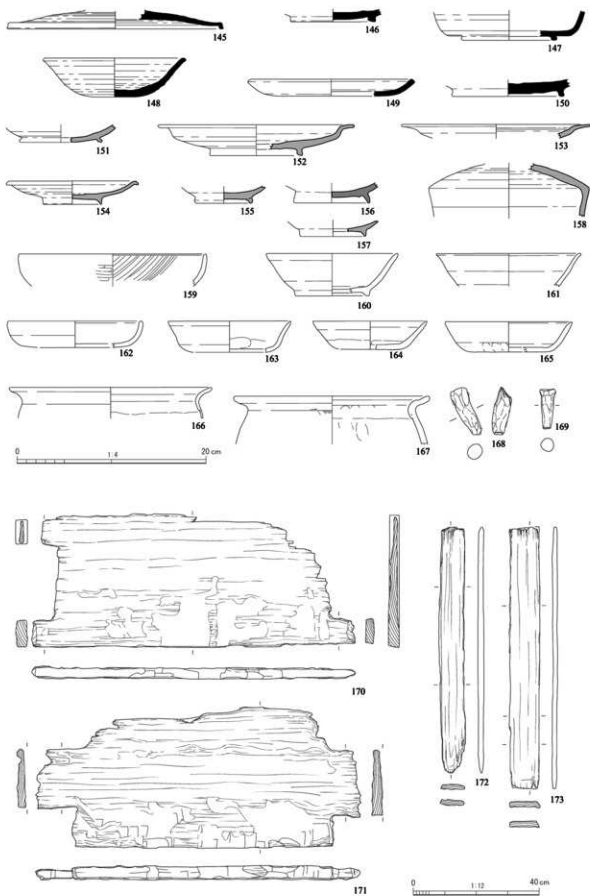


Fig.98 SE02 出土遺物

黒笹 14 号窯式並行であろう。

灰釉陶器は、151 が黒笹 14 号窯式の碗、152・153 が黒笹 14 号窯式の段皿、154 は、折戸 53 号窯式の皿である。155～157 も折戸 53 号窯式並行であろう。158 は、灰釉の長頸壺である。土師器は、159 がⅥ期に属し、他はⅦ期に属するものであろう。169 の製塩土器は特筆すべきものであろう。

(6) 包含層等出土遺物

古代の遺構検出面の把握が困難で、弥生時代の遺構と同一面で確認したこともあって、包含層と

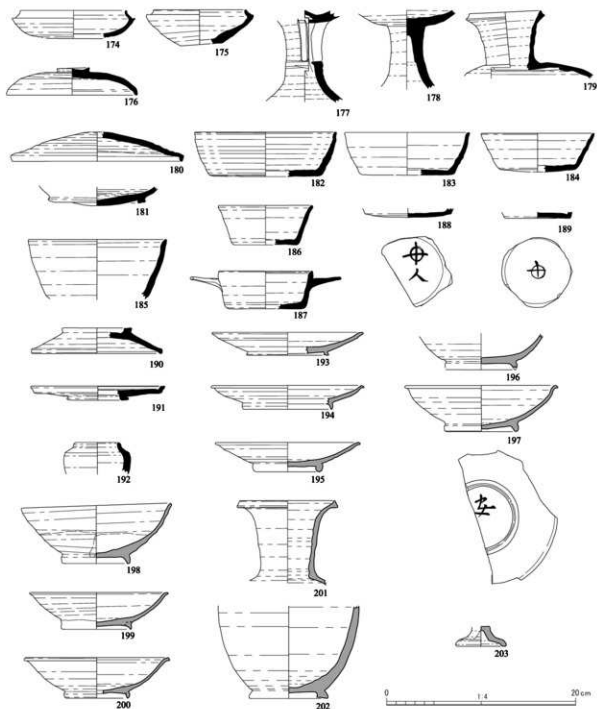


Fig.99 奈良・平安時代 包含層等 出土遺物 (1)

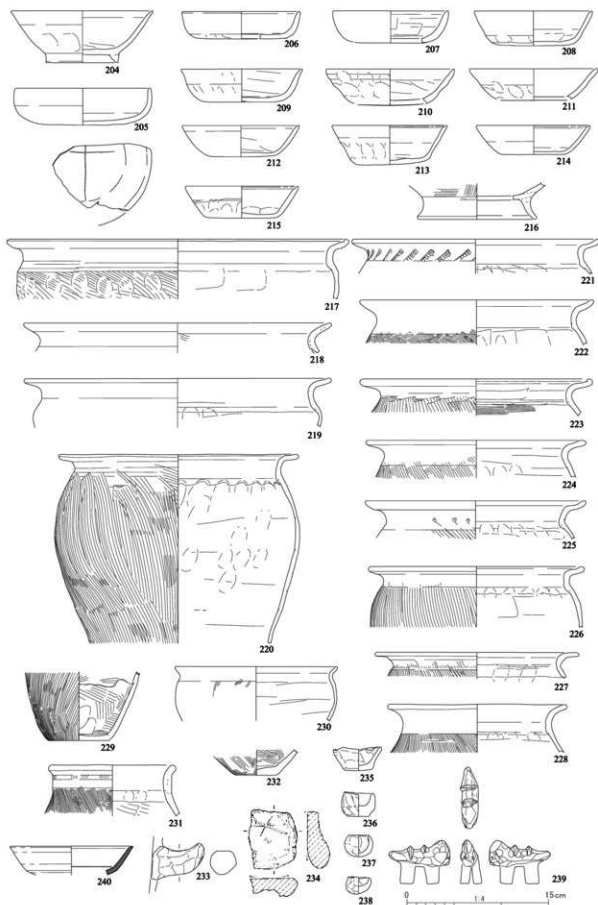


Fig.100 奈良・平安時代 包含層等 出土遺物 (2)

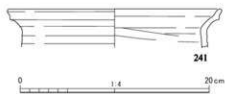


Fig.101 奈良・平安時代 包含層等 出土遺物 (3)

して取り上げた遺物が少なくない。これらの中で実測可能なものは図示した。

174～192は須恵器、193～203は灰釉陶器、204～233は土師器、234は砥石、235～238は手捏ね土器、239は土馬、240は緑釉陶器、241は詳細の不明な土師器である。

174～179は古墳時代に属する須恵器である。174は岩崎17窯式に属する尾張系の須恵器である。175～177はⅢ期に属するものであろう。180～183はⅥ期、184～192はⅦ期に属するものであろう。

灰釉陶器は、193が黒笹14号窯式の皿、194は黒笹90号窯式の皿、196が黒笹90号窯式の碗である。195・197～200は、折戸53号窯式に属している。これらの中で、197～200は宮口古窯産であらう。201は黒笹14号窯式の長頸壺であり、202・203もこの時期であらう。

土師器坏は、204～209はⅥ期に属するとみてよいであらう。210～215はⅦ期であらう。217～229のいわゆる長胴甕は、Ⅵ期～Ⅶ期に属するであらう。230・231は、Ⅵ期に属する鉢である。

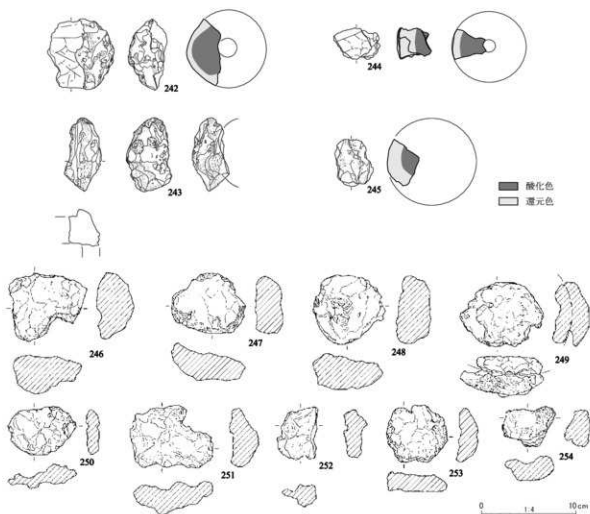


Fig.102 奈良・平安時代 包含層等 出土遺物 (4)

242・244・251・252・254: 包含層 243: 表土 245～248: SK301 249: SD118 250: SP982 253: 表探

233 は、今回の調査で唯一出土した土師器の把手である。240 は、黒笹 90 号窯式に属する緑釉の稜碗である。

241 は、この地域では類例を見ることができない甕形土器である。口縁部は、強く押し付けるように横ナデ成形されていることから、明瞭な稜を有して上方に伸びている。頸部から体部上部も内外ともに横ナデ成形で、外面にはこれに伴う稜が明瞭に観察できる。胎土には、径 0.5 cm 以下の白色チャートと、微細な金雲母を含み、焼成はきわめて良好である。いわゆる常総型甕と総称されているものに類例がみられる。相模地方などにも少量分布しているようで、概ね 9 世紀代と考えられている。

242 ～ 244 は轆羽口、251 ～ 254 は鉄滓である。これらは、包含層でも E4・E5 グリッドから多く出土しているが図示されなかったものの多くは、SH06 付近から出土している。

(7) 奈良・平安時代検出遺構・遺物の特徴

当調査区では、弥生時代後期と律令期に盛行したと考えることができる。そして、古墳時代の遺構遺物が極めて少ないことも確認することができた。

奈良・平安時代という括りのなかで考えると、積極的に 8 世紀前半の遺物といえるものは少なく、8 世紀後半から急速に増加している。また 10 世紀後半以降は、鎌倉時代に至るまで遺構・遺物は皆無になる。その内容から推定すれば、当調査区は、8 世紀後半から 10 世紀前半という約 200 年間の盛行期であったといえる。

奈良・平安時代の遺構で特記できるのは、土地を方形に囲んだと考えられる SD107 であろう。この SD107 は、調査区周辺の古い地割と区画の方向が近似しており (Fig. 103)、地割が古代から踏襲されていた可能性が考えられる。

SD107 のように、ある程度の範囲を囲み多量の遺物を出土する溝状の遺構は、官衙関連の遺跡や有力氏族の居館等にみられるが、一区画が広大な面積に及ぶことから、全容を把握できた例は少なく、当遺跡においてもその位置付けは簡単ではない。しかし、普通の集落ではなかったことは指摘できよう。この点は、この溝とその周辺から尾張地方で生産された灰釉陶器がある程度まとまって出土していることや、隣接する SD109 から銅印が出土していることから理解できそうである。

9 世紀代の灰釉陶器は、大略でいえば黒笹 14 号窯式、黒笹 90 号窯式の時期である。この時期の遠江周辺では、灰釉陶器の生産は本格化しておらず、出土するものの大半は尾張産である。これら灰釉陶器の生産と供給には、国家的規制が働いていたと考えられるので、これら初期の灰釉陶器を多く出土する遺跡は、その性格や規模は別として、国家の地方支配と密接にかかわっていると見てよいであろう。

調査区東端の SD107 の内側から、轆羽口、鉄滓が集中的に出土している点は注目できる。この付近で鍛冶に関連する作業が行われていたと考えられ、SK301・SK302・SD118・SH06 などは、鍛冶関連遺構と捉えることが可能と思われる。

また、出土遺物の中で、土師器の甕が出土していないのは注目すべき点であろう。遠江地方では 9 世紀代になると甕の出土例が極めて少なくなる傾向は、当遺跡でも検証できた。

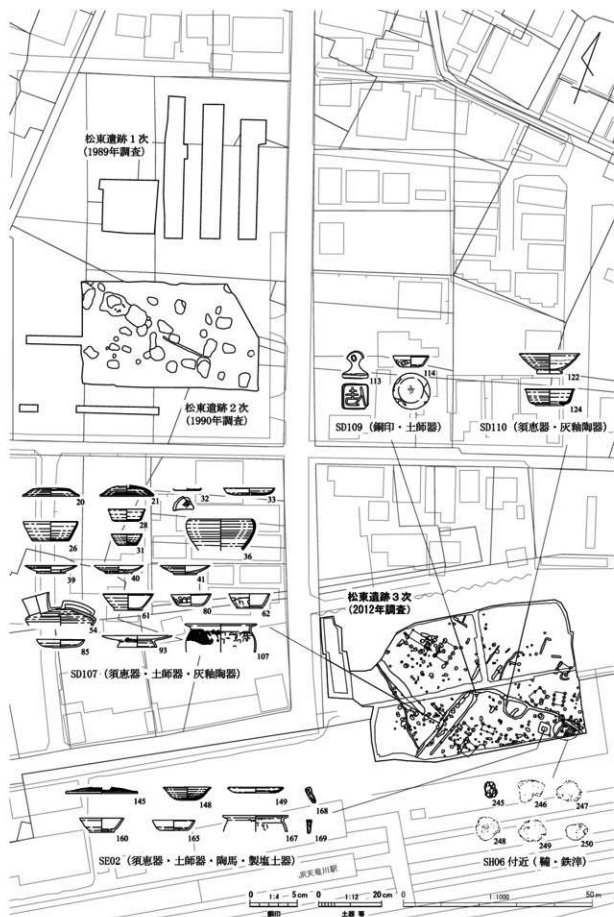


Fig.103 松東遺跡周辺の地籍図と奈良・平安時代の遺構

4 鎌倉時代以降

(1) 検出遺構の概観

鎌倉時代およびそれ以降の時代の遺構・遺物は少ない (Fig. 104)。井戸跡3基、幅広の溝状遺構4条、幅の狭い溝状遺構2条以外の遺構は、きわめて不明確な土坑、小穴が数箇所検出されたに過ぎない。

(2) 溝

概要 SD01・SD02・SD20・SD21は、幅の広い溝状遺構というべきか、沖積微高地を水田化した名残なのか識別困難であったので、溝として扱う。SD07とSD08は、SD01と関連のある溝と考えられるが、性格は不明である。

SD01・SD02・SD20・SD21 (Fig. 105) 調査区全体から、幅4～6m、深さ約0.3mの幅広で浅い溝状遺構が4条検出された。4条の溝状遺構は、主軸が真北から東方向に16～17度傾斜し、ほぼ等間隔で並行に延びている。SD01内には近代の掘り抜き井戸が2本検出された。

埋土からは、磨耗した土器片が出土したが、その量は決して多くない。

溝出土遺物 磨耗した弥生時代～江戸時代の遺物が出土したが、いずれも小片であり図示できるものはない。

(3) 井戸

概要 調査区中央付近で1箇所、東隅で2箇所検出された。

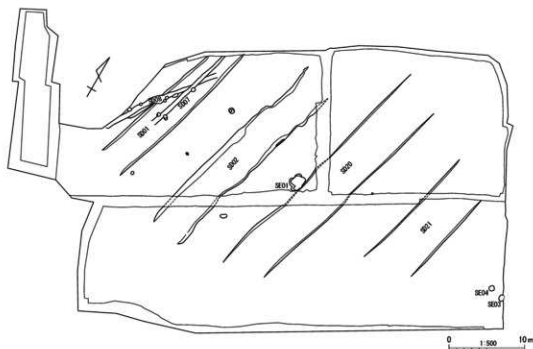


Fig.104 鎌倉時代以降 遺構分布図

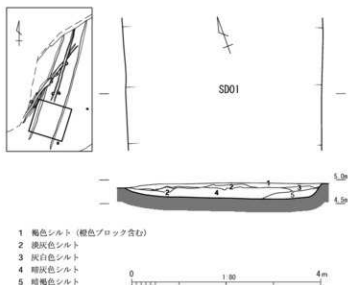


Fig.105 SD01 実測図

SD01 (Fig.106) 1 工区 E3～F3 にかけて検出された。隣接して SD20 がある。南～西側で湧水によって遺構が一部崩落している。直径 1.5 m 前後の不整形な平面形を呈する。底面は砂礫層に達している。現況で深さ 0.5 m である。底面の標高は、4.35 m である。土層観察では、掘り方の中に直径約 0.6 m の井戸枠状の窪みが認められたが、木枠等の施設は検出できなかった。出土した遺物は、255 がある。

底面から約 0.3 m 浮いた状態で、山茶碗 1 点 (256) が出土した。

SE04 (Fig.106) 3 工区 H3 グリッドから検出した。SE03 から約 1.1 m 西に位置する。平面形は直径 0.7 m の円形で、深さは 0.55 m である。底面は砂礫層に達する。埋土は、有機質の強い暗褐色

SE03 (Fig.106) 3 工区 I3 グリッドから検出された。平面形は長径 0.8 m、短径 0.7 m である。深さは、0.75 m で、底面は砂礫層に達する。埋土は、有機質の強い暗褐色土である。いわゆる野井戸であろう。

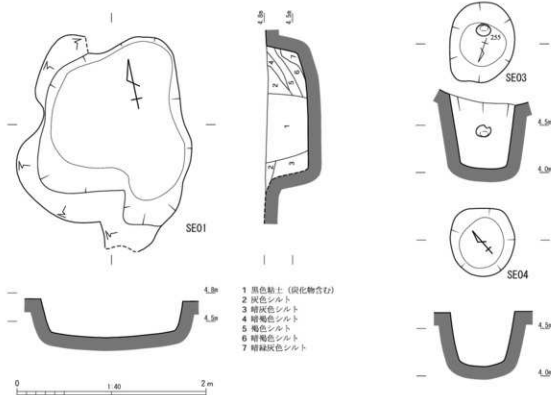


Fig.106 SE01・SE03・SE04 実測図

色土である。いわゆる野井戸であろう。

出土した遺物は、257・258がある。

井戸出土遺物 (Fig. 107) 255はSE01、256はSE03出土の山茶碗、257はSE04出土の山皿である。山茶碗のⅡ形式に属するものであろう。

(4) 包含層出土遺物

258～265は包含層出土である (Fig. 107)。258～260は、戦国時代頃のかわけである。261は羽釜の小片、262・263は青磁小片である。いずれも中国産であろう。前者は13～14世紀頃の稜皿である。後者は、14～15世紀頃の碗である。264は内面に半肉彫りの花文を有する白磁である。近世の国産とも考えられる。265は漆器の小片である。材はトチノキで、内面赤漆、外面黒漆である。

(5) 鎌倉時代以降検出遺構の特徴

鎌倉時代以降の遺構・遺物は他の時代と比べると希薄である。主な検出遺構は、井戸跡3基、幅広の溝状遺構4条である。

SD01・SD02・SD20・SD21の溝状遺構の性格は不明だが、4条が平行して並び主軸が一致している状況は、遺構の時期であると考えられる鎌倉～江戸時代の区画を表しているとみて間違いないと思われる。そこで、現在の都市計画図に地籍図を重ねたものに検出された遺構をあてはめてみた (Fig. 108・109)。詳細にみていくと、おおまかにAとBの2種類の地割りがみえてくる。Aは、検出した溝状遺構と主軸方向がほぼ一致するものとそれに直交する地割りである。Bは、Aの地割りを切るように設定された、Aより西へ振れている地割りである。Aの地割りをBの地割りが切っていることから、BよりもAの地割りの方がより古いということがいえる。応長元年 (1311)に開創されたと伝わる日蓮宗妙恩寺は、今回の調査区の北東に位置し、さらに妙恩寺から西へ200mには、開基金原法橋の屋敷にあったと伝わる法橋の松が存在する。松東遺跡は当時、妙恩寺の広大な境内

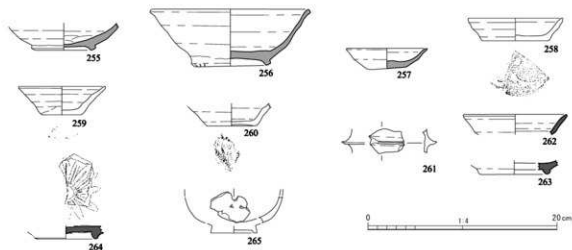


Fig.107 鎌倉時代以降 出土遺物

255:SE01 256:SE03 257:SE04 258～265:包含層

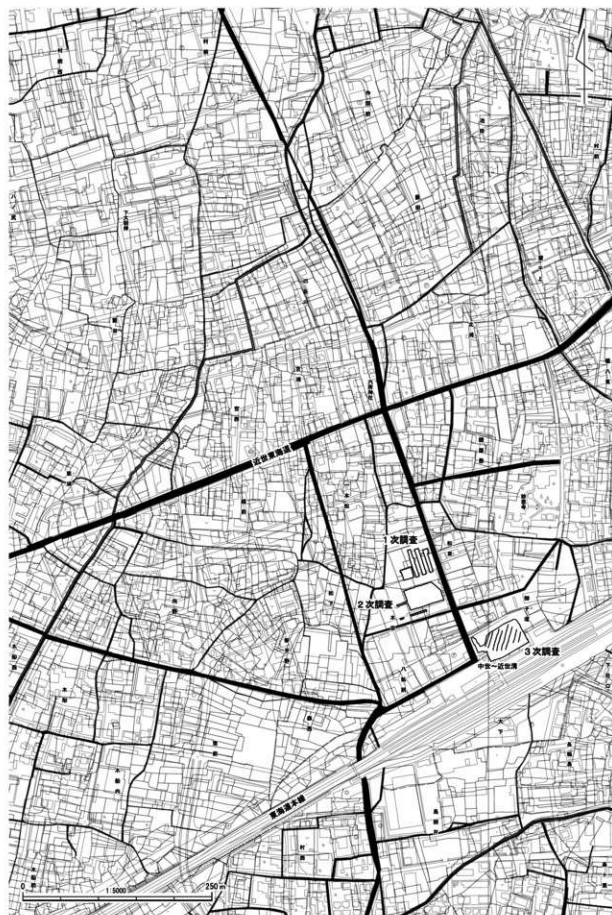


Fig.108 松東遺跡周辺の地籍図

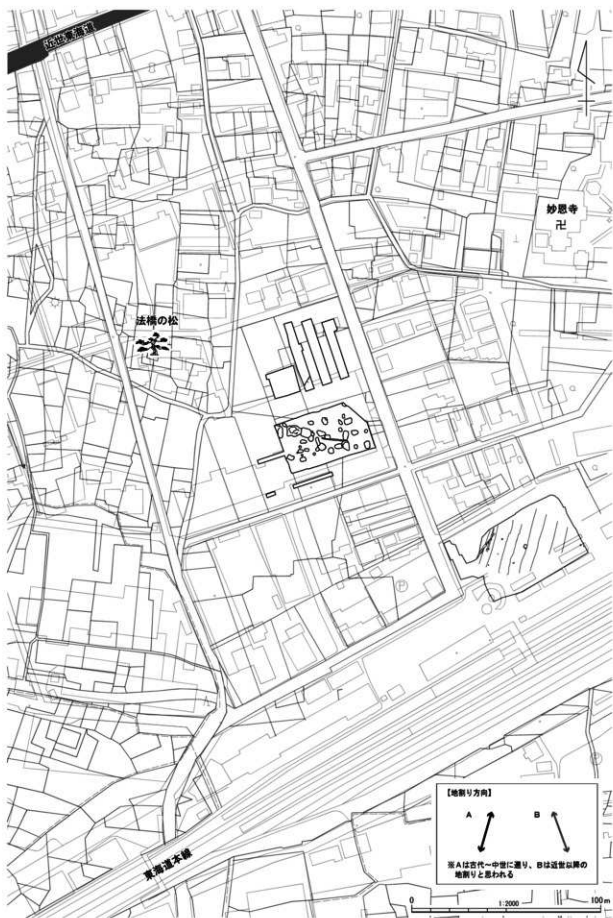


Fig.109 松東遺跡周辺の地籍図詳細と松東遺跡の中世遺構全体図

の中に位置しており、その妙思寺の地割りと今回検出された溝状遺構の方向は一致していることが確認された。また、Bは近世に成立した近世東海道を意識した地割りとみられ、Aの地割りを無視した区画を形成している。Bの方がAよりひとつひとつが大きな区画で構成され、整然としている印象である。今回の調査区近辺はBの地割りの箇所が多く、検出された溝状遺構とは明らかに主軸方向が異なることがわかる。これらのことから、Aは中世段階の地割りであり、Bは近世頃から現代に続く新しい地割りであることがいえる。また、Aは奈良・平安時代の区画溝であるSD107とも主軸方向が近似しており、中世段階のものと考えられるAの地割りは、さらに古代までさかのぼる可能性もある。

1章・2章参考文献

論文

- 赤塚次郎 1990 「廻間式土器」『廻間遺跡』(財)愛知県文化財センター
 国立歴史民俗博物館 1999 『日本古代印の基礎的研究』国立歴史民俗博物館研究報告第79集
 鈴木一有 2000 「第4章 考察」『山の神遺跡5次』(財)浜松市文化協会
 鈴木一有 2009a 「鳥居松遺跡出土遺物にみる弥生時代後期の土器編年」『鳥居松遺跡5次 弥生時代編』(財)浜松市文化振興財団
 鈴木一有 2009b 「鳥居松遺跡の集落構造とその特質」『鳥居松遺跡5次 弥生時代編』(財)浜松市文化振興財団
 難波洋三 1986 「銅鐸」『弥生文化の研究』第6巻 雄山閣
 難波洋三 2007 「難波分類に基づく銅鐸出土地名表の作成」平成15年度～18年度科学研究費補助金 基礎研究(C)研究成果報告書 向坂潤二 1989 「浜松市の弥生文化再考」『浜松市博物館報』1

発掘調査報告書

- (財)静岡県埋蔵文化財研究所 1996 『角江遺跡Ⅱ 遺物編3(石器・金属製品他)』
 (財)静岡県埋蔵文化財研究所 1999 『元島遺跡Ⅰ 遺物・考察編1-中世-』
 (財)静岡県埋蔵文化財研究所 2007 『井通遺跡 井伊谷川流域の遺跡Ⅱ』
 (財)静岡県埋蔵文化財研究所 2010 『西の谷遺跡』
 (財)浜松市文化協会 1989 『山の神遺跡』
 (財)浜松市文化協会 1990a 『松東遺跡発掘調査報告書』
 (財)浜松市文化協会 1990b 『松東遺跡Ⅱ』
 (財)浜松市文化協会 1991 『梶子遺跡Ⅶ』
 (財)浜松市文化協会 1994 『宮竹野原遺跡2』
 (財)浜松市文化協会 1997 『下蔵遺跡群』
 (財)浜松市文化協会 2000 『山の神遺跡5次』
 (財)浜松市文化協会 2002 『天王町村東遺跡』
 (財)浜松市文化協会 2002 『恒武西宮遺跡』
 (財)浜松市文化協会 2004 『大藤村東Ⅰ・Ⅱ遺跡』
 (財)浜松市文化協会 2004 『坊々跡遺跡』
 (財)浜松市文化協会 2005 『梶子北(三永)・中村遺跡 弥生時代編』
 (財)浜松市文化振興財団 2005 『森西遺跡』
 (財)浜松市文化振興財団 2007 『中田北遺跡』
 (財)浜松市文化振興財団 2011 『木船森寺跡2次』
 (財)浜松市文化振興財団 2012 『宮竹野原遺跡6次』
 静岡県埋蔵文化財センター 2012 『竹笠名遺跡』
 浜松市教育委員会 2008 『伊場遺跡総括編 文字資料・時代別総括』
 細江町教育委員会 1991 『滝瀬才四郎谷遺跡発掘調査報告書』

第3章 後 論

1 銅鐸・銅印の自然科学分析

川本耕三（公益財団法人元興寺文化財研究所）

西田京平・平尾良光（別府大学文化財研究所）

（1）分析内容

Tab. 6 に分析項目をまとめた。ICP 発光分析は日鉄住金テクノロジー株式会社が行った。また、鉛同位体比測定については、遺物から採取した鉛同位体比測定に供する試料の鉛含有の有無を蛍光 X 線分析法で確認した後、別府大学文化財研究所・平尾良光が分析した。

文章は、（1）～（3）を川本が、（4）を西田・平尾が、（5）を坂下が執筆した。

Tab.6 松東遺跡出土遺物の分析項目

	銅鐸測定	銅印
蛍光X線分析法による定性成分分析	○	○
ICP発光分析法による定性定量分析	○	—
鉛同位体比測定	○	○

（2）銅鐸鈕、銅印の蛍光 X 線分析法による定性成分分析

分析原理 蛍光 X 線分析法は、試料の微小領域に X 線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有の蛍光 X 線を検出することにより元素を同定する分析法である。

分析方法 エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置 (XRF) 【SII ナノテクノロジー SEA5230】を用いて、大気中でφ 1.8mm のコリメータと 45kV の管電圧で 180 秒間測定を行った。なお、X 線管球はモリブデン (Mo) である。

分析結果 銅鐸鈕の分析箇所 (Fig. 110 左) を XRF にて測定したところ、銅 (Cu)、ヒ素 (As)、銀 (Ag)、スズ (Sn)、アンチモン (Sb)、鉛 (Pb) などを検出した (Fig. 111) ことから、銅鐸鈕は青銅製であると考えられた。

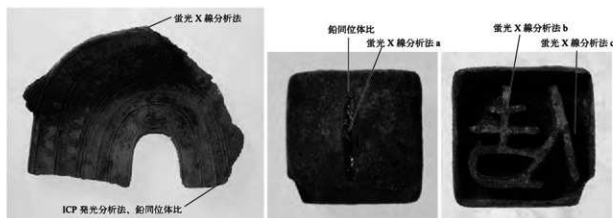


Fig.110 銅鐸鈕（左）、銅印（中・右）とその分析箇所

次に、銅印の分析箇所 (Fig. 110 中の a、Fig. 110 右の b、c) を XRF にて測定したところ、銅、ヒ素、銀、スズ、鉛、ビスマス (Bi) などを検出した (Fig. 112 ~ 114) ことから、銅印は青銅製であると考えられた。印面から水銀朱 (硫化水銀 (HgS)) は検出できなかった。

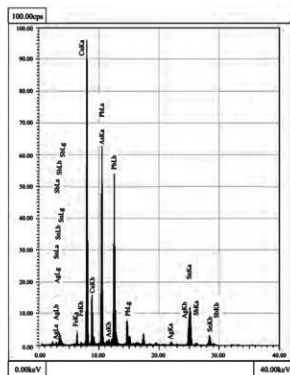


Fig.111 銅鐙靴紐分析箇所 (Fig. 110 左) の XRF スペクトル

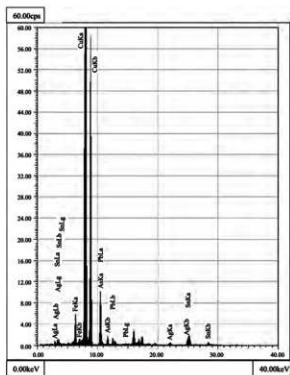


Fig.112 銅印分析箇所 (Fig. 110 中 a) の XRF スペクトル

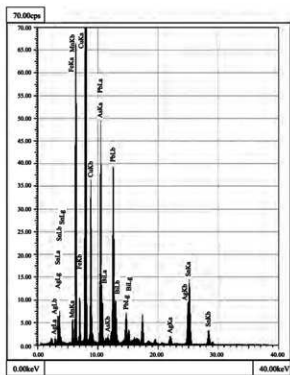


Fig.113 銅印分析箇所 (Fig. 110 中 b) の XRF スペクトル

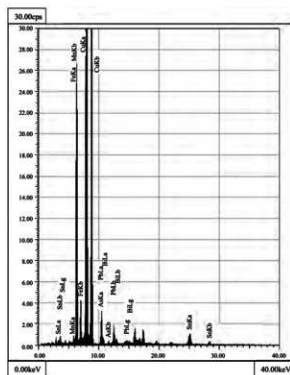


Fig.114 銅印分析箇所 (Fig. 110 中 c) の XRF スペクトル

Tab.7 酸可溶分 (sol 液) の定量分析結果

	マグネシウム Mg	シリコン Si	カルシウム Ca	クロム Cr	マンガン Mn	鉄 Fe	コバルト Co	ニッケル Ni	銅 Cu	亜鉛 Zn	アルミニウム Al	銀 Ag	スズ Sn	セレン Se	金 Au	鉛 Pb	ビスマス Bi
銅鐸鈕	0.002	0.033	0.017	0.001	0.004	0.19	0.037	0.077	87.6	0.003	0.42	0.15	4.32	0.45	0.005	3.31	0.023

単位：重量%

亜鉛濃度はICP-MSによる測定結果

Tab.8 酸不溶分 (insol 液) の定量分析結果

	マグネシウム Mg	アルミニウム Al	シリコン Si	カルシウム Ca	チタン Ti	鉄 Fe	ニッケル Ni	銅 Cu	亜鉛 Zn	スズ Sn	鉛 Pb
銅鐸鈕	0.002	<0.001	0.055	0.019	<0.001	0.007	0.019	0.12	0.13	0.19	0.011

単位：重量%

(3) 銅鐸鈕の ICP 発光分析法による定性定量分析

銅鐸鈕の Fig. 110 に示した箇所から試料を採取し、ICP 発光分析を日鉄住金テクノロジー株式会社が行った。Fig. 115 に試料採取部分を示す。

分析原理 誘導結合プラズマ発光分光分析では、試料にプラズマのエネルギーを外部から与えると含有されている成分元素（原子）が励起される。その励起された原子が低いエネルギー準位に戻るときに放出されるスペクトル線を測定することにより、その元素の種類と含有量を知る。



Fig.115 ICP 発光分析用使用採取部分

誘導結合プラズマ発光質量分析では、プラズマ中でイオン化した試料が質量分析計により質量選別され、イオン検出器により検出される。高感度分析が可能である。

分析方法

①前処理 試料0.05gを硝酸、塩酸で分解後、濾過し、50mlに希釈定容したものを酸可溶分(sol液)の測定試料とした。酸で分解不可能であったものは、濾紙上に濾別された。この濾別された酸不溶分は、濾紙とともに灰化・融剤（ホウ酸ナトリウム）で溶融した後、硝酸溶液にて溶解させ、50mlに定容した。この溶液を酸不溶分(insol液)として測定試料とした。

②定量方法 SPEX 製標準溶液を用いて、検量線を作成することにより定量値を算出した。

③測定方法 誘導結合プラズマ発光分光分析 (ICP) 【SII ナノテクノロジー SPS3100HVUV】、誘導結合プラズマ発光質量分析 (ICP-MS) 【セイコーインスツルメンツ SPQ9200】

分析結果 酸可溶分(sol液)の測定結果をTab.7に、酸不溶分(insol液)の測定結果をTab.8にまとめた。

(4) 鉛同位体比分析

銅鐸鈕、銅印の Fig. 110 に示した箇所からそれぞれ試料を採取し、XRF で成分分析して鉛の含有を確認後、試料の鉛同位体比分析を平尾良光が実施した。以下に試料採取部分 (Fig. 116) とその報告を示す。

銅鐸 本銅鐸は第1工区において弥生時代の遺構が検出され、この遺構の集落内の土坑から土器と共に出土している。共伴土器の形式から弥生時代後期と判断される。本資料は銅鐸の鈕部分（上部吊



Fig.116 銅鐸鈕と銅印の鉛同位体比測定用試料採取部分

り手)の破片であり、銅鐸の文様や製作技法から、突線鈕2式（近畿I式）銅鐸と判断されている。銅鐸は完全な形で集落外に埋納される場合と、故意に破壊され、再利用あるいは破棄される場合がある。本資料は故意に破壊・破棄された部分と判断される。

銅鐸の形式はI式（菱環鈕）から、II式（外縁付鈕）、III式（偏平鈕）、IV式（突線鈕）まで形式的に大きく4つの段階に変化するとされており、各形式はさらに細分化される。本資料はIV式（突線鈕）の中の第2形式で、弥生時代後期に現れた形式である。この形式の銅鐸は今までの鉛同位体比測定結果ではFig. 117とFig. 118の中で示される華北領域（A・A'領域）内に位置し、しかもa・a'領域に含まれる場合が多い。すなわち中国華北産の材料で、あたかも一つの鉱山から産出された鉛を利用しているかのようである。

浜松市周辺の遺跡から出土する銅鐸の形式はIV式（突線鈕）がほとんどであり、弥生時代後期にこの地で銅鐸に関連した人間の活動があったと推定される。

銅印 銅印は第3工区において、奈良～平安時代（700～800年頃）の遺構や遺物が検出されるなかで、溝（SD109）から確認されている。古代においては銅印を作ることが極めて珍しい。印字から「吉人」という個人名が推定され、個人が利用したと判断される。このような私印はさらに希少と推定されている。静岡県で5例目、浜松市では初めての出土である。

調査方法 資料の化学組成を測定するために蛍光X線法を利用する。分析用に供された試料は表面の錆を除いた内部から得られた金属部分であるため、本来の化学組成に近い値が得られると期待される。蛍光X線分析は別府大学に設置されているSII ナノテクノロジー社製の蛍光X線分析装置SEA5230Aで行う。測定条件は、測定時間：300秒、雰囲気：大気、測定面積：φ 2.5mm、励起電圧：50kV、管電流：8μA、定量方法：FP法、以上の条件である（中井2005）。

資料に使われた金属材料の産地を推定するために、鉛同位体比法を利用する。鉛同位体比法は鉛を構成する²⁰⁴Pb、²⁰⁶Pb、²⁰⁷Pb、²⁰⁸Pbという4種類の安定同位体の比が鉱山や鉱床の成因によって異なることを利用して、文化財資料に含まれる鉛の同位体比を測定し、鉱山や産地の明らかな文化財資料の鉛同位体比値と比較することから材料産地を推定する（平尾1999・2001）。

鉛同位体比の測定は次の手順で行う。分析用試料を石英製ピーカーに入れ、硝酸で溶解する。こ

Tab.9 松東遺跡で発掘された銅鐸と銅印の化学組成

資料名	Fe 鉄	Cu 銅	As ヒ素	Sn スズ	Sb アンチモン	Pb 鉛	分析番号
銅鐸紐	0.2	88.7	0.3	4.9	0.3	5.5	BP5916
銅 印	1.1	92.8	2.6	2.6	-	1	BP5917

単位：%

の溶液を蒸留水で希釈し、直流2Vで電気分解する。鉛は二酸化鉛として白金電極に析出するので、白金電極を取り出して硝酸と過酸化水素水で鉛を溶解する。この溶液の鉛濃度を測り、0.2 μg の鉛を分取する。この鉛にリン酸とシリカゲルを加えてレニウムフィラメント上に乗せる。以上のように準備したフィラメントを別府大学に設置されているFinnigan MAT262の中にセットし、測定諸条件を整え、1200℃で鉛同位体比を測定する。測定値は同一条件で測定した標準鉛試料NBS-SRM-981で規格化する（平尾・馬淵1989）。

調査結果 測定された化学組成の値をTab.9で示す。それによると銅鐸の化学組成は銅が89%、スズ4.9%、鉛5.5%である。突線鈕式銅鐸や広形銅矛など後期弥生時代青銅器の目安である銅90%、スズ5%、鉛5%、という平均値にほぼ一致する。それ故、IV式の銅鐸としては典型的な化学組成と判断できる。鉄(Fe)やヒ素(As)、アンチモン(Sb)は銅の不純物として含まれたと判断できる。

銅印は銅が93%、スズ3%、ヒ素3%、鉄1%であることから、鉄やヒ素は銅の不純物であろう。3%程度のスズは人為的に加えられたのか、銅の不純物として、混入していたのかは判断しにくい濃度である。銅にスズが3%程度含まれていたとしても、融点や強度に影響が顕著に表われるとは思えないので、本資料は青銅製（銅とスズの合金）と見るよりも、純銅製と判断した方が良いかもしれない（平尾2001）。

測定された鉛同位体比値をTab.10で示し、Fig.117とFig.118に図示する。

銅鐸の分析結果 Fig.117とFig.118に於いて、本銅鐸資料はA・A'領域の中でもa・a'領域に含まれると判断できる。このことから、本資料は弥生時代後期に利用された青銅材料であり、第IV式の銅鐸としては典型的な値である。化学組成からも、弥生時代後期の銅鐸として、典型的な銅、スズ、鉛濃度であると示されている。

Fig.119とFig.120とに、今までに測定されたIV式銅鐸の鉛同位体比分布を示す（平尾2003）。これらの図から判断すると、ほとんどのIV式銅鐸はA・A'領域の中のa・a'領域に含まれており、本銅鐸資料もこの中の一つであると示される。IV式の第1式銅鐸は華北（A・A'）領域にやや拡がるが、第2式以降はa・a'領域に集中する。このFig.119とFig.120を拡大してFig.121とFig.122とする。松東遺跡出土の銅鐸はa・a'領域から少々はずれるようにも見えるが、このa・a'領域の境界線は今までの銅鐸の分布から任意に設定されているので、この領域をより大きく拡げて問題はない。領域設定の意味は「IV式銅鐸はこの辺りに集まることが多い」と示しているだけで、この領域から外れても問題ではなく、他のIV式銅鐸と類似した鉛同位体比であると判断できる。

Tab.10 松東遺跡で発掘された銅鐸と銅印の鉛同位体比

資料名	$^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	分析番号
銅鐸紐	17.739	15.634	38.381	0.8757	2.1636	BP5916
銅 印	18.447	15.608	38.543	0.8461	2.0894	BP5917
誤差範囲 (1σ)	±0.010	±0.010	±0.030	±0.0003	±0.0006	

銅印の分析結果 Fig. 117 と Fig. 118 に於いて、日本産の材料であることが示されている。

日本における銅の生産は奈良時代に始まり、平安時代中期まで続く。皇朝十二銭の生産から判断すると、和同開珎 (708 年) や万年通宝 (760) などの初期の銅銭は大きく、化学組成も銅濃度が高い。それが皇朝十二銭の最後の乾元大宝 (958) になると、大きさが初期の銭貨の 70% 程度となり、鉛が 50% を超えるようになる。しかも発行量は予定の三分の一であったという。これら皇朝十二銭はそのほとんどが日本産材料を利用していると判断できるが、時代が進むにつれ日本における銅の生産が極限されたことを示唆する (齊藤 2001、平尾 2008・2013)。乾元大宝を発行した後、日本産材料を用いた銅銭の製作は 500 年以上無くなる。そこで、今までに測定された皇朝十二銭を含む平安時代の資料と本銅印を Fig. 123 と Fig. 124 で比較する。皇朝十二銭は主として日本産材料を利用しているが、日本産材料と判断できない材料もいくらかは含まれる。皇朝十二銭の分布は日本産材料領域の中でかなり大きくばらついており、本銅印資料の値はその中心から外れているようにも見える。

皇朝十二銭を外した奈良～平安時代初期の一般資料に関して、鉛同位体比を調べてみると、Fig. 125・Fig. 126 となる。これらには火熨斗、小金銅仏、銅碗などが含まれる。今回調査した銅印はこれら資料とよく似た同位体比を示しておりこの時代の典型的な材料を利用していると判断できる。それ故、本銅印は奈良時代後期から平安時代初期の典型的な銅材料を示していると判断される。鉛同位体比の値から得られた年代は、考古学的な所見で得られた奈良時代から平安時代初期という年代観とほぼ一致していることが示された。

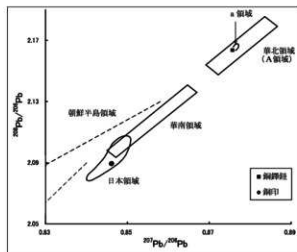


Fig.117 松東遺跡出土資料の鉛同位体比分布 (A式図)

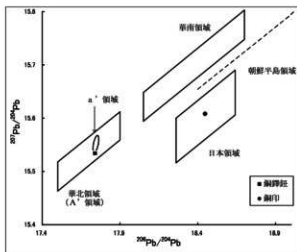


Fig.118 松東遺跡出土資料の鉛同位体比分布 (B式図)

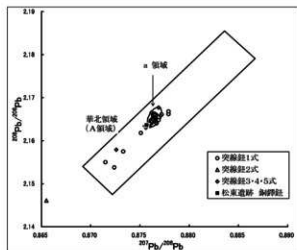


Fig.119 松東遺跡出土銅鐸と突線鈕式銅鐸の鉛同位体比分布 (A'式図)

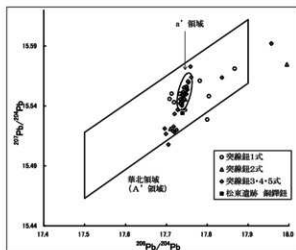


Fig.120 松東遺跡出土銅鐸と突線鈕式銅鐸の鉛同位体比分布 (B'式図)

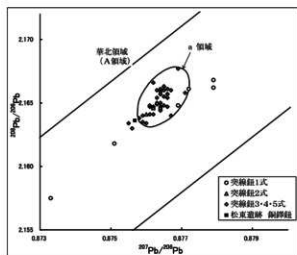


Fig.121 Fig.119の突線鈕式銅鐸の鉛同位体比分布の拡大図 (A'式図)

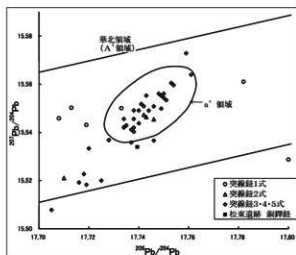


Fig.122 Fig.120の突線鈕式銅鐸の鉛同位体比分布の拡大図 (B'式図)

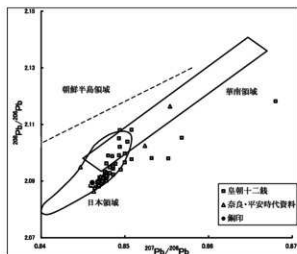


Fig.123 皇朝十二銭と奈良・平安時代資料の鉛同位体比分布 (A'式図)

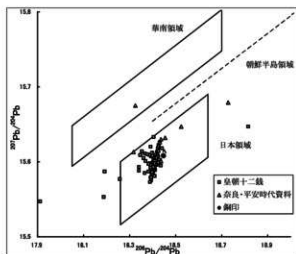


Fig.124 皇朝十二銭と奈良・平安時代資料の鉛同位体比分布 (B'式図)

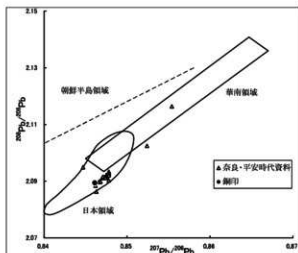


Fig.125 奈良・平安時代の鉛同位体比分布 (A式図)

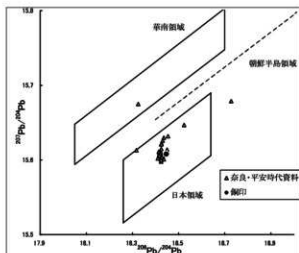


Fig.126 奈良・平安時代の鉛同位体比分布 (B式図)

(5) まとめ

分析の結果、銅鐸は青銅製で、鉛同位体比の値はほとんどの突線鈕式銅鐸が含まれるA領域の中のa領域に入った。弥生時代後期の青銅器の典型的な化学組成を示し、中国華北産の材料で製造されていると考えられる。

銅印は、化学組成の分析の結果、スズが人為的に加えられていない可能性があるため、青銅製ではなく純銅製と判断した方が良いかもしれない。鉛同位体比を測定して得た値は日本領域に含まれ、日本産の材料で製造されたと考えられる。

銅鐸については、他の突線鈕式銅鐸と類似した化学組成・鉛同位体比の値を示し、銅印についても奈良時代後期から平安時代初期の典型的な銅材料を示し、両資料ともに考古学的な所見と一致する結果を得ることができた。

引用・参考文献

- 斉藤努 2001 「日本の銭貨の鉛同位体比分析」『国立歴史民俗博物館研究報告第86集』pp. 65-128
- 中井泉 2005 『蛍光X線分析の実践』朝倉書店
- 平尾良光・馬淵久夫 1989 「表面電離型固体質量分析計VG Sectorの規格化について」『保存科学』28 pp. 17-24
- 平尾良光編 1999 『古代青銅の流通と製造』鶴山堂
- 平尾良光編 2001 『古代東アジア青銅の流通』鶴山堂
- 平尾良光 2003 「鉛同位体比の測定と分析」『考古資料大観 第6巻、弥生・古墳時代、青銅・ガラス製品』小学館 pp. 345-368
- 平尾良光 2008 「材料が語る中世—鉛同位体比測定からみた経簡—」『文化財研究所企画シリーズ-1 経簡が語る中世の世界』pp. 21-33
- 平尾良光 2013 「鉛から見える世界」『文化財学へのいざない (平尾良光先生古稀記念論集)』pp. 25-84

2 銅鐸・銅印の保存処理

西尾太加二（静岡文化財研究所）

坂下俊介（株式会社フジヤマ）

(1) はじめに

松東遺跡から出土した銅鐸・銅印の保存処理・修復を実施した。銅鐸の保存処理は株式会社フジヤマが、銅印の保存処理及び銅鐸・銅印のサンプリング孔の修復は静岡文化財研究所がそれぞれ行った。

銅鐸は、出土直後にクリーニング及び保存処理を行い、分析後にサンプリング孔の修復を実施した。サンプリング孔は、断面に4か所開けられていた。

銅印は、印面の角が一部欠損するがほぼ完形である。分析のために開けられた直径約1.2mmのサンプリング孔（1か所）の部分に金属光沢が露呈していた。

文章は、(1)・(3)を西尾が、(2)を坂下が執筆した。

(2) 銅鐸の保存処理

クリーニング (Fig. 127) 実体顕微鏡（8倍～10倍）で観察しながら、錆と銅鐸との境目に医

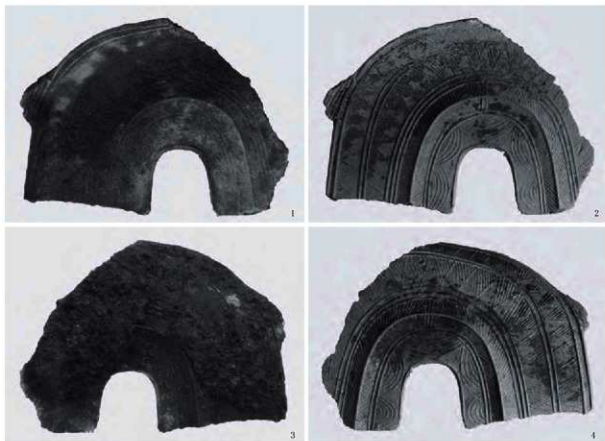


Fig.127 銅鐸のクリーニング処理前後写真 1. A面 処理前 2. A面 処理後 3. B面 処理前 4. B面 処理後

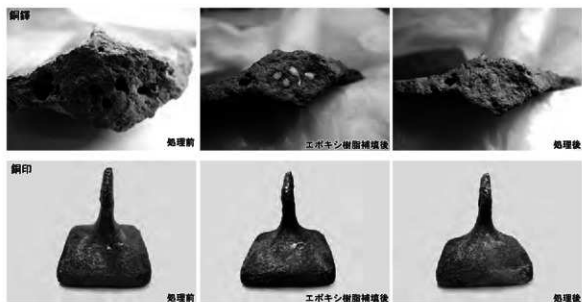


Fig.128 銅鐸・銅印の修復状況写真

療用メスNo.10 又はNo.11 の刃先を刺し入れて錆瘤を剥ぎ取った。地下水に含まれた鉄分などと結合して出来たと思われる錆瘤は堅牢であった。この除去には小型のグラブダー（ミニター）を併用した。全ての錆は取りきれないので、主に鋸歯文・連弧文を明瞭に浮き上がらせるよう努めた。

合成樹脂の含浸 クリーニング終了後、合成樹脂（インクラックをキシレンで5％に希釈）の溶液に常圧下で1週間含浸した。含浸槽から取り出して表面の溶液をバルブ等で拭き取ってから、樹脂の色斑を防ぐためキシレンの雰囲気（蒸気）の中で自然乾燥させた。

（3）銅印の保存処理

- 事前調査** 処理前の形状等を写真により記録した。
- クリーニング** 資料に付着する不要な土砂及び錆びを除去した。
- 安定化処理** 資料をBTA（ベンゾトリアゾール）2％エタノール溶液に浸漬し、減圧含浸した。
- 強化処置** 資料をアクリル樹脂（パラロイドB72）10％キシレン溶液に浸漬し、減圧含浸した。

（4）銅鐸・銅印の修復

エポキシ樹脂（セメダインハイスーパー）とフェノールマイクロバルーンを混和し、サンプリング孔に補填し、精密加工機で整形し、アクリル絵の具で補填部を彩色した（Fig.128）。

3 井戸材・漆器の樹種同定

西尾太加二（静岡文化財研究所）

（1）はじめに

松東遺跡から出土した井戸材 9 点（SE02・170～173）と、漆碗と思われる漆器片 1 点（包含層・266）の計 10 点の樹種同定を行った（Tab. 11）。判明した樹種は、井戸材はすべて針葉樹材のヒノキ、漆器片は広葉樹材のトチノキである。

（2）試料および方法

樹種同定用のプレパラート標本は、井戸材については、製品から切り出した数ミリ四方のブロック、漆器片については、製品から直接、両刃カミソリを用いて木口、放射、接線の各断面方向の切片を採取して作製した。封入はガムクロラルで行った。樹種同定は、生物顕微鏡によって 40～400 倍で観察し（Fig. 129）、現生標本および文献資料と比較しながら行った。

以下、同定に利用した材の解剖学的特徴を示す。

（3）同定結果

針葉樹材：ヒノキ（*Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科） 仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞の 3 種類の構成要素からなる。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅および年輪幅が狭く均質な材である。樹脂細胞は晩材部に散在し、ときに接線状となる。樹脂細胞の内容物は赤褐色を呈することが多く、水平壁は通常肥厚し、結節状となることが多い。分野壁孔は円形で開孔部は幅の狭いレンズ状で斜めに位置しトウヒ～ヒノキ型で 1 分野に通常 2 個存在する。放射組織は単列で、細胞高は 1～15 である。

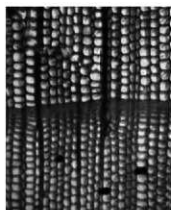
ヒノキは関東地方以西の冷温帯から暖温帯上部に分布する常緑針葉高木で樹高 30～40m、幹径 50～150cm。材は木理通直、割裂性がよく、緻密、強靱で光沢美しく、芳香がある。建築材、仏像、箸など様々な用途に用いられる。

静岡県内では、大井川を境にして以西からヒノキが多量に出土し、以东からはヒノキではなくスギが多量に出土する（西尾 2007）。

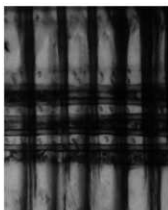
広葉樹材：トチノキ（*Aesculus turbinata* Blume トチノキ科） 20～80 μ m の小型で丸い道管が単独あるいは放射方向に 2～数个複合してやや疎らに散在する散孔材。道管の直径は年輪界に向けてやや減少し、密度はしばしば年輪のはじめと終りで低い。道管の穿孔は単一で、内壁にはらせん肥厚があり、道管相互の壁孔は交互状で密に分布する。道管内部にはしばしば褐色の物質が詰まっている。放射組織は単列同性で、しばしば層階状配列（リップルマーク）し、道管との壁孔は小型で密に分布する。

Tab. 11 樹種同定結果一覧

標本No.	遺構名	遺物番号	遺物名	樹種	
142	SE02	—	井戸材 (柱材)	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ科
143	SE02	—	井戸材 (柱材)	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ科
144	SE02	—	井戸材 (柱材)	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ科
145	SE02	173	井戸材 (底板)	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ科
146	SE02	172	井戸材 (底板)	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ科
147	SE02	—	井戸材 (側板)	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ科
148	SE02	—	井戸材 (側板)	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ科
149	SE02	170	井戸材 (側板)	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ科
150	SE02	171	井戸材 (側板)	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ科
151	包含層	266	漆器 (漆碗)	トチノキ	<i>Alexulus turbinatus</i> Blume トチノキ科



No. 0149 ヒノキ 木口 100 ×



柁目 400 ×



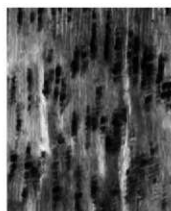
板目 100 ×



No. 0151 トチノキ 木口 50 ×



柁目 100 ×



板目 50 ×

Fig.129 木材顕微鏡写真

トチノキは北海道西南部から九州まで広く分布する日本特産の落葉高木で樹高 15 ～ 20 m、幹径 50 ～ 60 cm。材は柔らかく緻密であるが保存性は良くない。遺跡から出土する漆碗の材はトチノキをはじめクリ、ケヤキ、シオジ、ブナなどが一般的である。

参考文献

島地 謙・伊東隆夫 1982 『図説木材組織』 地球社

西尾太加二 2007 『静岡県の遺跡から出土する建築材の樹種構成』 『井通遺跡』 静岡県埋蔵文化財調査研究所

4 松東遺跡における銅鐸破片出土の意義

(1) はじめに

浜松市東区にある松東遺跡の3次調査において、銅鐸の鈕の破片が出土した。同遺跡からは過去の調査（2次調査）において銅鐸飾耳の破片（浜文協 1990）が出土しているが、周辺には、銅鐸形土製品を出土した森西遺跡（浜文振 2005）や、木船銅鐸出土地（梅原 1927）などが点在し、「永田遺跡群」⁽¹⁾として包括しうる銅鐸関連遺物の集中域を形成している（Fig. 130）。本遺跡が所在する西遠江は突線鈕2式（佐原 1960、難波 1986）⁽²⁾以降の「見る銅鐸」（田中 1970）が集中する地域としても著名であるが、永田遺跡群の様相は、今後の銅鐸研究において欠かせない重要な情報をはらんでいる。本稿では、近年、急速に進んでいる弥生集落の調査状況をふまえ、西遠江地域を中心にした銅鐸の出土傾向を整理し、松東遺跡（永田遺跡群）における銅鐸破片出土の意義について触れてみたい。

(2) 出土遺構と銅鐸破片の概要

土坑の詳細 銅鐸破片が出土した松東遺跡3次調査SK06は、長軸2.1m、短軸1.2mほどの、比較的大型の土坑である（Fig. 26）。検出面からの深さは0.4mほどであるが、銅鐸破片が含まれ

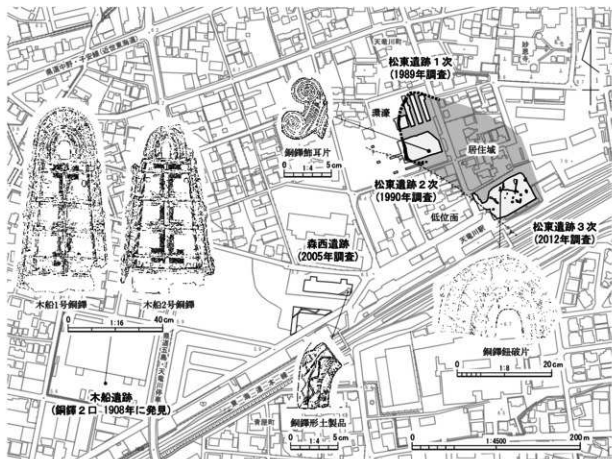


Fig.130 松東遺跡とその周辺における銅鐸関連遺物分布状況

るのは土坑埋土の上層（1層）部分である。1層は深さ0.15 mほどであり、土坑というよりも浅い窪地と呼ぶほうが実態に近い。銅鐸が出土した1層には炭化物と焼土の破片が多く含まれ、土坑を人為的に埋めた可能性が考えられる。また、銅鐸の出土状態が自然堆積と捉えるにはやや不自然な傾斜であること、破片が幅25cmの大型品で、完形の銅鐸を想起させるに足る状態であること、などから判断して、銅鐸の破片は何らかの意図をもって土坑内に埋められた可能性が高いと考えられる。

埋没の時期 銅鐸が出土したSK06からは弥生土器が出土している。このうち、銅鐸と同一層位の1層から出土した遺物（Fig. 30-77～83）には、小型高坏（82）や山中式系統の外反坏部高坏（81）が含まれる。これらの土器は比較的大きな破片なので、銅鐸破片の埋没時期を示すものと捉えてよいだろう。外反坏部高坏は、屈曲が弱いもので直径に対して坏部が深い点が注目できる。同様の形態は、山中様式期の最終段階の特徴を示している。SK06の1層からは、甕の口縁（79・80）も出土している。いずれも小破片で不明確ながら、口縁端部の刺突が観察できない。当地域において、甕の口縁の刺突が省略されるのは、欠山様式期に移行してからのことと考えられ（鈴木-2009、p126）、編年の位置づけを考える上で参考になるだろう。以上の特徴を示すSK06の1層出土遺物は、西遼江の山中Ⅲ式新相期（鈴木-2009）に中心があるとみられ、时期的には欠山Ⅰ式期頃まで下降する可能性を残している。この時期は、尾張の弥生土器編年（赤塚2002）では山中Ⅱ式新相期に、大和の弥生土器編年（藤田・豆谷2003）では、大和Ⅵ・2～3期に接点があるといえる。

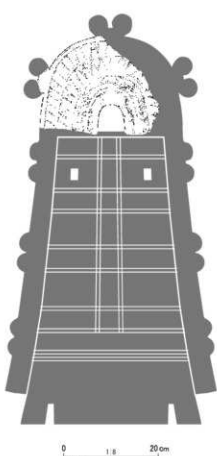


Fig.131 松東遺跡出土銅鐸想定復元図

銅鐸の型式と時期 出土した銅鐸は鈕の破片で、幅25.2cm、高さ（補正值）は20.6cm、重さ1,178 gである。双頭渦文飾耳を欠損しているが、鈕の大部分が遺存しているといえる。突線構成は両面ともに、外側から菱環を挟んで2・2・3-2・1である。菱環外界線は3条であるが、外周突線は2条であることから、近畿式銅鐸の突線鈕2式（難波1986）と判断できる。鈕幅は復元値で約30cm、鈕高は現状で20.6cm（歪みの補正值）が遺存しており、鈕脚壁分（0.6cm程度）を加えると、推定の鈕高は21.2cm程度とみられる。鈕高／鈕幅の比率は、 $21.2 / 30 = 0.7066$ （以下0.7とする）である。外縁第1・2模様帯の位置から舞長径の復元値を求めると、22.5cmほどとみられる。舞長径の大きさから突線鈕2式の事例を比例的にあてはめると、本例の全高は80cmを超える可能性がある⁽³⁾。この想定が正しいとすれば、本例は本来、突線鈕2式の中でも例がない大型品であったといえるだろう。

本例における鈕の形状は、鈕の高幅比（0.7）から判断すると兜形と小判形の間形態といえるが、舞長径が鈕高より大きいことから、兜形に含めておく方が妥当との意見もある⁽⁴⁾。

また、本例は、菱環が鈕脚壁近くにおいても舞に対して垂直ではなく、左右に開いていることも留意される。鈕孔の形態についても高さと同幅がほぼ同一（5.6cm）で、縦長化していない。菱環外界線が3条である点や、全高が80cmを超える大型品である点などが特異であるが、鈕の形態の特徴から判断すると、必ずしも突線鈕2式の中でも最新の段階に位置づける必要はないだろう。

遺存状態の特徴 本例は、第2横線帯の付近から大きく一方に折れ曲がっている。埋没後の土圧などで現状のように曲がるとは考えにくい。出土状態からも、上位から特別な圧力がかかっている様相はうかがえない。本例は鈕破片の状態に破砕された段階で、既に大きく折れ曲がっていたものと判断できる。近畿式銅鐸の青銅は錫の含有量が2～5%と低く展延性が高いため、小片に破砕することが難しい。このため、近畿式銅鐸の破砕に際しては高熱を加えることが想定されているが（難波2005・2007）、本例に見る変形状態は、銅鐸を破砕するにあつて鈕に変形をもたらすような大きな衝撃や圧力に加えられたことを示すものとして注目できるだろう。

（3）銅鐸破片の諸例

遠江における銅鐸破片出土例 遠江における銅鐸破片としては、松東遺跡の2例（以下、2次調査出土例を1号破片、3次調査出土例を2号破片とする）のほかに、浜松市梶子遺跡例、袋井市掛ノ上遺跡例を加え、合計4点が知られている。このほか、出土状態は明確でないが、「浜松南海岸」出土と伝えられる破片が2点ある⁽¹⁵⁾。これらの破片資料は、いずれも突線鈕式期の近畿式銅鐸で、共伴する遺物から埋没の時期がうかがえるものを含む点で重要である。銅鐸破片は発掘調査の多寡によって出土量が左右されるとみられるが、遠江は東海地方においても銅鐸破片の出土例が集中する地域といえる。

松東遺跡1号破片は、突線鈕3Ⅰa～3Ⅱa式に位置付けられる双頭渦文飾耳の破片で、2次調査で確認された不定形土坑（SX08）から出土した。この土坑は鎌倉時代の遺構と捉えられるが、比

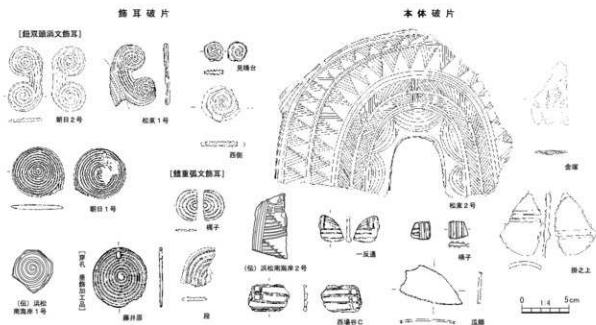


Fig.132 東海地方における銅鐸破片

Tab.12 突線鈕式銅鐸の破片資料

遺跡名・資料名	出土地	出土年	型 式	部 位	寸 法	備 考
西分堀井	高知県高知市	2001-02	扁平鈕式新へ突線鈕2式	鈕	3.8×3.0	青銅破片共伴
青木	鳥取県出雲市	2003	3 I a式の可能性がある	双頭渦文飾耳	6.1	
青谷上寺地1号	鳥取県鳥取市	1998	4式～5 I 式	身	5.2×3.9	
青谷上寺地2号	鳥取県鳥取市	1998	4式～5 I 式	身	6.8×2.5	貨泉出土遺跡
青谷上寺地3号	鳥取県鳥取市	1999	4式～5 I 式	身	3.7×4.4	
玉野市沖海底	岡山県玉野市	1988	3 I b～3 II 式の可能性がある	裾部	14.2	
高瀬	岡山県岡山市	1989	2式もしくは3式	身	4.0×2.9	貨泉出土遺跡
女代神社南	兵庫県豊岡市	1991	2式	鈕	15.0	
穴尾	兵庫県美郷市	1980	4式～5式	鈕	18.4×9.6	
大井川第6地点	兵庫県姫路市	1999	3式の可能性がある	鍔か鈕脚壁	6.0	
利倉	大阪府豊中市	1970	2式～3 I a式	鍔脚耳	2.1×1.9	
利倉南	大阪府豊中市	1996	2式～3 I 式	鈕	3.9×3.8	
亀井	大阪府八尾市	1981	4式～5 I 式	鍔下縁	5.0×3.6	
池上曾根1号	大阪府和泉市	1970-71	4式～5式	身	4.9×3.5	
池上曾根2号	大阪府和泉市	1974	2式～3式	身	4.7×3.8	
堀内1号	奈良県桜井市	1972	3 I b～5 II 式	双頭渦文飾耳	4.2	
堀内2号	奈良県桜井市	2010	突線鈕式か	鈕		
堀内1号	奈良県桜井市	2007	3～5式	身	3.2×2.7	
堀内2号	奈良県桜井市	2007	3～5式	身	2.0×1.4	鈴造関連遺物共伴
堀内3号	奈良県桜井市	2007	3～5式	身	1.9×1.3	
大堀1号	奈良県桜井市	2008	2式～4式	身	5.9×4.6	
大堀2号	奈良県桜井市	2009	2式～3式	身(舞)	8.0×5.5	鈴造関連遺物共伴
下長	徳島県守山市	1990	2式か3 I a式の可能性がある	双頭渦文飾耳	6.4×3.5	
高柳・下安田1号	福井県坂井市	2004	3 II b～5 II 式	鈕	3.7×2.3	銅鐸片A
高柳・下安田2号	福井県坂井市	2004	突線鈕式か	身	3.7×3.1	銅鐸片B
高柳・下安田3号	福井県坂井市	2004	突線鈕式か	身	1.8×0.8	銅鐸片C
荒尾南	岐阜県大垣市	2006	3 I b～5式	双頭渦文飾耳	5.0	
(伝)千歳	三重県伊賀市		3 II a～5 II 式	双頭渦文飾耳	6.6×6.2	
西場谷C	三重県伊賀市	1989	4式の可能性がある	鍔下縁	4.2×2.7	
一反崎	三重県鈴鹿市	1989	3 I a～5 I 式	鍔下縁	2.6×2.3	
金塚	三重県四日市市	1998	扁平鈕式新へ突線鈕2式	鈕	6.8×4.2	
橘子	三重県伊勢市	2003	3式～5式	鈕	1.8×1.6	種集資料
朝日1号	愛知県清洲市	1975	3 II a～5 II 式	双頭渦文飾耳	5.4×5.2	山中式共伴
朝日2号	愛知県清洲市	1980	3 I a～3 II a式	双頭渦文飾耳	6.9×3.5	
見晴台	愛知県名古屋	1999	2式の可能性がある	双頭渦文飾耳	2.0×2.0	
西園	愛知県豊橋市	2002	3 I b～3 II 式の可能性がある	双頭渦文飾耳	3.4×3.4	山中式共伴
瓜都	愛知県豊橋市	1947～49	型式不明確 近畿式か	裾部	7.0×3.3	採集資料
梶子	静岡県浜松市	1983	3 I b～3 II 式	鍔脚耳	3.2×2.1	山中式共伴
松東1号	静岡県浜松市	1990	3 I a～3 II a式	双頭渦文飾耳	6.6×4.7	
松東2号	静岡県浜松市	2012	2式	鈕	25.0×20.6	山中式共伴
(伝)浜松南海岸1号	静岡県浜松市	—	3 I b～3 II 式	双頭渦文飾耳	4.2×4.2	
(伝)浜松南海岸2号	静岡県浜松市	—	3式の可能性がある	鍔	6.7×3.6	
坂之上	静岡県浜松市	2001	2式か3式古段階の可能性がある	身	6.3×3.3	
藤井原	静岡県沼津市	1976	3 II a～5 II 式	双頭渦文飾耳	6.0×5.7	穿孔、垂飾に転用
渡波	静岡県伊豆の国市	1988	4式もしくは5式	鍔脚耳	4.0×3.2	穿孔、垂飾に転用
(伝)宮城	長野県松本市	—	2式か3式古段階の可能性がある	鈕	8.9×5.0	3連式・採集資料

難波2005の表3をもとに、新旧例などを加えて作成。1片ごとに出土した事例(難波A型型、難波2005)のみを例示。
扁平鈕式以前に遡る可能性がある事例を含む。寸法:長辺×短辺の値、不明確なものは長辺値のみを記載。

較的多くの弥生土器片が含まれている。厳密な意味での共伴遺物とはいえないが、近隣する遺構からの出土遺物は山中Ⅲ式期から欠山Ⅱ式頃までにおさまることから、銅鐸破片の埋没時期もおおよそこの時代幅の中で捉えることができるだろう。松東遺跡2号破片は、先述のとおり突線鈕2式の鈕の大型破片で、山中Ⅲ式新相期を中心とする遺物との共伴関係が確認できた。梶子遺跡例は鍔飾耳の破片で、7次調査で確認した土坑(A4区土坑2)から出土した。銅鐸片は突線鈕3 I b～3 II 式に相当し、共伴遺物の時期は山中Ⅱ～Ⅲ式期と判断できる。掛之上遺跡例は、突線鈕2～3式の身の破片であり、6次調査で確認された小穴から出土した。共伴遺物は小片で細かな時期を示すことが難しいが、弥生時代後期末の廃棄と想定されている。これらの事例が示すとおり、遠江においては、突線鈕2～3式期の近畿式銅鐸破片が集中的に出土しており、その埋没時期は山中Ⅱ～Ⅲ式期頃を中心にあり、と整理できる。

銅鐸破片の分布と時期 突線鈕式段階の銅鐸破片の出土例は近年増加傾向にあり、東海地方にお

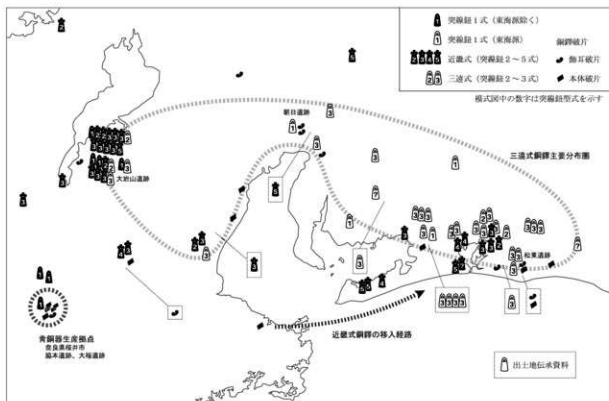


Fig.133 突線鈕式銅鐸と銅鐸破片の分布

いても20例ほどが確認できる(Tab. 12)。銅鐸破片については、進藤武(進藤 1999)や福永伸哉(福永 2001)、難波洋三(難波 2005)が検討を進めている。銅鐸破片の類型化をふまえ詳細な検討を加えた難波によると、破砕された銅鐸の事例は近畿式銅鐸が圧倒的に多く、1片ごとに碎片化して出土するA類型と多くの破片がまとまって見つかるB類型の2種があることを指摘している。ただし、難波も触れているとおり、B類型については正式な発掘調査を経たものが知られておらず、詳細を検討すると出土時に破砕されたものや後世に細片化したものを再埋納した可能性を考慮すべき事例が多い⁽⁶⁾。東海地方においてもB類型については確実な事例を検討の俎上にあげることが難しいため、本稿においても、その評価を保留しておきたい。以下、難波のA類型に限定して議論を進める。東海地方における銅鐸破片についても、近畿式銅鐸が占める割合が極めて大きい⁽⁷⁾。今後、三遠式銅鐸の破片の出土例が確認される可能性はあるが、破片で出土する突線鈕式銅鐸の圧倒的多数が近畿式である傾向は変わらないとみてよいだろう。

東海地方における銅鐸破片の埋没時期には、二つの傾向を認めうる。一つは遠江の事例で整理したように、山中式期を中心とした弥生時代後期に埋没時期が求められるものである。遠江での事例のほかに愛知県朝日遺跡1号破片(突線鈕3Ⅱa～5Ⅱ式)や、西側遺跡例(3Ⅰb～3Ⅱ式)が該当しよう。いっぽう、確実に時代が降り、古墳時代前期まで伝世している事例がある。静岡県藤井原遺跡例は突線鈕3Ⅱa～5Ⅱ式の双頭渦文飾耳の破片で、古墳時代前期の堅穴建物跡から出土している。静岡県段遺跡例は突線鈕4～5式の鰭飾耳の破片であり、相伴土器から古墳時代前期に埋没したと考えられよう。藤井原遺跡や段遺跡は、弥生時代の銅鐸分布圏外に相当する。銅鐸の

Tab.13 銅鐸型式別出土数

出土地	扁平鈕式		突線鈕式							破片		
	古段階	新段階	1式	2式	3式	4式	5式	6式	7式	扁平鈕式以前	突線鈕式	三連式
			1式東海派	近畿式	三連1式	近畿式	三連2式	三連3式	三連4式			
伊子			2	4						1		
廣政			1							15		
土佐			2	12						1		
阿波			3	1								
伯耆			2	1	1							
石見			3	9						1	1	
出雲			3	1						2	3	
伯耆										1		
因幡												
備前												
備後												
備中												
備前			5	1	1							
播磨			1	3								
播磨			1	15								
河内			2	7						1	1	
河内			1	3						1	1	
紀伊			3	10						1		
大和			2	2						1		
山城												
丹波												
丹波												
丹波												
近江			1	1	4		3	2	1	1		4
伊賀												
伊勢				2								
美濃										1		
尾張												
三河												
遠江												
駿河												
伊豆												
信濃												

(難波2007)地名表をもとに新出資料を追加して作成。括弧内の数値は不明瞭な資料

が、その大きさが東海地方から出土する飾耳破片や本体破片と比べて格段に大きく⁽⁸⁾、銅鐸そのものを強く連想させるものである。鈕全体の形状をうかがえる銅鐸破片として、愛媛県上分西遺跡例(四国中央市教委2010)があげられる。この事例は扁平鈕式段階のものであり本稿で扱う時期より遡るものであるが、鈕のほぼ全体を残す点で松東遺跡2号破片と近似した残存状況を示す。松東遺跡2号破片と上分西遺跡例はともに、人為的に小穴や土坑に埋納したとみられる点も共通している。完形銅鐸との関連が意識されていた可能性を想起させる出土状態といえるだろう。

破片化の経緯 銅鐸が破片化することについては完形銅鐸の一部を破砕した可能性を考慮すべきであるが、最も欠損する可能性が高い飾耳破片についても、完形で出土した突線鈕式銅鐸に飾耳を意識的に取り除いた事例は一般的に認められないことから、銅鐸全体を破砕した際に生じたものと捉えられている(難波2005・2007)。このほか、発掘調査で本来の埋納状態が確認できる銅鐸には、鈕を取り除いたり、鰭を打ち欠いたりするものが知られないので、本体破片においても銅鐸全体を破砕した際に破片の状態になったものであると考えられる。銅鐸破片は、完形の銅鐸を破砕して生じたものが大半であるといえるだろう⁽⁹⁾。

破片の取り扱いも穿孔して装飾品として用いるなど、変容が著しい点で、近似した来歴がうかがえる(難波2005・2007)。

ここでは、天竜川以西(東海西部地域)の銅鐸分布圏においては、突線鈕2～3式を中心とする破片が山中式期にもたらされていること、天竜川以東の東海東部地域では、突線鈕式でもやや新しい時期の破片が古墳時代前期まで伝世していることを確認しておきたい。

破片の類型化 突線鈕式の銅鐸破片は、東海地域以外にも近畿、山陰、瀬戸内地域といった銅鐸分布圏から出土例が確認できる(Tab.13)。また本稿では深く立ち入らないが、扁平鈕式以前の古い時期の銅鐸破片も少なからず認められることは破砕行為と銅鐸破片活用の起源を考える上で参考になろう。

破片化された銅鐸の部位は多様であるが、鈕の双頭渦文や鰭の重勾文などの「飾耳破片」と、飾耳以外の鈕や鰭、身などの「本体破片」とを分けて捉えておきたい。松東遺跡2号破片は本体破片である

銅鐸破片の再利用 双頭渦文など単体でも目を引く飾耳破片と、身や鱗、鈕など装飾的要素を見出しにくい本体破片は、取り扱いや用途に違いがあった可能性がある。東海地方では、飾耳破片の出土例が多いが、当地域では、飾耳破片が装飾品や呪術的意義を見出す金属製品として識別されていた可能性をうかがわせる。藤井原遺跡例や段遺跡例など、垂飾品として用いる事例などは、飾耳破片が珍重すべき価値があったことを示すものといえるだろう。

いっぽう、最大長 10cm 以下の小型の本体破片は、奈良県の脇本遺跡や大福遺跡など、青銅器生産にかかわる遺跡⁽¹⁰⁾からの出土例が示唆しているように、青銅素材としての用途が想定できる(難波 2012)。銅鐸の本体破片が青銅素材として用いられている可能性を考慮すると、飾耳破片についても本来は青銅素材として流通する中で、その形態的特徴が目ざされ、鋳潰されずに残った経緯を想定することも許されよう。松東遺跡 2 号破片のような大型の本体破片も飾耳破片と近似した来歴が想定しうる。本例にみられる折れ曲がった形状や飾耳の欠失は、破砕行為に起因するものと捉えられ、鈕そのものを丁寧に摘出したものとは考えられない。本例においても一義的には青銅素材として再利用すべく、破砕された可能性をうかがわせる。こうした事例が土坑に埋められた経緯としては、消費地において銅鐸そのものを強く連想させる残存状態が注視され、たんなる青銅素材として扱われなかった可能性が指摘できる。銅鐸破片の取り扱いについては、青銅素材として用いられるものの他に、各地で独自の選択肢が働くことがあったと解釈できよう⁽¹¹⁾。

(4) 銅鐸破砕の実態

銅鐸破砕の論点 突線鈕式段階の銅鐸破片が近畿式にほぼ限られる理由についてふれておこう。この議論を進めるにあたっては、破砕時期と破砕地という二つの論点を明確にする必要がある。前者については完形埋納例や銅鐸破片に共伴する土器から、後者については銅鐸の型式変遷と分布状況から検討を加えておきたい。

銅鐸破砕の時期 銅鐸破砕の時期をめぐっては、銅鐸祭祀の終焉後に集中的に銅鐸が破砕されたと捉える考えと、銅鐸祭祀が継続している段階で完全埋納と破砕という二種の処理方法が並存したとみる考えの二者がある。前者を一括破砕説、後者を継続破砕説と呼んでおきたい。

銅鐸の最終的な埋納時期については、突線鈕 5 I 式の銅鐸が出土した徳島県矢野遺跡(徳島県埋文 1993)の共伴土器から、弥生時代後期後葉からその直後の段階に求められるので(難波 2005)、銅鐸祭祀の終焉は弥生時代後期末から終末期(庄内式期)と想定できる。弥生土器の並行関係については詳細な吟味を加える必要があるが、庄内式期に破砕された銅鐸破片が各地にもたらされたとみると、東海地方における銅鐸破片の埋没時期は欠山式期に中心がある方が整合的である。しかしながら、東海西部地域における突線鈕 2～3 式の銅鐸破片の埋没時期は山中式新相期に接点があり、想定される銅鐸祭祀の終焉期よりも若干遡る。東海西部地域における銅鐸破片の事例は、庄内式期を遡る段階に銅鐸が破砕されていた可能性を示唆している⁽¹²⁾。

近畿式と三遠式 近畿式銅鐸と三遠式銅鐸の差異を検討する上で、突線鈕式段階の完形埋納銅鐸の分布状況や埋納状況を瞥見しておきたい。近畿式銅鐸と三遠式銅鐸の共存は、遠江において最も顕著である。浜松市北区三ヶ日町や北区細江町では、近畿式銅鐸と三遠式銅鐸が近隣地から出土し

Tab.14 静岡県出土銅鐸一覧

資料名	出土地	出土年	型式	銅鐸群	高さ	重量	所蔵	状態
長谷	掛川市長谷	1772	突縁鈕2式～3式	三連式	2尺余	16斤10両	—	所在不明
三方原	浜松市北部	1787	突縁鈕3式	三連3式	1尺9寸5分	1貫700両	—	所在不明
白須賀1号	湖西市白須賀	1801	突縁鈕5式	近畿式	112.3	—	東蔵寺	舞から上のみ残存
白須賀2号	湖西市白須賀	1801	—	近畿式	3尺9寸	—	—	踏潰し
荒神山1号	浜松市北区三ヶ日町	1838	突縁鈕3式	三連3式	74.2	10.57	東京国立博物館	—
荒神山2号	浜松市北区三ヶ日町	1838	突縁鈕3式	三連2式	57.6	—	奈良国立博物館	—
771村1号	浜松市南区芳川町	1868	突縁鈕3式	三連3式	64.6	8.325	東京国立博物館	—
771村2号	浜松市南区芳川町	1868	型式不明	—	—	—	—	所在不明
船渡1号	浜松市北区船渡町	1880	突縁鈕3式	三連2式	56.1	—	東京大学総合研究博物館	—
船渡2号	浜松市北区船渡町	1880	突縁鈕2式	三連1式	64.8	—	田代・ラン博物館蔵	所在不明
敷地1号	磐田市敷地	1890	突縁鈕3式	三連3式	68.5	9.31	東京国立博物館	—
敷地2号	磐田市敷地	1890	突縁鈕3式	三連2式	62.7	—	読馬考古資料館	—
木船1号	浜松市東区和田町	1908	突縁鈕3式	三連3式	81.2	12.532	東京国立博物館	—
木船2号	浜松市東区和田町	1908	突縁鈕3式	三連3式	71.5	11.293	東京国立博物館	—
悪ヶ谷	浜松市北区船渡町	1912	突縁鈕3式	三連3式	62.9	7.92	東京国立博物館	—
小野	浜松市北区船渡町	1933	突縁鈕3式	三連2式	66.6	3.147	東京国立博物館	—
山田	浜松市北区三ヶ日町	1950	突縁鈕4式	近畿式A系列	96.7	15.42	東京国立博物館	分寸出土
猪久保	浜松市北区三ヶ日町	1965	突縁鈕4式	近畿式B系列	96.0	—	浜松市	—
七曲り1号	浜松市北区船渡町	1966	突縁鈕3 I b 式	近畿式A系列	69.6	—	浜松市	—
七曲り2号	浜松市北区船渡町	1966	突縁鈕3式	三連2式	65.0	—	浜松市	—
不動平	浜松市北区船渡町	1967	突縁鈕3 I b 式	近畿式A系列	72.3	—	浜松市	—
藤井原	沼津市下香貫	1976	突縁鈕3～5式	破片	—	—	沼津市教育委員会	双頭通文飾耳片
穴子	浜松市中区南伊場町	1983	突縁鈕3 I b～3 B 式	近畿式	破片	0.008	浜松市	緒飾耳破片
穴ノ谷	浜松市北区船渡町	1987	突縁鈕3 II a 式	近畿式C系列	59.0	5.35	浜松市	—
前原	浜松市市南区都田一丁目	1987	突縁鈕2式	三連1式	67.3	—	浜松市	—
伊豆の国市大仁	伊豆の国市大仁	1988	突縁鈕4～5式	近畿式	破片	—	伊豆の国市教育委員会	双頭通文飾耳片
磯部才助邸	浜松市北区船渡町	1989	突縁鈕2式	近畿式C系列	72.7	—	浜松市	—
松東1号	浜松市東区天龍川町	1990	突縁鈕3 I a～3 B a 式	近畿式	破片	0.039	浜松市	双頭通文飾耳片
敷地3号	磐田市敷地	2000	突縁鈕3式	三連3式	77.1	12.12	静岡県教育委員会	西の谷遺跡
敷地2号	袋井市高尾	2001	突縁鈕2～3式	近畿式	破片	—	袋井市教育委員会	身振
松東2号	浜松市東区天龍川町	2012	突縁鈕2式	近畿式	破片	1.178	浜松市	緒飾片

出土地伝承資料

(伝) 浜松南海岸1号	浜松市南方面	—	突縁鈕3 I b～3 B 式	近畿式	破片	—	東京大学総合研究博物館
(伝) 浜松南海岸2号	浜松市南方面	—	突縁鈕3 I b～3 B 式	近畿式	破片	—	東京大学総合研究博物館
(伝) 遠江	浜松市南方面	—	突縁鈕3式	三連4式中機型	78.2	—	芋々博物館
(伝) 釜山寺	伊豆市湯岡	—	突縁鈕5 B 式	近畿式C系列	118.2	—	読馬考古資料館

ており、埋納箇所に目立った違いはない。埋納状態が判明する事例をみても、両者ともに、鐸を上にした一般的な埋納手法がみられる(静文研 2010)。内面突帯の形状から三連式銅鐸には鳴らされたものが含まれる可能性が指摘されているが(難波 2005)、最終的な取り扱いについては、近畿式銅鐸も三連式銅鐸も目立った差異はみられないといえるだろう。

遠江における完形銅鐸の時期別の推移をみると、近畿式と三連式の流入開始時期や盛行時期はほぼ同段階であり、三連式銅鐸の埋納が近畿式銅鐸の埋納よりも早く終了し、近畿式銅鐸のみが残存するような状況は想定しにくい。また、破片として知られる銅鐸の製作段階も三連式銅鐸が製作されていた時期に重なる突縁鈕2～3式のものが多く、その埋没時期も三連式銅鐸が使用されたときとみられる山中式新相期に接点求められることも無視できない。当地域では近畿式銅鐸だけが選択的に破壊されていたと捉えることは難しいといえるだろう。

銅鐸破砕地 銅鐸を破砕する意味は必ずしも明らかではない。一括破砕説のように銅鐸祭祀の終焉に伴い、従前の宗教的な象徴物を否定するように一斉に銅鐸を破砕したという捉え方(福永 1998)は魅力的である。庄内式期に廃棄された銅鐸破片の多さを考慮すると、弥生時代終末期において銅鐸の多くが破砕された可能性は充分考えうる。いっぽう、東海西部地域における銅鐸破片の埋没時期を勘案すると、継続破砕説も完全には否定できない。現状では、銅鐸祭祀の終焉に伴い多

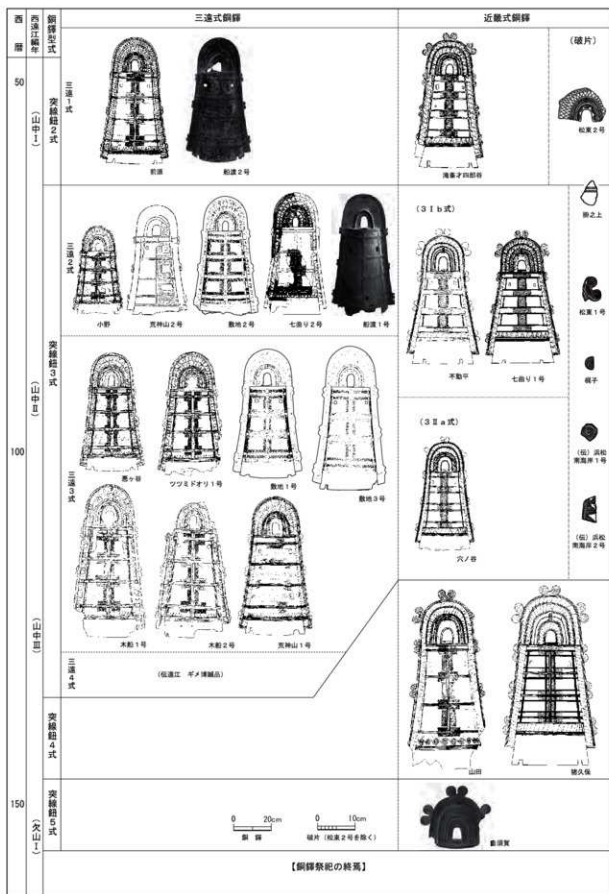


Fig.134 遠江における銅鐸の変遷

くの銅鐸が破砕された可能性を認めつつ、一部の銅鐸は銅鐸祭祀終焉よりも前に破壊されることがあったと捉えておくのがよいだろう。この考えに立つなら、破砕される銅鐸が近畿式にほぼ限定されていることと、銅鐸破砕時期の問題は切り離して検討すべきといえる。

突線鈕式段階の銅鐸破片が近畿式に偏ることについては、三遠式銅鐸が存在しない地域で銅鐸の破砕がなされていたと捉えれば理解しやすい。すなわち、近畿式銅鐸の中心的分布域である近畿地方中核部で銅鐸の破砕が多く行われ、三遠式銅鐸が分布する東海西部地域では銅鐸破砕が積極的になされなかったとみるのが最も合理的な解釈といえるだろう⁽¹³⁾。

奈良県下では、確実に完形で出土する銅鐸は突線鈕1式が最新式であり、突線鈕2式期以後の出土例は破片に限定される。奈良県をはじめとした畿内地方中核部においては共同体祭祀における銅鐸の役割が早い段階で変質していたと考えられており(佐原 1964、川西 1975)、破砕の頻度も相対的に高かった可能性が考えられる。銅鐸の破砕がすべて奈良県下で行われたとはいえないが、弥生時代後期を通じて銅鐸祭祀を頻繁に行っていた東海西部地域と比べて、銅鐸の取り扱いについて差異が生じていたとみても矛盾ない。銅鐸を小片化させるには特殊な熱処理が必要なことも、青銅器の処理方法に熟知しうる地域に限定して破砕処理が行われた可能性を示唆している。

(5) 銅鐸破片流入の意義

銅鐸のライフサイクル ここまでの議論をまとめておこう。銅鐸破片に青銅の原材料としての役割を認め、青銅素材として流通していた可能性を示した。また、突線鈕式段階の銅鐸破片が近畿式にほぼ限定できることの解釈として、銅鐸の破砕は、祭祀様式の変容が先行し、かつ青銅器生産の技術力が高かった近畿地方で多く行われたと捉えた。遠江には、近畿式・三遠式双方の完形銅鐸と、

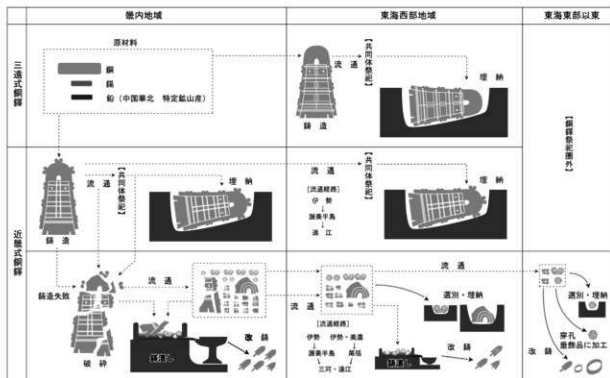


Fig.135 突線鈕式銅鐸のライフサイクル

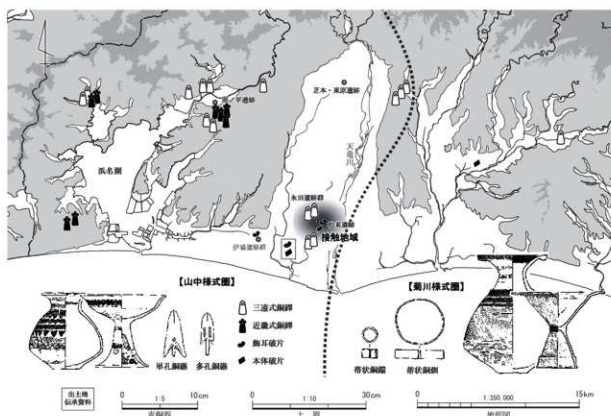


Fig.136 遠江における銅鐸の分布と地域圏

破片の状態の近畿式銅鐸が西方から流入したと考えられるだろう。近畿式・三連式共に、祭器として用いた完形銅鐸は、同じ祭式に則って埋納されている。いっぽう銅鐸破片については、多くは銹潰されて形を変えたとみられるが、飾耳破片や松東2号破片のような本体部材破片など、銹潰す対象から外れたものもあった。こうした銅鐸破片の取り扱いにかかわる選択肢は消費地における価値観に依拠していたと考えられるだろう。銅鐸破片の取り扱いについては、銅鐸の生産地や祭祀圏の中心から離れるに従い、特殊な取り扱いの程度が増す傾向があるといえる。銅鐸分布圏の外側において飾耳破片が伝世し、穿孔して装飾品として用いるなどの変容例が生じるのも、祭器にかかわる規制力の弱い地域的特性を示すものと評価できるだろう（難波 2005）。

文化圏の差異と青銅器 松東遺跡が所在する天竜川西側の沖積平野には、弥生時代後期の遺跡が比較的高密度に分布する。当地は伊勢湾沿岸地域を中心とする山中・欠山様式圏の東端にあたり、銅鐸分布域や多孔銅鐸・早孔銅鐸分布域（鈴木敏 1997）の東縁地域と重なる。いっぽう、天竜川を境界として東の地域（東遠江地域）には山中・欠山様式とは形態や模様が大きく異なる菊川様式圏が広がっている。天竜川以東の地域では銅鐸の出土例は激減し、かわりに帯状円環形銅釧・帯状指輪形銅鐸（帯状銅釧・銅鐸）といった独特の青銅器が分布している。帯状銅釧・銅鐸は、関東地方にも広く分布しており（中村 2001）、青銅器文化という点においても、東遠江地域は東日本文化圏に含まれるといってよい。松東遺跡は、大型青銅器を用いる西日本文化圏の東縁に位置し、東日本文化圏と隣り合わせの接触領域に位置するといえるだろう。

銅鐸や帯状銅釧・銅鐸などの小型の青銅器は、鉛同位体分析の結果からも極めて画一的な同位体

比（a 領域）をもつ中国華北産の鉛を含んでいることが明らかにされている（平尾 2003）。東日本地域では、小型青銅器の多くが弥生時代後期前葉に出現し、後期後葉から終末期にかけてその数を増していく状況が知られている。小型青銅器の素材としては、個別の金属素材が用いられた可能性もあるが、本稿で取上げたような銅鐸破片が利用された蓋然性も高いとみてよいだろう。

松東遺跡を含む永田遺跡群は広く東日本地域に青銅素材を提供する交易の窓口としても機能していた可能性がある。冒頭で述べたように、永田遺跡群に銅鐸にかかわる遺物が集中することについても、銅鐸文化圏の境界領域としての性格に加え（春成 1982）、日本列島の東西を結ぶ流通経路の要衝を占める地域的特性に起因するものと捉えておきたい。

（5）結 語

松東遺跡から出土した銅鐸破片の検討を端緒に、弥生時代後期における地域圏と青銅器の生産・流通の特性について触れてきた。松東遺跡は永田遺跡群の中でも最も東に位置する集落である。その先には天竜川を挟んで、菊川様式圏が広がっている。松東遺跡は、まさに山中・欠山様式圏（＝銅鐸文化圏）の辺境最前線に立地する集落といえるだろう。こうした文化の接触領域に相当する立地環境に銅鐸関連遺物が集中することは重要な意味をもつ。本稿で指摘したように、青銅素材としての銅鐸破片の役割を重視するなら、松東遺跡を含む永田遺跡群に東西文化圏を繋ぐ結節点としての特質も認めてよい。当地における地域間関係を示す考古学的情報を解きほぐし（鈴木 2000）、東西交流の実態がさらに明らかにされることを期待したい。

謝 辞

本稿を作成する上で、難波洋三氏からは銅鐸にかかわる数多くの教示と情報を得た。本稿で用いた銅鐸の型式分類だけでなく、松東遺跡 2 号破片の編年の位置や全体像の復元についても、全面的に難波氏の見解に従っている。また、堀水伸哉氏からは、銅鐸破片の解釈にかかわる重要な示唆を得た。末筆ながら、両者のお名前を明記して、深く感謝の意を表したい。

註

- (1) 永田遺跡群とは、中心集落「永田」（浜松市東区和田町）に由来する遺跡群の広域名称である。本稿では、山の神遺跡や木船銅鐸出土地、森西遺跡、松東遺跡を含む弥生時代後期の遺跡群の名前として用いる。この遺跡群は、奈良時代の長田（長上）郡家園連遺跡でもあり、大瀬町村東遺跡、木船庭寺、宮竹野際遺跡、越前道跡など古代の遺跡も密集する（鈴木 2012）。
- (2) 本稿における銅鐸の型式分類と編年観は、難波洋三の業績（難波 1986, 2007）に依拠する。
- (3) 突線鈕 2 式に位置づけられている銅鐸の舞長径に対する身の高さの割合（身高／舞長径）は、2.1～2.9 の範囲にあり、平均はおおよそ 2.5 という値を示す。舞長径と身の高さの比率を復元的に適用すると、舞長径 22.5cm と推定できる松東 2 号銅鐸の身の推定高は、 $22.5 \times 2.5 = 56.25\text{cm}$ であり、これに推定される鈕の高さ（21.2cm）と双頭満文飾耳の高さ（2cm 程度）を加えると、本例の全高は 80cm を超える可能性がある。
- (4) 佐原 1960 では、鈕高／鈕幅がほぼ 2/3 以下を更形、佐原 1964 では、0.7 未満あるいは鈕高が舞長径より小さいものを更形としている。突線鈕 2 式の中でも最も新しい特徴をもつ（小判形の鈕をもつ）静岡県才四郎谷銅鐸は鈕の高幅比が 0.78、滋賀県大岩山第 1 地点出土ケルン東洋美術館蔵銅鐸は 0.74 であり、松東 2 号銅鐸はこれらほど鈕が縦長でない。
- (5) この資料は、本来、完形銅鐸だったものが出土後に破片化した可能性もあるが、本稿では参考資料として銅鐸破片の一例に加えておく。
- (6) 東海地方で近畿式の破片事例として挙げられている愛知県原市桃銅鐸は、出土時に破片化された可能性が高いことが指摘されている（浜松市博物館 2011, p53）。

- (7) 三連式銅鐸の破片としては、長野県松本市宮園例（本村遺跡例）が知られる程度である。この資料は採集品であり、明確な破片資料として扱うことは難しい。
- (8) 重量の比較においても、松東遺跡2号破片は1,178 gであることに對して、松東遺跡1号破片は39.1 g、梶子遺跡例は7.5 gとその格差は著しい。小型の銅鐸の重量は5 g前後であることを考えると、松東遺跡2号破片は銅鐸200個分以上の重量があるといえるだろう。
- (9) 唐古鍵遺跡から出土した銅鐸破片は、外縁付紐2式～扁平紐式新段階項に位置づけられる身の破片であるが、厚さが0.9cmと極端に厚く、鋳造に失敗したものである可能性が指摘されている。破片化された銅鐸の中に鋳造失敗品が含まれる可能性は充分に考慮してよいだろう。
- (10) 高知県西分増井遺跡や岡山県高塚遺跡なども青銅器生産関連遺跡から銅鐸破片が出土する事例に加えてもよいだろう。
- (11) 松東遺跡のような銅鐸分布圏の境界地域においては、破片といえども重要視され、土坑に埋められることがあったと捉えられる。こうした周縁地域における大型の銅鐸破片の埋納例として、先に触れた愛媛県上分西遺跡例が類似した状況を示す事例として注目できる。
- (12) この解釈は、庄内式期に多くの銅鐸が破砕された可能性を否定するものではない。一括破砕説と継続破砕説は二律背反するものでなく、両者は共に成り立ちうる。
- (13) 難波洋三は銅鐸破片が近畿式に偏ることの解釈として、①近畿式銅鐸はその祭祀の終焉に伴って壊されたが、三連式銅鐸はそれ以前にすでに埋納されていた、②三連式銅鐸と近畿式銅鐸の祭祀は同時期に終わったが、近畿式銅鐸とは異なり、三連式銅鐸は壊されなかった、③三連式銅鐸も壊されたが、破片が残されなかった、といった3案を提示した。本稿における解釈は、解釈案②と触れ合うものであるが、銅鐸祭祀終焉の同時代性については、大きな問題として取り上げない。

参考文献

- 赤塚次郎 2002 「濃尾平野における弥生時代後期の土器編年」『八王子遺跡 考察編』愛知県埋蔵文化財センター
- 梅原末治 1927 『銅鐸の研究』大岡山書店
- 川西宏幸 1975 「銅鐸の埋蔵と鍍の伝世」『考古学雑誌』第61巻第2号
- 佐原真 1960 「銅鐸の鋳造」『世界考古学体系』第2巻日本Ⅱ弥生時代 平凡社
- 佐原真 1964 「銅鐸」『日本原始美術』4 青銅器 講談社
- 四国中央市教育委員会 2010 『上分西遺跡第2次調査現地説明会資料』
- 静岡県 1992 『静岡県史』資料編3 考古三
- 進藤武 1995 「近畿式銅鐸と三連式銅鐸」『古代文化』第47巻 第10号
- 進藤武 1999 「銅鐸祭祀の終焉—多数埋納・破砕破棄—」『滋賀考古』第21号
- 鈴木一有 2000 「天竜川南部平野南部における土器様式」『山の神道跡5次』（財）浜松市文化振興財団
- 鈴木一有 2009 「鳥居松遺跡出土遺物にみる弥生時代後期の土器編年」『鳥居松遺跡5次 弥生時代編』（財）浜松市文化振興財団
- 鈴木一有 2012 「宮竹野原遺跡と長土郡家」『宮竹野原遺跡6次』（財）浜松市文化振興財団
- 鈴木敏則 1997 「東海地方の弥生銅鐸」『古文化論叢—伊達先生古稀記念論文集—』
- 田中琢 1970 「まつり」から「まつりごと」へ』『古代の日本』第5巻 近畿 角川書店
- 徳島県埋蔵文化財センター 1993 『矢野銅鐸』
- 中村勉 2001 「銅鐸と呼ばれた青銅器について—東日本の青銅器に関する一考察—」『貝塚』第56号
- 難波洋三 1996 「銅鐸」『弥生文化の研究』第6巻 雄山閣
- 難波洋三 2005 「銅鐸の埋納と破壊」『西側遺跡（1）』豊橋市教育委員会
- 難波洋三 2007 『難波分類に基づく銅鐸出土地名表の作成』平成15年度～18年度科学研究費補助金 基礎研究（C）研究成果報告書
- 難波洋三 2011 「扁平紐式以後の銅鐸」『大岩山銅鐸から見えてくるもの』滋賀県立安土城考古博物館
- 難波洋三 2012 「銅鐸を使う国々」『卑弥呼がいた時代』兵庫県立考古博物館
- 浜松市博物館 2011 『銅鐸から銅鏡へ』
- （財）浜松市文化協会 1990 『松東遺跡Ⅱ』
- （財）浜松市文化振興財団 2005 『森西遺跡』
- 春成秀爾 1982 「銅鐸の時代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集
- 平尾良光 2003 「青銅器の鉛同位体比—分析データをどう読むか—」『考古資料大観6』小学館
- 福永伸哉 1998 「銅鐸から銅鏡へ」『古代国家はこうして生まれた』角川書店
- 福永伸哉 2001 『弥生・古墳時代青銅器の使用痕研究』大阪大学大学院文学研究科

藤田三郎・豆谷和之 2003 「奈良県における土器編年」『奈良県の弥生土器』奈良県立橿原考古学研究所
向坂綱二 1993 「考古文物 伊勢経由遠江行」『遠江』第16号

銅鐸関連文献（静岡県・愛知県・三重県）

静岡県

- 三方原、長谷、白須賀、荒神山、アサド利、船渡、敷地1・2号、木船：梅原末治 1927 『銅鐸の研究』大岡山書店
 悪ヶ谷：大野延太郎 1912 「引佐郡中川村悪ヶ谷発見の銅鐸について」『人類学雑誌』第28巻第9号
 小野：船越勇三郎・山崎常磐 1933 「遠江新発見の銅鐸」『考古学雑誌』第23巻第4号
 山田：三木文雄 1955 「静岡県引佐郡分寸銅鐸」『日本考古学年報』3 日本考古学協会
 猪久保：平野和男・向坂綱二 1965 「静岡県引佐郡三ヶ日町猪久保出土の銅鐸について」『考古学雑誌』第51巻第1号
 七曲り1号：静岡県教育委員会 1969 『引佐郡細江町中川地区銅鐸分布調査報告』
 七曲り2号：芝田文雄 1982 「静岡県引佐郡細江町滝峯七曲り2号銅鐸」『考古学雑誌』第68巻第1号
 不動平：向坂綱二 1968 「静岡県引佐郡細江町中川不動平出土の銅鐸」『考古学集刊』4-2
 藤井原：沼津市教育委員会 1977 『藤井原遺跡第3次発掘調査概報』
 梶子：浜松市遺跡調査会 1983 『国鉄浜松工場内遺跡第Ⅶ次発掘調査概報』
 穴ノ谷：細江町教育委員会 1988 『障子ヶ谷・穴ノ谷遺跡発掘調査報告書』
 前原：(財)浜松市文化協会 1990 『郡田地区発掘調査報告書（下）』
 段：大仁町教育委員会 1994 『山崎・段遺跡発掘調査報告書』
 滝峯才四郎谷：細江町教育委員会 1991 『滝峯才四郎谷遺跡発掘調査報告書』
 松東1号：(財)浜松市文化協会 1990 『松東遺跡Ⅱ』
 敷地3号：(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010 『西の谷遺跡』
 掛之上：袋井市教育委員会 2002 『掛之上遺跡Ⅸ・Ⅹ』
 松東2号：浜松市教育委員会 2014 『松東遺跡3次』（本書）
 (伝)浜松南海岸：浜松市 2007 『浜松の銅鐸』
 (伝)遠江：静岡県 1992 『静岡県史』資料編3考古3
 (伝)益山寺：梅原末治 1927 『銅鐸の研究』大岡山書店

愛知県（銅鐸破片）

- 朝日：愛知県教育委員会 1982 『朝日遺跡』
 見晴台：名古屋見晴台考古資料館 1999 『みはらし』No.203
 西側：豊橋市教委 2005 『西側遺跡（1）』
 瓜郷：豊橋市教育委員会 2013 『史跡瓜郷遺跡保存管理計画書』

三重県（銅鐸破片）

- 西場谷C：上野市遺跡調査会 1994 『上野新都市開発整備区域埋蔵文化財発掘調査報告書 第3分冊』
 一反通：三重県 2005 『三重県史』資料編 考古1
 金塚：三重県埋蔵文化財センター 2002 『金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡 発掘調査報告』
 桶子：伊勢市 2013 『伊勢市史』第六巻 考古編
 (伝)千歳：梅原末治 1927 『銅鐸の研究』大岡山書店

図出典

- Fig.132 梶子・段：袋井市教委2002から引用、(伝)浜松南海岸：浜市博2011より写真トレース、上記以外は、各文献から引用
 Fig.134 船渡1号：浜市博2011（東京大学総合研究博物館掲載依頼済）、船渡2号：浜松市博物館蔵資料（絵葉書）、荒神山2号・梅原1927、白須賀：浜市博2011（東観音寺掲載依頼済）、敷地1～3号：文芸研2010、松東1号：浜文協1990、梶子・掛之上：袋井市教委2002から引用、(伝)浜松南海岸：浜市博2011より写真トレース、上記以外は、静岡県1992から引用
 Fig.136 単孔銅鐸（愛知県中山遺跡）、多孔銅鐸（静岡県柳野遺跡）：鈴木1997、帯状銅鐸、帯状銅鐸（静岡県登呂遺跡）、山中式土器（静岡県伊場遺跡）、菊川式土器（静岡県一色前田遺跡、鶴松遺跡）：静岡県1992から引用

5 松東遺跡と長上郡家

(1) はじめに

松東遺跡の西側には古代の遺跡が広く展開しており、永田遺跡群と総称されている。そこには古代寺院である木船廃寺跡の存在に加え、各遺跡で陶硯、木簡、墨書土器等の官衙遺跡に特徴的な遺物が確認されていることから、長田郡（はじめ長田郡、和銅2（709）年に長上・長下2郡に分割）の郡家及び関連施設の所在地と想定されている。今回の発掘調査では、松東遺跡において初めて古代の遺構・遺物を確認することができたため、長田（長上）郡家において調査地周辺がどのように位置づけられるのかを考えてみたい。なお、松東遺跡における盛行期は、長上・長下2郡分割以降であり、その後当地は長上郡に属したと考えられるため、本稿では長上郡と記述することとしたい。

(2) 西遠江における郡の範囲と郡家推定地

古代律令国家の成立により、地方には国・郡・里（郷）という行政単位が敷かれ、行政機関として国には国府、郡には郡家が置かれた。遠江国の国府は、奈良時代には御殿・二之宮遺跡、平安時代中期以降には見付端城遺跡（いずれも現磐田市域）に置かれたと考えられている。また、西遠江には、数智郡、長田郡（後に長上郡・長下郡に分割）、引佐郡、浜名郡、龜玉郡が置かれ、数智郡家は伊場遺跡群、引佐郡家は井通遺跡とその周辺の遺跡群、長田（のちに長上）郡家は永田遺跡群に想定されている。

数智郡家に想定される伊場遺跡群は、伊場大溝と呼ばれる自然流路跡沿いに複数の遺跡が分布しており、遺跡群の南側を古代東海道が通過すると推定されている。城山遺跡・伊場遺跡周辺を中心

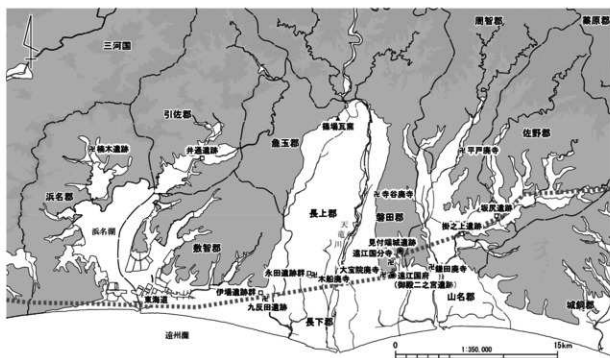


Fig.137 西遠江における郡と郡家の推定地

Tab.15 永田遺跡群における特殊遺物の出土状況

遺跡名	文字関係資料				祭祀関係資料				緑釉陶器	獣足	製塩土器	瓦	銅印	その他
	墨書土器	木簡	陶硯	その他	木製祭祀具	陶馬	土馬	その他						
木船廃寺跡												500以上		礎石
大蒲町村東Ⅰ遺跡		4			25							1?		木製備前兵
大蒲町村東Ⅱ遺跡						1	1	人形土製品 皮袋形土製品 手捏ね土器						
森西遺跡	5		2	転用硯2		1		人形土製品	2		脚部2	3		
越前遺跡						1		暗文土師器 手捏ね土器				3		
山の神遺跡	2				1	1		手捏ね土器		2		2		
宮竹野森遺跡	79		12	刻書土器2 転用硯1 水筒1		6	1?	人形土製品 手捏ね土器 馬書 機張	1	3	坏部37	10		
松東遺跡	5					1	1	手捏ね土器	1		脚部1		1	欄干口 鉄押

に、多数の掘立柱建物群が検出され、木簡・墨書土器・鈐帯金具・唐三彩などの特殊遺物が出土している。梶子北遺跡からは9世紀代のL形に配置された掘立柱建物群が検出されており、奈良時代に城山遺跡付近にあった郡家の中枢施設が、平安時代には梶子北遺跡周辺へと移ったと考えられる。また、伊場遺跡出土の文字資料からは栗原駅家との関連もうかがえる。

引佐郡家に想定される井通遺跡は、浜名湖北部に注ぐ都田川の支流井伊谷川左岸の微高地上に立地する。遺跡は都田川との合流地点から約200m上流に位置し、遺跡の南側には二見道が通る交通の要衝である。遺構は、大溝と規格性の高い掘立柱建物群が検出されており、「引佐一」「引佐二」などと記された墨書土器や、分銅やコップ形須恵器など度量衡に関する遺物が出土しており、物資の集散地としての役割も果たしていたと考えられる。

(3) 永田遺跡群における各遺跡の様相

永田遺跡群は、木船廃寺跡、大蒲町村東Ⅰ・Ⅱ遺跡、森西遺跡、越前遺跡、山の神遺跡、宮竹野際遺跡に松東遺跡を加えた、径約1.5kmの範囲に広がる遺跡の総称である。前述の通り、古代の官衙に関連する遺物が出土していることや、「永田」という地名が残っていることから、長上郡家所在地に比定されている。長田評は、飛鳥京跡や藤原宮跡で出土した木簡から7世紀代に成立していたと考えられている。ここでは、永田遺跡群を構成する各遺跡の概要について触れておきたい。

木船廃寺跡 1954年に大量の白鳳期の瓦が採集されたことから、存在が知られるようになった遺跡である。発掘調査（浜文振2011）では、白鳳期から奈良時代に至る大量の古代瓦が確認されており、白鳳期に創建された後、奈良時代を通じて堂宇の補修が行われてきたことがうかがえる。また、奈良時代の瓦は平城京系の瓦や、遠江国分寺系の瓦が出土していることから、中央政権や遠江国の中核に関わる勢力が、寺院の造営に関わっていたとみられる（鈴木・2011）。南北120m、東西80m程度の寺域が想定されており、隣接する大蒲町村東Ⅰ遺跡が郡家の中枢部と想定される

ことから、木船廃寺は、長上郡の郡衙（家）隣接寺院と捉えられる。

大蒲町村東Ⅰ遺跡 木船廃寺跡の西側に隣接する遺跡で、発掘調査（浜文協 2004）では、自然流路の中から、木簡をはじめ、機織具、畜串など約 400 点の木製品が出土している。出土木簡のうち、1 号木簡は公出挙に関する帳簿、2 号木簡は駅（起）稲の支給に関する帳簿、3 号木簡は田や稲の管理に関する帳簿と考えられており、いずれも税や公的機関に関係することから、当地周辺に郡家中枢部が存在していた可能性が高いと考えられる。また、機織具についても官衙関連遺跡からの出土例が多いことから、郡家付属の工房や有力農民のもとに備えられた機織具や織手によって、調・庸として納められる一定した規格の布が織られていたと推定されている（鈴木敏 2004）。

大蒲町村東Ⅱ遺跡 発掘調査（浜文協 2004）では、陶馬、土馬、手捏ね土器など祭祀的な遺物が認められたほかには、官衙関連の遺構・遺物はみられなかったが、古代末～中世にかけて当地周辺に展開していた蒲御厨に関係するとみられる「蒲屋敷」の推定地が地割や小字名に残されている。

森西遺跡 発掘調査（浜文協 2005）では、陶硯、墨書土器、製塩土器、緑釉陶器、布目瓦など少数ながら官衙関連遺物が出土している。遺構は明確ではないが、木船廃寺跡の東側に隣接することから、郡家の関連施設が存在する可能性は十分考えられる。

越前遺跡 木船廃寺跡の北側に隣接する。発掘調査（浜崎市遺跡調査会 1982）では、祭祀土坑から奈良時代の暗文を施した赤彩土器が数多く出土したほか、布目瓦、陶馬等も確認されている。

山の神遺跡 木船廃寺跡の約 500 m 北西に位置する。6 次にもわたる発掘調査が行われており、弥生時代後期と鎌倉時代を主体とする遺跡ながら、古代の遺構・遺物も確認されている。1 次調査（浜文協 1989）では、「長田」と墨書された山茶碗が出土しており、中世まで古代の郡名あるいは郷名が引き継がれていることがわかる。3 次調査（静文研 1997）では、自然流路から、破砕された甕や墨書土器、畜串など祭祀行為をうかがわせる遺物が出土している。

宮竹野際遺跡 山の神遺跡の北側に広がる遺跡で、永田遺跡群の中では北端に位置する。6 次にもわたる調査が行われている。1・2 次調査を中心に規則性のある掘立柱建物が確認されているほか、陶硯、墨書土器、布目瓦、陶馬、獣足、製塩土器など、官衙関連遺物が数多く出土している。宮竹野際遺跡の盛行時期は、木船廃寺跡や大蒲町村東Ⅰ遺跡より遅れる 8 世紀中葉以降であり、墨書土器には「北家」と書かれたものが複数確認されていること、5・6 次調査で検出した自然流路が大蒲町村東Ⅰ遺跡や山の神遺跡で検出された自然流路と同一と考えられることから、当初大蒲町村東Ⅰ遺跡周辺を中心として運営されていた郡家が、同一河川の上流域に「北家」と



Fig.138 山の神遺跡 墨書山茶碗



Fig.139 宮竹野際遺跡「北家」墨書

呼ばれる出先機関を設置し、郡城北部への対応を行ったと推測されている（鈴木-2012）。

（4）松東遺跡における古代の様相

①古代銅印について

古代印の種類と形態 古代印は文書等に押捺することにより、押印者の権利や正当性などを示すものとして律令制下で盛んに用いられる。多くは青銅製であるが、陶製、土製、石製、木製も存在する。大きく公印と寺社印、私印に分けられ、公印には、『令集解』『公式令』天子神祇条の中で用途・規格などが定められている内印（天皇の印）、外印（太政官の印）、諸司印、諸国印の4種と、規格などを定めた記録のない郡印、国倉印、郷印、軍団印などがある。私印は、家印と個人印に分けられ、『類聚三代格』巻17貞観10（868）年6月28日太政官符において、公印との区別をつけるために、印面の規格を方1寸5分（約45mm）以内に制限されている。

古代印は形態の個体差が少ない遺物で、鈕の形態を中心に分類される。鈕の上部が円弧を呈する弧鈕と、花卉状を呈する荅鈕に大別され、さらに孔の有無、先端部の形状、基部の装飾の有無などで分類される。伝世品が多いことや、発掘調査出土品であっても伝世されている可能性があるため、編年作業が難しい遺物といえる。しかしながら、弧鈕無孔で鈕両端の張り出しが少ないものが古く位置づけられ、無孔→有孔、弧鈕→荅鈕という大きな変遷は看取される（田路1999）。

印文には一字、二字、四字のものが存在する。一字、二字印はほとんどが私印であり、氏や名の一部のほか、吉兆文字も用いられたと考えられている。四字印は正式な印文の様式と考えられ、公印、寺社印の多くに採用され、私印にも「〇〇私印」として用いられる。

古代銅印の出土例 これまでに古代銅印は伝世品・出土品あわせて全国で200例以上が知られており、東海地方に関しては、発掘調査での出土例が静岡県で6点、愛知県では尾張国府跡から2点確認されており⁽¹⁾、いずれも平安時代以降のものと考えられている。静岡県内出土例は、東平遺跡は富士郡家、内荒遺跡は安倍郡家、道場田遺跡は小河駅家、坂尻遺跡は佐野郡家に想定されるなど官衙関連遺跡からの出土が多数を占めている。他に伝世品として東海地方関連では11点が確認されており、静岡県関係では「駿河倉印」、「安倍郡」の2点が知られている。

今回出土の銅印について 銅印が出土したSD109は検出面からの深さが非常に浅く、出土状況は良好とはいえないが、墨書土器を含む9世紀代の須恵器・土師器を共伴する。形態は弧鈕有孔であり、印面は27mm四方、高さは30mmを測る。印文の意味は不明だが、私印の諸例と照らし合わせれば、以下のような可能性が指摘できる。

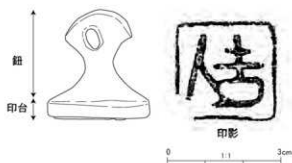


Fig.140 出土銅印

ば、以下のような可能性が指摘できる。

- A 「吉人」：銅印保有者の名
- B 「吉□ 人□」：銅印保有者の姓と名の頭文字
- C 「吉□」：銅印保有者の氏または名
- D 「吉」：吉兆文字として使用

二字印は多くはないが、印文の「人」の字を「にんべん」とするには右払いが顕著であり、一字とは読み取り難いことから、AまたはBの可能性が

Tab.16 東海地方の銅印一覧

状況	遺跡名または地域	印文	印形態	印面	現存高	備考
1 調査	静岡 富士市東平	十	不明	長(27)×21	(15.5)	鈕、印面下部を欠損、富士郡家推定地
2 調査	静岡 静岡市内荒	造大神印	舌鈕有孔	方35×35	41	9C中葉、安倍郡家推定地
3 調査	静岡 焼津市道場田	万	舌鈕有孔	方30×30	35	9~11C、小河駅家推定地
4 調査	静岡 袋井市川田・藤蔵洲	貞	舌鈕有孔	方34.8×33.7	39.4	10C、鈕部2次接合か
5 調査	静岡 袋井市坂尻	松	不明	方31×31	(24)	鈕欠損、8~12C、佐野郡家推定地
6 調査	静岡 浜松市松東	吉人?	舌鈕有孔	方27×27	30	9C、長上郡家推定地
7 調査	愛知 稲沢市尾張国府跡	珍富	舌鈕有孔	方44×46	46	12C後葉
8 調査	愛知 稲沢市尾張国府跡	富	舌鈕有孔	方30×30	32	
9 伝世	静岡 静岡県中〜東部	駿河倉印	舌鈕無孔	方60×60	65	
10 伝世	静岡 静岡市	安倍郡	舌鈕有孔	方33×28.5	33	所在不明
11 伝世	愛知 豊田市	伊保郷印	舌鈕有孔	方33×33	34	豊田市郷土資料館所蔵
12 伝世	愛知 豊田市	伊保郷印	舌鈕有孔	方33×32	25	
13 伝世	三重 伊勢市	大神宮印	舌鈕無孔	方64.4×65	60.3	伊勢神宮、延長年間に再鋳か
14 伝世	三重 伊勢市	内宮政印	舌鈕無孔	方54.1×54.8	55.6	伊勢神宮、伝承暦3年再鋳
15 伝世	三重 伊勢市	内宮政印	舌鈕有孔	方52×52	42	伊勢神宮
16 伝世	三重 伊勢市	豊受宮印	舌鈕有孔	方62.8×62.3	(47.2)	伊勢神宮、伝貞観5年鋳造
17 伝世	三重 伊勢市	神主石敷	舌鈕無孔	方23×23	28	伊勢神宮関連
18 伝世	三重 伊勢市?	己酉首丸	舌鈕有孔	方26×26	30	伊勢神宮関連
19 伝世	三重 伊勢市?	金剛契印	舌鈕有孔	方27×27	25	

凡例：印面・現存高の単位はmm、括弧書きは現存値、印面は縦×横の数値

国立歴史民俗博物館1999を改定

印面の形状：正方形一方、長方形一長、八角形一八

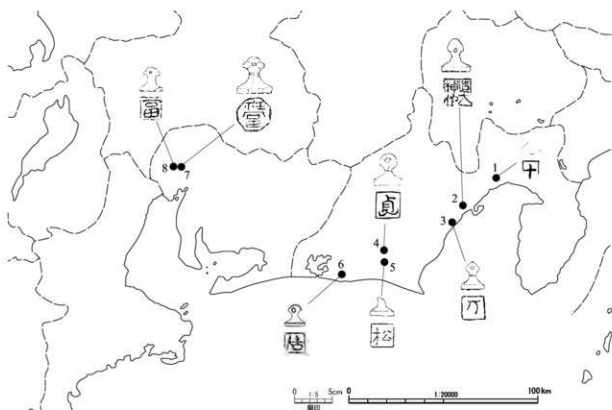


Fig.141 東海地方における古代銅印分布図（発掘調査出土品）

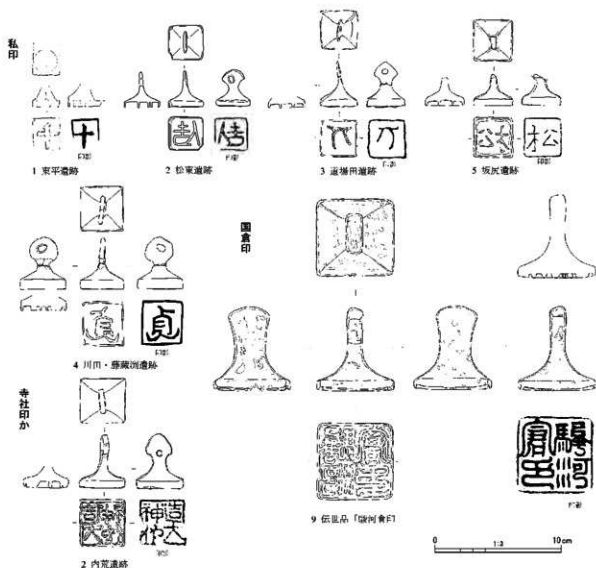


Fig.142 静岡県関係古代銅印

高いと考えられる。

また、共伴する土器の年代は9世紀代であるが、

- ・印文の彫りが深く、鋳型をつくるための原型に蠟型を使用した可能性が考えられる
 - ・印文の読みをA案の「古人」とすれば、「～人」は奈良時代に比較的にみられる名である
 - ・伝世する可能性のある遺物である
 - ・銅印が出土したSD109と隣接して平行に延びるSD107は8世紀代の遺物も出土している
- これらの点を考慮すると、銅印の年代が8世紀代に遡る可能性も考えられる。

②その他の特殊遺物について

鍛冶関連遺物 方形区画溝SD107の内側において、SK301・SK302内及びその周辺の包含層から、轡の羽口と鉄滓 (Fig. 102 - 242 ~ 250) が集中的に出土した。鉄滓は図示しなかったものを含め50点出土している。SK301・SK302は細長い楕円形状の遺構で、内部に被熱の形跡はなく、鉄滓も埋土上層からの出土であるため、炉などの用途を想定することはできないが、鍛冶関連遺物の集中

度から、方形区画内の北部において鍛冶が行われていたことがうかがえる。

墨書土器 今回の調査では5点の墨書土器が確認され、そのうち4点には「」という同一の記号が認められた。いずれも時期は9世紀代のものである。この記号が何を示しているかは不明であるが、出土地点も銅印が出土したSD109や隣接する方形区画溝SD107及びその周辺の包含層にまとまっていることから、9世紀代に方形区画溝内において、同一の施設あるいは人物が用いていたと考えられる。

緑釉陶器 包含層から緑釉陶器 (Fig. 100 - 240) が1点出土した。古代における高級食器であり、永田遺跡群内では、宮竹野際遺跡や森西遺跡に出土例がみられる。伊場遺跡群や井通遺跡など官衙関連遺跡や、河西市大知波峠廃寺など古代寺院跡に出土例が多い。

陶馬 (Fig. 98 - 168) 祭祀に用いられる陶製の馬形で、井戸 (SE02) 内から出土した。脚部1点のみの出土であり確証を得ないが、井戸周辺で祭祀が行われていた可能性がある。永田遺跡群では、木船廃寺跡、森西遺跡、山の神遺跡、宮竹野際遺跡で陶馬が確認されている。

製塩土器 (Fig. 98 - 169) 井戸 (SE02) 内から脚部が1点確認された。三河湾沿岸で土器製塩が行われ、土器ごと運ばれてくるため、当地域での出土例が知られるが、流通の過程で脚部が折り取られるとみられ、坏部と脚部が分離して出土する。永田遺跡群では、宮竹野際遺跡で坏部37点、森西遺跡で脚部2点が知られる。

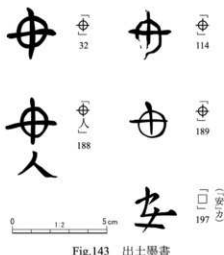


Fig.143 出土墨書

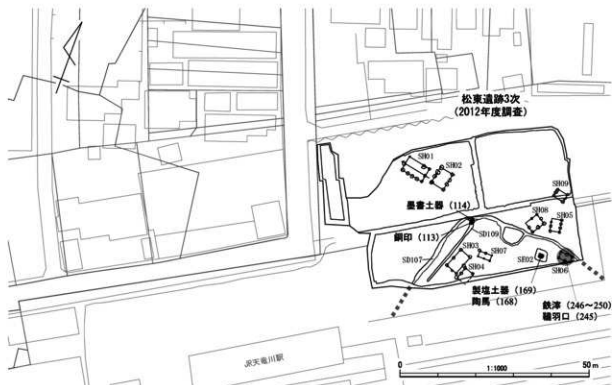


Fig.144 古代の主な遺構と特殊遺物の出土状況

③方形区画溝 SD107 とその内側の遺構

SD107 は調査区外に延びているため、正確な規模は不明だが、方位を真北からわずかに東へ傾けて、少なくとも南北 25 m、東西 35 m 以上の土地を区画していたと考えられる。出土遺物の主な時期は 8 世紀～10 世紀前半と幅が広く認められる。

区画内で検出された主な遺構には、掘立柱建物 4 棟 (SH03・04・06・07)、銅印・墨書土器出土溝 (SD109)、SD107 と接続し半円形に延びる溝 (SD110)、井戸 (SE02) などがあり、SK301・302 やその周辺の包含層では轆轤口、鉄滓が集中的に出土している。各遺構の相関関係は明確ではないが、井戸 SE02 出土遺物の時期は SD107 と同様 8 世紀～10 世紀前半であることから、この期間に方形区画内で何らかの施設が存続していたと考えられる。そこでは銅印や墨書土器が用いられ、鍛冶が行われており、井戸には陶馬・製塩土器が投棄されるなど一般的な集落とは捉えられない特殊な様相がみとれる。

(5) 永田遺跡群における松東遺跡の位置付け

永田遺跡群の各遺跡は、発掘調査の成果や古地図、地籍図などから旧河道をたどると、現在宮井戸川と呼ばれている河川やその支流沿いに展開していることがわかる (Fig. 145)。宮井戸川は芳川、馬込川を通じて遠州灘へと注いでおり、伊場遺跡群 (敷智郡家)、井通遺跡 (引佐郡家) 同様に、永田遺跡群においても水運に優れた河川沿いに長上郡家の関連施設が展開していたと考えられる。

長上郡家の中心は、白鳳期に造営された木船庵寺跡や、7 世紀末葉～8 世紀前葉頃の木簡が出土している大蒲町村東 I 遺跡跡りと想定されており、8 世紀中葉以降、郡家中枢から約 1 km 北側の宮竹野際遺跡に出先機関が置かれたと考えられている。そうした中で、永田遺跡群の東端に位置する松東遺跡の長上郡家における位置付けを考えてみたい。

松東遺跡については官衙関連の特殊遺物として、銅印をはじめ墨書土器、緑釉陶器、陶馬、製塩土器などが確認され、轆轤口・鉄滓が出土している。また、堅穴住居跡は確認されずに方形区画溝とその内側に掘立柱建物、井戸などが検出されている。こうした遺構・遺物の状況からは一般的な集落景観は想定できず、長上郡家に関連する施設の存在がうかがえる。

ただし、その一方で木簡、陶硯が全く出土せず、墨書土器も記号の記されたものが少量出土しているのみで、官衙遺跡と想定する際に最も有力な資料となる文字関連遺物が極めて乏しい。このことは、永田遺跡群の東端部という地理的状況も踏まえると、松東遺跡が郡家中枢部ではなく周縁部であることを示していると考えられる。

松東遺跡の年代は、8 世紀中葉頃～10 世紀前葉を中心としており、7 世紀末～8 世紀代に盛期があり郡家中枢と目される大蒲町村東 I 遺跡や木船庵寺跡との間に時期差が見受けられる。このことは、8 世紀中葉以降、急速に郡家の出先機関が整備された宮竹野際遺跡の状況と重ね合わせると、その頃に長上郡家において諸施設の再整備による拡充・拡散が図られたと考えられる。

陶硯や墨書土器など文字関連遺物を多数出土する宮竹野際遺跡は、郡の政務を執り行う機能が与えられ、文字関連遺物がほとんどみられない松東遺跡の本調査区周辺は、郡家にかかわりを有し、銅印を所有することのできる有力者＝郡司クラスの居館的な施設であったか、郡家に属して鍛冶を

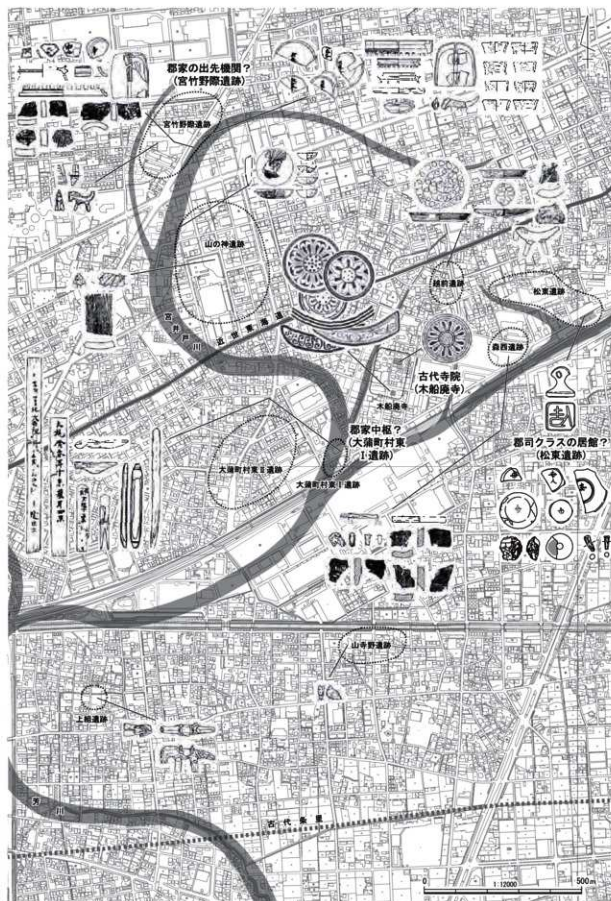


Fig.145 宮井戸川及び支流の推定流路と各遺跡の様相

行う工房的な施設であった可能性がうかがえるだろう。

(6) おわりに

以上、主な調査成果によりながら、長上郡家における松東遺跡の位置付けについて考えてきた。

今回の調査のみでは、建物の構造や配置に不明瞭な点が多く、明確な位置付けをすることは難しいが、特殊遺物の出土状況と遺構のあり方から、8世紀中葉以降に長上郡家の再整備による施設の拡充・拡散が行われたと推察し、今回の調査で検出された方形区画溝とその関連遺構については、郡司クラスの有力者の居館または郡家に属する鍛冶工房といった、郡家関連の施設である可能性に触れてみた。

水運に優れた河川沿いにおいて郡家の諸施設が散在的に配置される様相は、比較的発掘調査が進展している伊場遺跡群で知られており、永田遺跡群も類似した状況である可能性が次第にうかがえるようになってきた。伊場遺跡群と永田遺跡群は隣接する郡の郡家想定地であり、遠州灘から同じ水系を利用した水運が行われていたと想定されることから、今後は両遺跡群の関連性も視野に入れた調査・検討が必要になると考えられる。

註

- (1) 銅印以外では豊川市白鳥遺跡（三河国府跡）のほか、日進市岩崎24号室・海老池1号室、岐阜市老洞1号室からの陶製印4例が知られる。

参考文献

- 国立歴史民俗博物館 1999 『日本古代印の基礎的研究』国立歴史民俗博物館研究報告第79集
 静岡県 1994 『静岡県史』通史編1 原始・古代
 静岡県教育委員会 2003 『静岡県の古代寺院と官衙遺跡』静岡県文化財調査報告書第57集
 静岡県考古学会 2006 『古代の役所と寺院—郡衙とその周辺—』静岡県考古学会2005年度シンポジウム
 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1988 『内荒遺跡(遺物編)』
 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996 『川田・藤蔵遺跡』
 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1997 『山の神遺跡』
 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 2006 『井通遺跡』本文編1・2
 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 2006 『宮竹野際遺跡』
 鈴木一有 2011 「木船産寺出土土の時期と系譜」『木船産寺2次』(財)浜松市文化振興財団
 鈴木一有 2012 「宮竹野際遺跡と長上郡家」『宮竹野際遺跡6次』(財)浜松市文化振興財団
 鈴木敏則 2004 「出土木製品」『大瀬町村東Ⅰ・Ⅱ遺跡』(財)浜松市文化協会
 田地正幸 1999 「古代印の考古学的研究」『日本古代印の基礎的研究』国立歴史民俗博物館研究報告第79集
 浜松市遺跡調査会 1982 『越前遺跡発掘調査報告書』
 (財)浜松市文化協会 1989 『山の神遺跡』
 (財)浜松市文化協会 1994 『宮竹野際遺跡2』
 (財)浜松市文化協会 2004 『大瀬町村東Ⅰ・Ⅱ遺跡』
 (財)浜松市文化協会 2005 『森西遺跡』
 (財)浜松市文化振興財団 2011 『木船産寺2次』
 (財)浜松市文化振興財団 2012 『宮竹野際遺跡6次』
 袋井市教育委員会ほか 1985 『坂尻遺跡』
 富士市教育委員会 2013 『富士市内遺跡発掘調査報告書—平成22・23年度—』
 山中敏史 1994 『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房

第4章 総括

本書で報告した松東遺跡3次調査では、弥生時代後期と古代の遺構・遺物を中心に豊富な情報が得られた。最後に調査で得られた成果を時代ごとに要約し、明らかになった内容を総合するとともに今後の展望について示したい。

1 発掘調査の成果

弥生時代後期 土坑や溝・小穴を検出し、山中Ⅲ式期～元屋敷Ⅰ～Ⅰ式期までの時期が確認された。その中でも中心となる時期は欠山式期であり、1～2次調査で検出された環濠が廃絶した後の、欠山式期における集落の広がりをうかがうことができた。溝はほぼ真北とその直交方向に掘削されているものが多く、環濠内側の区画溝と方向が一致しており、欠山式期にはこうした区画溝で集落内部の空間構成を行っていたとみられる。また、廃棄土坑と考えられるSX01などからは大量に土器が出土した。松東遺跡は山中・欠山様式圏の東端に位置し、菊川様式圏と接しているため、出土土器には、菊川様式の影響を受けた土器が多く見受けられた。SK06からは銅鐸鈕の破片が出土した。発掘調査における銅鐸破片の出土は市内3例目で、破片としては大型である。周辺に多くみられる銅鐸、銅鐸関連遺物を出土する遺跡とのかかわりが注目される。

奈良・平安時代 掘立柱建物・土坑・溝・井戸・小穴を検出し、出土遺物などから8世紀後半から10世紀前半に当遺跡の盛期期があったといえる。調査区南側では方形区画溝であるSD107が検出された。SD107からは尾張地方で生産された灰釉陶器を中心に多くの遺物が出土していることや、区画溝が囲う範囲が広大な規模に及ぶことから、一般的な集落ではないことが理解できる。また、SD107の内側に平行して延びているSD109からは、銅印と墨書土器、同じくSD107の内側に位置するSE02からは、陶馬の脚部と製塩土器の脚部が出土している。こういった特殊遺物の出土から、松東遺跡の西側にその中心が想定されている長上郡家と関連する施設が存在がうかがわれる。

掘立柱建物はSD107の区画溝内4棟、区画溝外が5棟の計9棟が検出された。SH01とSH02、SH03とSH04は隣接し、建物方位も近似しているため関連性が認められる。調査区東端に位置するSK301、SK302、SD118からは、輪の羽口や鉄滓の鍛冶関連遺物が集中して出土し、SH06を含むこの一面に鍛冶関連の工房があったと考えられる。

鎌倉時代以降 鎌倉時代以降の遺構・遺物は希薄であった。検出した遺構は、溝状遺構4条、井戸3基である。水田跡の可能性もある幅広の溝状遺構は4条平行に並んで検出され、主軸が古代の溝(SD107等)や1937年頃の土地宝典にみられる古い地割と近似している。このように松東遺跡周辺の地割は、古代・中世からの地割を、時代が移り変わっても後世に踏襲されていたことがうかがわれる。

2 特筆すべきことがら

弥生時代後期の集落景観 1・2次調査で確認された環濠は検出されず、今回の調査区まで及んでいないとみられる。今回確認された遺構の多くは、環濠廃絶後に集落域が最大規模に広がった欠山Ⅱ式期以降と考えられる。永田遺跡群では、山の神遺跡、森西遺跡などに同時期の集落の存在が知られ、河川や低湿地の間の微高地ごとに集落が展開している様相がうかがえる。

弥生土器の地域性 弥生時代後期には、天竜川を境として西遠江に山中・欠山様式圏、東遠江に菊川様式圏が広がる。今回出土の土器群は、器種比率や属性分析では浜松南部の遺跡と概ね同様の傾向がみられたが、壺の肩部模様には羽状文の比率が高く、搬入品も多くみられるなど、永田遺跡群の東端という地理的要因から菊川式の影響が強うかがえる。

銅鐸破片 永田遺跡群の東端に位置し、銅鐸分布圏の最も辺境地といえる松東遺跡において2例目となる銅鐸破片が出土した。浅い窪み状の土坑(SK06)から出土し、山中Ⅲ式(～欠山Ⅰ式)の弥生土器と共伴する。近畿式銅鐸の突線鈕2式の鈕の破片で、大きく折れ曲っており、飾耳はすべて欠損している。近畿式銅鐸の破片は、青銅素材として再利用するために流通していた可能性があり、近畿地方を中心に破碎が行われ、本例のように破片が各地にもたらされたと考えられる。永田遺跡群周辺に銅鐸が集中する点については、銅鐸文化圏の境界領域としての性格に加え、東西の流通経路の要衝である地理的特性に起因すると捉えられる。

長上郡家との関係 古代の墨書土器、緑釉陶器など官衙関連の特殊遺物や、鍛冶行為を示す輪羽口、鉄滓が出土しており、長上郡家の一部が及んでいると想定できる。一方で文字関連遺物(木簡・陶硯・墨書土器等)は乏しく、永田遺跡群の東端という地理的状况からも、今回の調査区付近は長上郡家の中でも周縁部と捉えられる。方形区画溝(SD107)とその関連遺構については、出土銅印を所有していた郡司クラスの有力者の居館あるいは郡家に属する鍛冶工房といった郡家関連の施設と推定され、長上郡家の施設の拡充・拡散が行われた8世紀中葉以降に整備されたと考えられる。

古代銅印 方形区画溝(SD107)に近接して平行に延びる溝(SD109)から銅印が出土した。本例は印面の規模などから私印と考えられ、印文は「吉人」または「信」と読める。9世紀代の須恵器・土師器と共伴するが、製作年代は8世紀代に遡る可能性も考えられる。銅印は全国的にも官衙遺跡やその周辺での出土例が多く、本例についても郡司クラスの有力者が保有していたと推測される。

3 今後の展望

今回の調査では、弥生時代の銅鐸破片をはじめ、多くの土器資料を得られたほか、古代の銅印をはじめ、官衙関連の遺構・遺物を確認することができた。ただし、調査が行われたのは遺跡の一部に過ぎず、弥生時代の環濠の範囲や墓域が未だ明らかではなく、出土土器の地域性についても、より詳細な分析が必要であろう。また、古代の長上郡家の構造を明らかにするためには、歴史地理学的な検討も加えつつ、丹念な調査の継続が必要となる。

今後は、調査の進展によって松東遺跡を含む永田遺跡群の様相が明らかになっていくことを期待するとともに、多方面で今回の調査成果が活用されることを望みたい。

出土遺物観察表

凡例

残存率：％表示、基本的に10％単位での切り上げ

反転：「反」は断面を反転して図化したもの

大きさの単位は cm

回転体以外の大きさ表示 器径：長さ 口径：厚さ

口径は接地径

色調は『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠

出土遺物観察表

Fig.	番号	出土番号	工区	遺 跡	種 別	部 位	形状	数量	尺 寸	材 質	口 径	色 調	備 考
21	1	2364	2	SX01	弥生土器	広口壺	5	反			13.6	橙	
21	2	2616	2	SX01	弥生土器	外反口縁壺	5	反			13.1	透黄橙	
21	3	2579	2	SX01	弥生土器	低部口縁壺	30				14.9	透黄橙	
21	4	2312	2	SX01	弥生土器	低部口縁壺	10	反			37.4	にぶい黄橙	
21	5	2274・2281	2	SX01	弥生土器	内湾口縁壺	20	反			18.0	黄	
21	6	2481	2	SX01	弥生土器	内湾口縁壺	30				14.0	にぶい黄橙	
21	7	2530	2	SX01	弥生土器	内湾口縁壺	90	反	11.2 14.5	9.6	にぶい黄橙		底径5.1
21	8	2541	2	SX01	弥生土器	内湾口縁壺	10	反			12.5	にぶい橙	
21	9	2087・2477	2	SX01	弥生土器	直口壺	70		13.2 10.6	10.2	透黄橙		底径4.0
21	10	2385・2280	2	SX01	弥生土器	折返口縁壺	30				16.2	にぶい橙	
21	11	2612	2	SX01	弥生土器	折返口縁壺	10	反			13.0	灰白	
21	12	2629	2	SX01	弥生土器	折返口縁壺	5	黄			21.9	にぶい黄橙	
21	13	2629	2	SX01	弥生土器	折返口縁壺	10	反			19.0	にぶい橙	
21	14	2049・2415	2	SX01	弥生土器	折返口縁壺	20	反			17.7	黄灰	
21	15	2472	2	SX01	弥生土器	折返口縁壺	20	反			18.7	灰黄褐	
21	16	2601	2	SX01	弥生土器	壺	20	反	24.0			にぶい黄橙	
21	17	2282・2275	2	SX01	弥生土器	壺	30	反				にぶい黄橙	底径6.0
21	18	2028・2523	2	SX01	弥生土器	壺	50		28.8			にぶい黄橙	底径9.8
21	19	2420・2203	2	SX01	弥生土器	小型直口鉢	90		11.7 3.4	11.0	透黄橙		底径3.4
21	20	2612	2	SX01	弥生土器	小型直口鉢	80			7.4 9.3	橙		
21	21	2404	2	SX01	弥生土器	小型直口鉢	30	反	6.4	7.6	にぶい橙		底径3.5
21	22	2541	2	SX01	弥生土器	鉢形小型直口鉢	50	反	11.2	10.7	にぶい橙		
21	23	2600・2412	2	SX01	弥生土器	小型鉢	50			9.9	にぶい橙		底径3.3
21	24	2401	2	SX01	弥生土器	小型鉢	40			9.8	黄灰		底径4.0
21	25	2330	2	SX01	弥生土器	片口鉢	95		23.0 11.9	22.0	にぶい橙		底径4.1
21	26	2476	2	SX01	弥生土器	鉢	30	反	18.1	16.6	にぶい橙		
21	27	2087	2	SX01	弥生土器	小型脚付鉢	10	反	6.4			透黄橙	
21	28	2087	2	SX01	弥生土器	把手	5					透黄橙	
21	29	2319	2	SX01	弥生土器	外反坪部高杯	10	反			24.3	透黄橙	
21	30	2364	2	SX01	弥生土器	外反坪部高杯	10	反			26.0	透黄橙	
21	31	2399・2267	2	SX01	弥生土器	外反坪部高杯	30	反			25.9	灰黄	
21	32	2269	2	SX01	弥生土器	外反坪部高杯	20				21.2	にぶい黄橙	
21	33	2565	2	SX01	弥生土器	く字破形坪部高杯	10	反			24.0	にぶい橙	
21	34	2421・2482	2	SX01	弥生土器	く字破形坪部高杯	60				26.2	にぶい黄橙	脚径5.0
21	35	2374	2	SX01	弥生土器	く字破形坪部高杯	20	反			23.2	橙	
21	36	2262・2480	2	SX01	弥生土器	く字破形坪部高杯	10	反			20.8	にぶい橙	
21	37	2411	2	SX01	弥生土器	高杯	30					橙	脚径4.8
21	38	2406	2	SX01	弥生土器	高杯	5	反			29.9	にぶい黄橙	
21	39	2469	2	SX01	弥生土器	碗形坪部高杯	5	反			27.4	にぶい橙	
21	40	2584	2	SX01	弥生土器	碗形坪部高杯	5	反			16.8	にぶい黄橙	
21	41	2616・2609	2	SX01	弥生土器	有縁高杯	30	反			22.6	橙	
21	42	2573	2	SX01	弥生土器	有縁高杯	10	反			22.8	橙	
21	43	2175	2	SX01	弥生土器	返付高杯	10	反				にぶい橙	
21	44	2348	2	SX01	弥生土器	高杯	50					にぶい橙	脚径15.4、脚径5.0
21	45	22353	2	SX01	弥生土器	高杯	30	反				にぶい橙	脚径14.7
21	46	2370	2	SX01	弥生土器	高杯	5	反				にぶい黄橙	脚径14.5
21	47	2494	2	SX01	弥生土器	高杯	20					にぶい黄橙	脚径15.1
21	48	2599	2	SX01	弥生土器	鉢形高杯	20					にぶい橙	脚径12.3
21	49	2495	2	SX01	弥生土器	高杯	40					透黄橙	脚径4.3
21	50	2492	2	SX01	弥生土器	高杯	50					にぶい橙	脚径4.6
21	51	2601	2	SX01	弥生土器	高杯	40					にぶい橙	脚径4.2
21	52	2305	2	SX01	弥生土器	高杯	40					透黄橙	脚径4.8
21	53	2305	2	SX01	弥生土器	高杯	30					にぶい橙	脚径3.9
21	54	2549	2	SX01	弥生土器	高杯	50					透黄橙	脚径5.3
21	55	2613	2	SX01	弥生土器	高杯	50					にぶい橙	脚径4.5
21	56	2414	2	SX01	弥生土器	高杯	40					にぶい黄橙	脚径4.6
21	57	2087・2428	2	SX01	弥生土器	小型高杯	90		11.2 14.0			橙	脚径11.8、脚径4.1
21	58	2606・2428	2	SX01	弥生土器	小型高杯	80		10.4 8.8	9.8		にぶい黄	脚径8.0、脚径4.0
21	59	2291	2	SX01	弥生土器	小型高杯	20	反			11.8	透黄橙	
21	60	2380	2	SX01	弥生土器	小型高杯	50					にぶい橙	脚径9.0、脚径3.5
21	61	2615・2608	2	SX01	弥生土器	台付壺	40		22.4		20.1	にぶい黄橙	
21	62	2522・2585	2	SX01	弥生土器	壺	50	反	24.4		21.4	黄褐	
21	63	2397	2	SX01	弥生土器	壺	20	反			22.0	にぶい黄橙	
21	64	2321	2	SX01	弥生土器	壺	10	反			20.5	にぶい橙	
21	65	2556	2	SX01	弥生土器	壺	50		22.0		18.5	灰黄褐	
21	66	2390・2395	2	SX01	弥生土器	壺	30				17.0	灰黄褐	
21	67	2605・2087	2	SX01	弥生土器	壺	10	反			22.4	灰黄褐	
21	68	2413	2	SX01	弥生土器	壺	30	反	16.4		15.6	黄褐	
21	69	2321	2	SX01	弥生土器	壺	10	反			21.2	灰黄褐	
21	70	2290・2318	2	SX01	弥生土器	大型壺	10	反			44.6	灰褐	
21	71	2358	2	SX01	弥生土器	台付壺	10					透黄橙	脚径5.6
21	72	2396	2	SX01	弥生土器	台付壺	20					灰黄褐	脚径9.1
21	73	2746	2	SX01	弥生土器	台付壺	20	反				にぶい黄橙	脚径10.8
21	74	2594	2	SX01	弥生土器	台付壺	30					にぶい橙	脚径8.1

Fig	番号	取上番号	工法	遺 物	種 別	部 位	数量	反転	修復	材質	口径	色 澤	備 考
25	75	2539	2	SK01	石製品	裝飾串	100		5.2	5.2	0.9		21kg, 正始
28	76	1103	1	SK06	金属製品	折衝 鋸			17.8	25.2			1176.0g
30	77	71	1	SK06	1層	折衝口縁直	5	反			13.2	にぶい黄緑	
30	78	67	1	SK06	1層	折衝口縁直または鉢	5	反			15.4	にぶい黄緑	
30	79	67	1	SK06	1層	折衝口縁直	5	反			14.6	にぶい黄緑	
30	80	71	1	SK06	1層	鉢	5					にぶい黄緑	
30	81	71	1	SK06	1層	蓋	5					にぶい黄緑	
30	82	71	1	SK06	1層	外反片部高杯	20	反	9.4		22.2	にぶい黄緑	
30	83	67	1	SK06	1層	小型高杯	10	反				黄	
30	84	111	1	SK06	1層	台付盃	5	反				にぶい黄緑	脚径5.6
30	85	932	1	SK06	2層	盃	5	反				灰黄褐	底径6.0
30	86	96	1	SK06	2層	盃	5	反				にぶい黄緑	
30	87	92	1	SK06	2層	盃	5	反			14.8	黄	
30	88	84	1	SK06	2層	盃	5				16.9	にぶい黄緑	
30	89	95	1	SK06	2層	盃	5					黄	
30	90	930	1	SK06	2層	盃	5	反				にぶい黄緑	底径5.8
30	91	935	1	SK06	2層	盃	5	反				にぶい黄緑	底径5.0
30	92	935	1	SK06	2層	盃	5				18.1	灰黄	
30	93	931	1	SK06	2層	盃	5					にぶい黄緑	脚径4.8
30	94	933	1	SK06	2層	盃	5					にぶい黄緑	脚径5.5
40	95	229	1	SK07	弥生土器	鉢	10	反			13.2	淡黄	
40	96	112	1	SK07	弥生土器	盃	5					灰	
40	97	237	1	SK07	弥生土器	盃	50		25.8			黄	底径6.2
40	98	239	1	SK07	弥生土器	小型盃	30	反	6.0		4.8	にぶい黄緑	
40	99	247	1	SK07	弥生土器	直立口縁鉢	10	反	12.1		11.0	淡黄緑	
40	100	241・243	1	SK07	弥生土器	碗形片部高杯	60	反		20.6	28.8	黄	脚径16.6、脚径5.0
40	101	238	1	SK07	弥生土器	高杯	50					にぶい黄緑	底径13.5、脚径4.2
40	102	250	1	SK07	弥生土器	高杯	50					にぶい黄緑	脚径13.8
40	103	237・240	1	SK07	弥生土器	高杯	60					淡黄緑	脚径14.0、脚径5.2
40	104	251	1	SK07	弥生土器	盃	10	反	26.6		25.2	にぶい黄緑	
40	105	246	1	SK07	弥生土器	盃	5	反			31.2	灰白	
40	106	253	1	SK07	弥生土器	台付盃	20					灰白	脚径10.8、脚径5.2
40	107	247	1	SK07	弥生土器	台付盃	30					黄	脚径9.4、脚径5.2
41	108	788	1	SK56	弥生土器	外反口縁直	5	反			15.0	にぶい黄緑	
41	109	798	1	SK56	弥生土器	外反口縁直	10	反			17.2	にぶい黄緑	
41	110	737	1	SK56	弥生土器	外反口縁直	20	反			11.8	灰白	
41	111	730	1	SK56	弥生土器	外反口縁直	30	反			10.4	にぶい黄緑	
41	112	814	1	SK56	弥生土器	小型盃	5	反			10.9	にぶい黄緑	
41	113	825	1	SK56	弥生土器	小型盃	5	反			8.8	にぶい黄緑	径5.9
41	114	604	1	SK56	弥生土器	折衝口縁直	5					淡黄緑	
41	115	769	1	SK56	弥生土器	盃	5					にぶい黄緑	
41	116	676	1	SK56	弥生土器	盃	5					にぶい黄緑	
41	117	776	1	SK56	弥生土器	盃	5					灰白	
41	118	676	1	SK56	弥生土器	盃	5					灰白	
41	119	604	1	SK56	弥生土器	盃	5					にぶい黄緑	
41	120	780	1	SK56	弥生土器	盃	5					灰白	
41	121	771	1	SK56	弥生土器	盃	5					にぶい黄緑	
41	122	604	1	SK56	弥生土器	盃	5					淡黄緑	
41	123	604	1	SK56	弥生土器	盃	5					灰白	
41	124	604	1	SK56	弥生土器	盃	5					にぶい黄緑	
41	125	746	1	SK56	弥生土器	裝飾直口鉢	20	反			12.6	淡黄緑	
41	126	676	1	SK56	弥生土器	裝飾直口鉢	5					にぶい黄緑	
41	127	828	1	SK56	弥生土器	有台小型盃	50					淡黄	脚径4.4、脚径3.3
41	128	733	1	SK56	弥生土器	外反片部高杯	10	反			24.2	にぶい黄緑	
41	129	736	1	SK56	弥生土器	外反片部高杯	10	反			23.0	淡黄緑	
41	130	827	1	SK56	弥生土器	外反片部高杯	5					にぶい黄緑	
41	131	759	1	SK56	弥生土器	碗形片部高杯	10	反			21.8	黄	
41	132	761	1	SK56	弥生土器	盃	5	反			20.6	にぶい黄緑	
41	133	806	1	SK56	弥生土器	盃	5					にぶい黄緑	
41	134	812	1	SK56	弥生土器	台付盃	10					にぶい黄	脚径69.9、脚径5.2
42	135	976	1	SK84	弥生土器	折衝口縁直	5	反			16.9	にぶい黄緑	
42	136	1004	1	SK84	弥生土器	片口蓋盃	100			11.5	10.0	黄	底径3.0
42	137	995・961	1	SK84	弥生土器	盃	50	反	23.4		19.3	にぶい黄緑	
42	138	972	1	SK84	弥生土器	盃	70		20.2		17.4	にぶい黄緑	
42	139	969・961	1	SK84	弥生土器	盃	50		22.3		19.3	にぶい黄緑	
43	140	2663・2670	2	SK231	弥生土器	外反口縁直	20				15.3	にぶい黄緑	
43	141	2684・2674	2	SK231	弥生土器	外反口縁直	10	反			14.0	灰黄	
43	142	2722	2	SK231	弥生土器	直立口縁直	30				12.0	淡黄	
43	143	2636	2	SK231	弥生土器	直立口縁直	50		12.9		8.1	灰黄	
43	144	2712・2641	2	SK231	弥生土器	折衝口縁直	40				14.5	にぶい黄緑	
43	145	2589	2	SK231	弥生土器	複合口縁直	10	反			17.8	にぶい黄緑	
43	146	2637・2659	2	SK231	弥生土器	盃	50		21.8			にぶい黄緑	底径6.2
43	147	2648・2716	2	SK231	弥生土器	盃	20					淡黄緑	径8.1
43	148	2667	2	SK231	弥生土器	盃	5					にぶい黄緑	

出土遺物観察表

Flg.	発祥	出土番号	工数	遺 跡	種 別	部 位	形状	直径	底径	高さ	口径	色 澤	備 考	
43	149	2680	2	SK231	弥生土器	鉢		30	反	12.8	12.6	にぶい焼		
43	150	2686・2699	2	SK231	弥生土器	外反坪部高杯		20			24.6	にぶい焼		
43	151	2699	2	SK231	弥生土器	外反坪部高杯		20	反		19.8	にぶい焼		
43	152	2715	2	SK231	弥生土器	内反坪部高杯		70	反	18.5	16.5	17.4	透黄焼	跡径10.6, 跡径径3.6
43	153	2708	2	SK231	弥生土器	高杯		30	反				透黄焼	跡径14.1, 跡径径4.0
43	154	2709	2	SK231	弥生土器	高杯		60					透黄焼	跡径8.3, 跡径径3.4
43	155	2726	2	SK231	弥生土器	甕		10	反		22.3	灰黄焼		
43	156	2630	2	SK231	弥生土器	甕		20		21.4	17.5	にぶい焼		
43	157	2589・2655	2	SK231	弥生土器	甕		20	反	22.5	22.2	にぶい焼		
43	158	2697	2	SK231	弥生土器	甕		10	反		18.4	にぶい焼		
43	159	2678	2	SK231	弥生土器	甕		20	反	26.0	24.8	にぶい焼		
43	160	2676	2	SK231	弥生土器	台付甕		10				灰黄焼	跡径径5.5	
43	161	2702	2	SK231	弥生土器	台付甕		30	反			にぶい焼	跡径5.1	
43	162	2705	2	SK231	弥生土器	台付甕		30				焼	跡径7.1	
44	163	4238	3	SK309	弥生土器	鉢		5	反		15.3	焼		
44	164	4242・4250	3	SK309	弥生土器	く字破形坪部高杯		70			25.4	30.1	にぶい焼	跡径16.7, 跡径径4.6
44	165	4244	3	SK309	弥生土器	高杯		40					にぶい焼	跡径径4.5
44	166	4246	3	SK309	弥生土器	高杯		40					灰黄	跡径10.9, 跡径径4.3
44	167	4237	3	SK309	弥生土器	甕		10	反	18.0	15.0	高焼		
44	168	4248	3	SK309	弥生土器	甕		5	反		19.9	にぶい焼		
44	169	4247	3	SK309	弥生土器	台付甕		30				にぶい焼	跡径10.2	
45	170	4302	3	SK346	弥生土器	直立口縁蓋		80		12.6	13.7	6.6	透黄焼	底径5.0
45	171	4300	3	SK346	弥生土器	直立口縁蓋		50	反	14.2	8.4	焼		
45	172	4308	3	SK346	弥生土器	内反口縁蓋		10	反		13.4	焼		
45	173	4307	3	SK346	弥生土器	小型甕		60		8.0			にぶい焼	底径3.9
45	174	4301	3	SK346	弥生土器	小型甕		60		9.9			焼	底径3.8
45	175	4303	3	SK346	弥生土器	折返口縁蓋		20			25.4		にぶい焼	
45	176	4271・4273	3	SK346	弥生土器	甕		30	反				灰黄	跡径13.4
45	177	4305	3	SK346	弥生土器	甕		30	反	25.0	21.6	にぶい焼		
45	178	4304	3	SK346	弥生土器	高杯		60					にぶい焼	跡径10.2, 跡径径3.4
45	179	4306	3	SK346	弥生土器	外反坪部高杯		60					焼	跡径径4.0
45	180	4265	3	SK346	弥生土器	台付甕		30					灰黄焼	跡径9.6
45	181	4263	3	SK346	弥生土器	台付甕		20	反				にぶい焼	跡径9.6, 跡径径5.2
45	182	4314	3	SK347	弥生土器	甕		40	反	25.6			にぶい焼	
45	183	4312	3	SK347	弥生土器	甕		5	反				にぶい焼	
45	184	4319	3	SK347	弥生土器	く字鉢		5	反		23.6		にぶい焼	
45	185	4321	3	SK347	弥生土器	く字破形坪部高杯		10	反		27.2		にぶい焼	
45	186	4311	3	SK347	弥生土器	高杯		30					にぶい焼	跡径径4.3
45	187	4321	3	SK347	弥生土器	甕		10			19.8		にぶい焼	
46	188	4334・4345	3	SK351	弥生土器	く字鉢		40	反	15.4	14.6		にぶい焼	
46	189	4354	3	SK351	弥生土器	く字鉢		40	反	13.6	12.7		にぶい焼	
46	190	4360	3	SK351	弥生土器	小型直口鉢		5	反	7.0	6.6		にぶい焼	
46	191	4349	3	SK351	弥生土器	外反坪部高杯		10	反		22.6		にぶい焼	
46	192	4359	3	SK351	弥生土器	高杯		50					にぶい焼	跡径径4.6
46	193	4353	3	SK351	弥生土器	高杯		50					にぶい焼	跡径径4.8
46	194	4358	3	SK351	弥生土器	甕		40	反	22.9	20.0		にぶい焼	
46	195	2730	3	SK351	弥生土器	甕		20			16.1		にぶい焼	
46	196	4357	3	SK351	弥生土器	台付甕		30					灰黄焼	跡径9.6, 跡径径5.3
47	197	4405	3	SK352	弥生土器	内反口縁蓋		20			16.3		にぶい焼	跡径8.0
47	198	4390	3	SK352	弥生土器	内反口縁蓋		30			16.1		にぶい焼	跡径8.2
47	199	4362・4411	3	SK352	弥生土器	直口縁蓋		20			15.0		透黄焼	
47	200	4401	3	SK352	弥生土器	直口縁蓋		10	反		15.8		透黄焼	跡径9.1
47	201	4404・4412	3	SK352	弥生土器	直口縁蓋		30		13.6	9.2		焼	跡径6.4
47	202	4376	3	SK352	弥生土器	く字鉢		30	反	15.0	13.6		にぶい焼	
47	203	4391	3	SK352	弥生土器	外反坪部高杯		10	反		24.4		にぶい焼	
47	204	4374	3	SK352	弥生土器	外反坪部高杯		10	反		21.0		透黄焼	
47	205	4408	3	SK352	弥生土器	外反坪部高杯		20	反		22.7		灰白	
47	206	4411	3	SK352	弥生土器	外反坪部高杯		20	反		20.4		にぶい焼	
47	207	4372・4409	3	SK352	弥生土器	外反坪部高杯		80		17.2	21.8		にぶい焼	跡径12.4, 跡径径4.2
47	208	4380・4400	3	SK352	弥生土器	外反坪部高杯		50			21.6		にぶい焼	跡径径4.2
47	209	4403	3	SK352	弥生土器	高杯		40					にぶい焼	跡径径4.6
47	210	4391	3	SK352	弥生土器	高杯		40					透黄焼	跡径径4.2
47	211	4406	3	SK352	弥生土器	高杯		60					にぶい焼	跡径12.1, 跡径径4.2
47	212	4411	3	SK352	弥生土器	高杯		5	反				灰白	跡径115.2
47	213	4371	3	SK352	弥生土器	高杯		10	反				透黄焼	跡径15.6
47	214	4399	3	SK352	弥生土器	高杯		20					にぶい焼	跡径径4.4
47	215	4411	3	SK352	弥生土器	高杯		50					にぶい焼	跡径8.6, 跡径径3.3
47	216	4402・4396	3	SK352	弥生土器	台付甕		80		22.3	29.1	16.9	にぶい焼	跡径10.1, 跡径径5.8
47	217	4365	3	SK352	弥生土器	甕		20	反	18.4	16.4		灰黄焼	
47	218	4363	3	SK352	弥生土器	台付甕		30					灰黄	跡径9.4, 跡径径5.2
47	219	4397	3	SK352	弥生土器	台付甕		20					灰黄焼	跡径6.9, 跡径径4.7
47	220	4398	3	SK352	弥生土器	台付甕		30					にぶい焼	跡径8.4, 跡径径5.1
48	221	4528	3	SK361	弥生土器	直立口縁蓋		95		14.7	13.7	9.2	にぶい焼	底径5.5
48	222	4484	3	SK361	弥生土器	直立口縁蓋		10			18.0		透黄焼	

Fig.	番号	取上番号	工区	遺 物	種 別	材 質	数量	反転	割合	容 量	口 径	色 澤	備 考
48	223	4456	3	SK361	粘土土器	折込口縁壺	20				16.0	浅黄褐色	直径10.3
48	224	4443	3	SK361	粘土土器	折込口縁壺	10	反			16.0	浅黄褐色	
48	225	4544	3	SK361	粘土土器	折込口縁壺	30	反			12.7	黄褐色	直径9.0
48	226	4542	3	SK361	粘土土器	折込口縁壺	20				12.8	にぶい黄	
48	227	4496・4572	3	SK361	粘土土器	折込口縁壺	20				12.8	にぶい黄	
48	228	4533・4485	3	SK361	粘土土器	内腹口縁壺	30				16.0	にぶい黄	直径9.6
48	229	4523・4467	3	SK361	粘土土器	内腹口縁壺	30	23.1			15.0	にぶい黄	
48	230	4485	3	SK361	粘土土器	内腹口縁壺	20				17.8	にぶい黄	
48	231	4478	3	SK361	粘土土器	内腹口縁壺	20				17.0	浅黄褐色	
48	232	4527	3	SK361	粘土土器	内腹口縁壺	20				17.3	にぶい黄	
48	233	4447	3	SK361	粘土土器	内腹口縁壺	20				13.2	にぶい黄	
48	234	4441・4442	3	SK361	粘土土器	複合口縁壺	40				23.2	にぶい黄	直径9.4
48	235	4586・4486	3	SK361	粘土土器	複合口縁壺	20				21.6	黄	直径13.6
48	236	4572	3	SK361	粘土土器	壺	30	反	16.6		10.8	灰黄	
48	237	4572	3	SK361	粘土土器	壺	5					浅黄褐色	
48	238	4572	3	SK361	粘土土器	壺	5					にぶい黄	
48	239	4572	3	SK361	粘土土器	壺	5					灰白	
48	240	4473	3	SK361	粘土土器	壺	5					浅黄褐色	
48	241	4535	3	SK361	粘土土器	壺	10	反	40.8			にぶい黄	
48	242	4522・4498	3	SK361	粘土土器	<字鉢	30		22.9		16.0	にぶい黄	
48	243	4446・4572	3	SK361	粘土土器	<字鉢	40	反			23.4	にぶい黄	
48	244	4529	3	SK361	粘土土器	裝飾小型直口鉢	90			7.5	7.7	灰白	直径2.7
48	245	4572	3	SK361	粘土土器	瓢壺	5					黄褐色	
48	246	4492	3	SK361	粘土土器	小型直口鉢	80			6.3	8.8	にぶい黄	直径4.4
48	247	4490	3	SK361	粘土土器	小型壺	50		10.5			にぶい黄	直径3.0
48	248	4491	3	SK361	粘土土器	小型壺	70		10.2			黄	直径3.2
48	249	4452・4468	3	SK361	粘土土器	破形外部高杯	20	反			29.8	にぶい黄	脚縁径4.9
48	250	4526・4518	3	SK361	粘土土器	破形外部高杯	50				26.8	にぶい黄	
48	251	4512・4532	3	SK361	粘土土器	高杯	30					黄	脚縁径14.4
48	252	4516・4503	3	SK361	粘土土器	壺	20		19.8		16.2	明褐色	
48	253	4549	3	SK361	粘土土器	壺	20	反	15.2		11.5	灰褐	
48	254	458	3	SK361	粘土土器	壺	30	反			20.0	浅黄褐色	
48	255	4525	3	SK361	粘土土器	壺	10	反			16.6	浅黄褐色	
48	256	4446	3	SK361	粘土土器	台付壺	30					にぶい黄	脚縁8.7, 脚縁径5.1
48	257	4514	3	SK361	粘土土器	大型壺	10	反			46.0	にぶい黄	
48	258	58	1	SK01	粘土土器	壺	5					にぶい黄	
48	259	174	1	SK02	粘土土器	小型直口鉢壺	50		13.6	14.4	8.8	にぶい黄	直径4.9
48	260	60	1	SK03	粘土土器	壺	5					にぶい黄	
48	261	60・192	1	SK03	粘土土器	複合口縁壺	10	反			26.4	にぶい黄	
48	262	183・60	1	SK03	粘土土器	壺	70		25.9			にぶい黄	直径5.9
48	263	296	1	SK20	粘土土器	外反外部高杯	5	反			21.5	黄	
48	264	299	1	SK20	粘土土器	外反外部高杯	5					にぶい黄	
48	265	594	1	SK43	粘土土器	小型内腹口縁壺	5	反			9.2	明褐色	
48	266	595	1	SK43	粘土土器	壺	5					浅黄褐色	
48	267	515	1	SK43	粘土土器	壺	5					浅黄褐色	
48	268	592	1	SK43	粘土土器	台付壺	5	反				浅黄褐色	脚縁10.7
48	269	643	1	SK50	粘土土器	壺	5					黄	
48	270	563	1	SK50	粘土土器	壺	5					浅黄褐色	
48	271	530	1	SK50	粘土土器	瓢壺	10	反			10.0	にぶい黄	
48	272	545	1	SK50	粘土土器	内腹口縁縁壺	10	反			12.6	にぶい黄	
48	273	642	1	SK50	粘土土器	高杯	20	反				にぶい黄	脚縁13.6
48	274	640	1	SK50	粘土土器	高杯	40					黄	脚縁12.4
48	275	703	1	SK50	粘土土器	台付壺	10	反				にぶい黄	脚縁9.8, 脚縁径5.2
48	276	562	1	SK50	石製品	叩き石	100		12.2	8.3	3.0		384.3g, 浅灰色
48	277	577	1	SK57	粘土土器	裝飾高杯	5	反				灰黄褐色	
48	278	574	1	SK59	粘土土器	<字破形外部高杯	5	反			22.1	黄	
48	279	267	1	SK69	粘土土器	内腹口縁壺	10	反			14.8	にぶい黄	直径9.4
48	280	1028	1	SK79	粘土土器	外反外部高杯	20	反			19.9	にぶい黄	
48	281	1026	1	SK79	粘土土器	高杯	10					にぶい黄	脚縁径3.4
48	282	1027	1	SK79	粘土土器	高杯	40					にぶい黄	脚縁径4.5
48	283	2205・2206	2	SK208	粘土土器	<字鉢	80		10.1	8.0	9.2	浅黄褐色	
48	284	2091	2	SK208	粘土土器	<字破形外部高杯	20	反			21.4	浅黄褐色	
48	285	2131・2135	2	SK209	粘土土器	壺	60		16.2			にぶい黄	直径3.2
48	286	2137	2	SK209	粘土土器	壺	20					にぶい黄	直径4.6
48	287	2138	2	SK209	粘土土器	<字鉢	30	反	18.6		18.6	波褐色	
48	288	2128	2	SK209	粘土土器	<字鉢	10	反	14.4		15.0	にぶい黄	
48	289	2152	2	SK212	粘土土器	壺	5					灰白	
48	290	2102	2	SK212	粘土土器	外反外部高杯	5	反			24.0	明赤褐色	
48	291	2761	2	SK212	粘土土器	高杯	40					黄	脚縁径4.8
48	292	2153	2	SK212	粘土土器	高杯	40					にぶい黄	脚縁径4.8
48	293	2145	2	SK212	粘土土器	高杯	20	反				黄	脚縁径5.0
48	294	2150	2	SK212	粘土土器	高杯	20					にぶい黄	脚縁径3.4
48	295	2151	2	SK212	粘土土器	壺	10					灰黄褐色	
48	296	2212	2	SK215	粘土土器	高杯	50	反				浅黄褐色	脚縁径4.4

出土遺物観察表

Fig.	番号	出土番号	工数	遺物	種別	材料	数量	直径	高さ	口径	色	備考	
59	297	2207	2	SK215	弥生土器	壺	30	反	17.0	17.2	にぶい黄緑		
59	298	2447・2448	2	SK233	弥生土器	台付壺	50		20.4	23.8	19.5	にぶい黄緑	脚径9.2、脚高5.7
59	299	4119	3	SK304	弥生土器	釜	5					にぶい黄緑	
59	300	4117	3	SK304	弥生土器	高杯	30				黄	脚径4.1	
59	301	4118	3	SK304	弥生土器	高杯	30				黄	脚径4.4	
59	302	4126	3	SK315	弥生土器	壺	10	反			黄		
59	303	4140	3	SK315	弥生土器	直口壺	20	反		10.4	にぶい黄緑		
59	304	4129	3	SK315	弥生土器	く字鉢	30		11.3	8.7	11.5	にぶい褐	底径5.6
59	305	4139	3	SK315	弥生土器	外反口部高杯	20	反			23.2	黄	
59	306	4166	3	SK320	弥生土器	石製品	90		6.5	4.1	2.1		47.8g、流紋岩
59	307	4156	3	SK320	弥生土器	装飾く字鉢	5	反			12.7	明赤褐	
59	308	4152	3	SK320	弥生土器	高杯	10	反				黄	脚径12.9
59	309	4166	3	SK320	弥生土器	壺	40		22.4		18.4	褐灰色に黄	
59	310	4212	3	SK337	弥生土器	外反口縁壺	20	反			14.3	にぶい黄緑	
59	311	4234	3	SK337	弥生土器	小型壺	80		11.7			にぶい黄緑	底径5.2
59	312	4217	3	SK337	弥生土器	横合口縁壺	10	反			25.8	黄	
59	313	4219	3	SK337	弥生土器	く字鉢	5	反			9.8	にぶい黄緑	
59	314	4225	3	SK337	弥生土器	く字鉢	20	反			10.1	黄	
59	315	4219	3	SK337	弥生土器	装飾く字鉢	10	反			6.4	にぶい黄緑	径5.4
59	316	4329	3	SK350	弥生土器	高杯	50					にぶい黄	菊川系、脚径10.6、脚高4.3
59	317	4420	3	SK354	弥生土器	拡張口縁壺	5	反			24.7	黄	
59	318	4414	3	SK354	弥生土器	く字鉢	5	反			9.5	黄	
59	319	4415	3	SK354	弥生土器	台付壺	10					灰黄	脚径5.2
59	320	4425	3	SK355	弥生土器	壺	10					黄	径6.0
59	321	4423	3	SK355	弥生土器	高杯	30					黄	脚径3.5
59	322	4690・4691	3	SK356	弥生土器	内口縁壺	40	反		13.0		にぶい褐	径7.8
64	323	315	1	S003	弥生土器	高杯	30	反				にぶい黄緑	脚径4.6
64	324	317	1	S003	弥生土器	台付壺	10	反				にぶい黄緑	脚径5.8
64	325	917	1	S013	弥生土器	折返口縁壺	5					灰黄褐	
64	326	912	1	S013	弥生土器	横合口縁壺	5	反			24.3	黄	
64	327	922	1	S013	弥生土器	く字鉢	10	反			13.8	灰黄褐	
64	328	919	1	S013	弥生土器	壺	10				15.3	にぶい黄緑	
64	329	1043	2	S017	弥生土器	壺	10	反			19.0	にぶい黄褐	
64	330	2117	2	S061	弥生土器	小型壺	90		11.1	9.6	7.9	黄	
64	331	2118	2	S061	弥生土器	高杯	30	反				黄	脚径3.0
65	332	2590	2	S068	弥生土器	折返口縁壺	20				14.0	黄	径9.4
65	333	2446	2	S068	弥生土器	内口縁細頸壺	10				12.4	にぶい黄緑	
65	334	2249	2	S068	弥生土器	外反口部高杯	5	反			24.2	にぶい黄	
65	335	2591	2	S068	弥生土器	碗形部高杯	5	反			25.2	黄	
65	336	2338	2	S068	弥生土器	有縁高杯	10	反	12.8		12.4	にぶい黄緑	
65	337	2338	2	S068	弥生土器	高杯	10	反				にぶい黄緑	脚径12.0
65	338	2591	2	S068	弥生土器	壺	10	反	18.9		18.8	黄	
65	339	2591	2	S068	弥生土器	壺	5	反	19.8		19.8	にぶい黄緑	
65	340	2591	2	S068	弥生土器	壺	20	反	24.3		23.2	にぶい黄緑	
65	341	2591	2	S068	弥生土器	台付壺	20					脚径10.5、脚高6.3	
65	342	2738	2	S060	弥生土器	折返口縁壺	10	反			14.0	にぶい黄緑	径9.2
65	343	2740	2	S060	弥生土器	外反口縁壺	10	反			9.7	黄	径6.0
65	344	2756	2	S060	弥生土器	釜	5					灰白	
65	345	2736	2	S060	弥生土器	壺	10					にぶい褐	底径6.8
65	346	2740	2	S060	弥生土器	外反口部高杯	10	反			24.0	黄	
65	347	2737	2	S060	弥生土器	高杯	10					黄	脚径4.0
65	348	2739	2	S060	弥生土器	台付壺	10					灰黄褐	脚径5.2
66	349	4581	3	SP102	弥生土器	石製品	60		6.7	5.4	1.4		66.5g、緑色片岩
66	350	344	1	SP24	弥生土器	小型壺	60		9.0			にぶい黄緑	径3.2
66	351	491	1	SP73	弥生土器	釜	5					灰黄褐	
66	352	894	1	SP131	弥生土器	台付壺	30					にぶい黄	脚径10.0
66	353	962	1	SP170	弥生土器	壺	5					にぶい黄褐	
66	354	964	1	SP172	弥生土器	壺	10		20.3		20.0	にぶい黄緑	
66	355	2729	2	SP251	弥生土器	壺	5					にぶい黄	
66	356	3697	3	SP575	弥生土器	台付壺	10	反				にぶい黄	脚径9.0、脚高4.8
66	357	3716	3	SP597	弥生土器	石製品	90		9.4	9.3	2.9		276.5g、流紋岩
66	358	3787	3	SP713	弥生土器	内口口縁壺	20	反			14.6	黄	
66	359	3788	3	SP713	弥生土器	外反口部高杯	10	反			20.6	黄	
66	360	3852	3	SP786	弥生土器	壺	5					にぶい黄	
66	361	3854	3	SP786	弥生土器	高杯	10	反				にぶい黄	脚径16.0
66	362	3874	3	SP813	弥生土器	壺	5					灰白	
66	363	3933	3	SP874	弥生土器	台付壺	30					にぶい黄緑	脚径7.5
66	364	4045	3	SP1009	弥生土器	石製品	80		15.1	8.7	6.8		1161.8g、流紋岩
70	365	2021	2	包金層	弥生土器	二重口縁壺	5					黄	
70	366	2012	2	包金層	弥生土器	装飾く字鉢	5					にぶい黄	
70	367	2012	2	包金層	弥生土器	横合口縁壺	10	反			19.7	灰白	
70	368	2012	2	包金層	弥生土器	横合口縁壺	10	反			23.8	灰白	
70	369	4176	3	包金層	弥生土器	壺	5	反				にぶい黄	
70	370	2012	2	包金層	弥生土器	壺	5					灰白	

Fig	番号	取上番号	工法	遺 物	種 別	数	材質	形状	寸法	色 調	備 考	
70	371	2021	2	包含層	赤生土器	壺	5			浅黄褐色		
70	372	2012	2	包含層	赤生土器	壺	5			にぶい黄褐色		
70	373	2012	2	包含層	赤生土器	壺	5			にぶい褐色		
70	374	2012	2	包含層	赤生土器	壺	5			灰白		
70	375	2045	2	包含層	赤生土器	壺	5			灰白		
70	376	142	1	包含層	赤生土器	壺	5			灰黄		
70	377	3453	3	包含層	赤生土器	小形壺	30	反		にぶい褐色	底径4.3	
70	378	2001	2	包含層	赤生土器	小形壺	70		9.2	にぶい褐色	底径2.8	
70	379	2012	2	包含層	赤生土器	く字鉢	20	反	21.8	20.4	にぶい褐色	
70	380	2012	2	包含層	赤生土器	外反牙部高杯	5	反		29.0	にぶい褐色	
70	381	2012	2	包含層	赤生土器	外反牙部高杯	5				にぶい黄褐色	
70	382	2012	2	包含層	赤生土器	高杯	60				にぶい黄褐色	御願係4.3
70	383	2012	2	包含層	赤生土器	高杯	40	反			にぶい褐色	御願係15.0、御願係4.8
70	384	2012	2	包含層	赤生土器	高杯	30	反			にぶい黄褐色	御願係12.8、御願係4.2
71	385	391	1	包含層	赤生土器	裝飾高杯	20	反			褐色	御願係14.2
71	386	2012	2	包含層	赤生土器	壺	10	反	19.2	17.2	灰黄褐色	
71	387	33	1	包含層	赤生土器	壺	30	反	18.4	15.2	にぶい褐色	
71	388	53	1	包含層	赤生土器	壺	30	反	23.6	19.2	にぶい黄褐色	
71	389	3309	3	包含層	赤生土器	5字甕	5	反		15.8	灰黄褐色	
71	390	3228	3	包含層	赤生土器	台付甕	30				灰黄褐色	御願係8.6
71	391	3405	3	包含層	赤生土器	台付甕	30				褐色	御願係3.4
71	392	4776	3	包含層	石製品	叩き石	100		5.4	4.5	2.2	87.3g、砂岩
71	393	608	1	SK60	石器	磨製石斧	100		5.2	3.3	1.2	41.0g、泥岩
72	394	4167	3	包含層	石製品	砥石	100					18.9g、軽石
72	395	2740	2	包含層	石製品	砥石	100		3.8	2.5	2.2	5.8g、軽石
72	396	3692	3	包含層	石製品	砥石	100		5.6	4.8	3.8	30.2g、軽石
72	397	49	1	包含層	石製品	砥石	100		9.3	6.5	4.1	37.5g、軽石
72	398	2012	2	包含層	石製品	砥石	100					19.9g、軽石
72	399	2085	2	包含層	石製品	砥石	100					26.0g、軽石
84	1	2089	2	SK207	土師器	横皿	30			2.8	16.2	黄褐色
84	2	4148	3	SK317	灰釉陶器	長頸壺	10	反			12.2	灰白
84	3	4148	3	SK317	土師器	壺	30	反	3.3	12.0	灰白	底径5.6
84	4	4147	3	SK317	土師器	壺	10	反		24.4	灰白	
84	5	4148	3	SK317	土師器	壺	5	反		26.6	黄褐色	
84	6	4148	3	SK317	土師器	壺	5	反		23.0	黄褐色	
84	7	4148	3	SK317	土師器	壺	10	反			にぶい褐色	底径5.7
84	8	4189	3	SK322	土師器	壺	5	反		23.8	にぶい黄褐色	
84	9	4170	3	SK322	土師器	壺	5	反		23.2	にぶい黄褐色	
84	10	4171	3	SK322	土師器	鉢	10	反	16.7		17.6	にぶい褐色
84	11	4179 + 4178	3	SK325	土師器	壺	10	反		26.3	にぶい黄褐色	
84	12	4198	3	SK332	灰釉陶器	碗	10	反			灰白	底径7.2
84	13	4197	3	SK332	灰釉陶器	壺	10	反			灰	底径5.5
84	14	4203	3	SK333	灰釉陶器	碗	50				灰白	底径8.0
84	15	3561 + 4207	3	SK333	灰釉陶器	長頸壺	20	反			灰	頸径5.0
84	16	4204	3	SK333	灰釉陶器	壺	5	反			灰	底径16.2
84	17	4210	3	SK334	灰釉陶器	壺	40				にぶい黄褐色	底径5.5
89	18	4614	3	SD107	須恵器	横皿	30	反		22.4	灰	
89	19	4689	3	SD107	須恵器	坏蓋	10	反		18.0	灰白	
89	20	4689 + 2017	3	SD107	須恵器	坏蓋	10	反		17.8	灰白	
89	21	4619	3	SD107	須恵器	横皿	50			16.6	灰	
89	22	4599	3	SD107	須恵器	横皿	60			15.8	灰	
89	23	4689	3	SD107	須恵器	横皿	10				灰白	横径2.8
89	24	4689	3	SD107	須恵器	有台坏身	10	反			灰白	底径8.8
89	25	4689	3	SD107	須恵器	有台坏身	10	反			灰白	底径9.5
89	26	4689	3	SD107	須恵器	甕坏	20	反	6.2	17.2	灰白	底径11.6
89	27	4689	3	SD107	須恵器	甕坏	20	反			灰白	底径11.0
89	28	4618	3	SD107	須恵器	甕坏	30	反	3.9	11.6	灰	底径7.6
89	29	4596	3	SD107	須恵器	甕坏	60		3.5	10.5	黄灰	底径8.6
89	30	4689	3	SD107	須恵器	甕坏	10	反			灰白	底径8.2
89	31	4685	3	SD107	須恵器	甕坏	50		3.6	9.8	灰	底径6.0
89	32	4686	3	SD107	須恵器	甕坏	20				灰白	底径7.9、書
89	33	4587	3	SD107	須恵器	皿	40	反	2.2	16.0	灰	
89	34	4689	3	SD107	須恵器	皿	10	反		14.4	灰白	
89	35	4644	3	SD107	須恵器	高杯	10	反			灰	御願係12.8
89	36	4682	3	SD107	須恵器	鉢	30	反	22.1	20.0	灰	
89	37	4689	3	SD107	須恵器	壺	20	反		33.0	灰白	
89	38	4689	3	SD107	須恵器	壺	20	反		24.0	灰	
90	39	4689 + 3388	3	SD107	灰釉陶器	皿	20	反	2.5	16.0	灰白	底径9.0
90	40	4600	3	SD107	灰釉陶器	皿	40	反	2.5	15.4	灰オリーブ	底径8.4
90	41	3021	3	SD107	灰釉陶器	皿	10	反	2.9	15.4	灰	底径7.0
90	42	4689	3	SD107	灰釉陶器	皿	10			15.0	灰白	
90	43	4689	3	SD107	灰釉陶器	皿	10	反		15.6	灰白	
90	44	4642	3	SD107	灰釉陶器	碗	60				浅黄褐色	底径6.6
90	45	4641	3	SD107	灰釉陶器	碗	60		6.9	16.9	灰白	底径7.0

出土遺物観察表

Fig.	番号	出土番号	工数	遺物	種類	数量	形状	長さ	口径	色	備考	
90	46	4653	3	SD107	灰釉陶器	碗	70		6.1	14.9	灰黄	底径6.4
90	47	4689・3031	3	SD107	灰釉陶器	碗	20	反	4.5	16.5	灰白	底径7.7
90	48	4689・3424	3	SD107	灰釉陶器	碗	30	反			灰白	底径5.8
90	49	4628	3	SD107	灰釉陶器	碗	40		4.1	13.9	灰白	底径5.9
90	50	4621	3	SD107	灰釉陶器	碗	30				灰白	底径5.6
90	51	4648	3	SD107	灰釉陶器	碗	20				灰	底径6.6
90	52	4689	3	SD107	灰釉陶器	長頸壺	10	反			灰	頸径5.2
90	53	4637	3	SD107	灰釉陶器	壺	40	反	18.4		灰	底径10.4
90	54	4638	3	SD107	灰釉陶器	平瓶	10	反	22.4	8.6	にぶい黄緑	
90	55	4671	3	SD107	灰釉陶器	平瓶	10		18.0	5.6	灰	
90	56	4597	3	SD107	灰釉陶器	壺	10				赤灰	底径7.8
90	57	4590	3	SD107	灰釉陶器	壺	10				灰白	底径10.2
90	58	4647	3	SD107	灰釉陶器	壺	30	反			灰白	底径9.2
90	59	4689・3211	3	SD107	灰釉陶器	壺	10				灰白	底径12.6
90	60	4636	3	SD107	灰釉陶器	壺	5	反			灰	底径18.8
90	61	4018	3	SD107	土師器	有台坪	40	反	5.2	16.0	にぶい黄緑	底径9.0
90	62	4690	3	SD107	土師器	有台坪	60		4.5	13.0	にぶい黄緑	底径9.2
90	63	4690	3	SD107	土師器	有台坪	40				にぶい黄緑	
90	64	4690	3	SD107	土師器	坪	30	反		12.0	にぶい黄緑	
90	65	4595	3	SD107	土師器	坪	30	反	3.5	12.4	にぶい黄	底径6.6
90	66	4603	3	SD107	土師器	坪	30	反	3.8	12.2	にぶい黄	底径6.4
90	67	4690	3	SD107	土師器	坪	30	反	3.5	13.0	にぶい黄緑	
90	68	4665・4666	3	SD107	土師器	坪	30	反	4.0	12.0	にぶい黄緑	底径6.0
90	69	4667	3	SD107	土師器	坪	20	反	3.0	12.8	灰黄	底径6.8
90	70	4602	3	SD107	土師器	坪	30	反	3.2	12.2	にぶい黄緑	底径6.0
90	71	4691	3	SD107	土師器	坪	30	反	3.6	12.3	透黄緑	
90	72	4034	3	SD107	土師器	坪	80		3.3	10.1	にぶい黄緑	底径7.4
90	73	4668	3	SD107	土師器	坪	20	反			にぶい黄	底径6.6
90	74	4690	3	SD107	土師器	坪	30	反		12.0	にぶい黄緑	
90	75	4042	3	SD107	土師器	坪	10	反		9.8	にぶい黄	
90	76	4684	3	SD107	土師器	坪	90		2.9	12.2	透黄緑	底径6.8
90	77	4690	3	SD107	土師器	坪	20	反		13.8	透黄	
90	78	4690	3	SD107	土師器	坪	30	反		12.8	にぶい黄緑	
90	79	4691	3	SD107	土師器	坪	20	反		13.6	にぶい黄緑	
90	80	4043	3	SD107	土師器	坪	90		3.9	12.7	にぶい黄緑	底径8.0
90	81	4690	3	SD107	土師器	坪	10	反		11.0	にぶい黄緑	
90	82	4690	3	SD107	土師器	坪	10	反		11.8	にぶい黄緑	
91	83	4690	3	SD107	土師器	坪	30	反	3.6	12.0	灰黄緑	底径7.6
91	84	4603	3	SD107	土師器	坪	50		4.1	12.0	にぶい黄緑	底径8.4
91	85	4612・4616	3	SD107	土師器	皿	100		2.6	15.3	にぶい黄緑	底径11.0
91	86	4690	3	SD107	土師器	皿	10	反	1.6	15.0	にぶい黄緑	
91	87	4690	3	SD107	土師器	皿	50		1.9	14.7	にぶい黄緑	
91	88	4656	3	SD107	土師器	皿	30	反	2.0	14.6	灰黄	
91	89	4691	3	SD107	土師器	皿	10	反	2.0	14.7	にぶい黄	
91	90	4690	3	SD107	土師器	皿	30	反	1.9	14.3	透黄緑	
91	91	4690	3	SD107	土師器	皿	10	反	1.5	13.2	にぶい黄	
91	92	4018	3	SD107	土師器	鉢	10	反		23.6	にぶい黄緑	
91	93	4690	3	SD107	土師器	飯	20	反	3.7	22.2	にぶい黄緑	鉢径12.4
91	94	4633	3	SD107	土師器	高盤	30				にぶい黄	鉢径13.4
91	95	4617	3	SD107	土師器	壺	10	反		27.0	にぶい黄	
91	96	4041	3	SD107	土師器	壺	5	反		26.8	にぶい褐色	
91	97	4690	3	SD107	土師器	壺	10	反		27.0	にぶい黄緑	
91	98	4690	3	SD107	土師器	壺	10	反		26.8	にぶい黄	
91	99	4040	3	SD107	土師器	壺	5	反		24.4	にぶい黄緑	
91	100	4690	3	SD107	土師器	壺	10	反		25.6	にぶい黄緑	
91	101	4687	3	SD107	土師器	壺	10	反		23.8	透黄緑	
91	102	4632	3	SD107	土師器	壺	5	反		24.8	にぶい黄緑	
91	103	4690	3	SD107	土師器	壺	10	反		24.8	灰白	
91	104	4690	3	SD107	土師器	壺	5	反		24.0	にぶい黄	
91	105	4690	3	SD107	土師器	壺	10	反		23.8	黄	
91	106	4690	3	SD107	土師器	壺	10	反		23.5	にぶい黄	
91	107	4632	3	SD107	土師器	壺	20	反	22.2		透黄緑	
91	108	4680	3	SD107	土師器	壺	10	反		22.0	にぶい黄緑	
91	109	4690	3	SD107	土師器	壺	10	反		22.0	透黄	
91	110	4690	3	SD107	土師器	壺	10	反		21.6	にぶい黄緑	
91	111	4690	3	SD107	土師器	壺	10	反		21.8	にぶい黄	
91	112	4690	3	SD107	土師器	壺	5	反		19.4	にぶい黄	
92	113	4832	3	SD109	金銅製品	銅印			2.7	2.7	2.9	29.4g
93	114	4697	3	SD109	土師器	坪	90		3.6	11.2	にぶい黄	底径4.9、墨書
94	115	580	1	S305	浪嘉器	壺	5	反		14.2	灰黄	
94	116	615	1	S306	土師器	内附坪	50	反	3.1	12.4	黄	増文
94	117	2239	2	S307	浪嘉器	壺	30				灰白	底径6.0
94	118	4575	3	SD101	灰釉陶器	碗	10	反		14.0	灰白	
94	119	4575	3	SD101	石製品	砥石	60		5.9	3.6	3.8	65.2g、流紋岩

Fig	番号	取上番号	工法	遺 物	部 位	材 質	数量	反転	面数	体積	口径	色 調	備 考
94	120	4694	3	SD108	須臾器	皿	10	反			14.8	灰白	
94	121	4708	3	SD110	須臾器	有台杯	30					灰白	底径9.4
94	122	4705	3	SD110	灰胎陶器	碗	30	反		6.4	18.8	灰	底径7.6
94	123	4710	3	SD110	須臾器	有台杯	10	反			16.1	灰	
94	124	4704	3	SD110	須臾器	有台杯	20	反		5.2	15.8	灰	底径9.1
94	125	4713	3	SD112	須臾器	皿	10	反		1.6	16.9	灰白	
94	126	4715	3	SD113	灰胎陶器	碗	10	反				灰白	底径8.0
95	127	167	1	SP18	土師器	杯	20				13.9	にぶい	底径
95	128	853	1	SP29	須臾器	皿	5	反			13.9	灰	
95	129	620	1	SP29	土師器	皿	10	反		1.8	15.8	にぶい	底径
95	130	853	1	SP29	土師器	壺	5	反				19.4	底径
95	131	439	1	SP47	土師器	壺	10	反				15.4	底径
95	132	684	1	SP100	須臾器	有台杯	30	反				15.1	底径
95	133	202	1	SP155	土師器	杯	5	反			13.8	にぶい	底径
95	134	3659	3	SP533	灰胎陶器	碗	10	反				灰	底径7.4
95	135	3665	3	SP539	灰胎陶器	碗	30	反				灰	底径6.0
95	136	3706	3	SP585	灰胎陶器	碗	10	反			15.4	灰白	
95	137	3712	3	SP583	須臾器	碗蓋	10					灰	底径2.6
95	138	3733	3	SP620	土師器	壺	5	反		24.6		にぶい	底径
95	139	3733	3	SP620	灰胎陶器	碗	10	反			15.6	灰白	
95	140	3778	3	SP699	灰胎陶器	平皿	5	反	16.8			灰	
95	141	3848	3	SP785	須臾器	皿	10	反		2.3	16.8	灰	底径11.2
95	142	3848	3	SP785	須臾器	壺	10	反	15.6			灰	
95	143	3927	3	SP868	土師器	壺	5	反			22.0	灰	
95	144	3980	3	SP939	灰胎陶器	壺	20	反				にぶい	底径10.2
95	145	4743	3	SE02	須臾器	碗蓋	10	反			22.8	灰白	
95	146	4736	3	SE02	須臾器	有台杯	30	反				灰白	底径8.8
95	147	4738	3	SE02	須臾器	有台杯	20	反				灰白	底径10.0
95	148	4741	3	SE02	須臾器	無台碗	20	反		15.0	14.5	灰白	底径4.4
95	149	4743	3	SE02	須臾器	皿	10	反		1.8	17.0	灰白	底径12.0
95	150	4742	3	SE02	須臾器	平皿	20	反				灰白	底径11.6
95	151	4743	3	SE02	灰胎陶器	碗	10	反				灰白	底径8.6
95	152	3419・4743	3	SE02	灰胎陶器	段皿	30	反		3.2	20.8	灰白	底径9.8
95	153	4743	3	SE02	灰胎陶器	段皿	10	反			19.0	灰白	
95	154	4742	3	SE02	灰胎陶器	皿	20	反		2.5	13.4	灰	底径5.9
95	155	4742	3	SE02	灰胎陶器	碗	20	反				灰白	底径5.5
95	156	4742	3	SE02	灰胎陶器	碗	30					灰	底径8.0
95	157	4743	3	SE02	灰胎陶器	碗	20	反				灰白	底径6.6
95	158	4743	3	SE02	灰胎陶器	長頸壺	20	反	17.0			灰白	
95	159	4744	3	SE02	土師器	内轆轤	5	反			19.8	にぶい	底径
95	160	4744	3	SE02	土師器	有台杯	30	反		4.5	13.8	にぶい	底径7.8
95	161	4743	3	SE02	土師器	有台杯	10				15.2	にぶい	底径
95	162	4743	3	SE02	土師器	杯	10	反			14.0	灰	
95	163	4744	3	SE02	土師器	杯	10	反		3.3	13.0	にぶい	底径9.8
95	164	4744	3	SE02	土師器	杯	20	反		3.0	12.0	にぶい	底径6.6
95	165	4744	3	SE02	土師器	杯	50	反		3.2	13.4	灰白	底径9.1
95	166	4744	3	SE02	土師器	壺	5	反			21.1	にぶい	底径
95	167	4744	3	SE02	土師器	壺	5	反			20.4	灰	
95	168	4743	3	SE02	須臾器	陶馬	10						
95	169	4744	3	SE02	土製品	製塩土器	20					にぶい	底径
95	170	4830	3	SE02	木製品	井戸枠(製板)	70		102.8	42.5	4.2		
95	171	4831	3	SE02	木製品	井戸枠(製板)	70		103.4	44.8	4.6		
95	172	4826	3	SE02	木製品	井戸材(底板)	80		87.0	8.4	2.0		
95	173	4825	3	SE02	木製品	井戸材(底板)	100		83.0	9.8	2.0		
95	174	3279	3	包含層	須臾器	杯身	5			13.0	11.1	灰	
95	175	2032	2	包含層	須臾器	杯身	30		11.3	3.8	9.7	灰	底径4.5
95	176	2001	2	表土	須臾器	碗蓋	90			2.9	18.7	灰	底径3.4
95	177	2011	2	包含層	須臾器	高杯	50					灰白	底径3.7
95	178	3549	3	包含層	須臾器	高杯	60					灰	底径4.0
95	179	31	1	包含層	須臾器	平皿	30				7.5	灰	底径5.1
95	180	3466	3	包含層	須臾器	碗蓋	20	反			17.9	灰白	
95	181	3278	3	包含層	須臾器	有台杯身	50					灰	底径9.6
95	182	3501	3	包含層	須臾器	碗杯	20	反		4.7	14.8	灰	底径10.9
95	183	3044・3048	3	包含層	須臾器	碗杯	30	反		4.5	12.0	灰白	底径9.8
95	184	3012	3	包含層	須臾器	碗杯	40	反		4.1	11.8	灰	底径8.0
95	185	3028	3	包含層	須臾器	碗杯	10	反			14.4	灰	
95	186	3568	3	包含層	須臾器	碗杯	30	反		4.2	9.8	灰	底径7.2
95	187	3389	3	包含層	須臾器	双耳碗杯	40	反		4.0	9.8	灰	底径7.5
95	188	3556	3	包含層	須臾器	碗杯	20	反				灰白	底径6.0, 磨面
95	189	3559	3	包含層	須臾器	碗杯	40	反				灰	底径6.7, 磨面
95	190	3527	3	包含層	須臾器	蓋	20	反		2.7	13.6	灰	底径7.2
95	191	3503	3	包含層	須臾器	壺	10	反		2.0	14.0	灰白	底径5.1
95	192	3385	3	包含層	須臾器	短頸壺	10		3.3		4.6	灰白	
95	193	3388	3	包含層	灰胎陶器	皿	30	反		2.4	16.0	灰白	底径8.7

出土遺物観察表

Fig.	番号	出土番号	工数	遺 跡	品 類	種 別	形状・寸法	重量	反転	特徴	表面	口縁	色 調	備 考
99	194	3331	3	包含層	灰胎陶器	皿	5		反	5.5	15.0	灰白		底径9.4
99	195	3001	3	包含層	灰胎陶器	皿	50		反	3.1	15.4	灰白		底径6.4
99	196	377	1	包含層	灰胎陶器	碗	20		反			灰白		底径7.4
99	197	3588	3	包含層	灰胎陶器	碗	50		反	4.9	15.4	灰		底径7.3、墨書
99	198	3413	3	包含層	灰胎陶器	深碗	90			6.4	15.8	灰白		底径7.2
99	199	378	1	包含層	灰胎陶器	碗	60			3.9	14.4	灰オリーブ		底径6.8
99	200	3409	3	包含層	灰胎陶器	皿	40		反	5.3	15.6	灰白		底径6.6
99	201	3557	3	包含層	灰胎陶器	長頸壺	30		反	14.8	10.0	灰白		底径6.2
99	202	3019	3	包含層	灰胎陶器	甕	40		反			灰白		底径5.4
99	203	18	1	包含層	灰胎陶器	仏師餅	30					灰白		底径7.5
100	204	3328	3	包含層	土師器	有台杯	40			5.5	14.8	にぶい黄橙		底径5.4
100	205	3432	3	包含層	土師器	内轆杯	30		反	3.9	14.2	明赤褐		へう記号
100	206	908	1	排水溝	土師器	杯	20		反	2.9	12.2	明赤褐		
100	207	113	1	包含層	土師器	杯	20		反	3.0	12.0	にぶい黄橙		
100	208	3082	3	包含層	土師器	杯	20		反	3.2	12.4	赤橙		
100	209	590	1	包含層	土師器	杯	30			3.5	12.8	赤橙		底径6.6
100	210	375	1	包含層	土師器	杯	20		反	13.4		褐灰		
100	211	3170	3	包含層	土師器	杯	10		反	3.2	13.5	赤橙		
100	212	3130	3	包含層	土師器	杯	30		反	3.3	12.4	赤橙		
100	213	3378	3	包含層	土師器	杯	50			4.1	12.2	明赤褐		
100	214	3432	3	包含層	土師器	杯	40		反	3.1	11.9	明赤褐		
100	215	3515	3	包含層	土師器	杯	40		反	3.4	11.8	にぶい黄橙		底径7.8
100	216	3093	3	包含層	土師器	台付碗	10					にぶい黄橙		底径12.2
100	217	3004	3	包含層	土師器	甕	5		反		35.6	にぶい黄		
100	218	4166	3	SK320	土師器	甕	5		反		32.2	にぶい黄		
100	219	4182	3	SK325	土師器	甕	5		反		31.9	にぶい黄		
100	220	3003・3159	3	包含層	土師器	甕	60			26.0	25.0	にぶい黄		
100	221	3376・3379	3	包含層	土師器	甕	5		反		25.7	にぶい黄		
100	222	3374	3	包含層	土師器	甕	10		反		24.4	灰黄		
100	223	3370	3	包含層	土師器	甕	5		反		23.9	にぶい黄橙		
100	224	3560	3	包含層	土師器	甕	10		反		22.8	透黄橙		
100	225	3146	3	包含層	土師器	甕	10		反		23.1	にぶい黄橙		
100	226	3334	3	包含層	土師器	甕	10		反		22.0	にぶい黄橙		
100	227	3392	3	包含層	土師器	甕	5				21.1	にぶい黄橙		
100	228	3144	3	包含層	土師器	甕	10				18.6	灰黄褐		
100	229	2022	2	包含層	土師器	甕	30					にぶい黄橙		底径6.4
100	230	3239	3	包含層	土師器	鉢	10		反	17.1	17.0	にぶい黄橙		
100	231	4160	3	SK320	土師器	鉢	10		反		12.8	透黄橙		
100	232	3180	3	包含層	土師器	甕	10					にぶい黄橙		底径4.4
100	233	3295	3	包含層	土師器	瓶	100					灰黄褐		
100	234	4764	3	包含層	石製品	砥石	50			6.2	5.2	2.4		88.6g、波紋岩
100	235	42	1	包含層	土師器	鉢形	95			2.5	5.0	にぶい黄橙		底径3.1
100	236	3216	3	包含層	土師器	壺形	95			3.6	2.6	3.0	灰黄褐	底径2.3
100	237	113	1	包含層	土師器	壺形	30		反	2.0	2.4	明黄褐		
100	238	4785	3	包含層	土師器	壺形	95			2.7	1.9	2.1	にぶい黄橙	
100	239	26	1	包含層	土製品	土馬	60							
100	240	3518	3	包含層	緑釉陶器	様碗	5		反		12.8	オリブ黄		K90
101	241	3083	3	包含層	土師器	甕	10		反		22.5	黄		
102	242	3339	3	包含層	土製品	輪				7.1	7.3	3.8		酸化：橙 還元：灰黄
102	243	2001	2	表土	土製品	輪				3.9	7.8	4.3		酸化：橙 還元：灰黄
102	244	3339	3	包含層	土製品	輪				4.9	3.3	3.5		酸化：にぶい黄 還元：灰黄
102	245	4094	3	SK301	土製品	輪				4.1	5.0			酸化：橙 還元：灰白
102	246	4100	3	SK301	鉄製品	鉄片				7.2	8.2	4.1		
102	247	4101	3	SK301	鉄製品	鉄片				6.3	7.8	4.0		
102	248	4106	3	SK301	鉄製品	鉄片				7.3	7.6	3.7		
102	249	4729	3	SD118	鉄製品	鉄片				6.7	8.8	4.3		
102	250	4017	3	SP982	鉄製品	鉄片				5.2	7.2	2.5		
102	251	3338	3	包含層	鉄製品	鉄片				6.6	8.8	3.6		
102	252	3340	3	包含層	鉄製品	鉄片				5.6	4.2	2.5		
102	253	4793	3	表層	鉄製品	鉄片				6.0	6.4	2.3		
102	254	4761	3	包含層	鉄製品	鉄片				4.2	5.6	2.7		
107	255	352	1	SE01	中世陶器	山茶碗	10		反			灰白		底径5.8
107	256	4746	3	SE03	中世陶器	山茶碗	90			6.1	16.5	灰白		底径7.3
107	257	4749	3	SE04	中世陶器	山皿	70			2.3	8.6	灰白		底径4.0
107	258	3233	3	包含層	土師器	かわらけ	40		反	2.4	9.9	灰黄褐		底径7.0
107	259	3239	3	包含層	土師器	かわらけ	30		反	3.0	9.2	にぶい黄		底径4.4
107	260	3305	3	包含層	土師器	かわらけ	20					にぶい黄橙		底径5.2
107	261	3125	3	包含層	土師器	羽蓋	5					にぶい黄橙		
107	262	3006	3	包含層	青磁	有縁皿	10		反		10.4	明オリブ灰		
107	263	3206	3	包含層	青磁	碗	10		反			オリブ灰		底径7.0
107	264	3005	3	包含層	白磁	碗	5		反			青灰白		底径6.2
107	265	4760	3	包含層	木製品	漆椀	10		反			黒・赤黒		

付 図

- Fig.146 松東遺跡 検出遺構全体図
- Fig.147 弥生時代 検出遺構
- Fig.148 奈良・平安時代 検出遺構
- Fig.149 鎌倉時代以降 検出遺構
- Fig.150 松東遺跡 検出遺構図①
- Fig.151 松東遺跡 検出遺構図②
- Fig.152 松東遺跡 検出遺構図③



Fig.146 松東遺跡 検出遺構全体図



Fig.147 弥生時代 検出遺構



Fig.148 奈良・平安時代 検出遺構

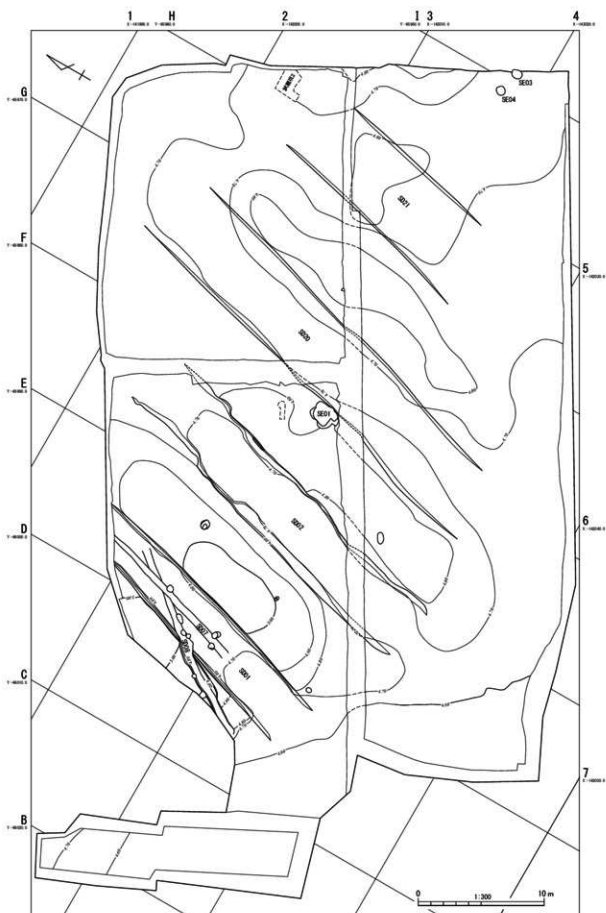


Fig.149 鎌倉時代以降 検出遺構

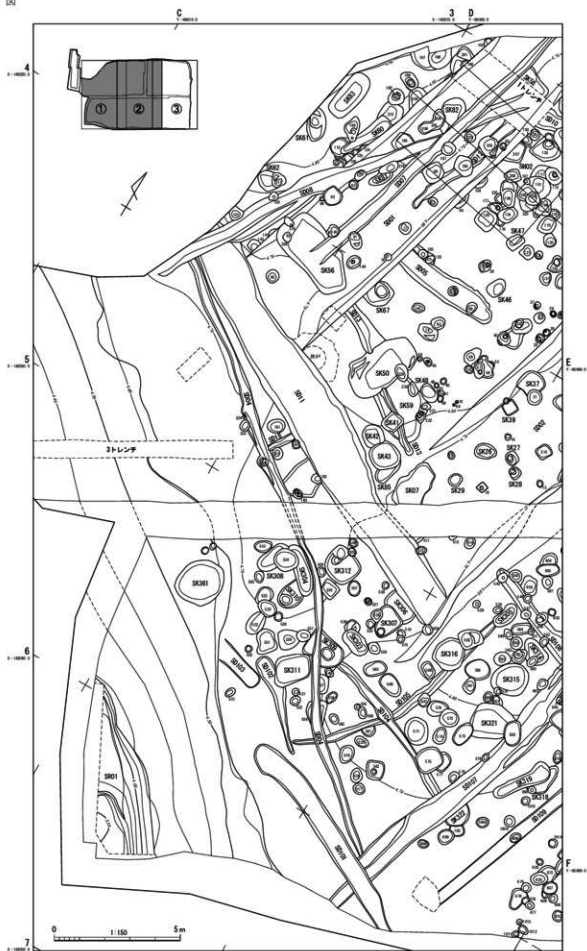


Fig.150 松東遺跡 検出遺構図①

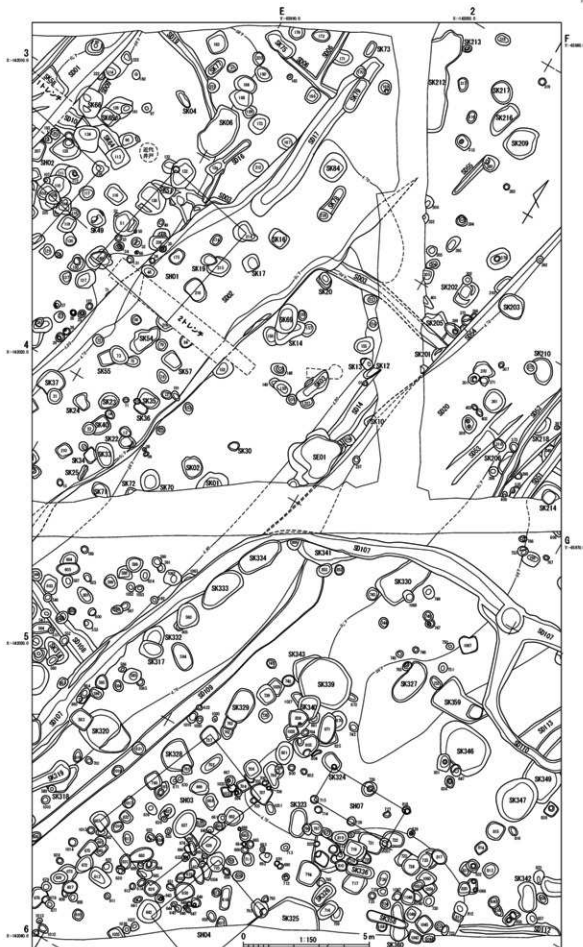


Fig.151 松東遺跡 検出遺構図②

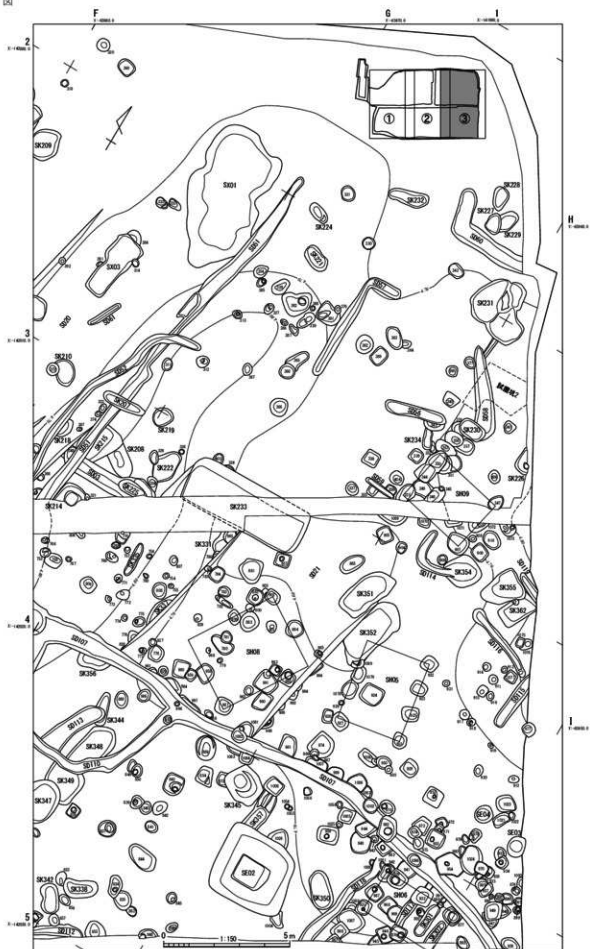


図 版



SK06 銅鐸出土状況



1工区 全景（北から）



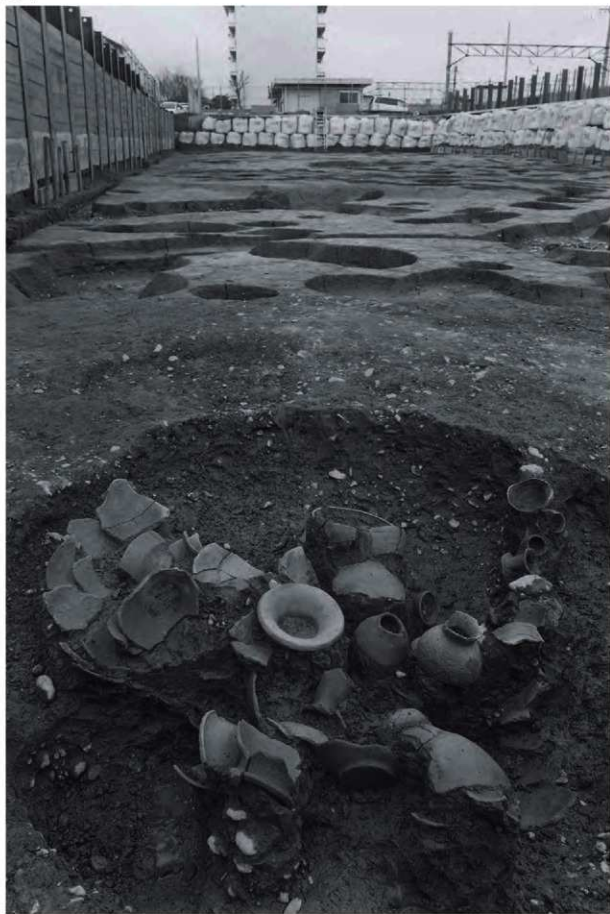
1 2工区 全景（北東から）



2 2工区 全景（東から）



3 工区 全景（南西から）



弥生時代 土坑 遺物出土状況 (SK361 南西から)



1 SX01 遺物出土状況（西から）



2 SX01 土層断面（西から）



1 SX01 焼土内遺物出土状況（北東から）



2 SX01 焼土断面（北西から）



SK06 銅鐸出土状況（南東から）



1 SK06 銅鐸出土状況(北東から)



2 SK06 土層断面(南東から)



1 SK07 遺物出土状況 (北から)



2 SK84 遺物出土状況 (南から)



1 SK231 遺物出土状況（北東から）



2 SK231 土層断面（南西から）



1 SK339 遺物出土状況（北西から）



2 SK346 遺物出土状況（南東から）



1 SK352 遺物出土状況（東から）



2 SK361 遺物出土状況（南西から）



1 SK03 遺物出土状況（東から）



2 SK03 土層断面（南西から）



3 SK03 遺物出土状況（北西から）



1 SK208・SK215 遺物出土状況（南東から）



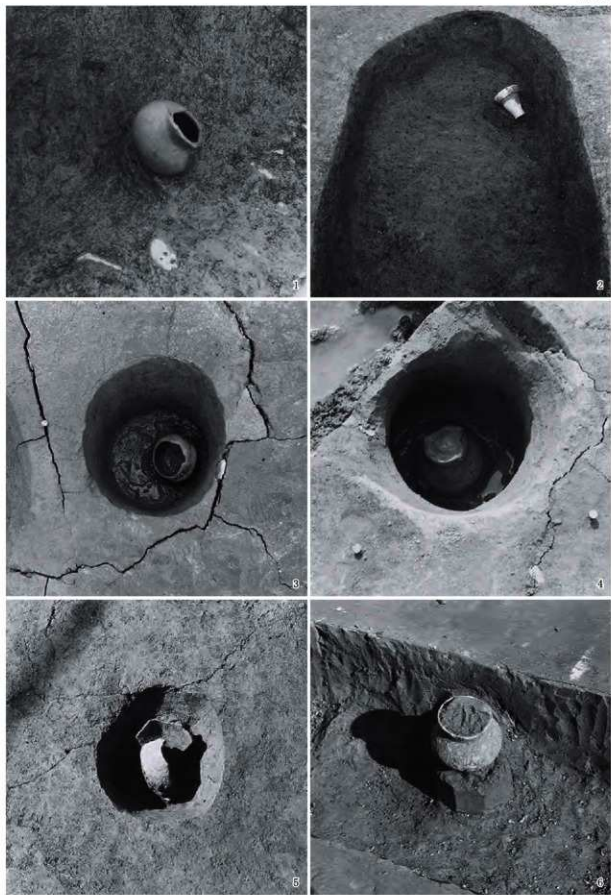
2 SK209 遺物出土状況（北東から）



3 SD03 遺物出土状況（南東から）



4 SD51 完掘状況（北から）



弥生時代 遺物出土状況 1. SK337 (東から) 2. SK350 (南東から) 3. SP24 (東から) 4. SP131 (北東から)
5. SP713 (北東から) 6. SD51 (西から)



奈良・平安時代 遺構集中部（3工区 東から）



1 奈良・平安時代 遺構集中部 (1工区 北から)



2 SH02 (西から)



3 SH03 (南から)



4 SH05 (南から)



5 SH07 (西から)



1 SD107 完掘状況（東から）



2 SD107 完掘状況（南西から）



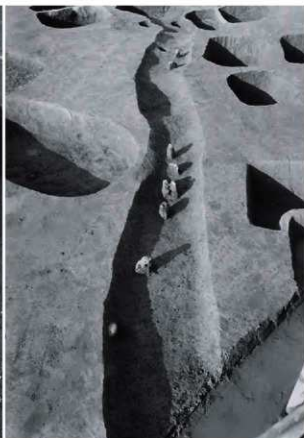
1 SD107 遺物出土状況（南東から）



2 SD107 遺物出土状況（北西から）



3 SD107 遺物出土状況（南西から）



4 SD118 遺物出土状況（南から）



1 SD109 銅印出土状況（北西から）



2 SD109 銅印出土状況（北西から）



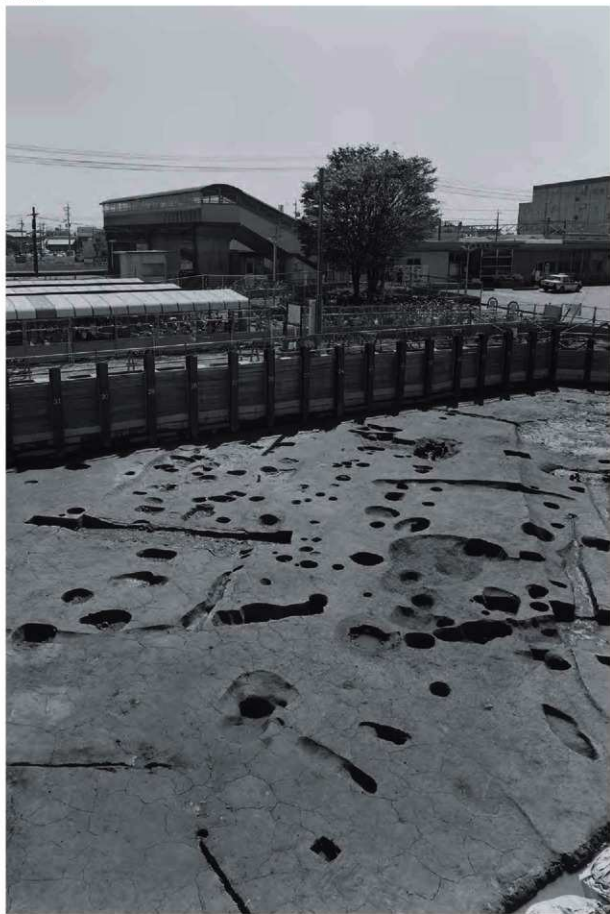
3 SD109 銅印出土状況（南東から）



1 SE02 井戸枠 検出状況（南東から）



2 SK301・SK302 遺物出土状況（南西から）



鎌倉時代以降 大型溝 (SD01・SD02 北から)



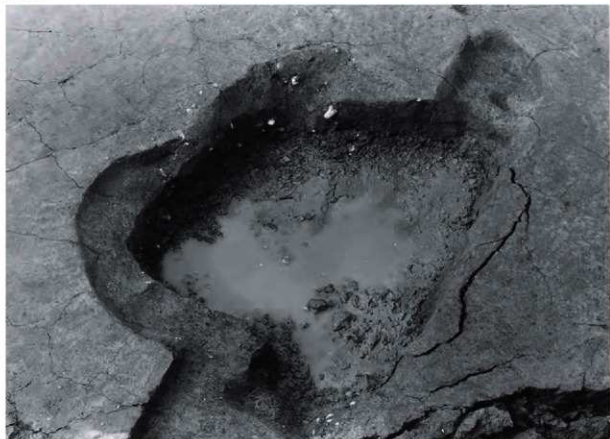
1 SD01・SD02 完掘状況（南から）



2 SD01 完掘状況（北から）



3 SD02 完掘状況（南から）



1 SE01 完掘状況（南から）



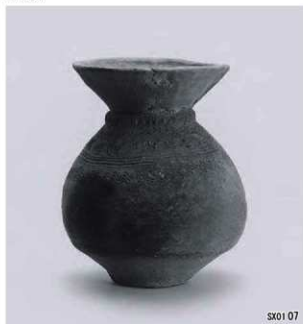
2 SE03 遺物出土状況（南から）



3 SE04 遺物出土状況（西から）



弥生時代 主要出土遺物



弥生時代 大型土器集積土坑 (SX01) 出土遺物 (1)



弥生時代 大型土器集積土坑 (SX01) 出土遺物 (2)

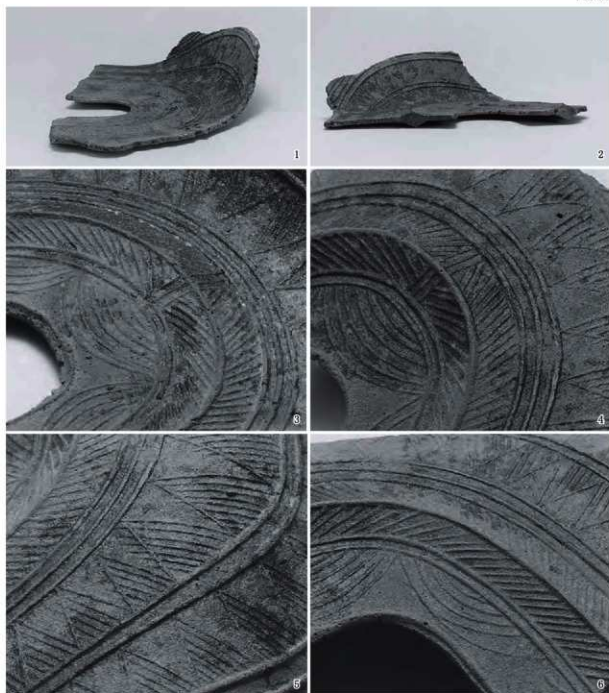


1



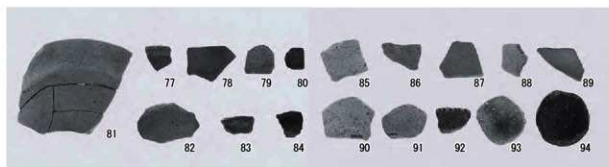
2

弥生時代 銅鐸出土土坑 (SK06) 出土遺物 (1) 銅鐸 (76) 1. A面 2. B面



1 弥生時代 銅鐸出土土坑 (SK06) 出土遺物 (2) 銅鐸 (76) 詳細

1. A面 右側面 2. A面 下側面 3. A面 菱帯周辺 4. B面 菱帯周辺 5. B面 瀬曲文 6. B面 重弧文



2 弥生時代 銅鐸出土土坑 (SK06) 出土遺物 (3) 銅鐸 (76) 共伴土器



弥生時代 土器集積土坑 出土遺物 (1)



SK84 136



SK84 137



SK84 138



SK84 139



SK231 146



SK231 152

弥生時代 土器集積土坑 出土遺物 (2)



弥生時代 土器集積土坑 出土遺物 (3)



弥生時代 土器集積土坑 出土遺物 (4)





SK361 248



SK361 251



SK361 249



SK361 252



SK361 253



SK361 254

弥生時代 土器集積土坑 出土遺物 (6)



弥生時代 土坑 出土遺物 (1)



SK337 311



SK350 316

1 弥生時代 土坑 出土遺物 (2)



S061 330



SP24 350



S0102 349

2 弥生時代 溝・小穴 出土遺物



奈良・平安時代 主要出土遺物 (SD107 出土遺物)



1 奈良・平安時代 土坑 出土遺物



2 奈良・平安時代 溝 出土遺物 (1)

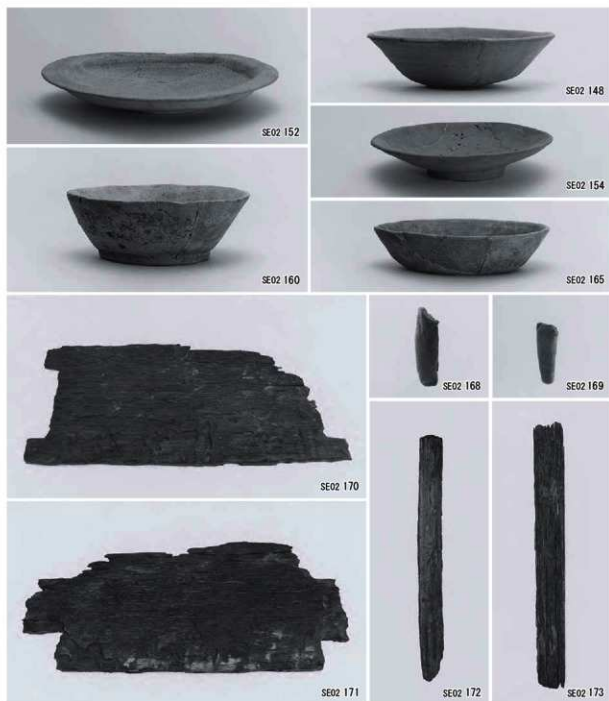




奈良・平安時代 溝 出土遺物 (3)



1 奈良・平安時代 溝 出土遺物 (4) SD109 出土銅印



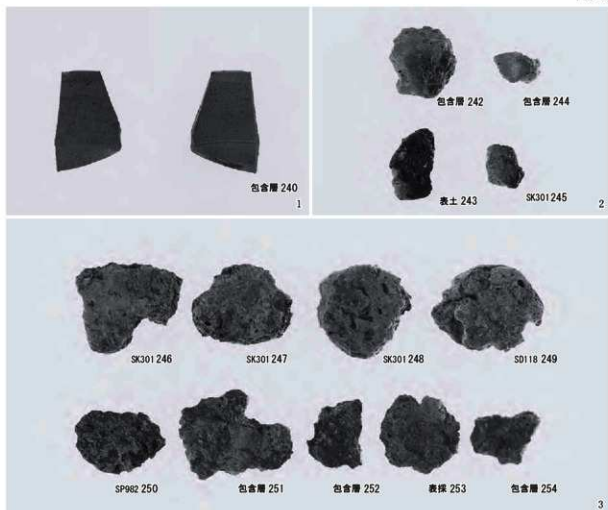
2 奈良・平安時代 井戸 (SE02) 出土遺物



奈良・平安時代 包含層 出土遺物 (1)



奈良・平安時代 包含層 出土遺物 (2)



1 奈良・平安時代 包含層等 出土遺物 1. 緑釉陶器 2. 轆轤口 3. 鉄滓



2 鎌倉時代以降 出土遺物



1 銅鐸 X 線画像



2 銅印 X 線画像

報告書抄録

[illegible]

松東遺跡3次

2014年2月21日発行

編集・発行機関 浜松市教育委員会
(浜松市市民部文化財課が補助執行)
印刷 中部印刷株式会社

Matsuhigashi Site

The 3rd excavation report

A report of archaeological investigations
in Western Shizuoka, Japan



February, 2014

Hamamatsu Municipal Board of Education